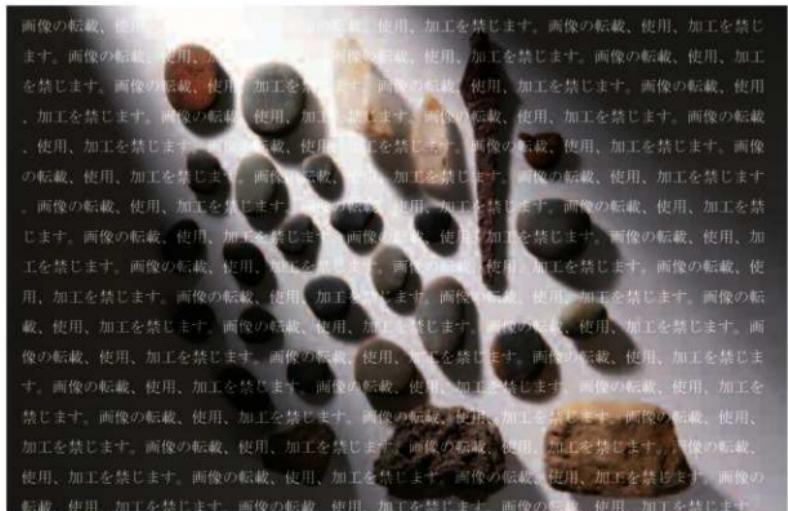


山梨県山岳信仰遺跡詳細分布調査報告書

— 富士山信仰遺跡に関わる調査報告 —

2012. 3

山梨県教育委員会



富士御室浅間神社里宮 片山社 土台石出土遺物

富士御室浅間神社里宮 片山社 土台石出土の墨書きされた石

劍形鉄製品

富士御室浅間神社里宮二合目本宮境内地遺跡出土錢貨

河口浅間神社に伝わる文化財

陶製猿像

河口浅間神社に伝わる文化財

陶製こま犬 阿形

A small, dark wooden figurine of a seated animal, possibly a deer or stag, with antlers, wearing a decorative collar. The figurine is positioned in front of a dense background of repeating Japanese text.

陶製こま犬 吻形



写真1 経筒

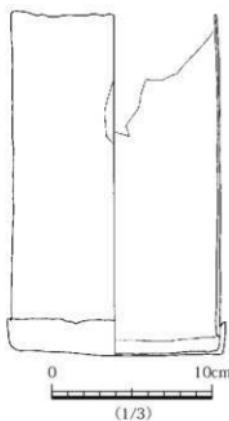


図2 経筒実測図



写真2 経卷



写真4 経軸頭（部分拡大）

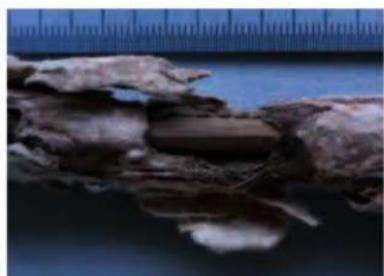
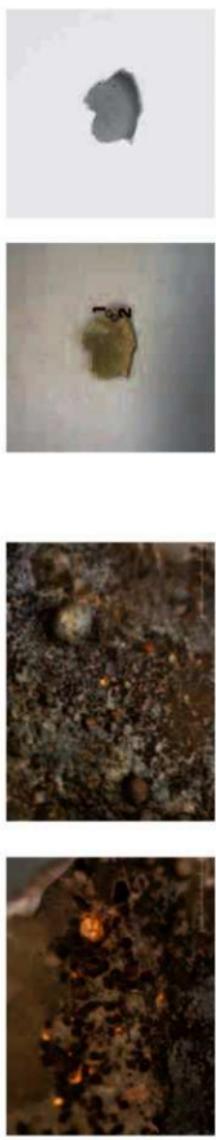


写真3 経軸（部分拡大）

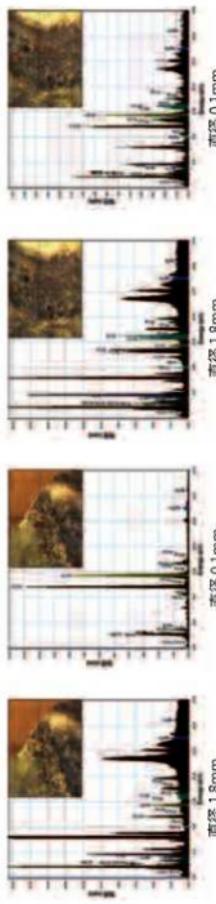


写真5 経紙 No.12

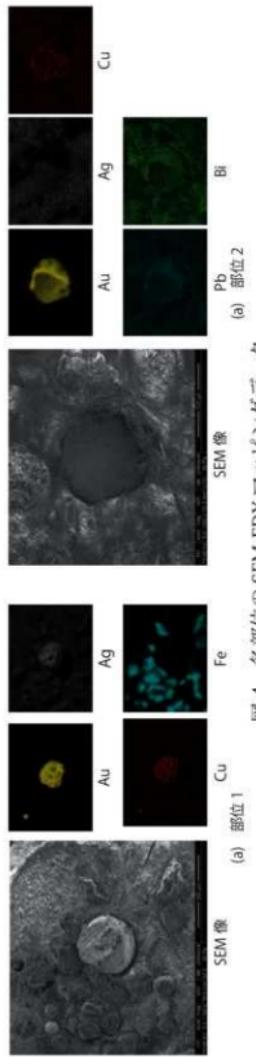
宮ノ上遺跡分析資料（特論第8節）



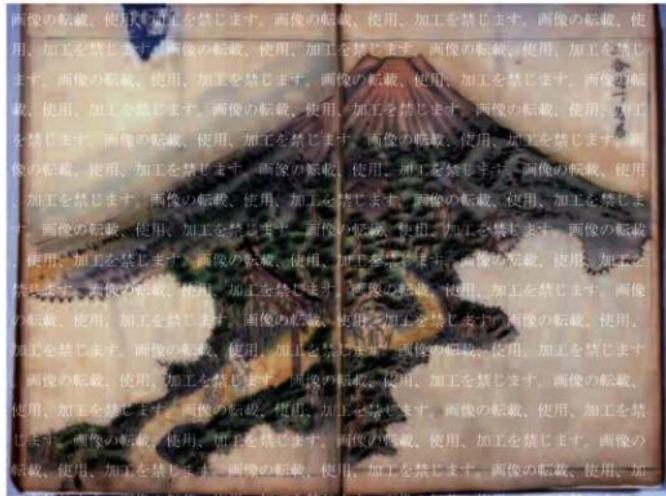
(a) 資料画像
(b) 調査資料のエックス線透過画像
図2



直徑1.8mm 直徑0.1mm



『富士山明細図』 墨描淡彩色 江戸時代末 川口十二坊 二十七代目 本庄元直氏所蔵



二合目 一ノ鳥居



二合目 小室浅間社

序

本書は、平成 21 年度から平成 23 年度までの 3 年間にわたり、国庫補助金を受けて実施した『山梨県内山岳信仰遺跡分布調査』の報告書です。

山梨県内には多くの遺跡が所在しており、中でも縄文時代の遺跡は質・量ともにすぐれたものが多く、全国的にもよく知られています。豊かな森という環境が縄文時代の暮らしの源となつたとも言われています。現在もまた豊かな森が広がる山梨県ですが、それに加えて富士山をはじめとした多くの山々に囲まれた地域もあります。山梨県と富士山との対比では、古く『万葉集』で「なまよみの甲斐の国、うち寄する駿河の国と、こちごちの國のみ中ゆ、出で立てる、富士の高嶺は…」と詠われ、一説では「行（並）吉みの甲斐の国」＝「山の並べ方の素晴らしい甲斐の国」とも考えられており、古くから、山とは結びつきの深い土地だったといえます。この「山」は畏れの対象であるのと同時に豊かな自然の恵みを与えてくれる存在として、古くから大きな信仰の対象でした。

近年、金峰山信仰に関わる杣口金桜神社奥社地遺跡の調査など、県内でも山岳信仰に関する調査が行われるようになってきました。また富士山については、世界文化遺産登録に向けて様々な分野からの調査研究が進められています。このような動きの中で、富士山信仰に関わる遺跡の調査については、その立地環境等から事例が少なく、埋蔵文化財包蔵地として周知化が図られていない現状があったことから、これらの山岳信仰遺跡の所在を明らかにし、開発行為と保護措置との調整ができるよう、基礎資料を作成することを目的に、『山梨県内山岳信仰詳細遺跡分布調査』として、3 カ年計画で実施することになった事業であります。

今回の調査では、富士山信仰に関わる 11 地点についての試掘確認調査を実施し、地中レーダー探査やボーリング調査などの関連調査も併せて行い、多くの成果を得ることができました。

この報告書が、山岳信仰を考える上で、また各種開発と文化財保護との円滑な調整に役立つことができれば幸甚です。

最後になりましたが、試掘確認調査・関連調査等について快諾していただいた社寺および土地所有者の皆様や、史資料を提供して下さった方々、並びにご指導いただいた指導者会議の先生方をはじめ、さまざまご協力をいただいた関係者・関係機関の方々には厚く御礼申し上げます。

平成 24 年 3 月 9 日

山梨県埋蔵文化財センター

所長 平賀 孝雄

例　　言

- 1 本書は、平成 21 年度（2009）から平成 23 年度（2011）の 3 カ年でおこなわれた、山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査報告書である。
- 2 調査は、山梨県教育委員会が文化庁の国庫補助を受け、山梨県埋蔵文化財センターが山岳信仰遺跡分布調査・試掘確認調査・その他の関連調査・整理作業・報告書作成を実施したものである。
- 3 今回の調査では、山岳信仰遺跡の中でも特に富士山信仰に関わる遺跡についての調査に重点を置いた為、調査箇所については山梨県の東部富士五湖を中心とする地域とした。
- 4 調査主体は山梨県教育委員会、調査機関は山梨県埋蔵文化財センターである。
- 5 調査については、野代恵子（副主査 文化財主事）と古郡雅子（非常勤嘱託職員）が担当した。
また、調査にあたっては指導者会議設置要項に基づき、次のとおり指導者会議を設置した。
指導者会議　清雲俊元（山梨県文化財保護審議会会長）
坂詰秀一（立正大学名誉教授）
笛生　衛（國學院大學教授）
櫛原功一（帝京大学山梨文化財研究所）
堀内　亨（山梨県立山梨園芸高校）
- 6 本書の編集は、山梨県埋蔵文化財センター野代恵子がおこなった。また、本書の執筆は、次の通りである。
特論の第1節 坂詰秀一氏・第2節 笛生衛氏・第3節 清雲俊元氏・第4節 櫛原功一氏・第5節 堀内亨氏・
第6節 篠原武氏・第7節 杉本悠樹氏・第8節 香名貴彦氏にそれぞれ依頼した。それ以外については
野代恵子が執筆した。また、遺跡における遺構等の写真は野代恵子・古郡雅子が撮影した。また遺物の写真
は、ツカハラスタジオの塚原明生氏に撮影を委託した。
- 7 調査期間および実施箇所については、第1章の第2節に記載した。
- 8 整理作業については、山梨県埋蔵文化財センターで実施した。
- 9 本報告書にかかる出土品・記録図面・写真・調査カード等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管して
ある。
- 10 地中レーダー探査については、株式会社テラインフォメーションに、簡易ボーリング調査については、株式
会社山梨地質に、富士山吉田口登山道の測量および図化と富士山二合目周辺の地形作成については、昭和測
量株式会社に、それぞれ委託した。
- 11 協力者（五十音順・敬称略）

[団体]

愛知県陶磁資料館、北口本宮富士浅間神社、河口浅間神社、環境省富士五湖自然保護官事務所、熊谷市立港
南文化財センター、熊谷市立図書館、甲州市教育委員会、静岡県島田市博物館、富士御室浅間神社、正福
寺、大善寺、鳴沢村郷土史研究会、帝京大学山梨文化財研究所、鳴沢村教育委員会、笛吹市教育委員会、笛
吹市産業観光部、富士吉田市外二ヶ村恩賜県有財産保護組合、富士河口湖町教育委員会、富士宮市教育委員
会、富士吉田市教育委員会、（財）富士吉田文化振興協会、富士吉田市歴史民俗博物館、山中湖村教育委員会、
山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県環境科学研究所、山梨県企画県民部世界遺産推進課、山梨県土整
備部砂防課、山梨県立博物館、蓮華寺

[個人]

新井 端、在原慶夫、飯島 泉、石原豊春・井上哲秀、上杉陽、大石 方、奥脇和夫、小佐野静子、小佐野勝、小野伸夫、河西 学、梶原 充、金子正之、神崎かず子、北川 洋、沓名貴彦、與水達司、小林靜作・小林昭輪、駒井彰、坂本輝幸、佐々木満、篠ヶ谷路人、篠原武、上文司厚、神宮司恵一、杉本悠樹、鈴木直人、鈴木康之、中田進、中村義朗、新津健、八須一成、浜将盛、平井 隆、平野 修、布施光敏、堀内真、本庄元直、茂木雄功、村石真澄、望月和幸、渡井英聰、渡辺昭訓、渡辺真一、渡邊芳明

作業員

[分布調査] 池谷千代子・石坂恵理・伊藤津真子・岡 和子・加藤光男・千野富子・野呂瀬秀臣・米山孝子

[試掘調査] 石坂恵理・猪俣順子・岡 和子・金丸恵美・坂口 正・鷲田勝男・菅沼芳治・中込 槿・

野呂瀬秀臣・藤原さつき・望月孝次・矢崎 緑

[整理作業] 石坂恵理・猪俣順子・金丸恵美

凡　例

- 1 遺構・遺物の縮尺は、各図面に付した通りである。
- 2 遺構断面図中のレベルポイント部分にあたる数字は標高を示す。
- 3 遺構図中の数字は、出土遺物実測図の番号と対応する。
- 4 スクリーントーンの指示内容については図中に記した。
- 5 遺物観察表中の括弧付き数値は推定値である。

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 調査経過と組織	1
第1節 調査目的	1
第2節 調査方法と調査の流れ	1
第3節 指導者会議	3
第2章 富士山信仰遺跡の分布	4
第1節 富士山信仰の歴史	4
第2節 分布図について	5
第3章 富士山信仰遺跡の調査	6
第1節 富士山信仰遺跡に関するこれまでの調査	6
第2節 調査地の選定について	6
第3節 富士山中の調査	15
第1項 富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡	15
第2項 定善(禪)院跡伝承地	17
第3項 富士山吉田口登山道関連遺跡 五合目地点	18
第4項 五合目で発見された石碑	19
第4節 富士山周辺の調査	54
第1項 北口本宮富士浅間神社社有地	54
第2項 富士御室浅間神社里宮(里宮遺跡)	56
第3項 河口浅間神社	57
第4項 御墓	58
第5項 宮ノ上遺跡	59
第6項 富士山吉田口登山道関連遺跡 鈴原下A地点	59
第7項 行者平遺跡(御坂山中:大善寺行者堂跡伝承地)	60
第8項 行者屋敷遺跡(足和田山中:蓮華寺奥の院伝承地)	61
第9項 藤塚(南都留郡山中湖村)	62

第4章 富士山吉田口登山道の測量成果	123
第1節 吉田口登山道の歴史的環境	123
第2節 吉田口登山道測量成果	123
 第5章 成果と課題	123
第1節 富士山中の信仰活動	123
第1項 富士山二合目	123
第2項 富士山五合目	127
第2節 富士山麓の信仰活動	128
第3節 山岳信仰遺跡調査の今後に向けて	129
 特論	
第1節 「富士山と修験」	131
清雲俊元	
第2節 「山岳信仰遺跡調査の課題」	136
坂詰秀一	
第3節 「富士山の古代祭祀とその背景 一火山活動・災害と古代の神観・祭祀一」	142
笹生 衛	
第4節 「山梨県の山岳信仰遺跡」	148
櫛原功一	
第5節 「富士山二合目の信仰施設と文献」	159
堀内 亨	
第6節 「伝経ヶ岳出土資料について」	161
篠原 武	
第7節 「富士河口湖町河口 西川遺跡の概要」	171
杉本悠樹	
第8節 「宮ノ上遺跡出土の金付着陶器の科学調査について」	176
杏名貴彦	

図 版 目 次

第1図 『八葉九尊図』	7
第2図 富士山の登山道と浅間神社	8
第3図 富士山信仰関連地点分布図（1）	9・10
第4図 富士山信仰関連地点分布図（2）	11・12
第5図 富士山二合目周辺図	19
第6図 富士御室浅間神社二合目本宮（H 21）トレント位置図	20
第7図 同上 1トレント平面図・セクション図	21
第8図 同上 2トレント平面図・セクション図	22
第9図 同上 1・2トレント出土遺物	23
第10図 同上 3トレント平面図・セクション図	24
第11図 同上 3トレントセクション図・出土遺物	25
第12図 同上 4トレント平面図・セクション図・出土遺物	26
第13図 同上 5トレント平面図・セクション図・出土遺物	27
第14図 同上 6トレント平面図・セクション図・出土遺物	28
第15図 同上 7トレント平面図・セクション図・出土遺物	29
第16図 同上 8トレント平面図・セクション図・出土遺物（1）	30
第17図 同上 8トレント平面図・出土遺物（2）	31
第18図 富士御室浅間神社二合目本宮表探遺物	31
第19図 同上 9・1トレント平面図・セクション図・出土遺物	32
第20図 同上 9・2トレント平面図・セクション図・出土遺物	33
第21図 富士御室浅間神社二合目本宮（H 22）トレント位置図	34
第22図 同上 木縫跡周辺・セクション図	35
第23図 同上 拝殿附近 磐石および石段 平面図	36
第24図 同上 4トレント全体図・セクション図・出土遺物	37
第25図 同上 2トレント出土遺物	38
第26図 同上 表探遺物（1）	38
第27図 同上 表探遺物（2）	39
第28図 二合目一の鳥居周辺テラス 平面図・セクション図	40
第29図 同上 セクション図・出土遺物	41
第30図 定善（禪）院跡伝承地 トレント位置図・出土遺物	42
第31図 同上 セクション図（1）	43
第32図 同上 セクション図（2）	44
第33図 同上 6トレント 平面図・セクション図	45
第34図 同上 6トレント 上出石碑および石灯籠の笠部	46
第35図 同上 出土石碑	47
第36図 富士山五合目周辺 信仰拠点位置図	48
第37図 富士山吉田口登山道周辺五合目地点 概況図	49
第38図 同上 第1テラス 平面図・セクション図	50
第39図 同上 第3テラス 平面図・セクション図・出土遺物（1）	51
第40図 同上 第3テラス 出土遺物（2）	
同上 第1テラス 平面図・出土遺物・周辺表探遺物	52
第41図 旧富士守富権現周辺で発見された石碑	53
第42図 北口1本宮富士浅間神社周辺図	63
第43図 同上 A地区・B地区トレント位置図	64
第44図 同上 B地区出土遺物	64
第45図 同上 A地区トレント平面図・セクション図	65
第46図 同上 B地区トレント平面図・セクション図	66
第47図 北口1本宮富士浅間神社 C地区 トレント位置図	67
第48図 同上 C地区トレント 平面図・セクション図	68
第49図 同上 C地区1トレント 集石状造構	69
第50図 同上 C地区1トレント 出土遺物	69
第51図 同上 C地区2・7トレント 平面図・セクション図	70
第52図 同上 C地区2・7トレント出土遺物	70
第53図 同上 C地区3・5トレント 平面図・セクション図	71
第54図 同上 C地区3・5トレント出土遺物	71
第55図 同上 C地区4トレント 平面図・セクション図	72
第56図 同上 C地区4トレント出土遺物	72
第57図 同上 C地区6トレント 平面図・セクション図・出土遺物	73
第58図 同上 C地区8トレント 平面図・セクション図・出土遺物	74
第59図 同上 C地区9トレント 平面図・セクション図	75
第60図 同上 C地区11トレント 平面図・セクション図	76
第61図 大塚丘 近接地 トレント位置図	77
第62図 同上 トレントセクション図（1）	78
第63図 同上 トレントセクション図（2）	79
第64図 同上 出土遺物・表探遺物	80
第65図 北口本宮富士浅間神社（隨神門周辺）トレント位置図	81
第66図 同上 セクション図	82
第67図 同上 出土遺物	83
第68図 御室浅間神社里宮調査区・トレント位置図・出土遺物	84
第69図 同上 セクション図（1）	85
第70図 同上 セクション図（2）	86
第71図 同上 A地区 石列転出状況・出土遺物	87
第72図 同上 石組 エレベーション図	88
第73図 同上 片山社土台石 平面図・セクション図	89
第74図 同上 片山社土台石 出土遺物（1）	90
第75図 同上 片山社土台石 出土遺物（2）	91
第76図 河口浅間神社周辺図	92
第77図 同上 A地区 トレント位置図・セクション図	93
第78図 同上 B地区 トレント位置図・セクション図	94
第79図 同上 B地区 集石状造構・出土遺物	95
第80図 同上 C地区 全体図	96
第81図 宮ノ上道路 トレント位置図・セクション図・出土遺物（1）	97
第82図 河口浅間神社 A地区 出土遺物	98
第83図 宮ノ上道路 出土遺物（2）	98
第84図 河口浅間神社に伝わる文化財（1）	99
第85図 河口浅間神社に伝わる文化財（2）10は疱瘡跡出土遺物	100
第86図 富士山吉田口登山道周辺跡 鶴原A地点 全体図	101
第87図 同上 コの字状石積 平面図・エレベーション図	102
第88図 同上 セクション図・出土遺物	103
第89図 行者平道路（大寺行者堂跡伝承地）全体図	104
第90図 同上 セクション図・A区出土遺物（1）	105
第91図 同上 A区出土遺物（2）	106
第92図 同上 セクション図・C区出土遺物（1）	106
第93図 同上 セクション図・C区 全体図・セクション図	107
第94図 同上 C区出土遺物（2）	108
第95図 同上 表探遺物（1）	108
第96図 同上 表探遺物（2）	109
第97図 行者屋敷跡（垂草寺奥の院伝承地）全体図・出土遺物	110
第98図 同上 セクション図	111
第99図 権名池（足和山中）全体図・エレベーション図	112
第100図 藤原（山中湖村）周辺図	113
第101図 山梨県の富士塚分布図	114
第102図 富士山吉田口登山道測量図	125・126

表 目 次

第1表 踏査地一覧	13・14
第2表 山梨県の富士塚一覧	114
第3表 陶器類遺物觀察表	115～117
第4表 金属製品觀察表	118
第5表 古鏡觀察表	119・120
第6表 石製品觀察表	121
第7表 その他觀察表	121
第8表 河口浅間神社に伝わる文化財 遺物觀察表	122
第9表 炮橋跡 出土遺物觀察表	122

第1章 調査経過と組織

第1節 調査目的

当センターでは、未調査の重要遺跡について発掘調査の対象となる埋蔵文化財としての位置づけを行い、遺跡の保護・保存をはかるため、これまでに7事業を実施してきた。直近では、平成16年度からの5カ年で「山梨県内中世寺院分布調査」を実施したが、そのなかで、富士山信仰に関わる遺跡が多数存在していることを改めて確認した。富士山信仰遺跡は富士山の北麓地域を中心に縄文時代から近現代に至るまで多数点在している。また都内地域に限らず、甲府盆地地域にも同様な遺跡が点在する。これら遺跡の内容は、遥拝所、寺社とその旧地、宿泊施設とそれらを繋ぐルート、富士塚、溶岩洞穴など多岐に渡っている。

今回の調査は、これら失われつつある山岳信仰に関わる遺跡の資料収集や聞き取り調査、試掘確認調査などを行ない、保護・保存のための基礎資料を早急に作成することを目的として、文化庁の補助金を得て3カ年計画で実施した。

第2節 調査方法と調査の流れ

本事業で、調査対象とする「山岳信仰遺跡」は、県内に所在するものとし、特に富士山信仰に関わる遺跡についての調査を実施した。地域については、富士山に近い県南東部の地域を主な対象地域とした。調査の開始にあたって、「山梨県内山岳信仰遺跡分布調査実施要項」(平成21年4月10日施行)により、平成21～23年度の年次計画を策定した。まず、平成21年～22年で聞き取り・地域伝承採取・遺物の表面採集・地形観察を目的として踏査を行ない、踏査結果により調査が必要であると判断された地点については、試掘確認調査を実施した。また併せて各地点の状況に合わせた関連調査を実施した。調査地点は以下の通りである。

なお太字は、今回の調査で埋蔵文化財包蔵地として周知化した遺跡である。北口本宮富士浅間神社社有地および河口浅間神社社有地については、平成23年2月7日付で史跡となっており、保護措置がとられているため、それ以降の調査により遺跡と判断された場合の周知化は行なっていない。

〔平成21年度〕

試掘確認調査

- ・富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡（富士山二合目：富士河口湖町）

- ・北口本宮富士浅間神社境内地・御鞍石遺跡（富士吉田市）

地中レーダー探査

- ・大塚丘（北口本宮富士浅間神社社有地：富士吉田市）

〔平成22年度〕

試掘確認調査

- ・富士御室浅間神社里宮（里宮遺跡）（富士河口湖町）

- ・富士山吉田口登山道間連遺跡鈴原A地点（富士吉田市）

- ・富士山吉田口登山道間連遺跡五合目地点（富士吉田市）

- ・富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡（富士山二合目：富士河口湖町）

- ・大塚丘（北口本宮富士浅間神社社有地：富士吉田市）

地中レーダー探査

- ・北口本宮富士浅間神社境内地（富士吉田市）

- ・河口浅間神社境内地（富士河口湖町）

- ・藤塚（山中湖村）

簡易ボーリング調査

- ・大塚丘（北口本宮富士浅間神社社有地：富士吉田市）

〔平成 23 年度〕

試掘確認調査

- ・北口本宮富士浅間神社境内地（富士吉田市）
- ・河口浅間神社境内地（富士河口湖町）
- ・**宮ノ上遺跡**（富士河口湖町）
- ・**行者平遺跡**（大善寺行者堂跡伝承地：笛吹市）
- ・行者屋敷遺跡（蓮華寺奥の院伝承地：鳴沢村）

地中レーダー探査

- ・河口浅間神社境内地（富士河口湖町）
- ・御墓（富士河口湖町）

【山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査 実施要綱】

（調査目的）

第1条 本事業は、埋蔵文化財包蔵地としての周知が図られず、開発行為等による破壊や消滅の懼れがある山梨県内の山岳信仰遺跡の所在位置・時期・内容等を調査・整理することにより、埋蔵文化財包蔵地として周知し、開発行為等との調整や保存整備・活用のための基礎資料を作成することを目的とする。なお、今回の事業は国庫補助を受け、平成 21 年度から平成 23 年度までの 3 カ年計画で実施するものとする。

（事業名称）

第2条 本事業の名称は、「山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査」とする。

（事業内容）

第3条 本事業の内容は、山梨県内に残る山岳信仰遺跡の所在と内容についての詳細分布調査とする。

（事業主体）

第4条 本事業の主体は、山梨県教育委員会とし、山梨県埋蔵文化財センターが実施する。

（調査組織）

第5条 本事業の調査組織は、以下のとおりとする。

ア) 事務局

- 山梨県教育庁学術文化財課
- 山梨県埋蔵文化財センター

イ) 指導者会議

学識経験者より調査に係わる指導・助言を得るために、別に定める「山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査 指導者会議設置要項」に基づいて設置する

ウ) 協力者・協力機関

- 市町村教育委員会
- 関係寺社ほか

（調査対象）

第6条 本事業の調査対象は、県内に所在する山岳信仰遺跡を主たる対象とする。ただし山岳信仰遺跡に関しては調査手法が確立していないため、それに関係する施設・遺構等（道・遙拝所・寺社・伝承地・石造物・宿泊施設など）を調査することによって、山岳信仰の実態を明らかにする。

(調査計画)

第7条 各年度における調査計画は、概ね以下のとおりとする。ただし、各年度の調査対象の詳細については、平成21年度中に各年次調査計画を定める。

平成21年度 基礎資料の調査、試掘・測量を伴う現地調査1

平成22年度 基礎資料の調査、試掘・測量を伴う現地調査2

平成23年度 補足追加調査および調査報告書の作成、印刷製本

(調査方法)

第8条 調査は、以下に挙げる基礎資料の調査を経て、踏査・発掘調査・測量調査を行なうものとし、最終年度に調査結果を報告書にまとめる。

1) 基礎資料の調査

各種の文献資料、発掘調査・遺跡詳細分布調査資料（発掘調査報告書等）、各地域・関係社寺に残る口承・伝承等を含む資料の調査や信仰と関わりのある場についての調査（カード化）

2) 発掘調査等の現地調査

山岳信仰遺跡の所在および範囲や性格を確認するための踏査および発掘調査や測量調査

(その他)

第9条 この要綱に定めるもののほか、調査に関して必要な事項については、事務局が協議して定める。

附 則

この要綱は、平成21年6月10日から施行する。

第3節 指導者会議

当事業では、「山梨県内山岳信仰遺跡分布調査指導者会議設置要項」（平成21年6月10日施行）に基づき、県内外の学識経験者5名よりなる指導者会議を設置した。指導者会議は年間3回を開催し、専門的かつ客観的な視点により調査方法の検討やその成果の検証・評価を行なうことを目的とした。その内容については、年度初回は、調査予定箇所の調査方法、留意点に関する指導・助言を行ない、2回目は試掘確認調査の現地視察を行なった。また3回目は調査結果の検討及び次年度の調査計画についての助言を行なった。さらにこれら指導者会議の他、資料調査への参加や調査の視察なども行なった。また平成23年度の第2回指導者会議については、調査成果を広く一般の方々にも知ってもらうために、「富士山と山岳信仰遺跡」と題し、山梨県富士山総合学術調査研究委員会と合同で、公開発表会形式での開催とした。

〔開催の記録〕

平成21年度 第1回	平成21年10月26日13:00～17:00	於：北口本宮富士浅間神社 富士吉田市歴史民俗博物館
第2回	平成22年2月15日13:30～17:00	於：県民会館403会議室
	同 3月10日13:30～17:00	於：埋蔵文化財センター
平成22年度 第1回	平成22年6月10日13:30～17:00	於：富士御室浅間神社里宮
	同 6月11日13:30～17:00	河口浅間神社
	同 6月24日13:30～17:00	
第2回	平成22年9月9日13:30～17:00	於：富士山二合目
	同 9月10日13:30～17:00	
	同 10月8日13:30～17:00	於：大塚丘 富士吉田市歴史民俗博物館

第3回 平成22年2月15日13:30～17:00 於：県民会館702会議室
平成23年度 第1回 平成23年6月2日13:30～17:00 於：河口浅間神社
甲州市立勝沼図書館
第2回 平成23年3月4日13:00～17:00 於：富士吉田市民会館小ホール

【山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査 指導者会議設置要項】

(設置)

第1条 山梨県埋蔵文化財センター（以下、「センター」とする。）が実施する山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査（以下、「調査事業」とする。）について、その調査方法等を検討するために、山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査指導者会議（以下、「指導者会議」とする。）を設置する。

(組織)

第2条 指導者会議は、5名の指導者で構成する。

(所掌事項)

第3条 指導者会議は、調査事業について、必要な指導・助言を行なう。

(会議)

第4条 指導者会議は、センター所長（以下、「所長」とする。）が招集し、概ね年3回開催する。

(任期)

第5条 指導者の任期は、委嘱の日から所長が定める日までとする。

(関係者および有識者の出席等)

第6条 所長は、必要があると認めるときは、会議に指導者以外の出席を求め、意見又は説明を聞くことができる。

(事務局)

第7条 指導者会議の事務局は、センターに置く。

(その他)

第8条 この要項に定めるもののほか、指導者会議の運営に関して必要な事項は、所長が定める。

附 則

この要項は、平成21年6月10日から施行する。

第2章 富士山信仰遺跡の分布

第1節 富士山信仰の歴史

童謡「ふじの山」に歌われるよう富士山は日本で一番高い山として親しまれている。特に近年は登山ブームを背景として、シーズンには多くの登山客で溢れかえっている。また地質学的に見ると典型的な成層火山であり、この種の火山特有の美しい稜線をもつ。このように雄大で美しい山姿は、古くから信仰の対象として人々の関心を集めてきた。富士山は、先小御岳火山・小御岳火山・古富士火山・新富士火山という複数の火山体から構成される。古富士火山は約10万年前から活動が始まり、約1万年前に現在に近い形になったと言われている。この類い希な山「富士山」に対する信仰は、古くからあったと考えられている。例えば静岡県富士宮市の千屈遺跡では縄文時代中期の住居跡や配石遺構等が発見されており、中でも配石遺構は富士山を意識する形で配置されていることから、富士山に対する祭祀的な遺構である可能性も説かれている。また山梨県都留市の牛石遺跡でも、直径50mの大形の環状配石遺構が見つかっており縄文時代中期には、富士山を意識した祭祀が行われていたと考

えてもよいのではないだろうか。富士山の噴火活動が国史に記されるのは、『続日本紀』天応元年（781）の条にある「七月癸亥、駿河国言す。富士山の下に灰を雨す。灰の及ぶ所は木葉彫萎すと。」を初見とし、平安時代初期以降多くの記録が残されるようになる。噴火活動が活発化すると、富士山の荒ぶる神はより敬われるようになり、国は位階を授けた。このように噴火活動に対して国が積極的に関与するようになり、国家祭祀の対象として富士山の荒ぶる神（浅間大神）を鎮めるために駿河国に浅間大社が造られる。浅間大社ははじめ山宮の地に祀られるが、その後湧玉池の近くの、福地（フヂ、フチまたはフクチ）神社という富士山そのものを神として祀った神社の鎮座地に遷座する。浅間大社に場所を譲った福地神社はその後、別の場所に遷座する。ここに、純粋な自然崇拜の対象としての富士山信仰から国家祭祀の対象としての信仰へとシフトされているように感じる。

その後、『日本三代実録』貞觀6年（864）の条には、富士山の側火山である長尾山から大噴火して、甲斐国に甚大な被害をもたらした旨が、甲斐国からの報告として記されている。この被害により、甲斐国にも浅間明神が祀られることになる。この甲斐国で初めて置かれた浅間神社が現在のどの神社に該当するのかについては諸説あるが、『三代実録』の現地視察の記事に拠れば、神社は熔岩流に埋め立てられた「セの海」に近接して建てられたとあることや『和名抄』の郡郷配置などからすると、富士河口湖町河口に鎮座する河口浅間神社がこの神社に該当する可能性が高い。その11日後には山梨郡にも浅間明神が祀られたことが同じく『三代実録』の記述にあり、これは現在の笛吹市一宮町の浅間神社である可能性が高い。

平安時代の終わり頃から、噴火活動が一段落すると、山中での宗教活動の痕跡が伺えるようになる。『本朝世紀』には、久安5年（1149）、末代上人が山頂に登り大日寺を建立したという記事がある。また山頂の三島ヶ嶽南麓から出土したと伝わる経典群は末代が理納した一切経である可能性があり、この時期には宗教者による山中での活動が活発になったものと考えられる。二合目の富士御室浅間神社本宮には、かつて文治5年（1189）銘の日本武尊像と建久3年（1192）銘の女神像があったと『甲斐国志』には記されていることから、末代とその周辺の人々による富士山頂での宗教的活動を皮切りに、山中での宗教行為がより活発化したものと言えるのではないだろうか。また富士御室浅間神社の神像は、その銘に走湯山の覚対らにより納められたことが記されており、走湯修験と富士山との関わりも伺える。また、末代の流れをくむ賴尊という人物が「富士行」を創設し、富士修験（村山修験）を確立させる。その後、室町時代中頃に至ると『勝山記』の明応9年（1500）の条に「此年六月富士へ道者參ル事無限。」という記述が見られ、この頃には一般民衆による登拝が一般的に行なわれていたことがわかる。

また角行は、『吾妻鏡』などで「浅間大菩薩の御在所」と記される人穴で16世紀から17世紀に修行したとされるが、この角行を祖とする富士講は、江戸時代に入って多くの信者を集めようになる。この富士講は、享保18年（1733）の食行身禄の富士山七合五勺烏帽子岩での入定後、さらに大きく繁栄した。また同じ享保年間に村上光清による、北口本宮富士浅間神社の大改修が行われたが、この2人の存在により、富士講は関東を中心さらに栄えた。

時は移り明治時代に至ると、神仏分離令のもと廢仏毀釈の波が富士山にも訪れる。山中および周辺の仏教施設は神社内に組み込まれ、仏教色はことごとく排除された。1872年には、信仰の山における女人禁制が解禁され、富士山への登拝はさらに拡大した。19世紀以降、東海道線や中央線等の鉄道の開通や、北麓の富士山スバルライン、南麓の富士山スカイラインなど自動車道の開通により、交通手段が確保されると登山者は急激に増加した。時代が下るに従い、人々の登山の動機は、信仰中心のものから富士山への憧れを主とするものへと変化していくが、その核には富士山という偉大な自然に対する畏敬の念が今も変わらず息づいているのではないだろうか。

第2節 分布図について

今回の調査にあたって、富士山信仰と関わりのある寺社・その旧地など関連箇所を挙げ、その中から調査地点を洗い出す作業を行なった。関連箇所については、細かいものも挙げていくと膨大な数に上るために、今回は中でも特に関連のあるものを選んで地図上に落とした（第3・4図）。

第3章 富士山信仰遺跡の調査

第1節 富士山信仰遺跡に関するこれまでの調査

これまでに実施された富士山信仰遺跡に関する発掘調査としては、富士山吉田口登山道関連遺跡の発掘調査、富士山二合目の富士御室浅間神社本宮社有地の円乗寺行者堂跡推定地の試掘確認調査がある。前者は歴史の道整備活用推進事業の中で、旧来の登山道の遺構確認を目的として、富士吉田市教育委員会により平成8年～10年にかけて、馬返しから一合目までの発掘調査が実施された。この調査によって明治時代の終わりに開かれた現登山道以前の旧道や、一合目鈴原社前の山小屋、一字一石経塚の存在が明らかとなった。後者は山梨県内中世寺院分布調査の一環として山梨県教育委員会により実施された調査で、この行者堂跡は甲府市盆地にある真言宗の古刹円乗寺の富士山側の拠点施設であると考えられている。円乗寺には、役行者像としては最古級である鎌倉時代の像が伝えられているが、かつてはこの像が夏季に富士山二合目の行者堂で祀られていたと言われている。調査の結果、行者堂があったとされるテラス付近で、登山道に沿う形で石列が確認された。またテラス壁面では、土留めの為の石垣も確認されている。出土遺物で注目されるのは、13世紀初頭の東遠系の山茶碗片が出土していることである。この他、発掘調査ではないが、富士吉田市史編纂事業の一環として、馬返から頂上までと噴火口を一周する範囲についての分布調査が行われ、山中各所において銅鏡・鉄鏃・鎌・和鏡の小破片・銅造仏像の破片・鉄釘等が表採されている。

第2節 調査地の選定について

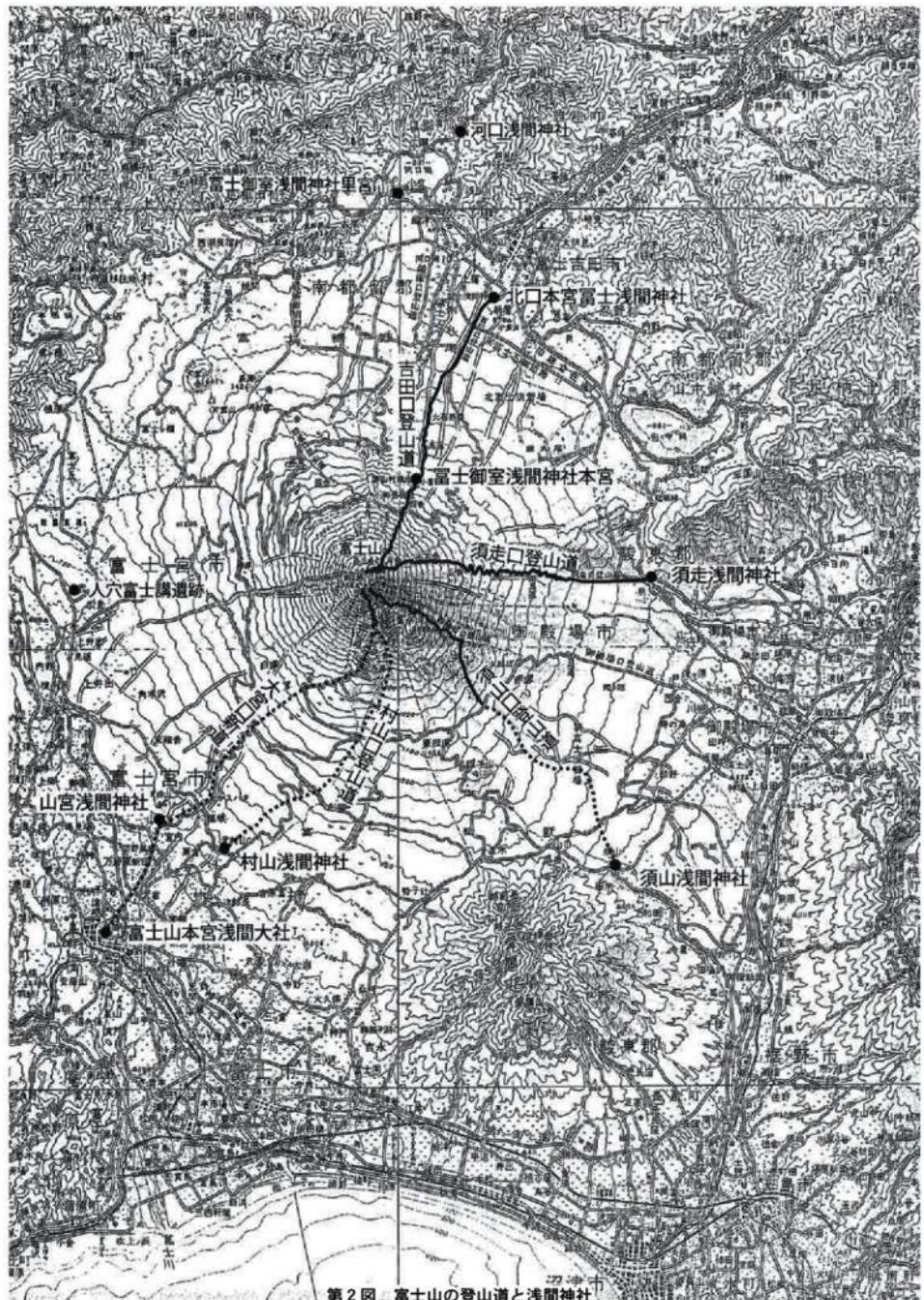
試掘確認調査については10箇所、関連調査として、地中レーダー探査については4箇所、簡易ボーリング調査については1箇所の調査を実施した。調査対象地については、事前に聞き取りや踏査を実施し、指導者会議にかけて決定した。また特に富士山中の調査については、山梨県側からみた富士山の信仰世界を描いた最古の絵画資料である『八葉九尊図』(延宝8年(1680))(第1図)を調査箇所の選定資料として活用した。

『八葉九尊図』

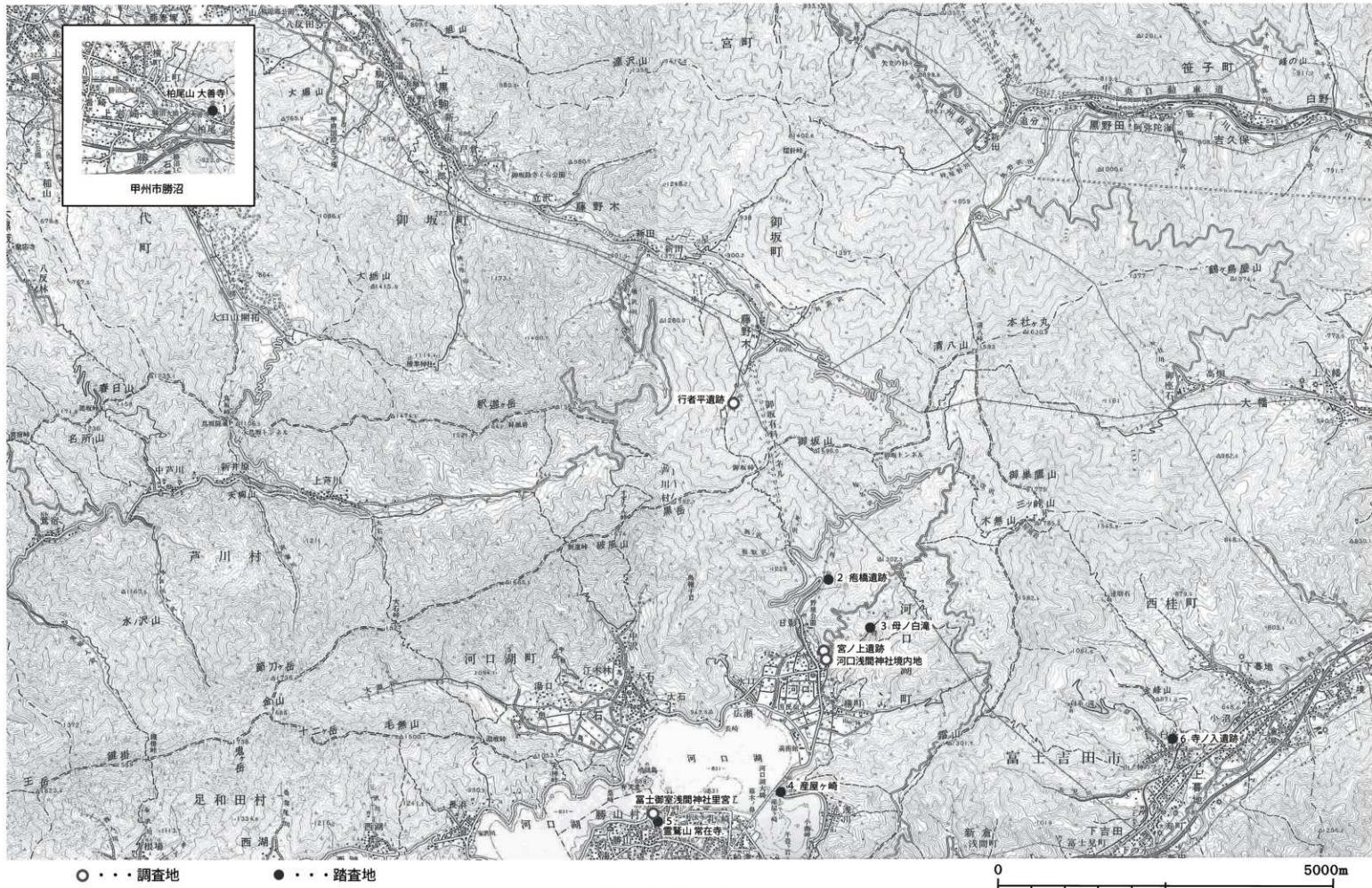


第1図

木版墨色 延宝8年(1680) 正福寺(版木所藏)



第2図 富士山の登山道と浅間神社



第3図 富士山信仰関連地点分布図1



第4図 富士山信仰関連地点分布図2

○···調査地

●···踏査地

0

5000m

第1表 踏査地一覧

名 称	住 所	内 容
1 柏尾山 大善寺	甲州市勝沼町勝沼 3559	真言宗智山派 義長2年(718)の創建、開基は行基とされ柏尾山と号する。神変堂(役行者堂)元禄13年(1700)土屋相模守が建立。鎌倉時代に作られたとされる行者像を御坂峠より遷し安置。柏尾山経塚出土の康和5年(1103年)在銘経筒には当時の伽藍の様子が記され天台寺院として機能していたことも示される。
2 朝橋遺跡	富士河口湖町河口 1343 ほか	御坂峠へ続いている旧鎌倉街道に隣接。縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代の遺物が出土。
3 母ノ白滝	富士河口湖町河口	アメノオシオミ尊の皇后で栉幡千々姫命(タクハタチチヒメンミコト)が祀られる。また木花咲耶姫命(天津明神)の姑神。平安時代のころより富士登山者は村の宿坊を宿にし、この滝で潔斎をおこない富士山へと向かったとされる。
4 産屋ヶ崎	富士河口湖町浅川	瓊杵杵尊と木花咲耶姫命が結婚し、わずか一夜で身ごもった子を国津神の子ではないかとの疑いを晴らすため、誓約をして産屋に入り「天津神である二ニギの本当の子なら何があっても無事に産めるはず」と無戸室に火を放ち、火照命(けり)、火須勢理命(けり)、火遠理命(けり)という御子を無事に出产。このことから産屋ヶ崎と名がついたといわれる
5 霊鷲山 常在寺	富士河口湖町小立 139	寺伝では真言宗の広門田山法寺と号す。妙法寺は末寺。明応9年(1500)に日國の仰法寺の住僧に迎えられるが、永正5年(1508)に当寺に戻る。平成7年(1995)に山梨県史編纂の調査において「日國覺書」を発見し「勝山記・妙法寺記」の原本系統に属する史料から転写された断片であると考えられている。
6 寺ノ入遺跡	上暮地字寺ノ入	現在富士吉田市寿町にある宝珠山福昌寺の前身となる寺院があつたとされる。
7 持名山 蓮華寺	富士河口湖町大嵐 6	大同4年(809)弘法大師空海が富士山小室社に安置されていた諸像を大原村(蓮華寺)へ移し一宇を建立、大同山御堂寺という真言宗寺院を開く。弘安5年(1282)日蓮聖人が身延山より常陸の国へ向かう途中に、川口村上ノ坊に宿した際に、河口浅間神社の御師の梅谷采女を折伏。翌日、采女の兄弟(法亥阿闍梨)のいる御堂寺に聖人をつれてゆき折伏。これより真言宗から日蓮宗へと改宗。寺号も大同山御堂寺から持明山蓮華寺となり、紋は梅谷の紋を用いいる。鈔口(享禄元年(室町時代)作・県指定有形文化財)が伝わる。
8 新倉山 正福寺	富士吉田市新倉 5 8 5	淨土真宗本願寺派。弘法大師空海の高弟道海が真言宗富北院に起源し、建長年間(1249~56)に至って真宗寺院となる。かつて富士山五合目に小屋を持て19世紀初頭には当寺の手を離れていたが、毎年(庚申年)になな生牛王宝印(富士山宝印)や「八葉九尊図」の配布は継続し多くの版木が伝存するなか、延宝8年(1680)の「八葉九尊図」は富士山北面の信仰世界を描いた図像としては最古のものと考えられる。
9 大崩山 如来寺	富士吉田市新倉 613	淨土真宗本願派。一説に救願寺と称する真言宗寺院に起る。寛貞2年(1228)甲斐を遊化中の親鸞に帰依し真宗に改宗。また遊行上人が鎌倉の折に開いた時宗道場に起源とする述べる由緒もある。富士山七合三匁の所在した太子小屋(現太子館)を所持。文化8年(1811)に江戸の講中より寄進された「太子像」が祭祀されていた。現在は境内一隅の太子堂に安置。
10 聖徳山 福源寺	富士吉田市下吉田 5780	淨土真宗本願派。聖徳寺と号する真言宗寺院に起るというが詳細は不明。文安4年(1447)蓮如が遊化した折改宗。境内に建つ「太子堂」には聖徳太子の肖像といわれる太子1歳の肖像画と太子の木像が安置されている。
11 小室浅間神社	富士吉田市下吉田 5221	延暦12年(793年)、征夷大將軍坂上田村麻呂が東征の際、この地より富士山を遥望。戦勝祈願し大勝、その神護を謝して大同2年(807)社殿を建てる。社号は幕末まで「下宮浅間」、明治に入り「小室浅間神社」と改称。上吉田・下吉田・松山の三村の産土神。
12 水上山 月江寺	富士吉田市下吉田 869	寺伝によると浅間明神(北口本宮富士浅間神社)の祈願を司った天台宗寺院称光院に起る。14世紀末、上吉田の祥春庵(現廃庵)に寄宿した向嶽寺(甲州市)の開山抜隊得勝の高弟絶学祖能が再興を企図。毎年6.7月には富士参詣の道者に勧進し再興。月江庵と称し向嶽寺の末派になる。17世紀初頭、妙心寺の派下に転じる。神利となつたのちも浅間明神との関係は維持され、明治初頭まで同社境内の隨神門を所蔵。

	名 称	住 所	内 容
13	小室浅間神社	富士吉田市大明見 148	近世の神社名は浅間明神（甲斐国志）、富士浅間大神（社記・寺記）。この地域には2軒の御陣があり、富士浅間御師としての活動をとあわせ神社とも開わりがあった。祭神は木花咲耶姫命、誓田別命、国狭槌命
15	法輪山 地藏寺	富士吉田市上吉田 5-5-25	臨濟宗妙心寺派。下吉田にある月江寺の末寺。天5年(1577)に雪峰和尚が開基したとされる。本尊は地藏菩薩。甲斐国志・社記に諷訪明神（現諷訪神社）の領地に建立されたと記される。
16	吉積山 西念寺	富士吉田市上吉田 7-7-1	養老3年(719)、行基により開創された天台宗寺院。富士山来迎阿弥陀三尊を安置し、富士道場と呼ばれた。永仁6年(1298)遊行2世他阿真教によって改宗し甲斐武田氏一族、一条右衛門太夫吉積を本願として諸堂を再建し、吉積山と号する。富士山の一合五尺に所在したといわれる定善(禪)院は塔頭清光院の所管で6、7月の登拝期にはその住僧が參籠し法要を執行した。本尊は薬師如来立像で県文化財に指定。現在も火祭の執行に際し諷訪神社の社頭へ参詣し諷經。御幸する神輿を門前で出迎える。
17	吉祥山 上行寺	富士吉田市上吉田 38	養老2年(718)富岳入山のころ休道坊と号したものが寺院となる。文永6年(1269)に日蓮大士を開山として改宗。寺所蔵の創造如來立像は、8世紀頃朝鮮の新羅で造られ日勝聖人の手で富士山へもたらされ、上行寺に納められたとされる。日蓮上人本坐像、多宝如來、釈迦牟尼仏
18	魔王天神社	南都留郡鳴沢村 7932	社殿はなく、この社中に古くは太郎坊の小祠があり、後に富士山小御岳に遷され小御岳権現と称する。
19	船津脇内櫻型	富士河口湖町船津町丸尾 6663	元和3年(1617)富士講の開祖長谷川角行が富士登山の際、焼入(現脇内の南上)に洞穴を見出し浅間明神を祀る。延宝元年(1673)富士仙元道5世村上七衡門は現脇の脇内櫻型を見出し、開祖が祀った浅間明神を遷する。浅間明神誕生の地ともいわれ、木花咲耶姫命が無戸室に火を放ち無事に無事に皇子を出産したという故事にならい無戸室浅間神社と称す。宝永2年(1705)本殿建立。仙元道信徒は登山の往復に脇内をくぐり身の潔斎をおこなった。
20	忍草山 東円寺	南都留郡忍野村忍草 38	天台宗東叡山寺末。その後比叡山延暦寺末。忍草浅間神社の別当寺、創建年代は不明。浅間神社神体に「正和4年(1315)別當東円寺」とある。江戸時代は大日寺と号し施主笠置の折、鈴原社(当時は大日堂)から降ろされた不動明王を受け入れる。江戸時代以前の旧地と伝わる斜面には雛壇状の平場がある。
21	忍草浅間神社	南都留郡忍野村忍草向屋敷 456	建久4年(1193)源賴朝から朱印地を賜り鎌倉幕府の武運長久祈禱を申し付けられる。隨神門・金剛力士像を建立したと伝わる。本殿には慶長8年(1613)の棟札がある。正和4年(1315)10月13日銘のある木花咲耶姫命、鷹御、犬御、(三神像)の御神体を所蔵。

第3節 富士山中の調査

第1項 富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡

(1) 概要と調査に至る経緯

富士御室浅間神社は、富士山吉田口登山道二合目に鎮座する本宮と、河口湖の南岸に鎮座する里宮とから構成されている。神社由緒記によると、本宮は文武天皇3年(699)藤原朝臣義忠が勧進し、大同2年(807)に坂上田村麻呂が社殿を創建したという由緒をもつ富士山中で最古の神社と伝えられる。『富士山明細図』の「二合目小室浅間社」(巻頭図版6)には、江戸時代末ころの神社周辺の景観がよくあらわされている。

地質的に見ると富士山二合目は、小富士火山(8万年前～氷河期時代が終わる10,500年前)の噴出物地帯であり、新富士火山期(後氷期)の堆積物や熔岩に覆われていない場所はここ以外にはほとんど見られないことから、古代においては土壤形成の由来による顕著な植生の違いがあった可能性が高い。神社周辺には、登山道が沢を渡る部分があり、またこの近くにはかつて「神泉飲料水」を汲んだ水場が今でも残されていることから、古くから信仰拠点として着目されていたと考えられる場所である。文献上の初現は、『諸州古文書』にある文明7年(1475)の小林入道正善の神領証文であるが、『甲斐国志』によると、文治5年(1189)銘の男神像と建久3年(1192)銘の女神合掌神像が祀られていたとされ、神社の存在時期は少なくとも平安時代末～鎌倉時代初頭に遡るものと考えられる。ただしこれら神像は現在行方が知らない。平成19年には、「山梨県内中世寺院分布調査」において、神社に隣接する行者堂跡推定地の発掘調査が実施された。この行者堂は、甲府盆地の真言宗の古刹である円楽寺の兼帶である。調査により、テラス壁面を土留めする石垣や、13世紀初頭に位置付けられる東遠系の山茶碗片などが見つかっている。

このように、富士山中での重要な信仰拠点のひとつでありながら、その創建年代等については、はっきりしたことがわからっていないため、第一に二合目の信仰拠点としての起源を探る目的で、第二には境内周辺に残るテラスの性格や使用時期を探り、また周辺の旧道と信仰施設との繋がりを考え、神社周辺の信仰拠点としてのかつての景観を知るためのデータを得る目的で平成21年10月5日～同30日にかけて調査を実施した。

なお、調査の結果、神社社有地である、富士河口湖町の飛び地の範囲を、富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡とした。

(2) 試掘・確認調査

■平成21年度の調査(第6～20回)

現在、拝殿が残るテラスとその裏の山林中に見られる小テラスについての調査を実施した。

第1トレント

建物跡などの遺構は発見されなかったが、永楽通宝や熙寧元寶など中世段階の銭貨40点あまりが確認されている。土層の状況から、人為的なテラス造成がなされていると考えられる。

第2トレント

調査に入る前から、石が並んでいたが、石の上面が平らではなく建物礎石などではないと考えられる。旧道に面する小規模なテラスという状況は第1トレントと同様であるが、銭貨の出土は5点と少ない。

第3トレント

拝殿が残るテラスから裏の山林に入つてすぐのところにあるテラスである。第1・2トレントと比較するとやや規模の大きいテラスである。建物礎石と考えられる石が確認された。調査前から1基のみ石の頭が見えていたが、調査の結果6基の礎石が確認された。またここからは釘が9点発見された。釘が出土していない第1・2トレントとは性格が異なり、建物があったことを補強するデータである。土層の堆積状況から、人為的なテラス造成がなされていると考えられる。

第4トレント

本殿裏側のマウンド状となった場所である。銭貨の他、土器片が確認されている。このトレントを120cmほ

と掘り下げたところ、新富士中期（約4,000～1,600年前）と考えられる噴出物が確認されている。

第5トレンチ

本殿跡の北側にあたる場所である。土器片が確認された他、地表下70cm～160cmにかけて炭化材が多く出土している。細かい破片ばかりではなく、10～20cm程度の大きな材も含まれていた。その分布を断面図で見ると、地表下約50～60cmまでは土器等の遺物を含んでおり、炭化材は遺物を含む層より下から出土している。これら炭化材について奥水達司氏（県環境科学研究所）のご協力のもと年代測定を行った結果、西暦1100～1200年という結果が出た。

第6トレンチ

本殿跡の北側に接して設定したトレンチである。銭貨が3点出土した。土層の状況からすると、かなり改変されている状況が見られた。

第7トレンチ

拝殿裏側にあたる位置である。寛永通宝・文久永宝が1点ずつ発見された。

第8トレンチ

もともと石塔の一部があった場所である。寛永通宝や鉄銭（新寛永か）、土器片や陶磁器片も確認されている。

第9トレンチ

本殿跡の南に接して設定したトレンチである。ここからは本殿下の基礎となる版築と考えられる土層が確認されている。陶磁器片や銭貨も確認されている。

現在拝殿があるテラスの裏に広がる小テラスからも、遺物の出土が見られたことから、ここに広がる旧道とそれに面するテラスについても、ある段階で使われていたということが確認された。遺物の出土状況をみると、銭貨の出土が多い第1トレンチには何らかの信仰施設があった可能性もある。ただしここでは、礎石や建物跡などは確認されておらず、釘なども出土していないことから建物があったとは考えにくい。一方で第3トレンチからは建物礎石が確認され、釘の出土も見られることから、このテラスに建物が存在したことは確実と思われる。土層の堆積状況から第1・3テラスともに人為的な造成によるものと考えられる。

全体的な概観としては、遺物の出土状況から見ると、境内地内からは渡来銭に加えて寛永通宝など江戸期の銭貨が混在して見られるのに対して、境内地裏側からは渡来銭のみが見つかっており、江戸期の銭貨は含まれていない状況がある。ただし渡来銭は江戸期になども使用されていたことから、銭貨のみで明確な時期分けをすることはできないが、旧道に面する山林中の小テラスは中世段階に使用されたものであり、江戸期には使われていなかったことを示唆している可能性もある。土器類は第5・8トレンチから多く見つかっている。土器の時期については、編年がある程度把握されている甲府盆地周辺地域と比較すると、15世紀後半くらいに位置づけられるという見解もある。また、中世末頃、静岡県富士宮市の大宮城跡で出土している、富士系かわらけに類似するものも含まれているという指摘も得ている。郡内地域の、該期の土器様相についてはまだはっきりとわかっていない為、在地土器編年の中での、これら土器類の位置付け等については、今後の課題である。以上の成果や、現在の境内地が慶長年間に整備されたことを考え合わせると、整備以前には現在とは異なった景観が存在した可能性もある。

■平成22年度の調査（第21～29回）

前年度の調査で確認された神社周辺における信仰施設の広がりについて、旧道との関係を含めて明らかにするために、二合目一の鳥居に近接するテラス、神社より一段下のテラスである定善（禪）院跡推定地周辺について調査を実施した。また現在の境内地においては、前年度確認された本殿跡の版築について、その規模を確認する目的で調査を実施するとともに、現在の境内地であるテラスの造成状況について確認する目的でも調査を行なった。調査期間は、平成22年9月2日～10月6日である。

本殿跡周辺（第1～3トレーナー）

本殿跡周辺では、全体的に付き固められた土層が確認されたが、それは方形のようなきちんとした形は成さないことが確認された。また合わせて、礎石の確認を行なった。礎石らしきものも幾つか確認されたが、規則的に並ぶものは見られなかった。

本殿裏側にあたる第2トレーナーでは、前年度も確認されている古富士火山噴出物の続きが検出され、もとは東側（一合目方向）に向かって落ち込んでいく地形であったことが明らかとなった。

石碑群石垣裏（第4トレーナー）

富士講の石碑が立ち並ぶ石垣の上からは、石垣と軸を同じにする石列が確認された。その周辺からは近世の陶磁器片や寛永通宝などの銭貨が出土した。

二合目一の鳥居周辺のテラス

この周辺では、江戸期の陶磁器片が上方から落ちてきたような形で確認されている。上に何らかの施設等があり、そこから落ちてきたと考えるのが自然である。ただし踏査ではこの上方にテラスなどは確認されていない。その中で旧道に沿ってやや広いテラスが見られたが、このテラスには上にある富士御室浅間神社の裏側の山林を通って下ってくる旧道と、一合目方面から上り一の鳥居に向かう旧道とがクロスする位置にあたる。ここに2本のトレーナーを設定した。調査の結果、両者のトレーナーとともに踏み固められた部分が確認され、ここが旧道として使われていたことが明らかとなった。一部には焼土が集中する箇所も確認されている。建物跡等の遺構は確認されなかった。

第2項 定善（禪）院跡伝承地（富士御室浅間神社二合日本宮境内地遺跡内）

（1）概要と調査に至る経緯

『甲斐国志』によると、富士吉田市上吉田に所在する時衆寺院「西念寺」の塔頭のひとつであると伝えられる。ここでは西念寺の塔頭清光院の住僧が、毎年6・7月の登山期に参籠して常念仏を執行していたところであり、仏法修行の参詣者にとっての道場であったと思われる。現在西念寺に安置される「薬師仏（釈迦如来像）」〔山梨県指定文化財〕は、定善（禪）院の本尊であったと伝えられる。この台座には永享12年（1440）に作られたとの記録がある。『甲斐国志』には、定善（禪）院の記録は見られないことから、甲斐国志編纂時には庵寺であった可能性が高い。

この付近には、他に良好なテラスは存在しないため、定善（禪）院があったのはこの地点であると考えられた。このため、今回の調査は、第一にこのテラスに釈迦如来像の銘と同時期の建物跡等が存在するか確認すること、第二に、このテラスには旧道が通っていたものと考えられるが、テラス上にあった施設と旧道との位置関係を明らかにすることを目的として実施した。

なお、調査地点は、富士御室浅間神社二合日本宮境内地遺跡内に含まれる。

（2）試掘・確認調査（第30～35図）

定善（禪）院跡伝承地のテラス（第1～5トレーナー・第8・9トレーナー）

7本のトレーナーを設定し掘り下げを行なったが、全体的に土中には陶磁器片の他、ガラスや街が含まれていることから、大規模に搅乱されているか、土を入れられているものと考えられる。土層は水平堆積であることから、搅乱後に平らにならされているものと想定される。出土した陶磁器類は江戸期～近代のもので、中世に属するものは含まれていない。周辺を見渡すと、現地は唯一の広い平坦地であることから、登山道の改修などの折にも資材置き場等として活用されたものと考えられる。また、富士御室浅間神社総代さんからは、昭和49年に本宮本殿を里宮へ下ろした時にも、解体した本殿の部材をこのテラスに仮置きしたという話を伺っている。このように、後世に作業スペースとして活用されたことも、遺構が確認されなかつた一因である可能性もあるが、釈迦如来像の銘にあるような中世段階の遺物が皆無であったことから、あるいはもともと定善（禪）院があった場所がここ

ではなかった可能性も高いのではないだろうか。

旧道部分①（第6・7トレンチ）

江戸時代末期に制作され、吉田口登山道に点在する信仰拠点の風景を納めた『富士山明細図』の「二合目一ノ鳥居」（巻頭図版6）には、一の鳥居から右に大きく曲がって、富士御室浅間神社に登り上げる道を行く道者の姿が描かれている。現地にはこれと同じカーブを描く旧道が残されているが、そこに大きな石が露頭する場所があり、ここを中心としトレンチを設定して掘り下げを行なった。調査の結果、露頭する大きな石の上には、富士講の石碑が倒れた状態のまま、埋もれているのが確認された。石碑の正面には「御中渡大願成就禪行」、右側面には「寛政八辰歳 七月二日 御師 外川能登守」、左側面には「江戸麻布廣尾町 先達 包市郎兵衛」と記され、御師である外川能登守と山包講の講祖的存在である包市郎兵衛によって、寛政8年（1796）に制作されたものであることがわかる。また、旧道部分に設置したトレンチからは（Ⓐ）、（Ⓑ）の講印（朱入れ）がある石灯籠の笠部分や四角く加工された石、陶磁器片、寛永通宝等が出土した。石灯籠の笠部分は、富士御室浅間神社の拝殿前に埋没していたものと同じものであり、かつて、神社の拝殿前に設置されていた対の石灯籠であると考えられる。

『富士山明細図』「二合目 小室浅間神社」にも神社前の鳥居の脇に對で描かれている（巻頭図版6）。これら石造物は、旧道に沿って神社周辺から転がり落ちてきたものと考えられる。ただし富士講の石碑は、倒れた状態で埋没したことから、もともとは露頭する石の上に立っていたものと考えられる。とすれば、この道が登拝道として機能していたことを如実に物語っていると言える。

旧道部分②（第10・11トレンチ）

二合目一の鳥居から現登山道を挟んで、定善（禪）院跡伝承地のテラスに至る間に、幅の狭い平坦地がある。旧道を通って鳥居をくぐり、再び旧道から富士御室浅間神社本宮を目指すにあたって、おそらくは旧道として機能していたと考えられる場所であったため、トレンチを設定した。その結果、道と考えられる踏み固められた範囲が確認された。このことからかつての旧道は、上述の「二合目一の鳥居周辺のテラス」から鳥居に至り、現登山道を横断し、「旧道部分②」を通って定善（禪）院跡伝承地のテラスを通過して、「旧道部分①」を上り上げて本宮に至ったものと推定される。

第3項 富士山吉田口登山道関連遺跡 五合目地點

（1）概要と調査に至る経緯

五合目は古くは中宮と呼ばれ、富士山における宗教上の大きなポイントのひとつであった。このあたりには、富士山中の役錢場のひとつである中宮役場が置かれていた。中宮改所は、戦国の頃に鎌倉改めのため18軒の小屋が設けられ錢改が行なわれ、吉田・河口の師職が交代でそこへ詰めて錢改を行なったのが始まりと言われる。山梨県側の富士山中の信仰世界を描いた延宝8年（1680）の版木『八葉九尊図』には「こやかす十八間」と記されており、延宝期までに中宮十八軒が成立していたことは確実である。その後、享保18年（1733）の記録によれば、「富士山中宮憩小屋 中宮十八軒」と記されており、江戸時代中期にもこの辺りに18軒の小屋が設置されていたことがわかる。中宮小屋は、參詣道者からの山役錢の請取場所とされ、同時に茶屋など參詣道者の休憩所として商いが営まれていたと考えられている。五合目以上は「天地境」であり、それ以上は神聖な場所であると考えられてきたため、商い小屋を建てる事ができなかった。このため、早朝の御来光を拝む參詣者の宿泊施設として、ここに小屋が集中したものと考えられる。江戸時代中期以降は、信仰觀の変化により、五合目周辺の小屋はより上へと移り4軒の小屋のみが残った。文献・絵画資料等によるとこのようないわゆる場所だが、赤色立体図によりこの周辺の地形をみると、五合目館跡よりも上で早川館跡よりも下の範囲の山林中に20ほどの中規模なテラスが段々に見られ、富士吉田市教育委員会の踏査によって現地を確認した。その結果、自然地形とは考えにくい小規模なテラスが集中していることから、ここが中宮十八軒に当たる場所であると想定し、比較的広いテラスを3つ選んで調査を実施した。調査期間は平成22年7月15日～同23日である。

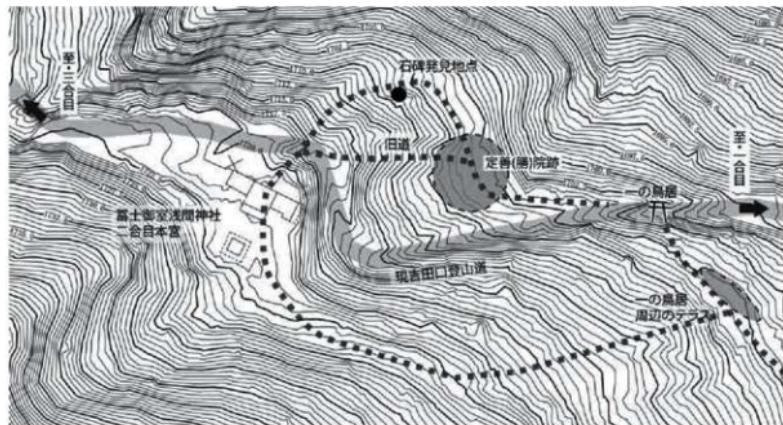
(2) 試掘・確認調査(第36～40図)

対象となるテラスのうち、第1・3・10テラスについてトレンチを設定した。第1テラスでは礎石状に並ぶ石が確認されている。第3テラスからは銭貨が13点出土した。鉄銭1点を除いては全て波来銭であるが鎧銭が多い。また火打石も出土している。礎石等は発見されなかった。第10テラスは、拳大～人頭大程度の石が多く露出する場所があり、ここを中心精査を行なったが、これらの石は建物礎石や基礎を成すものではなさそうである。ここからは寛永通宝などの銭貨が3点出土している。今回は3つのテラスのみの調査であったが、銭貨などの遺物が出土し、礎石とみられるものも見つかっていることから、この周辺に見られるヒナ段状の地形に中宮十八軒があったものと考えてよいのではないだろうか。また、ヒナ段の周辺には、それらを繋ぐような形で谷状に産んだ旧道と考えられる溝が巡っている。ここからも徳利の破片が見つかっていることから、これら溝は旧道と考えられる。

第4項 五合目で発見された石碑(第36・41図)

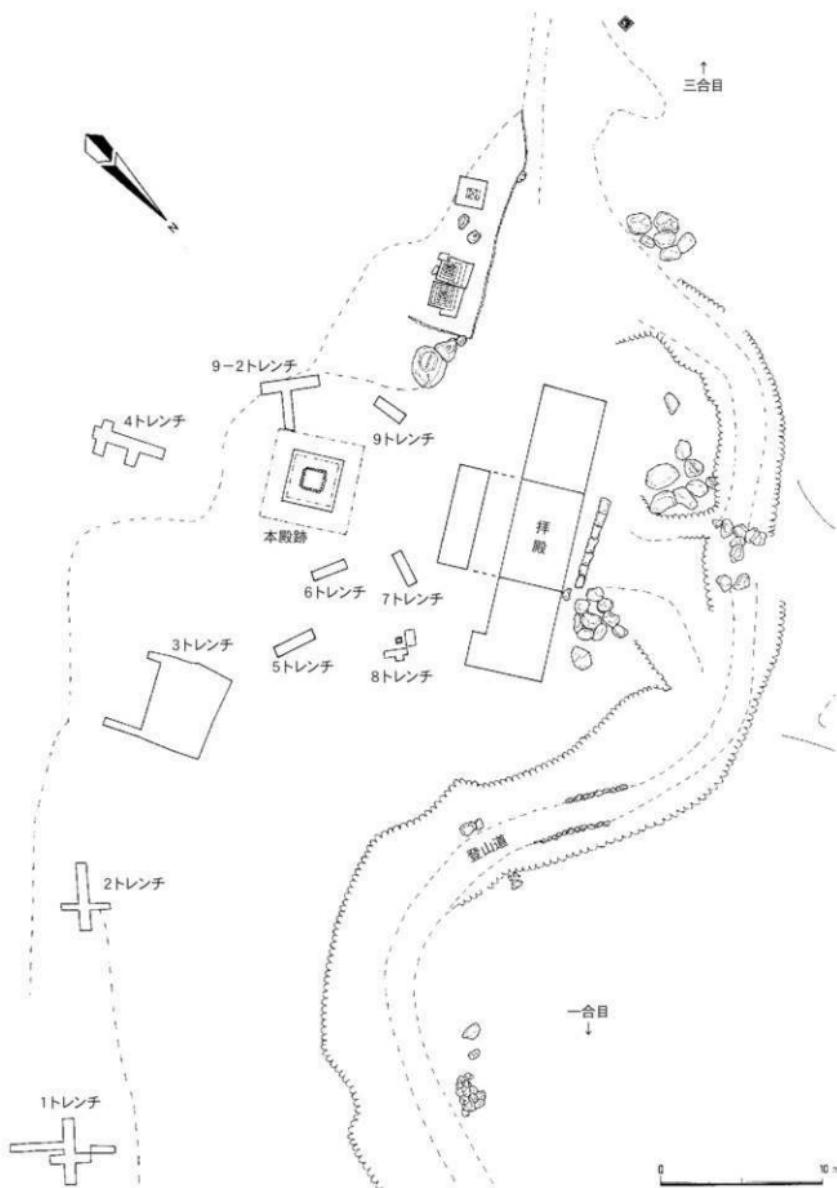
五合目には、かつて大日社・浅間社・稻荷社の3社が祀られており、また周辺には富士山中の役戸場のひとつである「中宮役場」が置かれており、この一帯は山中の重要な信仰拠点であったことが理解できる。しかしながらこれら主要建物は、雪代により流され跡形もなくなり、現在では富士守稻荷と、もとの富士守稻荷の跡地といわれる小テラスが残るのみである。このように山中の重要な信仰拠点であるにも関わらず、その跡地などよくわかつていないことから、周辺の地形および信仰拠点としての痕跡を確認すること目的として踏査を実施した。

その結果、富士守稻荷跡地の小テラスの西側で、旧道と考えられるV字状の凹みを確認した。さらにこの旧道沿いに大形の板状の石碑が倒れて埋もれているのを発見した。この石碑には茂木重蔵・家寿の記名があり、新井端氏(熊谷市立江南文化財センター)・金子正之氏(熊谷市立図書館)のご教示により、茂木重蔵氏は現在の埼玉県熊谷市で紙問屋を営んでいた方であることがわかった。この店は、戦前まで、関東でも大きな紙問屋として知られていたということである。また、重蔵氏の子孫にあたる茂木雄功氏の話により、「重蔵」名は名乗りで、雄功氏の祖父の代まで代々が名乗ったものであるという。石碑には残念ながら年号が確認できず、また「重蔵」名も代々の名乗りであることから、これがいつ頃奉納されたものであるのか正確な時期は出せないが、現在機能していない旧道沿いに設置されていることなどから考えると、明治時代まで遡ると考えてもよいのではないだろうか。この石碑は約140cm×約80cmとかなり大型で、これを五合目まで運んできた当時の人々の信仰心には驚かされる。

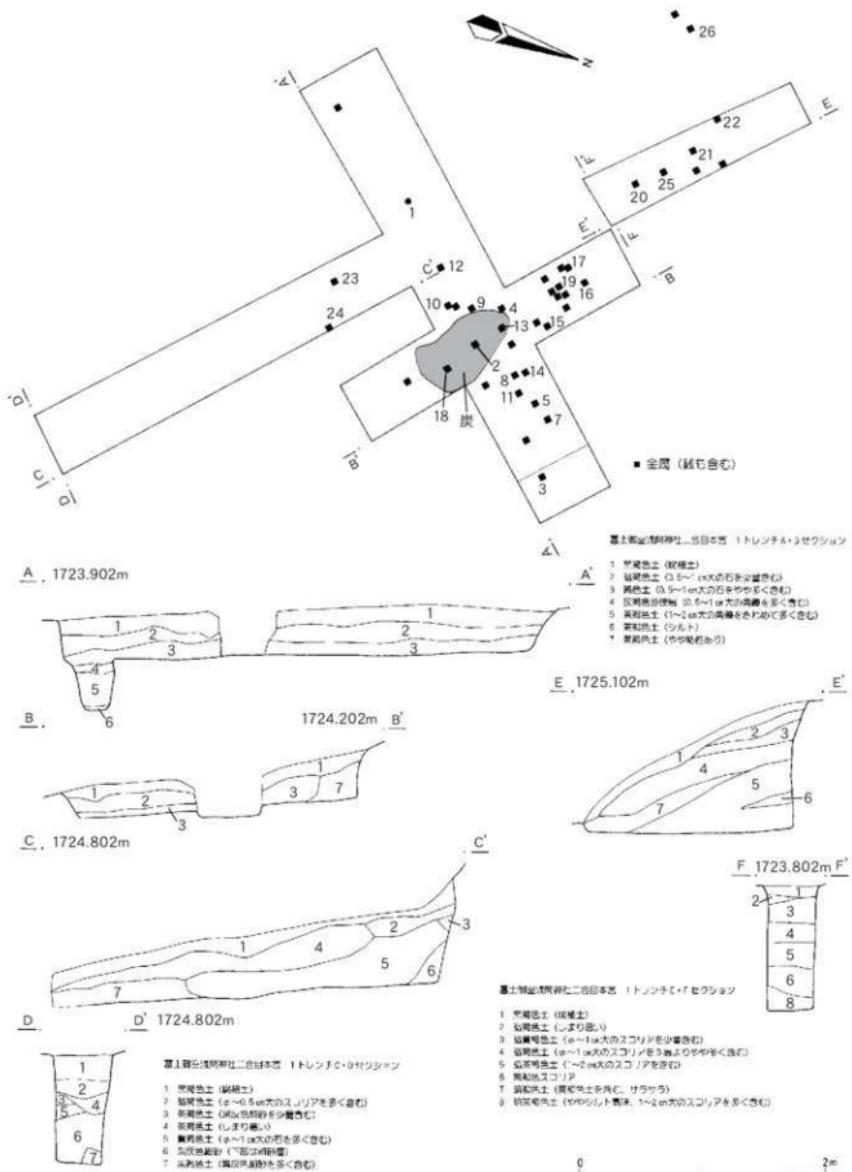


第5図 富士山二合目周辺図

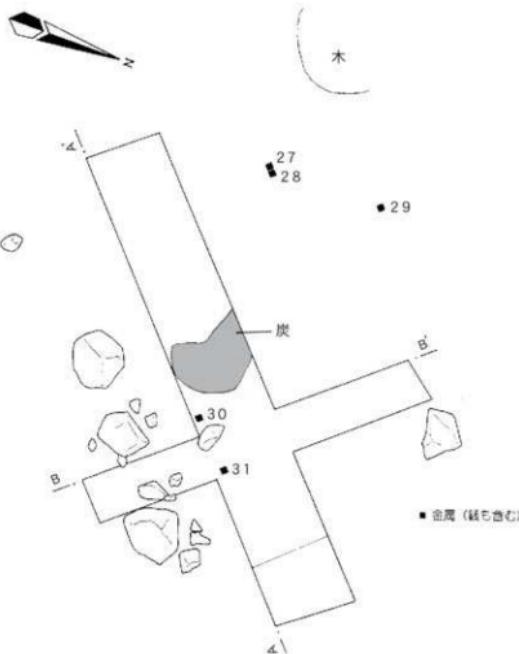
S=1/1,000



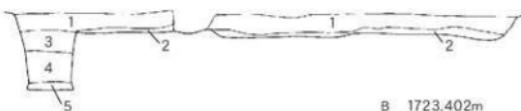
第6図 富士御室浅間神社ニ合日本宮(H21) トレンチ位置図



第7図 富士御室浅間神社二合目本宮(H21) 1トレンチ 平面図・セレクション図



A 1723.402m



富士御室浅間神社二合目本宮 2トレンチ

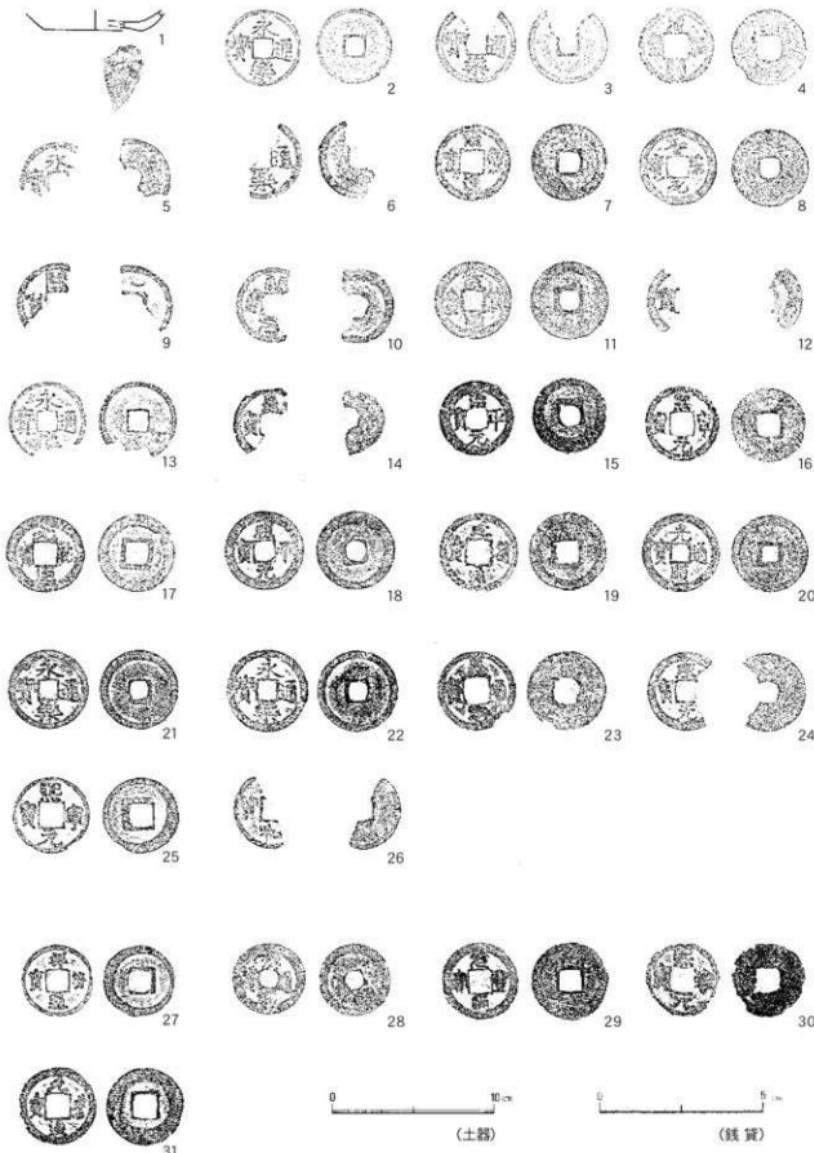
- 1 黒褐色土 (漂砾土)
- 2 砂礫層土 (2-5cmの石を含む多石土)
- 3 黄褐色土 (0.5-1.5mの石を含む砂質土)
- 4 黑褐色土 (1-2.0mの粘土を含む多く青色)
- 5 黄褐色土 (シルト)

B 1723.402m

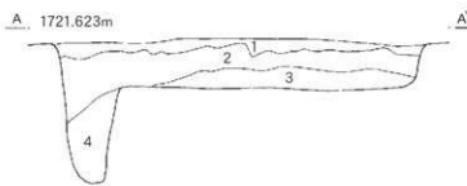
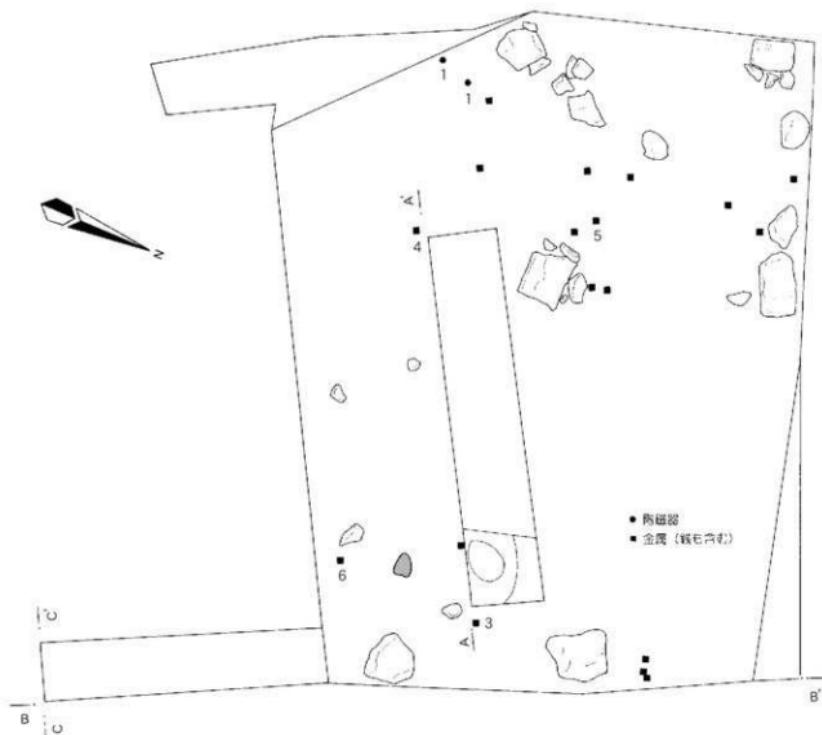


0 2m

第8図 富士御室浅間神社二合目本宮(H21) 2トレンチ 平面図・セレクション図



第9図 富士御室浅間神社二合目本宮(H21) 1・2トレンチ 出土遺物



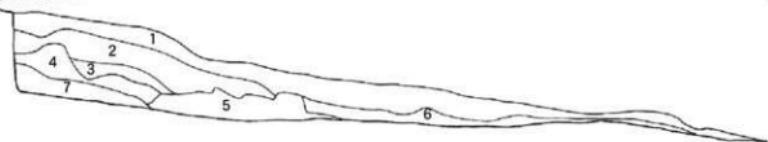
富士御室浅間神社二合目本宮・3トレンチセクション

- 1 黄褐色土(硬粘土)
- 2 黄褐色土(φ~2cmの石を含む)
- 3 黄褐色土(硬土質、砂片を少量含む、φ~2cmの石を含む)
- 4 黄褐色土(φ~2cmの石を含む)

第10図 富士御室浅間神社二合目本宮(H21) 3トレンチ 平面図・セクション図

B' , 1722.803m

B

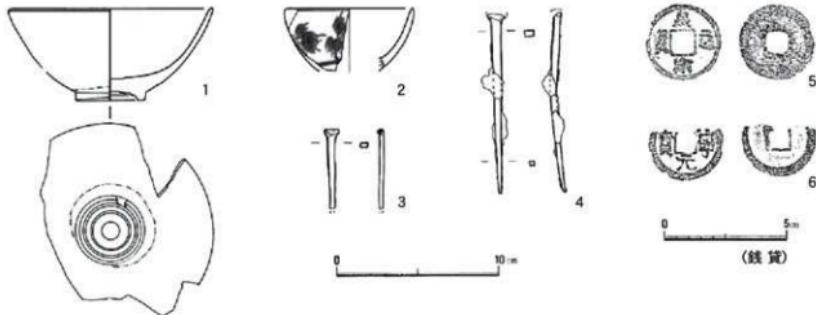


C , 1725.373m . C'

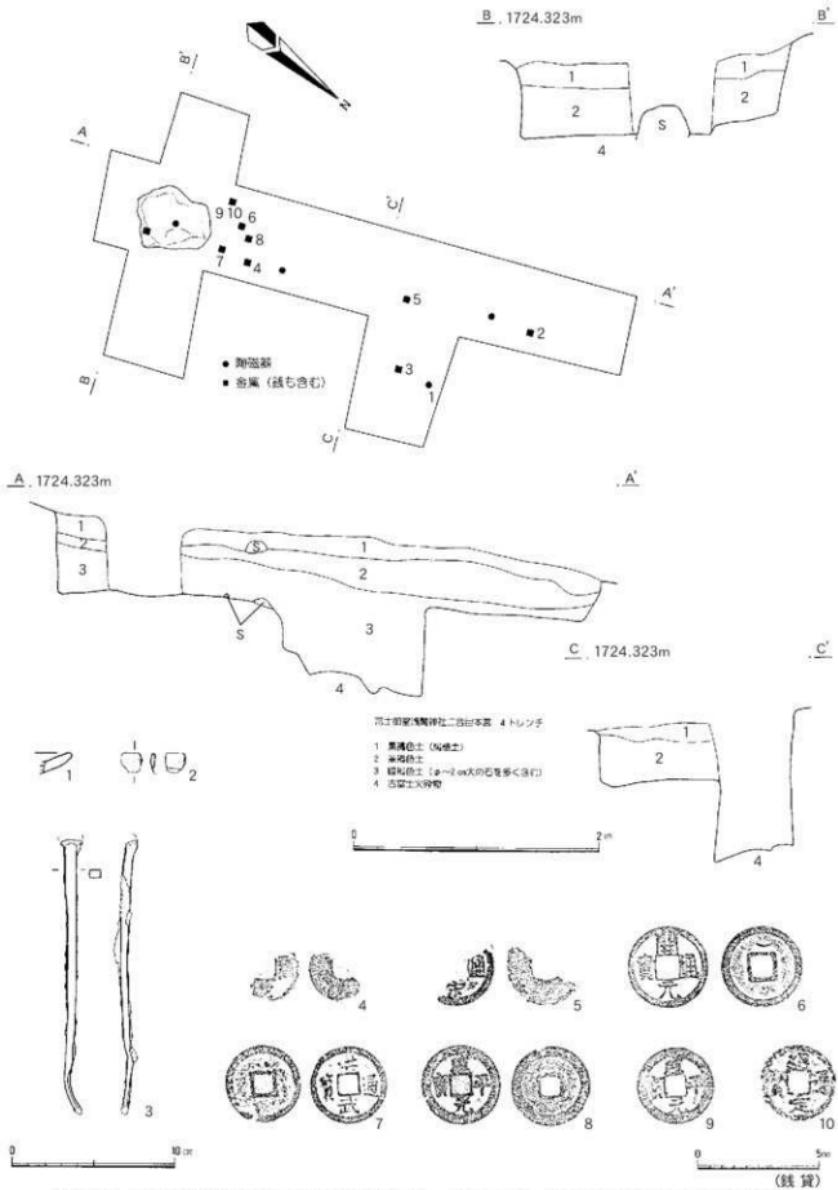


富士御室浅間神社二合日本宮 3トレンチセクション

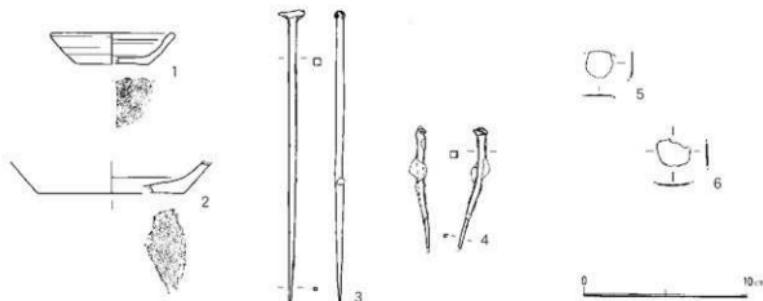
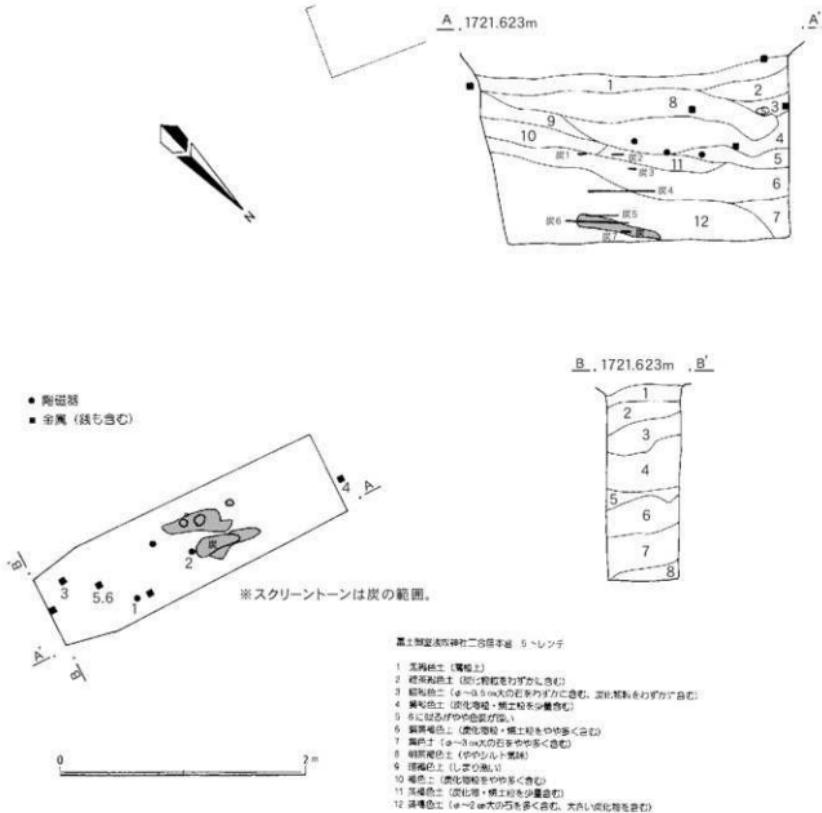
- 1 実相白土(礫砂土)
- 2 黄褐色土(φ=1cmの石を少量化)
- 3 黄褐色土(より土が多い)
- 4 実相白土(砂)
- 5 混相土(φ=1cmの石を多く含む、スコリアを少量含む)
- 6 混相土(φ=1cmの石を含む、より多い)
- 7 黄褐色土(1~2cmの石を多く含む)



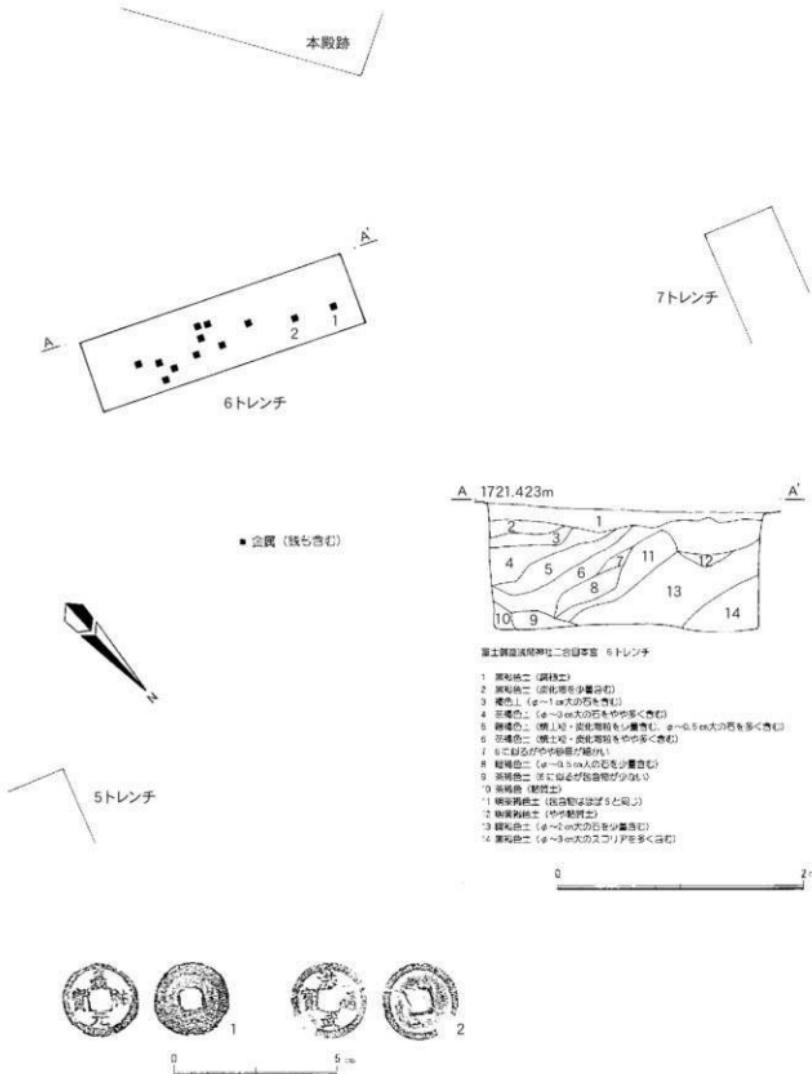
第11図 富士御室浅間神社二合日本宮(H21) 3トレンチ セクション図・出土遺物



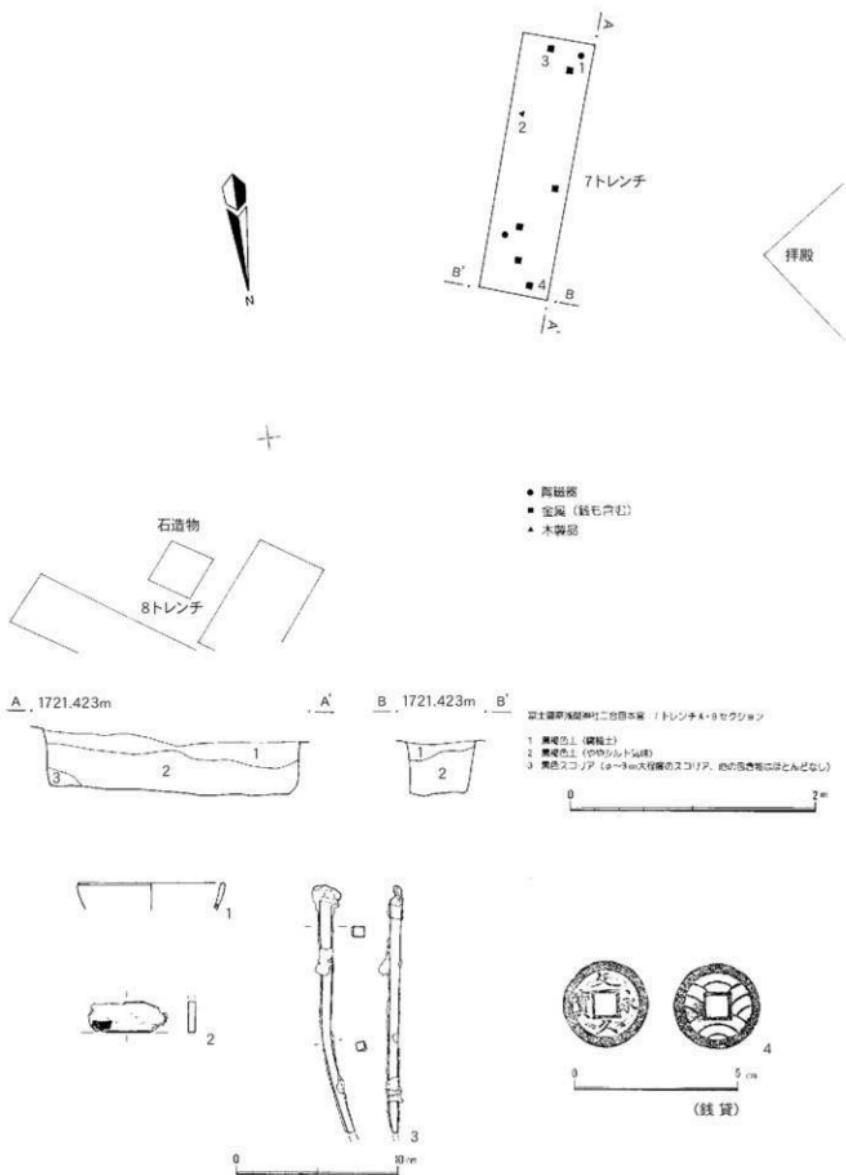
第12図 富士御室浅間神社二合目本宮(H21) 4トレンチ 平面図・セクション図・出土遺物



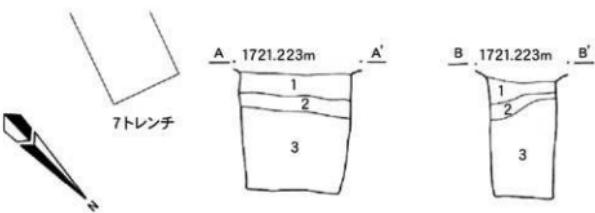
第13図 富士御室浅間神社二合目本宮(H21) 5トレンチ 平面図・セクション図・出土遺物



第14図 富士御室浅間神社二合目本宮(H21) 6トレンチ 平面図・セクション図・出土遺物



第15図 富士御室浅間神社二合目本宮(H21) 7トレンチ 平面図・セクション図・出土遺物

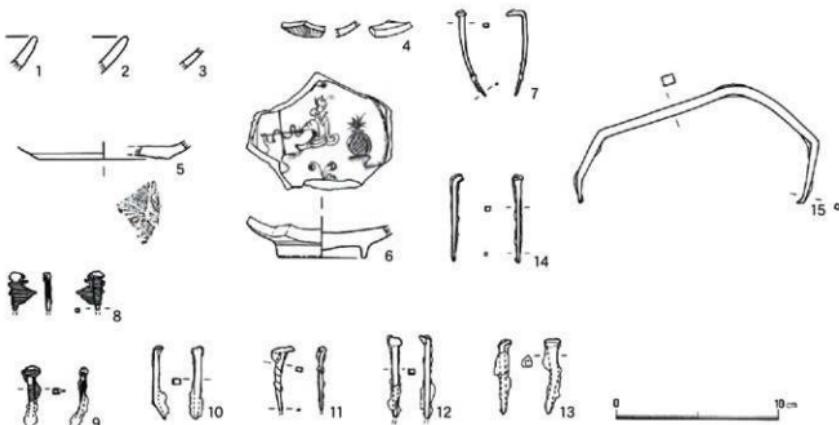
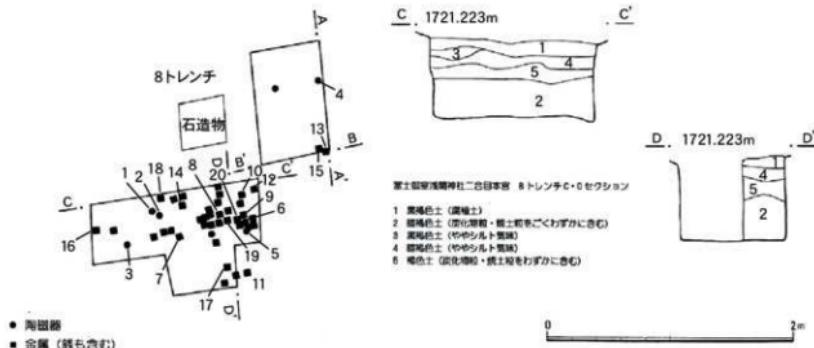


富士御室浅間神社二合日本宮 7トレンチA・Bセクション

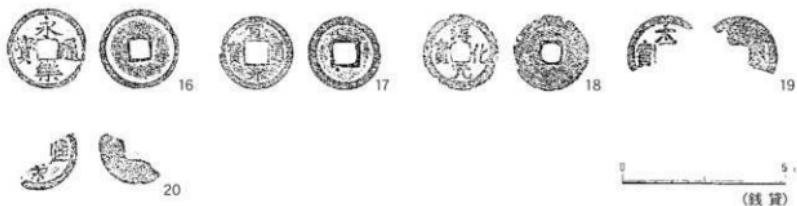
1 黄褐色土(腐殖土)

2 暗褐色土(φ~1cmの大いの石を少數含む)

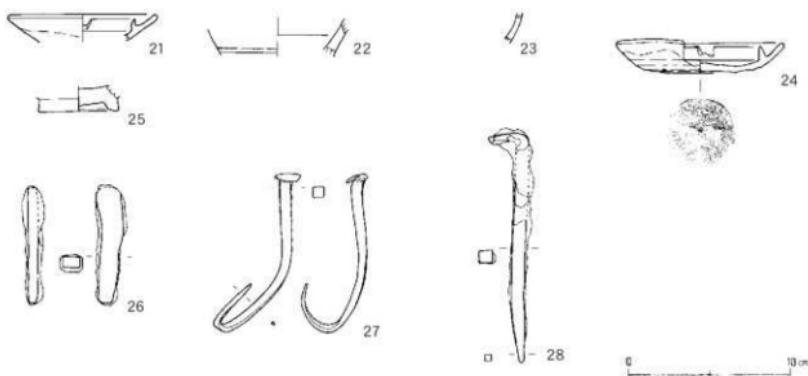
3 黄褐色土(1~2cmの石を多く含む、炭化物類・焼土粒を少數含む)



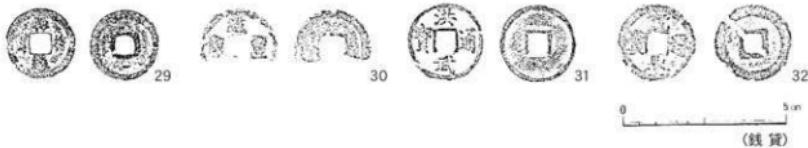
第16図 富士御室浅間神社二合日本宮(H21) 8トレンチ 平面図・セクション図・出土遺物(1)

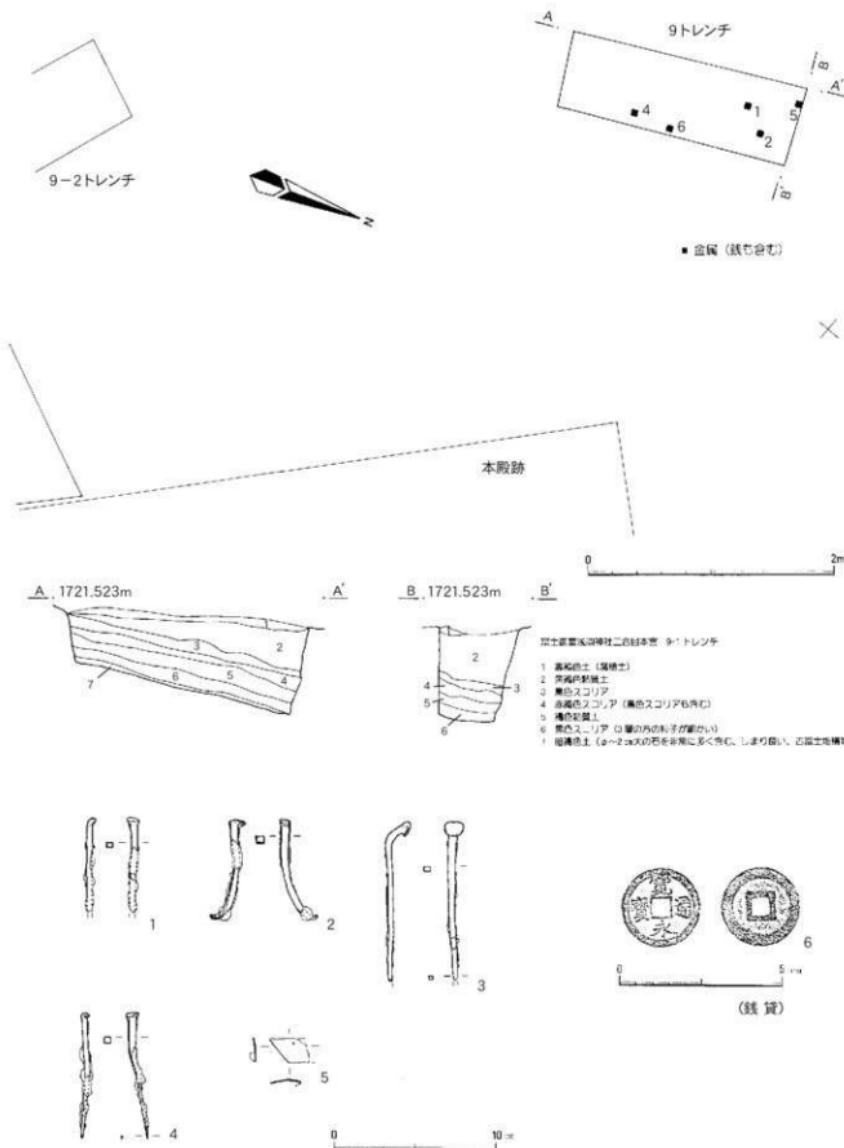


第17図 富士御室浅間神社二合目本宮(H21) 8トレンチ 出土遺物(2)

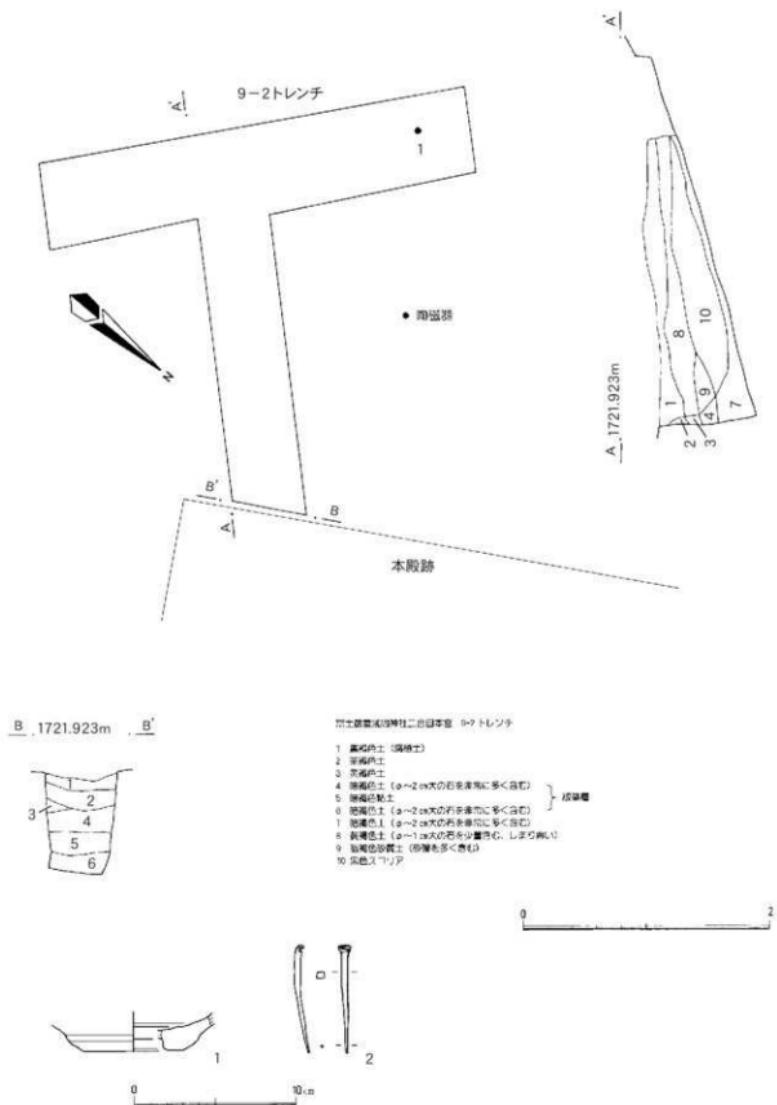


第18図 富士御室浅間神社二合目本宮(H21) 表探遺物

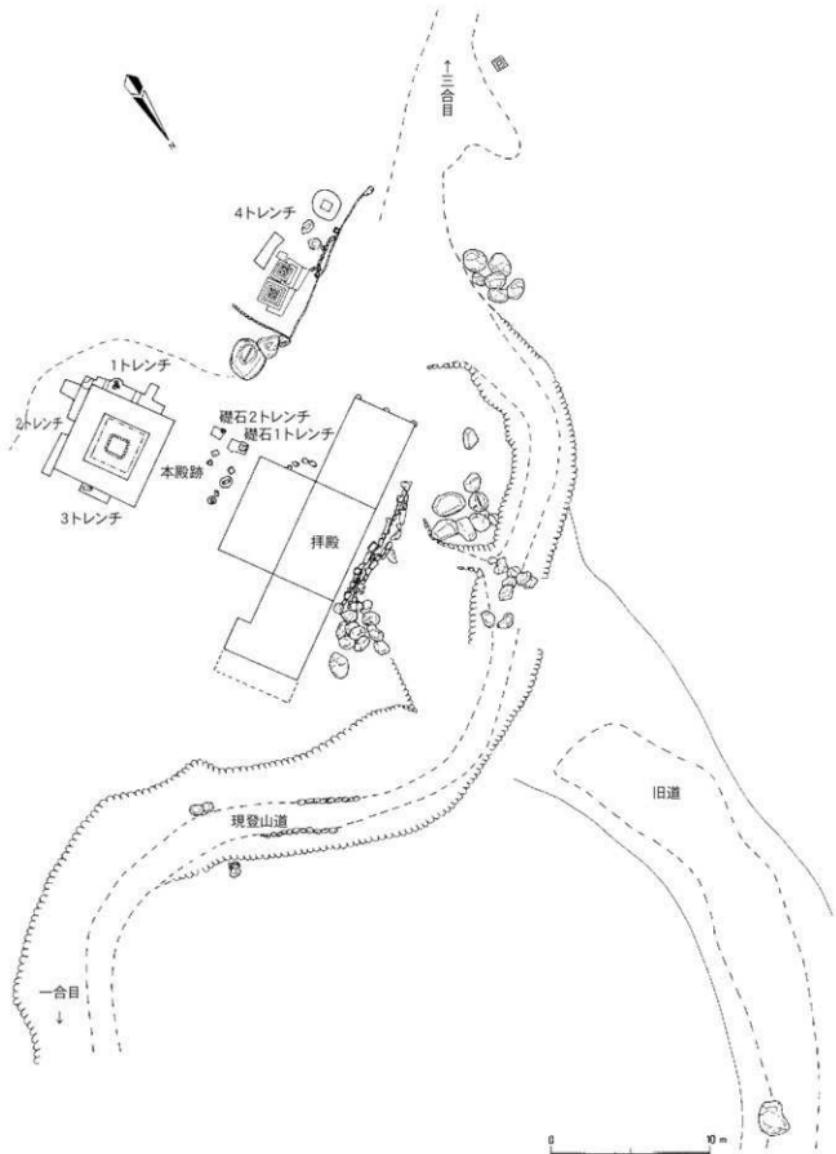




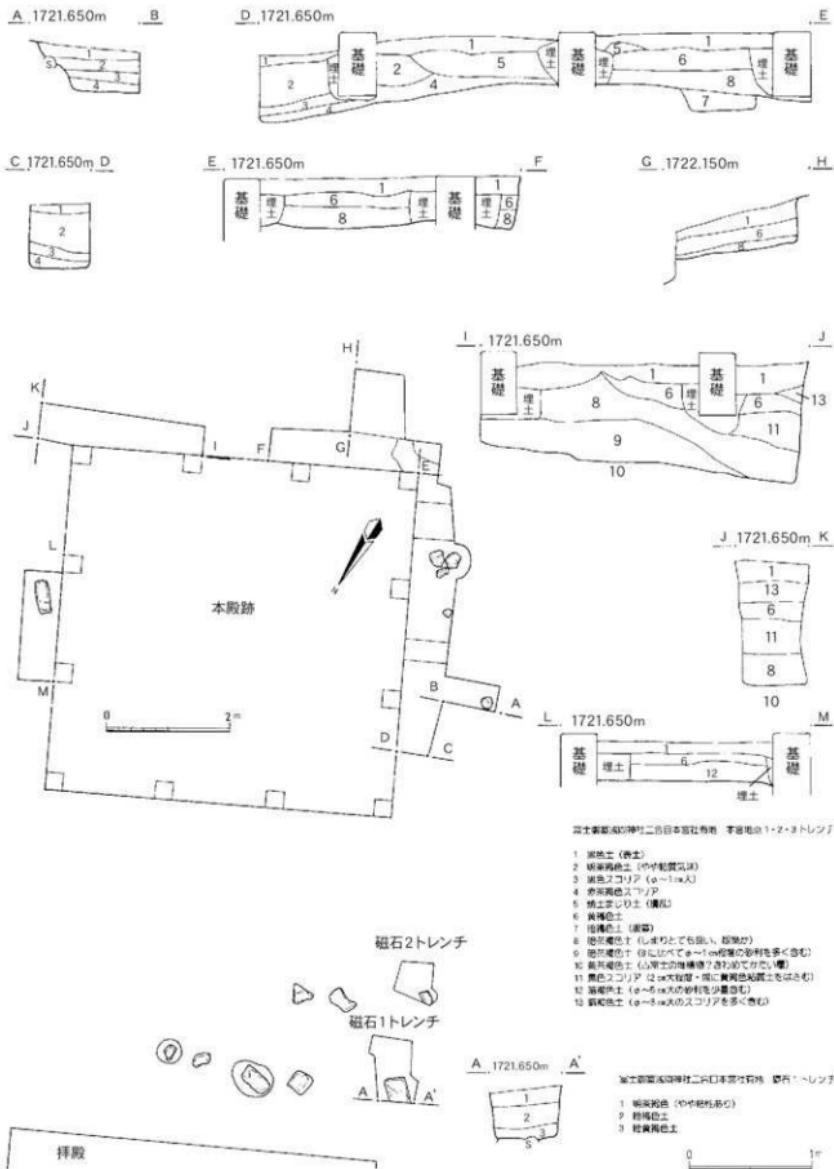
第19図 富士御室浅間神社二合目本宮(H21) 9-1トレンチ 平面図・セクション図・出土遺物



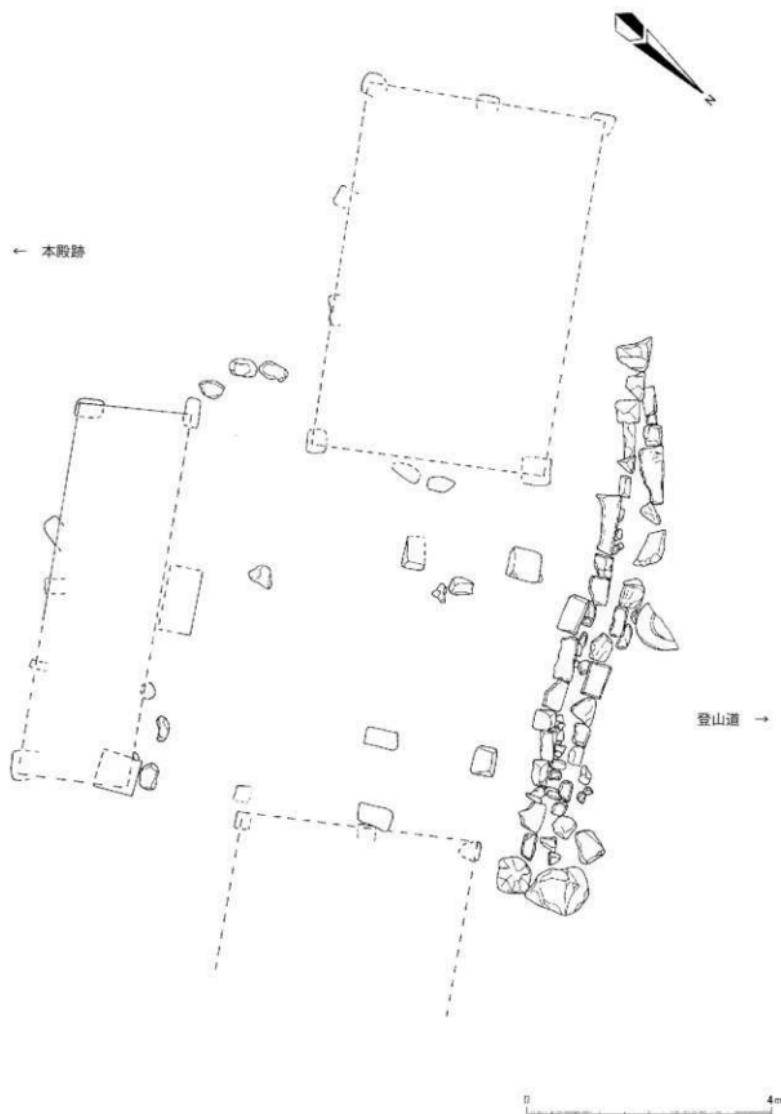
第20図 富士御室浅間神社二合目本宮(H21) 9-2トレンチ 平面図・セクション図・出土遺物



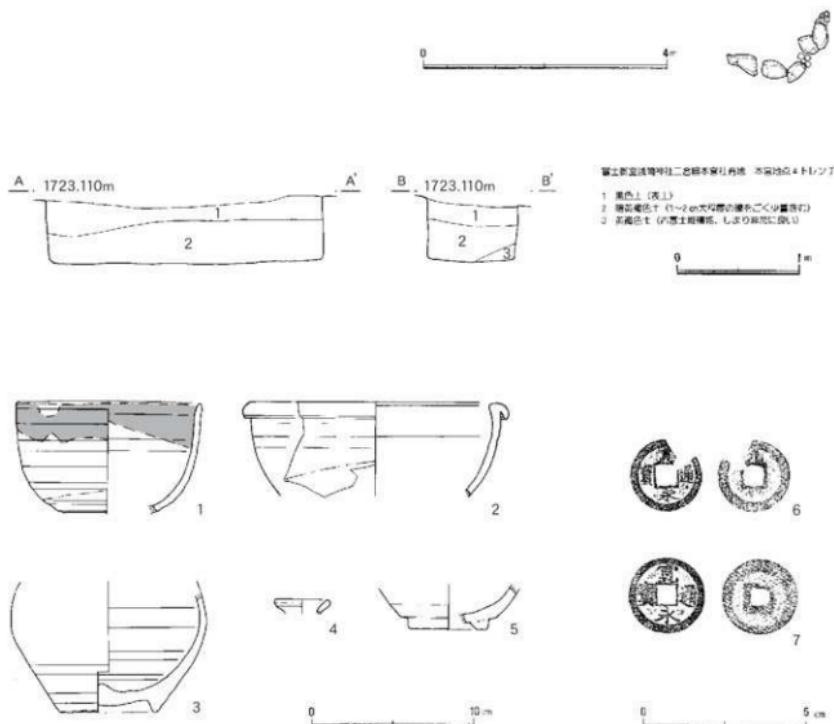
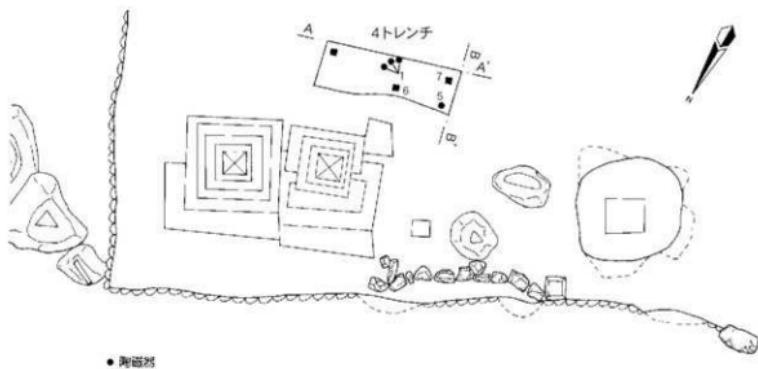
第21図 富士御室浅間神社二合目本宮(H22) トレンチ位置図



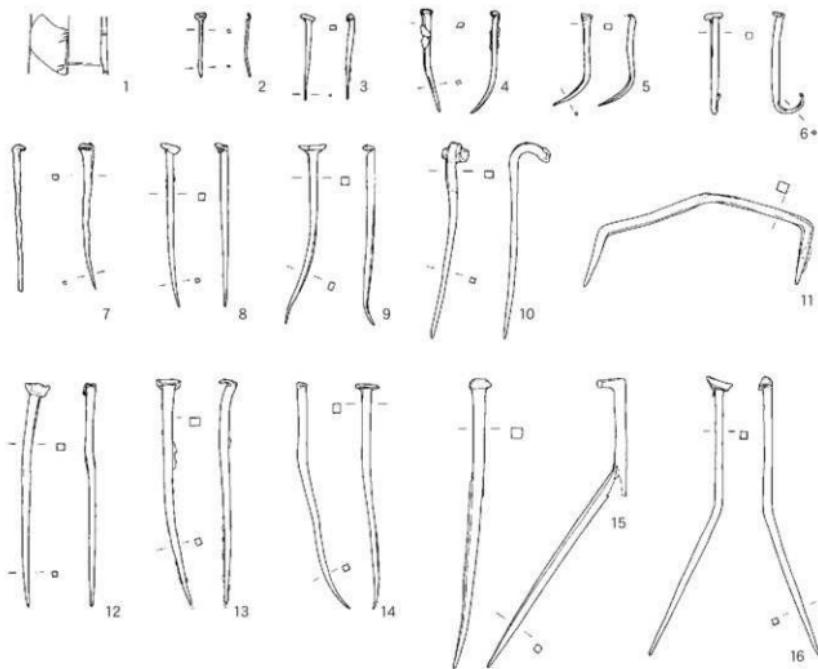
第22図 富士御室浅間神社 二合日本宮(H22) 本殿跡周辺 セクション図



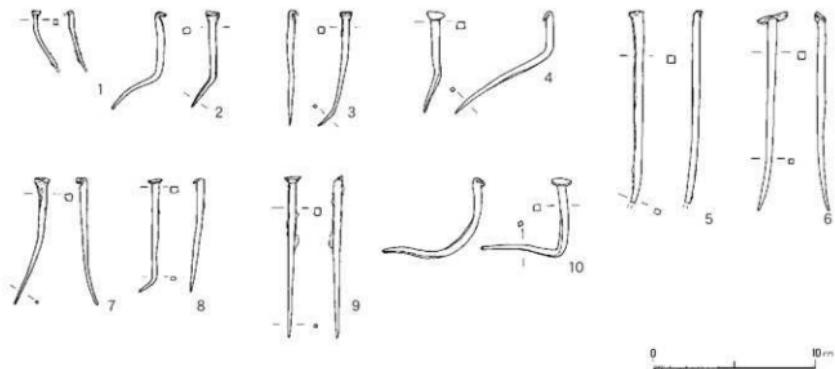
第23図 富士御室浅間神社 二合目本宮(H22) 拝殿周辺 磐石および石段 平面図



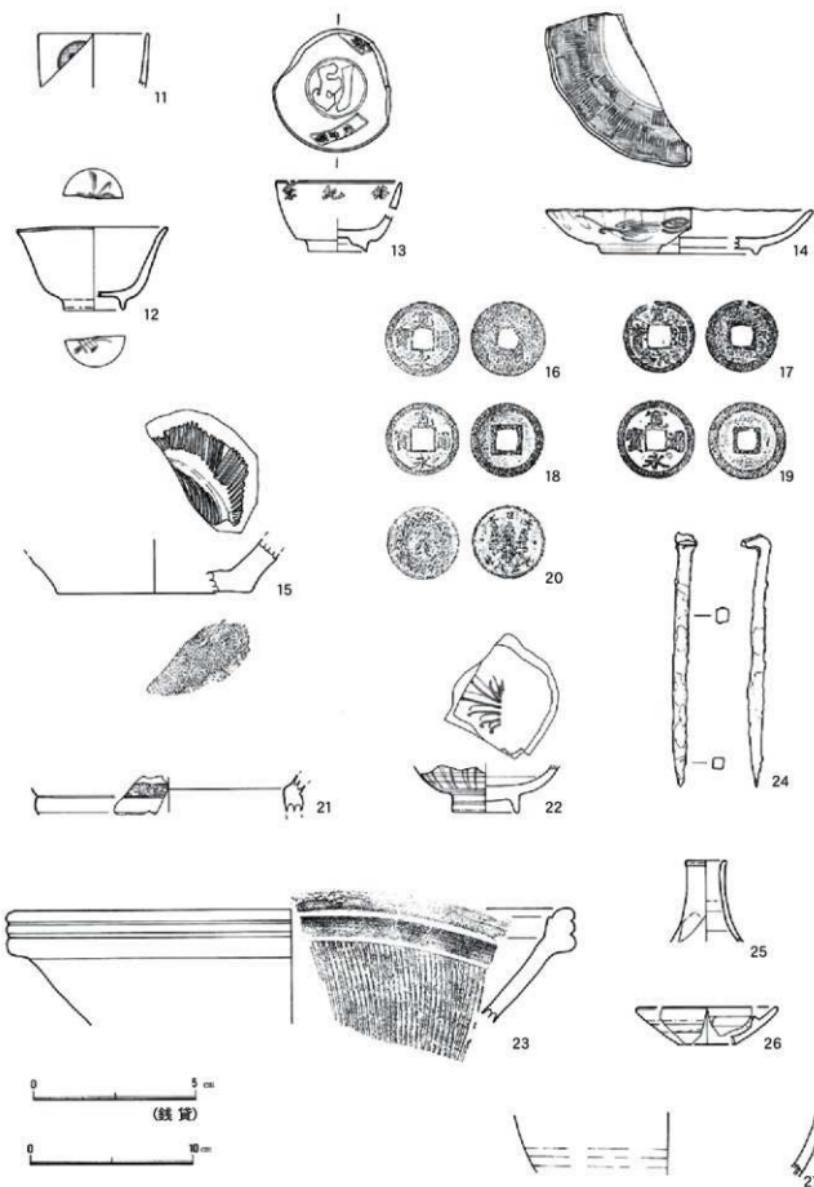
第24図 富士御室浅間神社 二合日本宮(H22) 4トレンチ全体図・セクション図・出土遺物



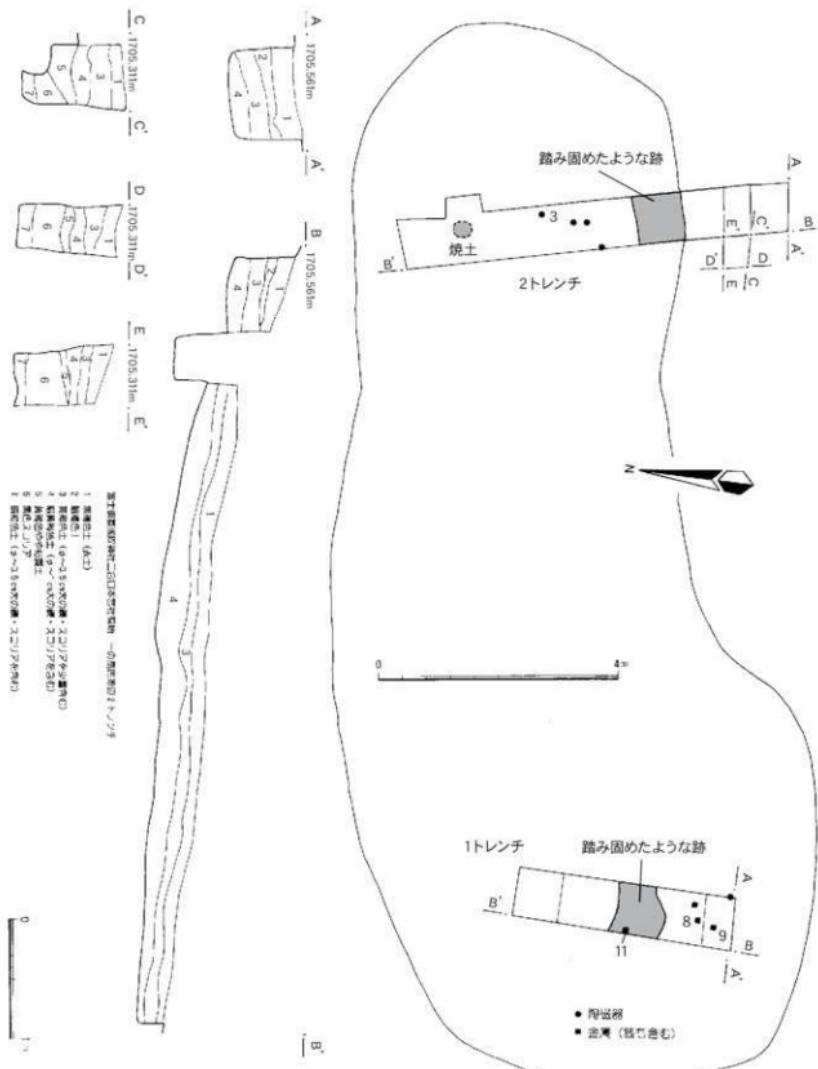
第25図 富士御室浅間神社 二合目本宮(H22) 2トレンチ 出土遺物



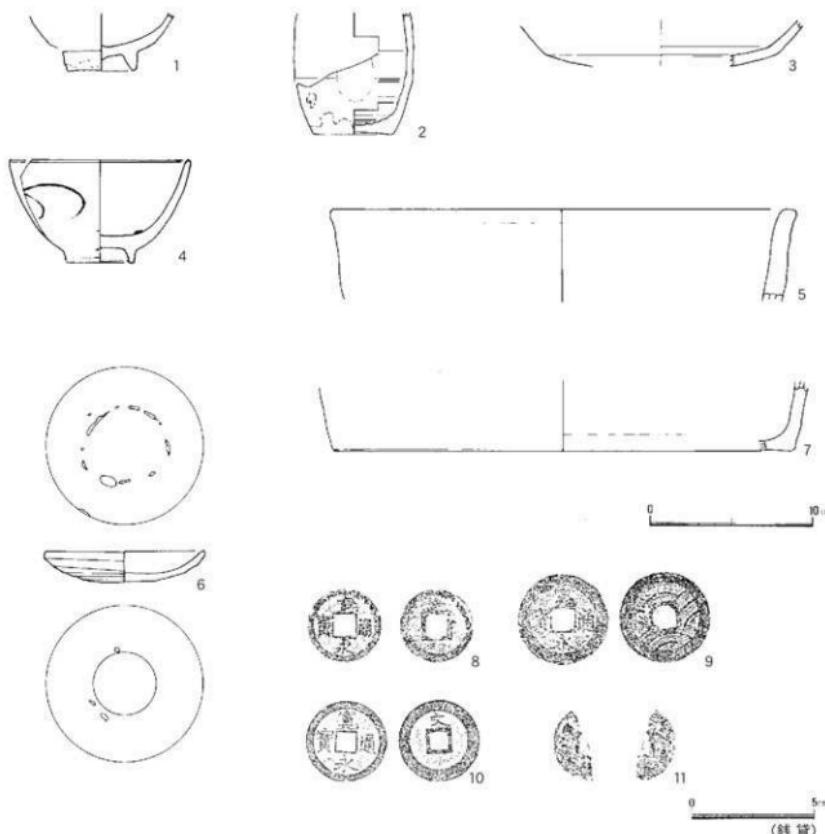
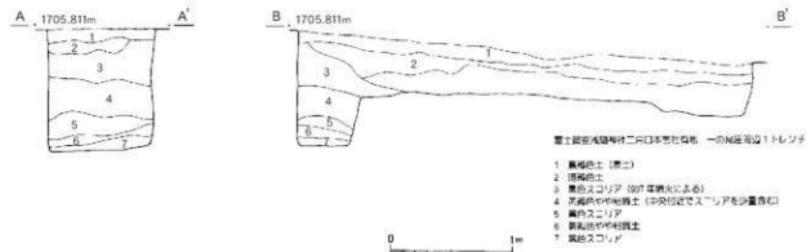
第26図 富士御室浅間神社 二合目本宮 表採遺物(1)



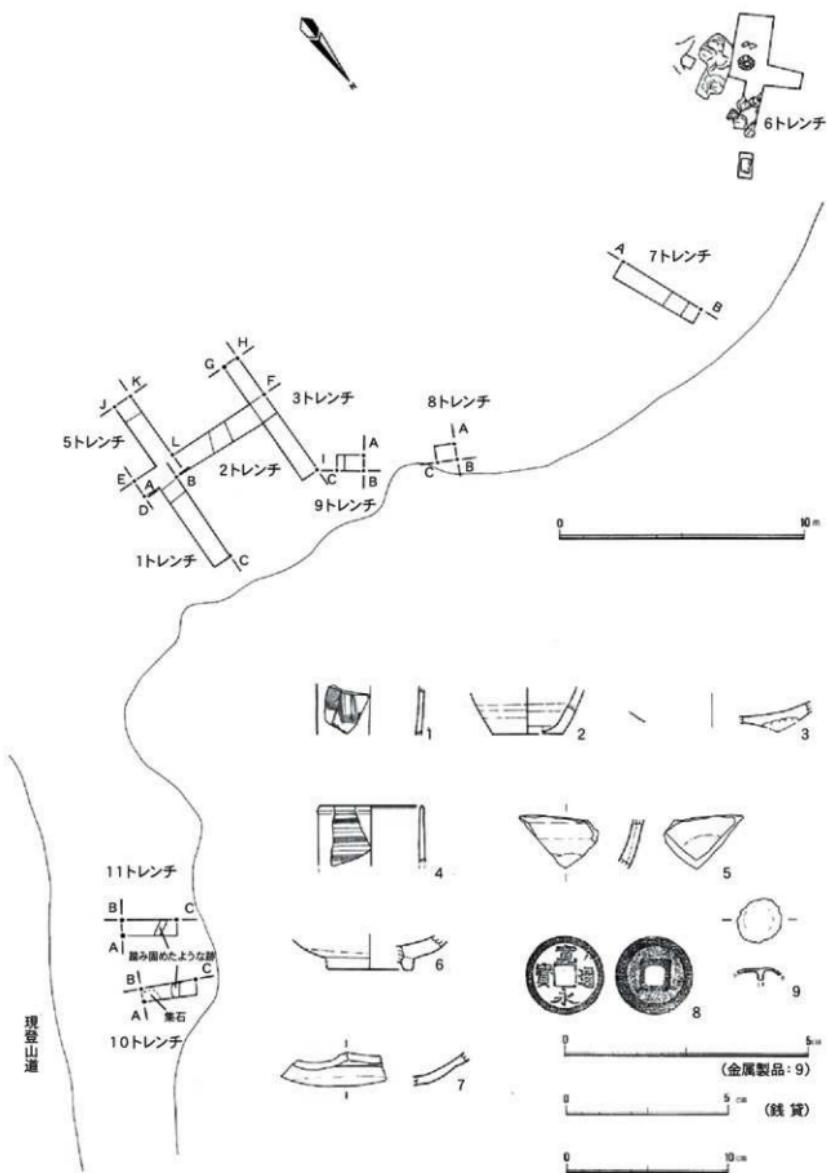
第27図 富士御室浅間神社二合目本宮 表探遺物(2)



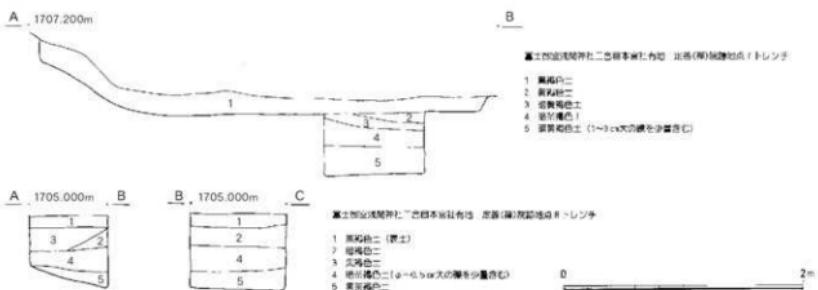
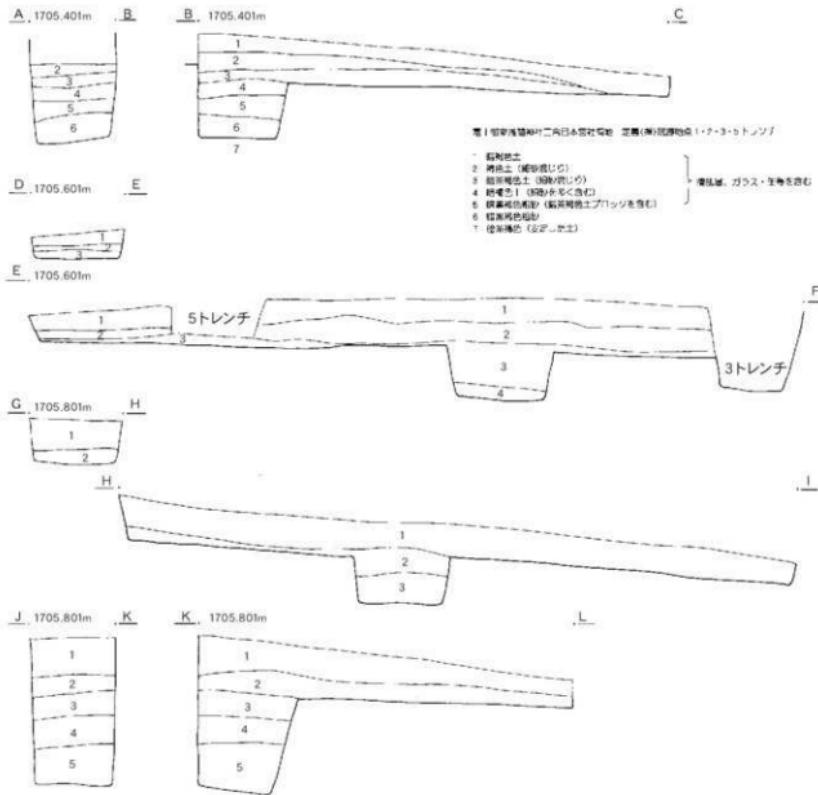
第28図 二合目 一の鳥居周辺のテラス 平面図・セクション図



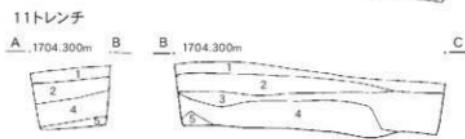
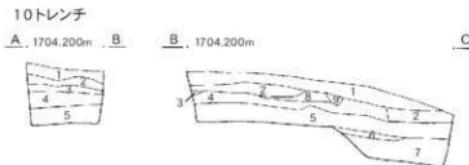
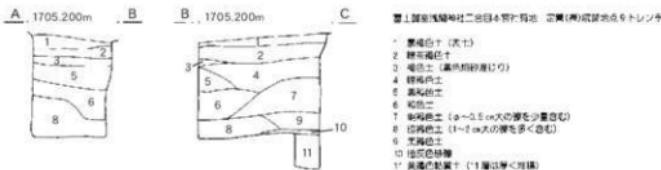
第29図 二合目 一の鳥居周辺のテラス セクション図・出土遺物



第30図 定善(禪)院跡伝承地 トレンチ位置図・出土遺物



第31図 定善(禪)院跡伝承地 セクション図(1)

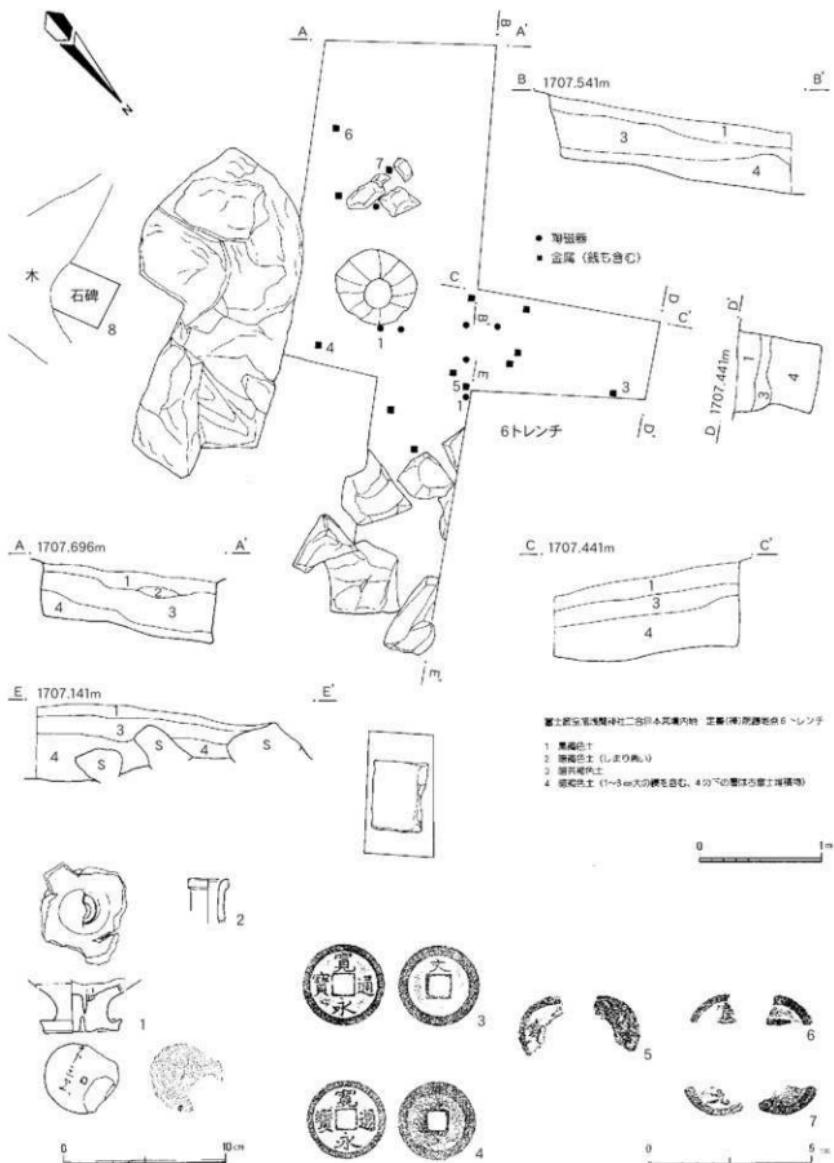


図上は東北側、左は西側

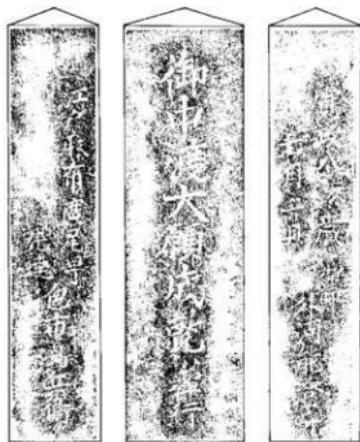
1 褐色褐色土
 2 緑苔褐色土 (a~2cmの塊を少々含む)
 3 緑苔土
 4 黒褐色土
 5 緑苔褐色土 (やや粘性あり)
 6 塗膜褐色土 (シルトを多く含む)
 7 褐色褐色土 (a~5cmの塊を少々含む)
 8 黃褐色土 (より堅い)
 9 田畠地



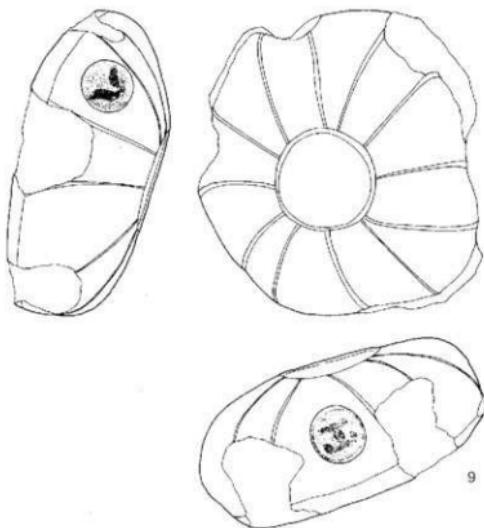
第32図 定善(禪)院跡伝承地 セクション図(2)



第33図 定善(禪)院跡伝承地 6トレンチ 平面図・セクション図・出土遺物

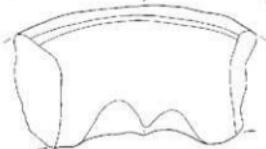
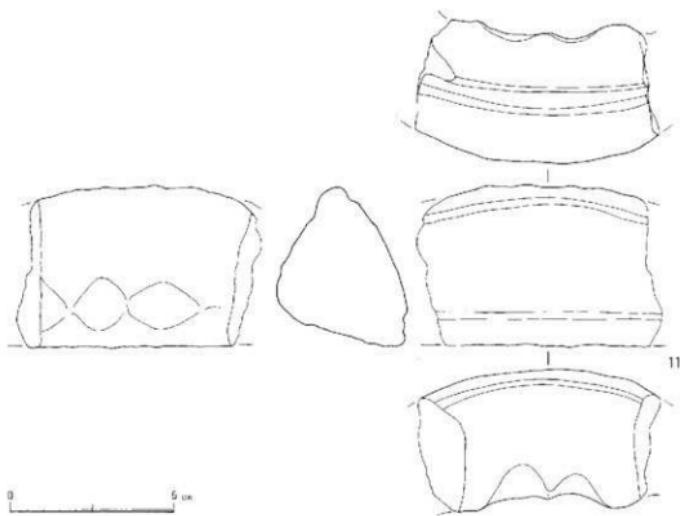
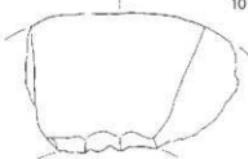
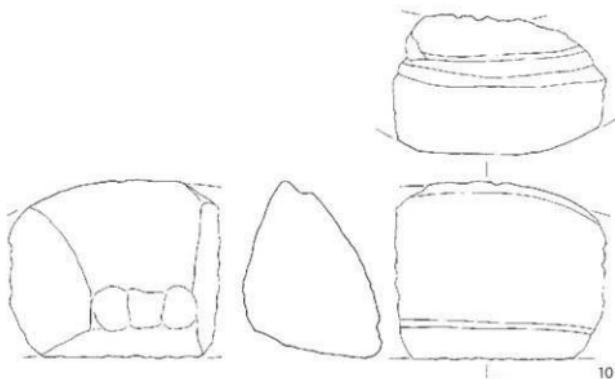


8



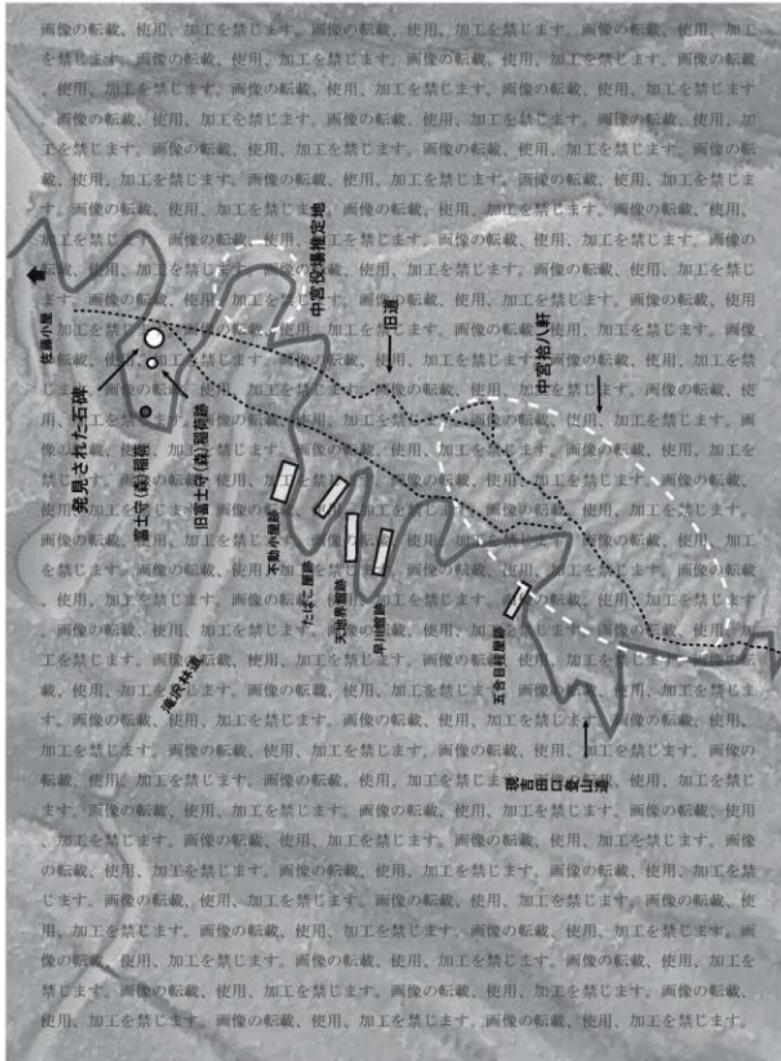
0 50cm

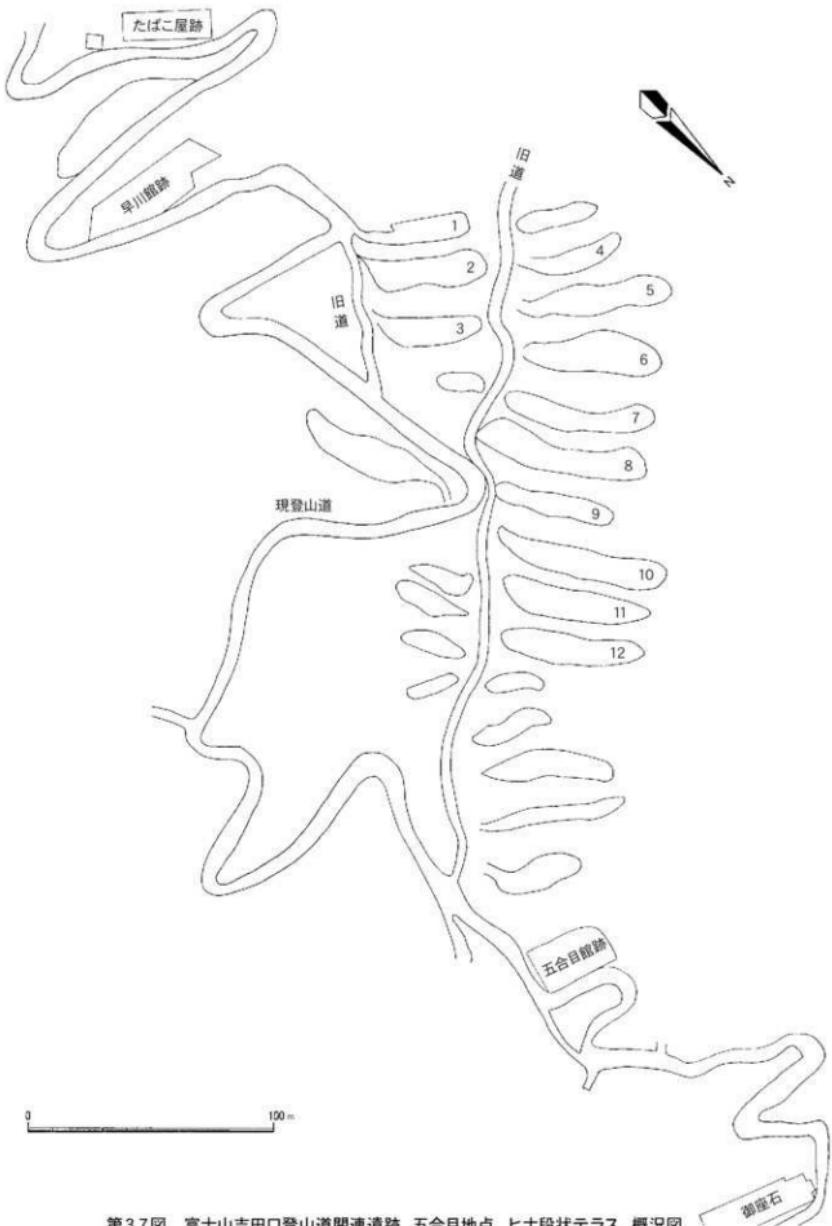
第34図 定善(禪)院跡伝承地 6トレンチ 出土石碑および石灯籠の笠部



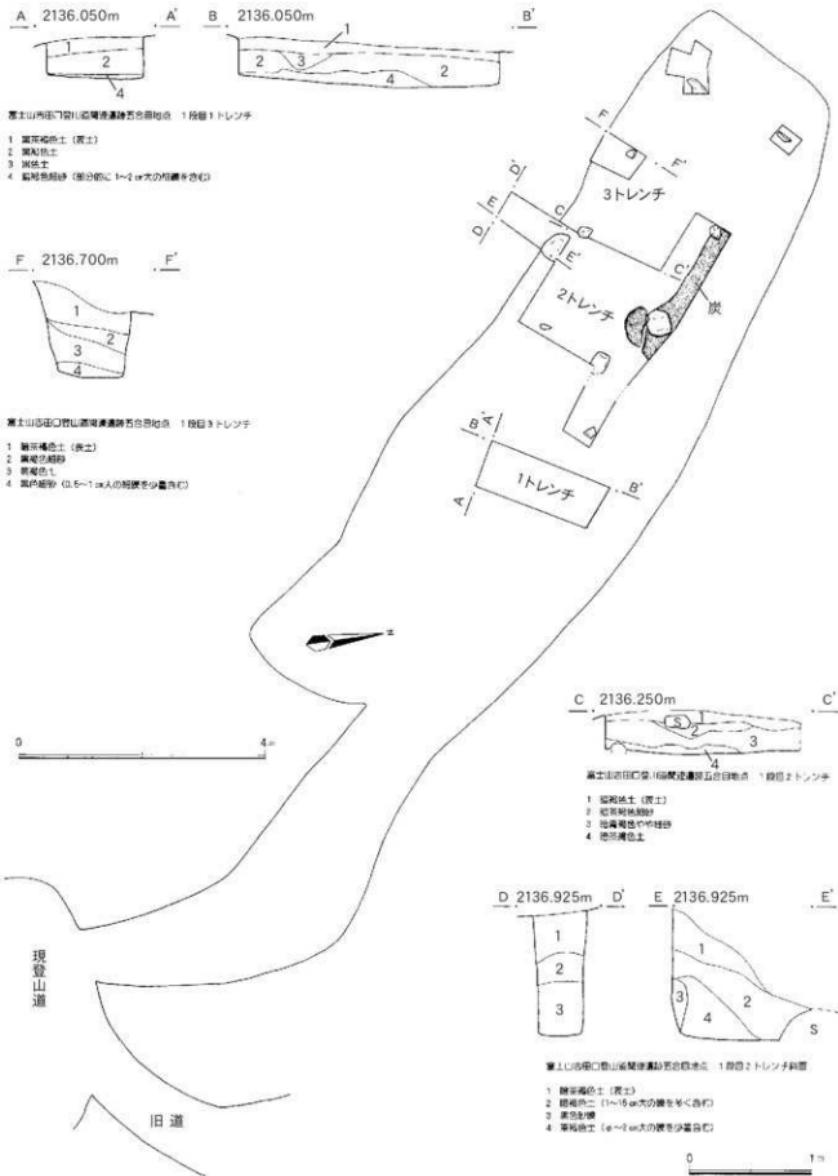
0 1 2 3 4 5 cm

第35図 定善(禪)院跡伝承地 出土石造物

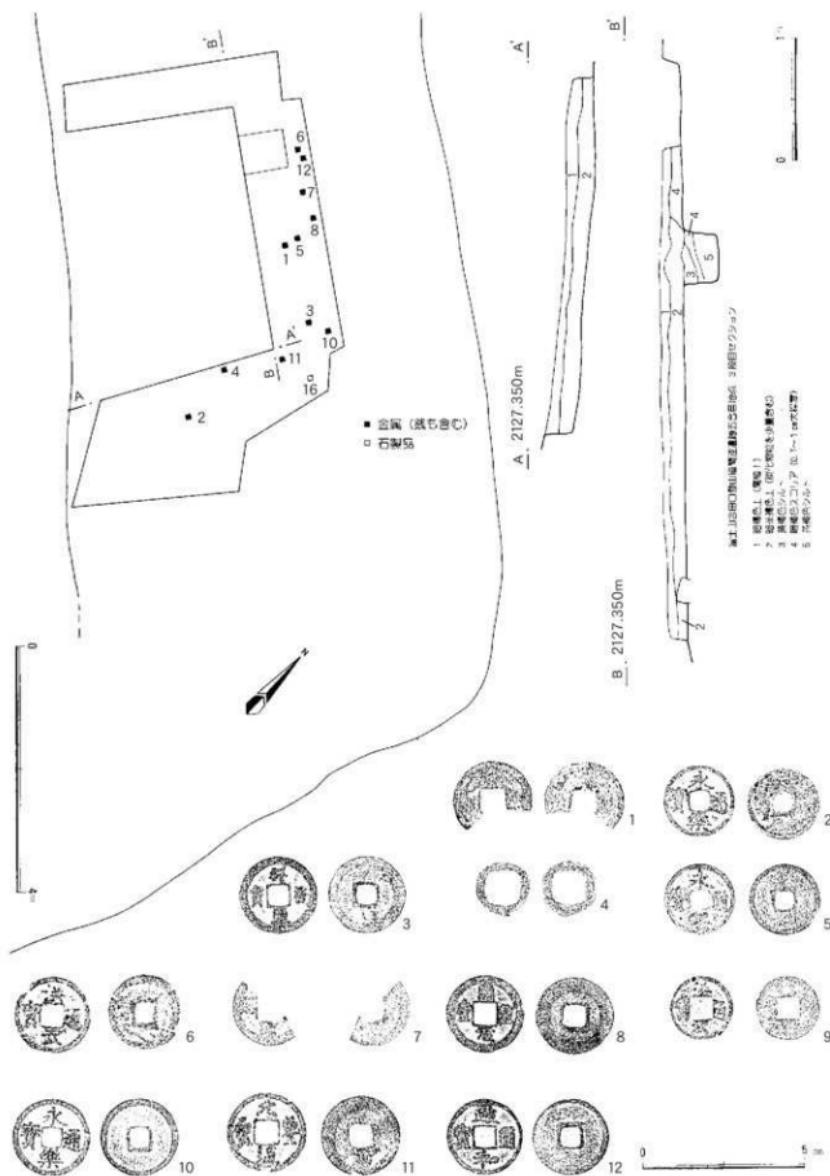




第37図 富士山吉田口登山道関連遺跡 五合目地点 ヒナ段状テラス 概況図



第38図 五合目地点 第1テラス 平面図・セクション図



第39図 五合目地点 第3テラス 平面図・セクション・出土遺物(1)



13



14

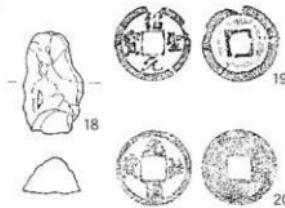
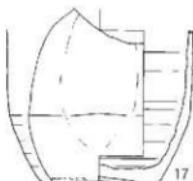


15

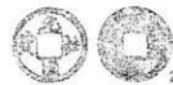
第10テラス出土遺物



第3テラス出土遺物



19

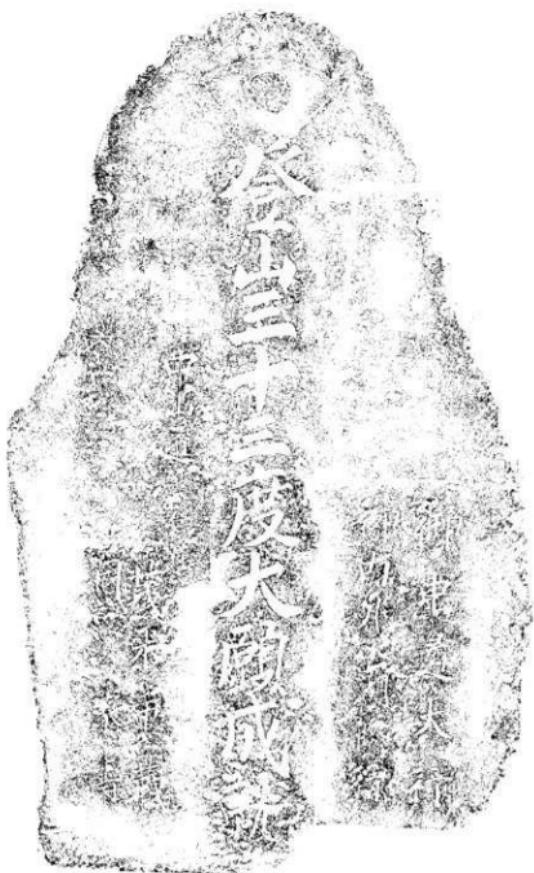


20

周辺表探遺物

5cm
(銅貨)10cm
(陶磁器)5cm
(石製品)

第40図 五合目地点 第3テラス 出土遺物(2)、第10テラス 平面図・出土遺物、周辺表探遺物



0 40cm

第41図 旧富士守稻荷跡周辺で発見された石碑

第4節 富士山周辺の調査

第1項 北口本宮富士浅間神社社有地

(1) 概要と調査に至る経緯

北口本宮富士浅間神社社有地は、浅間神社が勧請される前から諏訪神社が祀られ、古くから富士山を遥拝する神域であったと伝えられる。『社誌』によると、仁和3年(887)造社、貞応2年(1223)北条義時再建等の記録が見られる。また神宝として5体の神像の存在が記されているが、このうち2体には貞応2年(1223)の銘があり、さらにそのうちの1体は女神像であるとされている。これらのことから鎌倉時代中期には何らかの画期があったものと考えられる。このほか史料として残るものでは『勝山記』の文明12年(1480)の条にある「富士山吉田鳥居(取井)立」が、もっとも古い記事である。下って永禄4年(1561)に東宮本殿、文禄3年(1594)に西宮本殿、元和元年(1615)には本殿がそれぞれ建立されて、16世紀半ばには浅間神社の社殿が整備されたといわれる。その後、享保年間の富士講の指導者である村上光清の大改修により、現在の境内の景観が成立了。このように、この地が古くから現在に至るまで、重要な信仰拠点として継続的に使われてきた信仰の場であることは明白である。しかしながらこの周辺については、これまで小規模な試掘調査が実施されたのみであり、実際に土地の履歴として時代的にどのくらい遡るのは明らかになっていない。このため今回、3カ年に渡り、神社境内地、御駄石周辺、大塚丘の各地点について調査を実施した。

(2) 地中レーダー探査

大塚丘

平成21年度調査として平成22年1月25日に実施した(第42図)。日本武尊伝説をもつ大塚丘は、社叢を抜けてすぐの所にあり、ここは富士山を遥拝するための富士山信仰上重要な場であったと考えられている。塚の形状は、南北約24m、東西約18m、高さ約4mの方形台状である。塚の北側では方形が顕著であるが、南側では不明瞭になる。塚上部で足踏みをすると、塚の内部は付き固められていないような音がする。約4m四方の頂部には「浅間明神」をまつる石祠が残されており、四隅にはヒノキが植樹されているが、南東隅のものは残っていない。

このように大塚丘は、古くから富士山に対する重要な信仰拠点のひとつであると考えられてきたが、本格的な調査が実施されたことはなく、その構造等については全く不明であった。このことから、第一に塚自体が自然地形を利用して築造されたものなのか、人為的に造られたものなのか等、その構造について把握する目的で、第二に塚自体に埋納物等があるかを確認する目的で調査を実施した。

調査の結果、①くぼ地状の地形に塚が構築されていること、②塚頂部の中央あたりに掘り込みを示す波形を確認、③塚内部に小さなマウンド状の構築物がある可能性がある、という成果を得た。

境内地

平成22年度調査として平成22年11月16日に実施した(第42図)。神社に伝わる『境内指図』によれば、村上光清による江戸時代中期の大改修以前の社殿配置は、より小規模なものであったことが伺える。このことから、この指図による、旧建物配置の場所にその痕跡が残っているのかどうかを確認することを目的とする。その中でも特に「鐘楼堂」「護摩堂」の建物痕跡が地下に残されているかどうかを調査の目的とした。また併せて、神社境内の旧地形等の確認を行なった。

調査の結果、①鐘楼堂の痕跡(建物基礎か)は地中に残されている。②現拝殿・神楽殿周辺には旧建物の痕跡(柱跡?)が残されている可能性がある。③諏訪神社の前庭周辺は南北方向に谷状に窪んでいる地形だったと想定される。という成果を得た。この成果をもとに、平成23年度に試掘・確認調査を実施した。

(3) 簡易ボーリング調査

平成 22 年度調査として平成 22 年 10 月 26 日、平成 23 年 2 月 22 日に大塚丘の簡易ボーリング調査を実施した。これは径 16mm のサンプル管を塚頂部から人力で打ち込み、塚を構成する土壌を採取するというものである。

調査の結果、塚本体を構成するのは黒色粘質土であった。塚基底部では礫もしくは固結したスコリア層にあたり、それ以上のサンプリングは不可能であった。地中レーダー探査の成果を示すような塚内部での土質の違いは認められなかった。

(4) 試掘・確認調査（第 42 ~ 60 図）

■平成 21 年度の調査

神社境内地

神社境内地と御鞍石周辺について、平成 21 年 11 月 9 日～11 月 30 日にかけて調査を実施した。境内地については、現在社殿が建ち並ぶスペースは、享保の大改修の際に大きく改変されていることが想定されたため、あまり手が入っていないと考えられる本殿裏側の一段高くなった場所についてトレンチを設定した。その結果、この場所は放水銃の設置に伴い搅乱されおり、遺構・遺物は確認できなかった。また本殿東側の部分についてもトレンチを設定したが、特に遺構等は確認されなかった。遺物については陶磁器片が少量出土したのみであった。

御鞍石

ここは、「吉田の火祭り」の中で御鞍石祭の神事が行なわれる神聖な場所である。山林中に、馬の鞍の形をした巨石があって、その上に明神神輿を安置して神事が行なわれる（写真図版 3）。ここで神事を行なった後、神輿は神社に還幸する。ここで行なわれる神事の際に、宮司によって読まれる祝詞には「ここに神輿のまたがりいます御鞍石はしもあが大神のしずまりまししいとも古くみゆかりあるあとにして御社のおこりはじまるみなもとなれば」との一節があるが、この中では、諏訪神社の旧地としての御鞍石の伝承が伝えられている。

このエリアについては、御鞍石を中心としたトレンチを設定したが、銭貨など遺物の出土が見られたのは石の周りに限られており、この石こそが信仰の対象となっていたことが改めて認識された。また石周囲に入れたトレンチの土層観察により、御鞍石は人為的に設置されたものではないことがわかった。周辺の畠中等には巨石が点在して見られ、おそらくは御鞍石もこれらとともに流されてきたものと考えられる。その時期については鎌倉時代の吉田大沢の山体崩壊によるものと考えられている。石がのるマウンドについては上に粘土が貼られた石積が確認されており、現在のマウンドよりもひとまわり小さいマウンドが形成されていた時期があることがわかった。上述のように、この場所にはもとの諏訪神社があったという伝承もあり、また正福寺蔵の版本『八葉九尊図』（延宝 8 年（1680））には、「浅間神社」の右側に「明神の上げ松」が、その向こうに「すわ大明神」と描かれており、この「すわ大明神」が御鞍石周辺ともとれる配置になっていることから、建物跡などの検出も視野に置いて調査を進めたが、結果、建物の礎石や版築などは確認されず、常設の建物はなかったものと考えられる。

■平成 22 年度の調査

大塚丘近接地（第 61 ~ 64 図）

平成 21 年度に地中レーダー探査を実施し、塚が人為的な構造である可能性が指摘されたため、平成 22 年 10 月 7 日～同 18 日にかけて試掘確認調査を実施した。塚本体については、掘削を行うとそこから塚が崩壊する可能性があるため、塚自体には手を付けず、塚の南側（富士山側）の平坦地について 7 本のトレンチを設定し、調査を行った。

調査の結果、出土した遺物は、渡来銭 1 点、鉄製鉢残欠 1 点のみであった。遺構についても確認されなかったが、塚裾にかける状態で設定した第 2 トレンチにおいて、塚本体の構築土である黒色粘質土が検出された。これは、簡易ボーリング調査において確認された土壌と同一のものである。

■平成 23 年度の調査（第 65 ~ 67 図）

随神門周辺

平成 22 年度に実施した地中レーダー探査の成果をもとに、実際発掘できる場所か等考慮に入れた結果、調査箇所を鐘楼堂に絞り込んで調査を実施した。調査の目的は、鐘楼堂の位置を確認すること、鐘楼堂が建立された時期を探ることである。調査期間は平成 23 年 5 月 16 日～同 23 日である。

調査の結果、基本的な層序は、地表下 120cm で地山層となり、これより上については江戸時代の遺物を含む層である。この盛土中には、享保年間の大改修による盛土も含まれているものと考えられる。表土に近い部分では明治時代以降の陶磁器片やガラス片等含まれていることから、新しい段階にも土の移動があったものと考えられる。鐘楼堂の跡であるが、地中レーダー探査の成果から、基礎等の遺存を想定して調査を実施したが、何も残されていないことが確認された。地中レーダー探査で反応があった隨神門の近くで版築状の土層が検出されたが、この下部には捨てコンクリートが敷設されていることからごく新しいものである。社史によれば大正 3 年に隨神門の大改修が行なわれており、この地業はこの際に行なわれたものと考えられる。

今回の調査では隨神門の痕跡は確認されなかったが、享保の大改修の土盛等確認され、神社境内における土地履歴の一端を知ることができた。

第2項 富士御室浅間神社里宮（里宮遺跡）

(1) 概要と調査に至る経緯

富士山二合目に鎮座する富士御室浅間神社本宮に対する里宮であり、二合目では氏子らによる祭事の便が悪いことから、天徳 2 年（958）に村上天皇が里宮を創建したとされる。河口湖の南岸に鎮座し、熔岩が河口湖に流入する突端付近にあたる。この熔岩の一部は「しょうじんば」と呼ばれ、かつては禊所となっていた。近年まで、この場所で雨乞いの儀式が行われており、その際には、龍の彫り物がある蛙又を水に沈め、この龍神を痛めつけることにより、雨を呼んだという話を氏子総代から伺った。また、氏子総代によるとこの蛙又はかつて二合目本宮の本殿に使われていたものだといいます。

この里宮であるが、『甲斐国志草稿』には「此社ヲ里宮トイ云フハ小室ノ社ニ封シテ云事也 此古ハ舟津木立勝山大嵐成沢長浜大石七郷ノ産神ナリ」とあり、かつては河口湖を取り巻く地域で広く信仰されていた時期もあったことがわかる。この里宮と二合目本宮は「御室道」で繋がっており、二合目で神事が行われる際には、ここを通っていたといわれる。現在では廢れているが、一部たどれる部分もある。

今回の調査目的は、ここ里宮の地での神社の起源についてのデータを得ることである。また、二合目本宮の調査を実施する中で、山宮と里宮を山の祭祀・里の祭祀としてセットで捉える必要性があるとの指摘を指導者会議で得たことから、里宮についても調査を実施することとなった。周辺の埋蔵文化財の分布調査等では、神社創建期とされる平安時代中期の土師器片等が採取されている。調査期間は平成 22 年 6 月 1 日～同 28 日である。

(2) 試掘・確認調査（第 68 ～ 75 図）

調査は、本殿裏側（A 区）と、神社に接する山林中（B～E 区）について実施した。

A 区では、本殿と反対側の、現在機能していない区画に伴う石列が確認された。この A 区の範囲からは、微量ではあるが、土器片・陶磁器片が出土した。中には 10 世紀～11 世紀の土師器片も混在している。山林中の地区からは特に遺構・遺物等は確認されなかったことから、ここは神聖な森として手付かずであったことが考えられる。

C 区には大きな熔岩があり、この上は平らに加工されており、この面に 35cm × 38cm の孔があけられ、白い漆喰状のもので蓋がされていた。の中には小形の丸い川原石や熔岩片等が充填されており、の中には墨書き 1 点、朱書き 1 点や水晶の結晶片が含まれていた。これらを除去していくと上面より約 17cm のところで底となり、底には剣形鉄製品が 1 点、剣先をほぼ北に向けた状態で納められていた。神社宮司の話によると、この熔岩の上には、平成 21 年 9 月まで片山社の祠が鎮座していたそうで、現在、その祠は本殿裏側に新設した場所に移されている。この片山社は、もともとは神社の御神主家である小佐野家そばの勅使塚に祀られていたという。「片山（カ

タヤマ）’とは一帯の地名である‘勝山（カツヤマ）’のもとの名であり、周辺一帯の産土神である。この片山社が、どのようなきさつで、いつ頃富士御室浅間神社里宮内に移されたのかについては不明である。出土した墨書石には「一切神力」、朱書石には左から「八神 大辨財天 宇賀（神）」と記されている。これら出土遺物の時期については、不明であるが、このような埋納形態からは江戸時代の所産である可能性が高い。

第3項 河口浅間神社

(1) 概要と調査に至る経緯

古代官道の東海道から甲斐国衙に向かう甲斐路に置かれた駅のひとつ「河口駅」は、この河口の地に比定されることが通説となっており、河口浅間神社が鎮座する川口は古代より交通の要衝であった。『日本三代実録』には、「貞觀 6年（864）に大噴火が起り、富士山北麓に甚大な被害をもたらしたのをきっかけに、貞觀 7年（865）に甲斐国八代郡に浅間神社がつくられた」と記されている。この甲斐国最初の浅間神社の所在地については諸説あるが、『甲斐国志』は河口浅間神社に比定している。本神社は貞觀の大噴火を起こした富士山西麓の側火山群を一望できる位置に鎮座しており、またこの地が江戸時代以前は八代郡域に属していたことからも、河口浅間神社が甲斐国最初の浅間神社である可能性は高い。境内には根回り 30 m を超えるものを含む七本杉があり、県の天然記念物に指定されている。これらの巨木が鬱蒼とした森を形成しており、神社の歴史の長さを物語っている。

今回の調査目的は、現在の河口浅間神社が『日本三代実録』にいう甲斐国最初の浅間神社が建立された場所であるのかを検討するため、神社の創建時期にあたる遺構や遺物が現在の鎮座地周辺に残されているかを確認することである。地中レーダー探査は平成 22 年 11 月 16 日に、試掘確認調査は平成 23 年 5 月 23 日～6 月 6 日の日程で実施した。

(2) 地中レーダー探査

神社境内については、平成 22 年度と同 23 年度の 2 回に渡り探査を実施した。

平成 22 年度については、調査箇所選定のためのデータを得る目的で調査を実施した。一説によると神社内の七本杉は、昔の神社参道の木立て、富士山の方向に向かって並んでいると言われる。このことから、杉の木周辺に参道等の痕跡が残っているか確認することを目的とした。また、本殿の背後にある尾根上の平坦地について、何らかの遺構の痕跡が見られるか確認することについても調査の目的とした。この平坦地上には根回り 3 m 50 cm ほどの柄の大木（町指定）がある。七本杉周辺については、石疊のような明確な構造物は土中に存在しないが、締め固められた地盤である可能性を示すデータが得られた。本殿背後の平坦地については、明確な遺構等を示す反応はなかったが、データパターンから透水層的な反応も見られ、神社内に水を供給するような、自然の水道（みずみち）がある可能性もある。

平成 23 年度については、本殿周辺について、古い段階の遺構等が残されていないか確認する目的で探査を実施した。その結果、本殿前北西部では土中に何らかの構造跡を示すデータが得られた。また本殿周辺で採取したデータの分析から、本殿直下はもと窪地状であった可能性を示すパターンが得られた。

(3) 試掘・確認調査（第 76 ～ 80・82 図）

今回、境内地について調査を実施した。その場所は、社務所より一段低い場所である A 区、本殿裏側の尾根上のテラスである B 区についてトレンチを設定した。なお、もとの社務所があった場所についても、七本杉の木立てを同じにする石段が残されている場所があったことから、清掃発掘を実施して図化した。

A 区については、地表下約 50cm までは造成土が見られ、その下は、地表下約 150cm 以上砂礫層であることを確認した。この造成土中から平安時代の土師器片や中世～近世の陶磁器片が数点確認された。B 区についてもトレンチを設定して掘り下げを行なったが、遺物については刀子状の鉄製品 1 点が出土したのみであった。その他目立った遺物は確認されなかったが、石を集めた集石状の遺構が 1 基確認された。周辺では石の出土はほと

んど見られないため、何らかの意図があつて石を集めた可能性がある。B区の基本層序は、地表下約160cmまでが水平堆積、それより下部が地山であり、大きな改変等がなされていないと考えられる。またC区では一部石列が見える部分もあったため、清掃発掘を実施した。その結果、区画石列と石段、コンクリート敷きの方形区画石列が確認された。神社総代によるとこのコンクリート敷きの石列は、かつて使われていた社務所の跡だという。これが社務所跡とするとその周りの区画石列も、当然社務所に伴うものと考えられるが、少し気になるのがその軸である。この軸は七本杉の木立の軸と同一であり、富士山に向かう方向となっている。また石段は、かつての旧道（神社総代談）といわれる道に面している。さらに社務所跡の土台を構成する石の中には、鳥居等の台石とも考えられる石が転用されており、もともとこの区画の中には何らかの宗教的施設があり、それが廃絶したのち社務所として使われたという可能性もあるのではないだろうか。

今回の調査地では、神社に関わる遺構等を確認することはできなかった。神社の主要部分は別の場所にある可能性もあるが、七本杉のような巨木が残されているのは神社境内に限られており、ある段階で、この地に神社本体が置かれていたものと考えるのが自然であろう。

（4）神社に伝わる文化財の調査（第84・85図）

試掘・確認調査を実施する中で、神社に伝わる文化財について調査する機会を得た。今回調査を実施したものは、陶製こま犬阿形・吽形の1対、陶製猿像1体と神社拝殿前に鎮座する「美麗石（ヒライ石）」から出土したと伝わる出土品（須恵器蓋破片2点・磨製石斧2点・管玉1点・白石4点）、美麗石である。陶製こま犬については、阿形が、火災による火を受けて（慶長段階の火災によるものという）、表面釉薬の艶が消失しているが、吽形には鉄輪の艶がよく残されている。これらについて神崎かず子氏（愛知県陶磁資料館）から室町時代の所産である可能性が高いというご教示を頂いた。中世段階の陶製こま犬については、生産地である瀬戸・美濃地域に加え、関東地方の神社等に伝来する例が散見される。神崎氏は、後の江戸時代のものは瀬戸・美濃地域に集中していることと比べると中世段階の分布は東国に広がる傾向があるとしている。関東地方に伝来するものとしては、鹿島神宮撰社（茨城県鹿島市）、香取神宮撰社又見神社（千葉県香取市）、玉崎神社（千葉県旭市）などの例が知られる。また東京都八丈島の優婆夷宝明神社では、こま犬の陶片が出土している。このように広範囲に分布する理由として、山岳宗教の修行者により各地に運ばれたとする説もある¹¹。河口浅間神社のこま犬の形態、顔のつくり等は八丈島の優婆夷宝明神社出土のものに類似する。

美麗石下から出土したと伝わる出土品については、出土品と一緒に古布に書かれた記録が伝わっている。それによると、明治20年4月に美麗石の下を掘ると、深さ1丈1尺（約3.3m）の位置からこれら埋蔵物が発見されたとある。出土品については、須恵器蓋が奈良～平安時代の所産、磨製石斧2点は縄文時代、管玉は古墳時代のものである。様々な時代のものが混在していることから、ある段階で様々なものがまとめて埋蔵されたものと考えられる。美麗石については、この地に浅間明神をはじめて祀った石闇と伝えられている。現在は拝殿の向かって左に祀られており、「お宮の前のヒライ石、踏めば草履の鼻緒が切れる」とうたわれるが、以前は「お宮の上のヒライ石…」とうたわれていたという。このことから推察すると古くは本殿裏の柄の大木があるテラス（今回の試掘対象地B区）や山宮の辺りに祀られていた可能性もある。

この他にも、神社参道には‘波多志神’として石棒が祀られている。

註1 愛知県陶磁資料館 2005『陶磁のこま犬百面相』P16～17

第4項 御墓（第76図）

（1）概要と調査に至る経緯

河口浅間神社の北方の丘陵地に「御墓（ミハカ）」と呼ばれる場所がある。この場所から見渡すと正面に河口湖が広がり、さらにその向こう側には貞観6年（864）の大噴火で大量の熔岩を噴出した富士山の側火山である長尾山を望むことができる。

この場所は、『浅間神社正史』等によると、河口浅間神社の初代祝の伴真貞の墓所と伝えられる場所である。現在5m×3mほどの平坦地には方形の墓碑3基と笠付きの円柱形の墓碑1基が置かれている。前者には「神主宮下」後者には「神主藤原布好盡爾」「寛政九年丁巳秋八月十有二日」の文字が記されている。数年前まではこれらがバラバラに散在していたそうで、近所の有志の方が整備して現在に至っている。「御墓」の性格については調査が実施されたことがないため不明であるが、寛政段階の地検帳等によると、当時は今よりもはるかに広大な境内地を有していたことから、「御墓」周辺ももとは境内地の一部であったものと考えられる。

(2) 地中レーダー探査

この平坦地について地中レーダー探査を平成23年7月13日に実施した。今回の調査の目的は、「御墓」という河口浅間神社に閑わりの深い土地での、埋設物等や遺構の有無を確認することによって、この場所がもつ性格についての手がかりを得ることである。

探査は、平坦地の裏側も含めて8本の測線をかけて実施した。その結果、平坦地上の2箇所で何らかの埋蔵物を示すデータが得られた。また、その裏側についても何らかの埋蔵物を示す可能性のあるデータを得ている。

第5項 宮ノ上遺跡

(1) 概要と調査に至る経緯

「御墓」に続く東側の平坦地一帯である。「御墓」と同様にここからも河口湖および長尾山を見渡すことができる。このあたりも古くは河口浅間神社境内地であったものと考えられる。諸事情により、「御墓」の試掘確認調査ができないことから、同様の地形の近接地について試掘確認調査を実施することにより、河口浅間神社がもつ歴史についての手がかりを得ることを調査の目的とした。調査期間は平成23年6月28日・同29日である。

(2) 試掘確認調査（第81・83図）

調査は、80cm×2mのトレンチを1本設定し掘り下げを実施した。その結果、約10cmの表土を取り除くと、その下に①約30cmの暗褐色土、②約25cmの暗茶褐色土、③約40cmの暗褐色土の堆積が見られた。①層からは近世の陶器片が出土し、③層の下部からは内外面に二次的な被熱を受け、金の付着が見られる大窯期の陶器片および平安時代の土師器片、刀子状の鉄製品が出土した。この③層には焼土粒・炭化物粒が含まれていた。今回の調査はトレンチ1本の掘削であった為、遺構は確認されず、また出土した遺物量も少なかったが、金が付着する陶器片が出土していることから、遺跡の特殊性も伺える。また神社創建期にあたる平安時代の土師器片が出土していることから、周辺には該期の遺構が眠っている可能性が高い。

第6項 富士山吉田口登山道関連遺跡 鈴原下A地点（姥子）

(1) 概要と調査に至る経緯

調査地点は、富士山登山道のうち、富士吉田市の北口本宮富士浅間神社に起点を発する吉田口登山道の中ノ茶屋から200mほど上の山林中に所在する（第102図—姥子）。このあたりは、「遊興（幽境）」と呼ばれ、「俗世界」と「山という神聖な世界」との境にあたると考えられてきた場所である。『八葉九尊図』（第1図）には、「うは子」「さいノ川原」という記載がみられる。『甲斐国志』によると、中ノ茶屋から二町上がった所が毎衣婆の小堂で、礎石が残ると記されている。現地では、旧道と考えられる道状の窪みに面してコの字状の石積みが残る場所があり、これが『甲斐国志』にいう毎衣婆の小堂の場所と考えられる。今回の調査は、この場所が『甲斐国志』に記された場所であるかどうか確認する目的で行なった。調査期間は平成22年6月28日～7月15日である。

(4) 試掘・確認調査（第86～88図）

調査は、まず対象地の地表面を精査した後、露頭しているコの字状の石積を検出しながら掘り下げを行なった。

石積の規模は南北 1.8 m、東西 2.0 m 程度であり、間口よりも奥行の方が若干長い。石積の高さは奥壁で 80cm ほど、両袖の部分は 60cm 程度である。一部石積が崩れている部分もある。奥壁際では焼土や灰も検出された。礎石とも考えられる石も出土しているが、規則的には並んでいない。遺物については、床面と考えられる高さから、江戸時代後期の小壺と徳利の口縁部破片が出土したのみである。また、コの字状の石積の前面にある旧道についても、硬化面が確認された。

調査の結果、ここに残る石積は人為的なものであることが確認された。小堂があったことを直接示す遺構・遺物などは発見されなかったが、石積の規模や『甲斐国志』の「奪衣婆の像が納められていた小堂である」との記述からは、一間四方程度の建物があったとも考えられる。ただし、奥壁際から検出された焼土・灰は厚く堆積しており、長きに渡って火を焚いていたことを伺わせる。石積内に小堂があったと考えると、堂の裏側にあたる場所となり、堂と火を焚いた場が同時に存在したことは考えにくいため、小堂の廃絶後に残った石積内で火が焚かれた可能性もある。実際、『甲斐国志』が記された江戸時代後期には、小堂は廃絶しているが、今回床面から出土した陶磁器片はこの頃のものであり、これら陶磁器片の時期が火を焚いた時期を示しているものとも考えられる。箱根山の麓では石囲いの中で火を焚いて、山への手向けをする場所もあるというが、この場所が、俗世界と神聖な世界との境目にあたると考えると、火を焚くことで穢れを払い、また山の神への手向けをする場所としてはふさわしいようにも感じる。

今回の調査は、「奪衣婆の小堂」のみに焦点をあてて行なった。小堂に関する積極的な痕跡は確認されなかったものの、石積が人為的なものであることや、火を焚いた痕跡を確認することができた。すでに述べたように、この一帯は俗世界と神聖な山の世界との境界としての認識があった場所であるが、これらの成果から、この場所が富士山信仰上重要な拠点のひとつであることを再認識することができた。

第7項 行者平遺跡（御坂山中：大善寺行者堂跡伝承地）

(1) 概要と調査に至る経緯

甲府盆地から駿河方面に向かう鎌倉街道（鎌倉往還・御坂路）は、御坂山系から流れ下る金川を遡りながら御坂峠に向かっている。行者平は、この街道が藤野木から右に折れて支流の川沢側を遡って左岸から右岸に渡ったところに位置する。この場所はその地名が示すように、甲州市勝沼町にある名刹、柏尾山大善寺に伝わる鎌倉時代後期の役行者像を納めた行者堂があったと伝えられる場所である。一説によれば、武田信春によって、御坂山中から、現在の境内地内に移されたという。時期的には、信春の没年から考えると南北朝時代後期～室町時代初頭あたりのことだと考えられる。今回の調査は、甲府盆地から富士山に向かう信仰ルート上有るこの場所に行者堂があったのかを確認すること、またその時期について探ることを目的とした。調査期間は、平成 23 年 6 月 8 日～同 14 日である。

(2) 試掘・確認調査（第 89 ～ 96 図）

現地は、旧鎌倉街道を挟んで 34 m × 18 m ほどの平坦地が広がる場所である。平坦地の一部には自然石が露頭し、その上に役行者像、前鬼像、後鬼像の 3 基の石造物が祀られている。この自然石の前には、周りよりもわずかに高い平坦な部分があり、行者堂があったとすればこの場所ではないかと想定されたため、トレーニングを設定した（A 区）。掘下げると黄褐色細砂が 15cm ほどの厚みで敷かれており、この細砂を除去すると、その下からは江戸時代の遺物のみを包含する層が現われ、礎石状の石等も残されていた。また、焼土や炭化物の堆積も部分的に見られた。ただし、礎石状の石や焼土等は原位置を留めていないことから、ある段階で小規模な土地の改変がなされたものと考えられる。次に、A 区の奥側に設定した B 区では、黄褐色細砂は見られず、また A 区で見られたような面は確認されなかった。しかしながら、トレーニング断面でピット状の遺構が確認され、中には土師器片が 1 点含まれていた。さらに A 区から若干下った位置に C 区を設定して掘り下げを行なった。C 区の上層では、江戸時代の陶磁器片を包含する層があり、この層を取り去ると、その下には中世のかわらけ片を包含する層が見ら

れた。この中世の包含層からは、15世紀末頃を中心とするかわらけ片の他、古墳時代のS字甕の破片や須恵器甕口縁部破片も出土した。この包含層を取り去ると、その下は一面の礫層であった。また周辺では江戸時代～明治時代の陶磁器片を表探したが、中には中世のかわらけ片や、古代に属する甕胴部の破片なども含まれていた。

今回の調査により、①周辺には江戸時代と中世という2つの時期の遺跡が存在すること、②礎石らしきものの存在や釘の出土などの状況証拠から、江戸時代には建物があったと考えられること、③中世のかわらけは、15世紀末頃を中心とするものであること、出土遺物や表探遺物の中に古墳時代や古代という、行者堂の年代よりも古いものが含まれていることがわかった。伝承では、行者堂は南北朝時代後期～室町時代初頭の間に現在の大善寺境内に移されたと言われるが、この時期に該当する遺物は確認されなかった。古い時期の遺物が確認されたことについては、この御坂山中を通る旧鎌倉街道は、古くからの主要ルートであると考えられていることから、古墳時代等においても往来があったことを補強するデータのひとつになるのではないだろうか。実際、御坂峠を越えて河口湖側に下った所にあるドライブインでは、工事で山裾を切り崩した際に古墳時代の坏等が出土している（泡橋遺跡：第3図-2：第85図-10）。

第8項 行者屋敷遺跡（足和田山中：蓮華寺奥の院跡伝承地）

(1) 概要と調査に至る経緯

大同山蓮華寺は、富士河口湖町大嵐に所在する日蓮宗の寺院である。もとは真言宗であったが、日蓮により折伏され改宗したと伝えられている。今回の調査対象地は足和田山の山頂からやや下った場所の平坦地であり、ここにはかつて蓮華寺の奥の院があったと伝えられている。『甲斐国志』には「檀ノ山ノ内雨乞山ノ上ニアリ少シ平地ナル所礎石存セリ其辺ニ小池アリ麗水常ニタタヘテ早魃ニモ潤ルコトナシ往昔ハ山伏ドモ此山ニ參籠シ行法ヲ修シケルトゾ」と記載されている。大田和の集落から40分ほど山を登った尾根の鞍部に削平地があり、礎石が数個残存している所があるが、この場所が『甲斐国志』にいう場所と考えられる。この礎石がある平坦地から少し下った所には榛名池と呼ばれる湧水地点がある。現在では泥水が溜まったヌタ場状の水溜りであるが、川のない周辺地域にとっては、かつては貴重な水源のひとつであったと考えられる。ここでは近年も雨乞の儀式が行われているといふ。

今回の調査目的は、第一に蓮華寺奥の院伝承地とされるテラスについて、残されている礎石の配置や規模を確認することである。また合わせて試掘確認調査を実施し、この場が使われていた時期について考えるデータを得ることである。榛名池については、祭祀遺物等がないか確認を行い、池周辺の地形の図化を行なった。

(2) 試掘・確認調査（97～99図）

調査前から、奥の院伝承地のテラスには礎石状の石が確認されていたが、埋没しているものもあると想定されたことから、まずはこれらの石の並びについての確認調査を行った。その結果、猪等に荒らされて元位置を留めていないものもあるが、二間×二間程度の礎石の並びが確認された。さらに礎石の間にトレンチを設定し、掘り下げを行ったが、遺物・遺構等は発見されなかった。掘り下げの結果、地表下20～40cmで黄褐色の地山があらわれ、堆積土がそれほど厚くないことが確認された。遺物については、地表にごく近い表土から灯明皿が1点出土した。

調査の結果、礎石と近世の灯明皿が発見されたが、建物に使われているはずの釘などは全く出土していない。ただし周辺には、これほど石が集まる場所がないため、今回確認された石は、人為的に配置されているものと考えられる。また、地山までの堆積土も薄く、灯明皿も表土より発見されていることから、礎石が機能していた時期から、それほど埋していないものと考えられる。

榛名池と呼ばれる場所は尾根の途中から沢の際に向かって回り込んだ非常に分かりにくい場所に位置するため、地元の鳴沢村郷土史研究会の方々に案内していただき、現地を確認することができた。榛名池の現状は、直徑3.5mほどで、ヌタ場状に泥水が溜まる窟みであった。調査はまず、泥水が溜まる窟みの中に祭祀遺物等がな

いかの確認を行なったが、特に遺物等は発見されなかった。また、池には「榛名池」の文字が刻まれた石があり、これをイノシシ等が沢へ転げ落とさないように池のそばの木の根元に差し込んである、という話を郷土史研究会の方々に聞いていたため、この石を取り出して確認したが、特に文字等は刻まれていなかった（第99図-1）。水の供給箇所については、窟みが山と接する部分からこんこんと湧いているのが確認された。

この池に関しては、雨乞いの場所であったという伝承があるが、数年前にも雨乞いが行われたそうである。雨乞いの際には、竜宮洞穴の水と氷池白大龍王の水をこの池の中で合わせるという。竜宮洞穴とは西湖畔の青木ヶ原樹海内にある長さ約60mの洞穴で、かつては富士講八海巡りの靈場として栄えた場所である。一方の氷池白大龍王は、富士山の側火山である天神山から西南約3kmの山中にある噴火口の跡で、傍には富士講の碑も建てられている。これら2箇所の水を持って、市民センターから直登するルートで山を登る。これが雨乞いのルートだという。この榛名池でそれら水を混ぜてかき混ぜると雨が降ると伝えられており、数年前の雨乞い時にも、その日の午後に雨が降り出したという。我々も案内して頂いた時と、調査時の2回、遺物の確認等で結果的に池中をかき混ぜることになったが（水は混ぜていない）、両日とも午後になって湿った風が吹き始め雨が落ちてくるという体験をした。

第9項 藤塚（南都留郡山中湖村）（第100図）

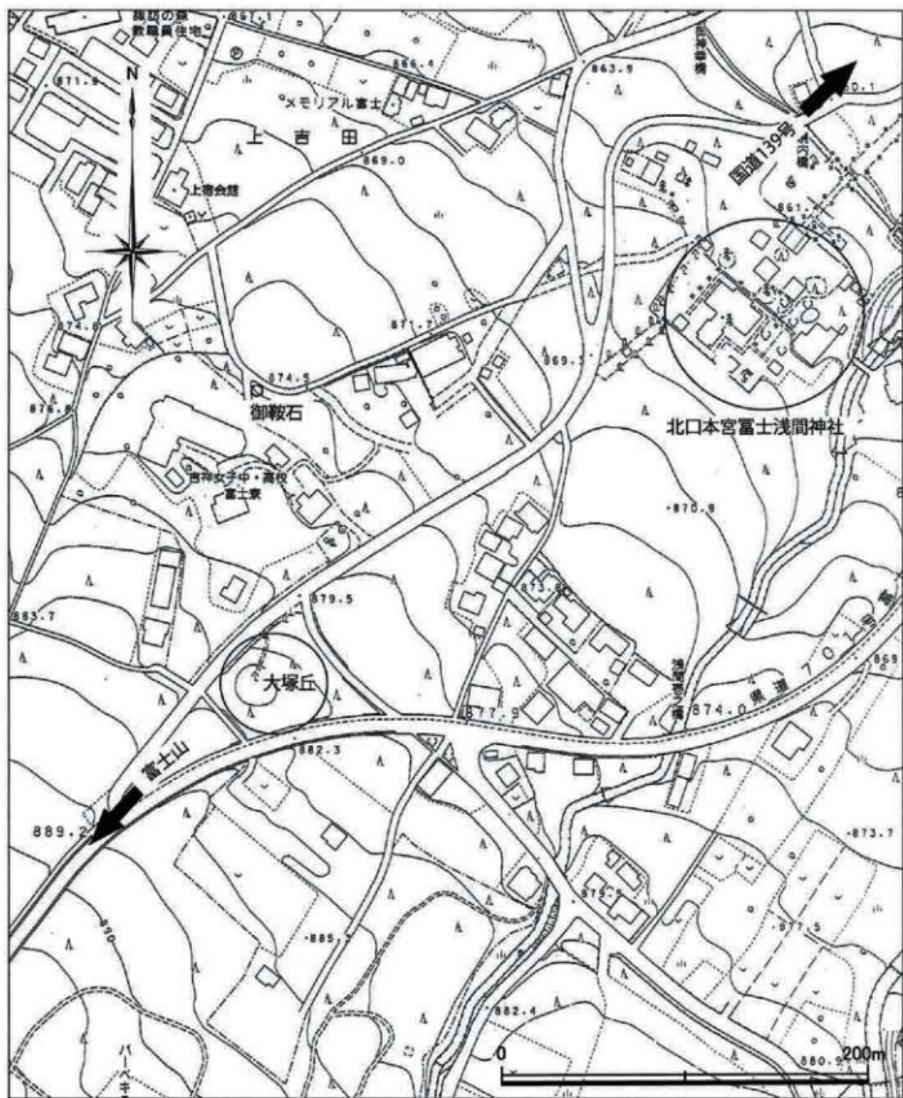
（1）概要と調査に至る経緯

山中湖は、富士五湖の中ではもっとも南東に位置する湖である。山中湖の成り立ちについては、延暦19年（800）に起きた延暦の大噴火で流出した溶岩流のひとつである鷹丸尾熔岩が、宇津湖を分断して忍野湖と山中湖ができるとされていると言われてきたが、近年の調査では、この鷹丸尾熔岩の噴出年代については戦国時代以前と考えられている。例えば、北畠遺跡ではこの熔岩の下から12世紀中頃～後半に位置づけられる松鶴鏡とガラス玉が発見されていることから、やはり噴出時期については12世紀以降と考えるのが自然である。この鷹丸尾熔岩は、藤塚がのる熔岩丘で左右の筋に分かれている。この熔岩丘は鷹丸尾熔岩よりも古く、丘上には弥生時代のテフラがのっている。この丘は噴火口である可能性もあるという。この山中湖岸には古代官道が通っていたと考えられ、塚がある山中地区には「加吉駅」（加吉の誤りか）が想定されている。以上のように、この藤塚について、2筋の鷹丸尾熔岩流に挟まれた、噴火口の可能性もある熔岩丘上に位置しており、特徴的な地形上に立地していると言える。塚の規模は直径約10m、高さ約2mの円墳状である。この塚は「ふじづか」という名称で呼ばれているが、山梨県内では現在17基の富士塚が確認されている（第101図、第2表）。富士講の興隆と共に造られた富士塚は、関東圏など富士山から離れた場所に造られ、それを富士山の代わりとして信仰の対象とされた。このような富士塚の性格を考えると、藤塚は「ふじづか」と呼ばれるものの富士山を眼前に立地し、富士山の代わりである必要性はないことから、所謂一般的な富士塚とは性格を異にするものと考えられる。またこの塚は、地元では、南北朝時代の南朝天皇である長慶天皇の御陵だという伝説もある。「山中湖の史話・伝説」によると藤塚が長慶天皇陵であるという刻印が施された銅鏡・直刀が存在するという。

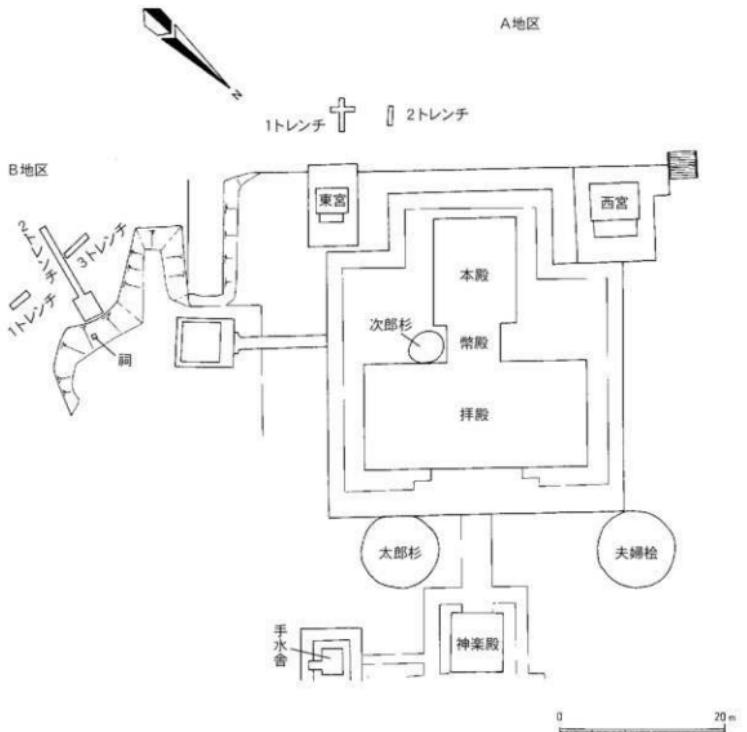
塚は丘上にあり、塚の前面にはテラス状地形や壠状地形が見られるが人為的なものではなく、熔岩流により形成された地形と考えられる。

（2）地中レーダー探査

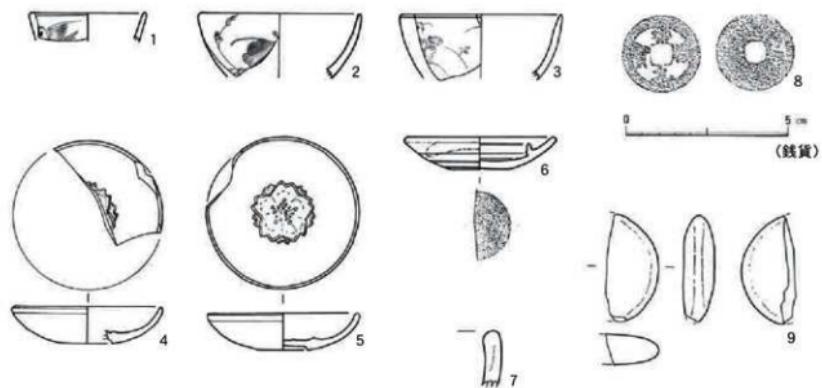
塚本体については、その構造を確認する目的で、また塚周辺については地形等を確認する目的で探査を実施した。塚本体については、塚内部の水平地形線よりも下部に墓室データに類似する反応が得られている。塚の頂部にはクレーター状のパターンが見られ、そこからほぼ一直線に規模の小さい縦穴が下部に延びていることが想定される。なおこの縦穴は、竪穴式墓坑に伴うものほど規模が大きくなりない。また塚周囲には周溝状の反応も見られる。また塚の南側では、ある一定の場所に限って平坦地盤を示すデータが得られており、これがある種の遺構を示す可能性もある。



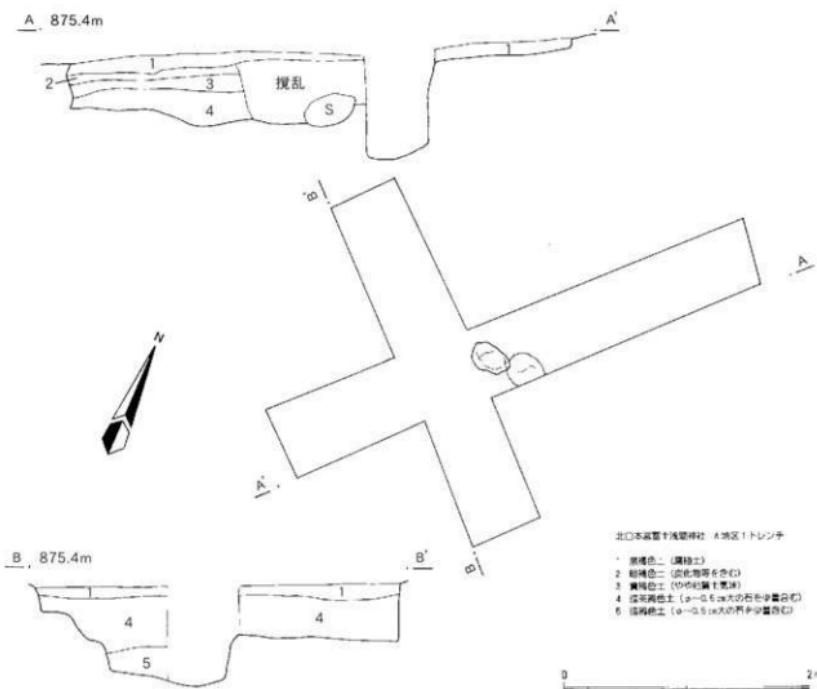
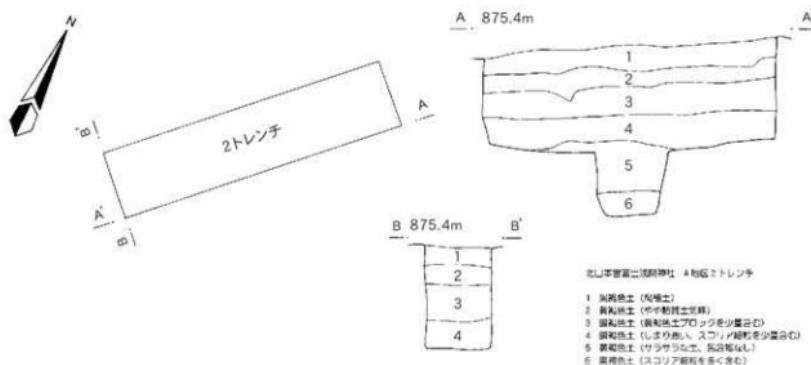
第42図 北口本宮富士浅間神社周辺図 (1 / 2500)



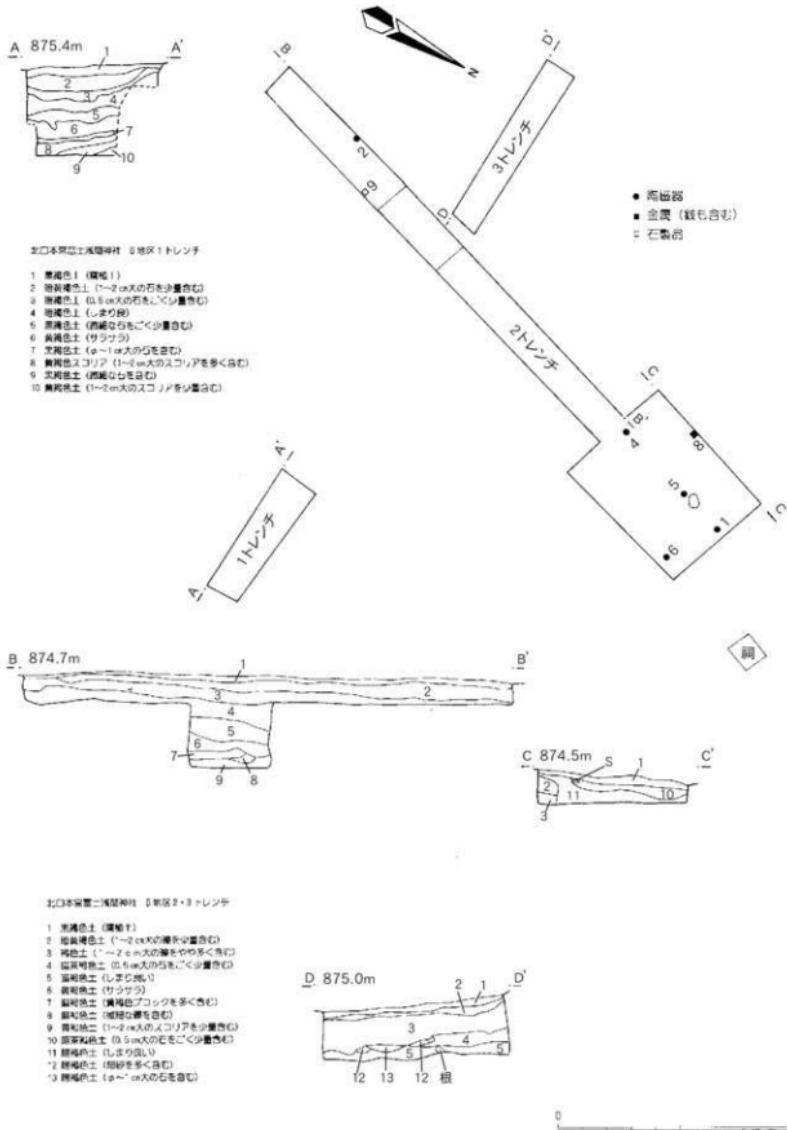
第43図 北口本宮富士浅間神社 A地区・B地区トレンチ位置図



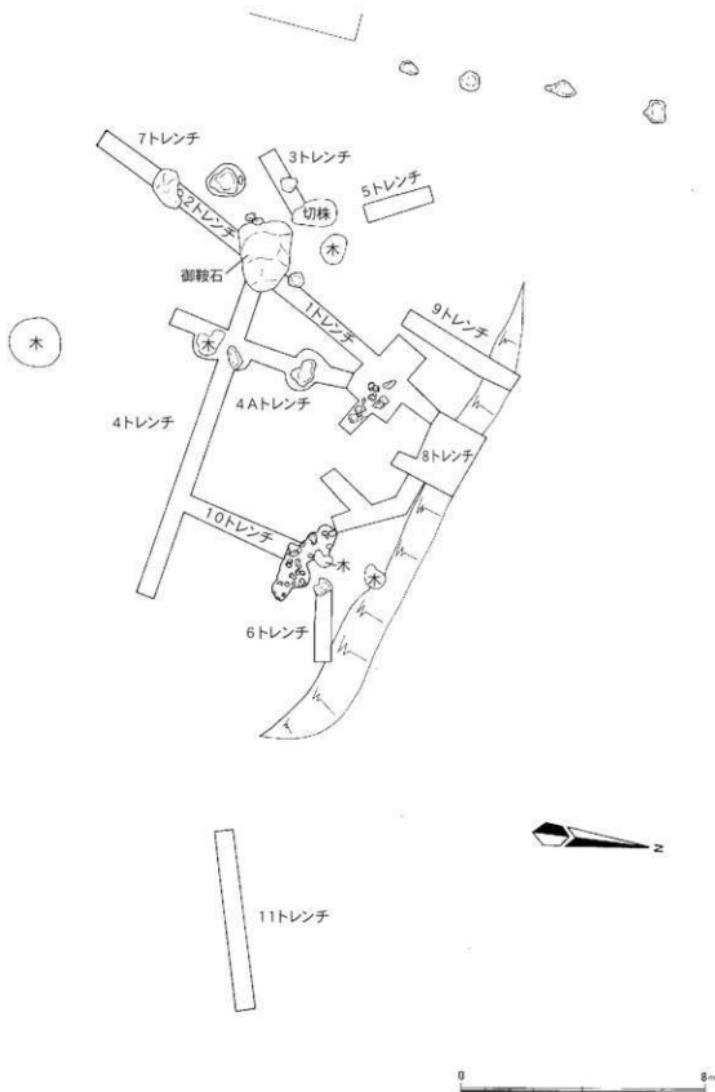
第44図 北口本宮富士浅間神社 B地区 出土遺物



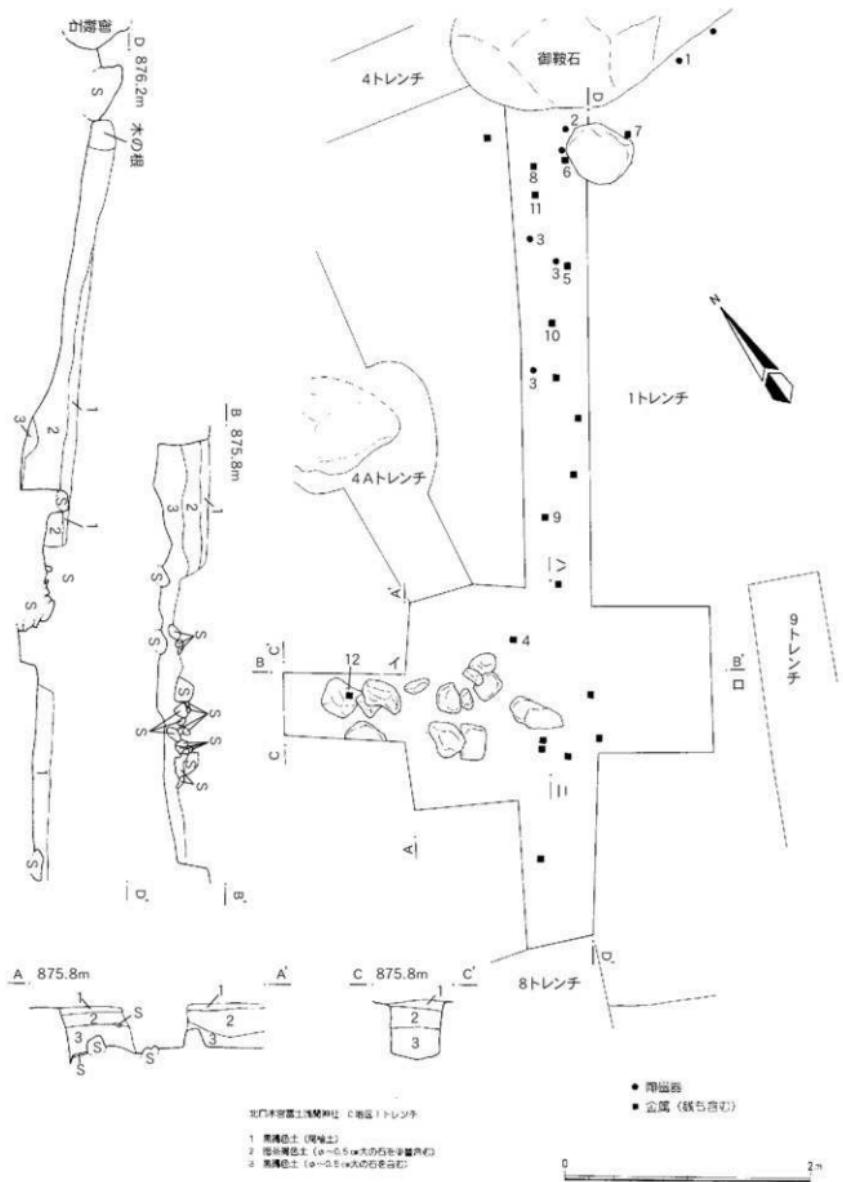
第45図 北口本宮富士浅間神社 A地区トレンチ平面図・セクション図



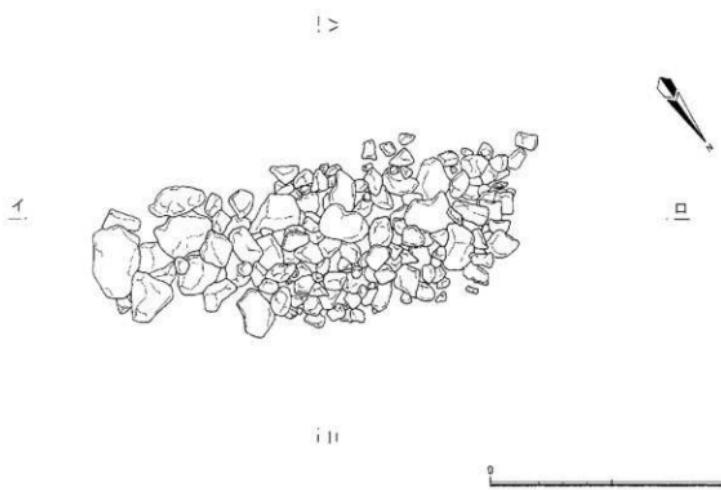
第46図 北口本宮富士浅間神社 B地区トレンチ平面図・セクション図



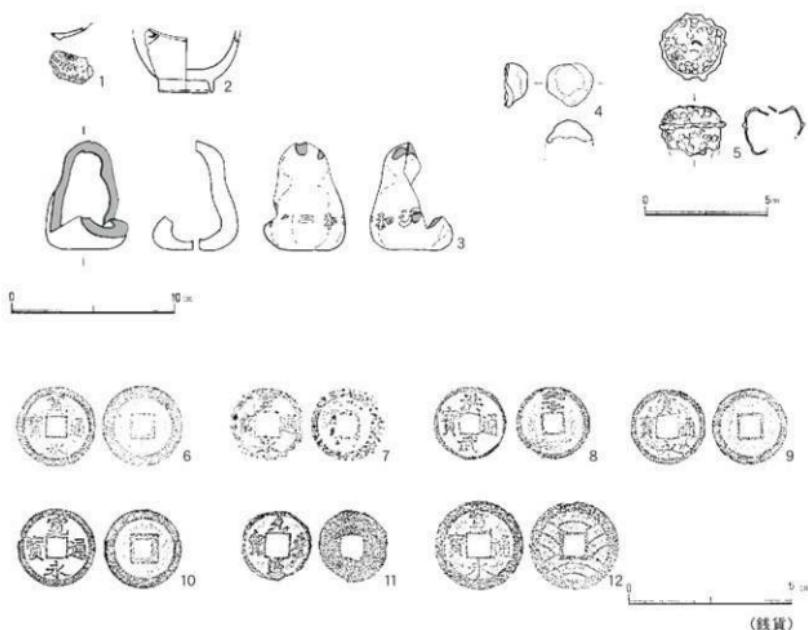
第47図 北口本宮富士浅間神社 C地区 トレンチ位置図



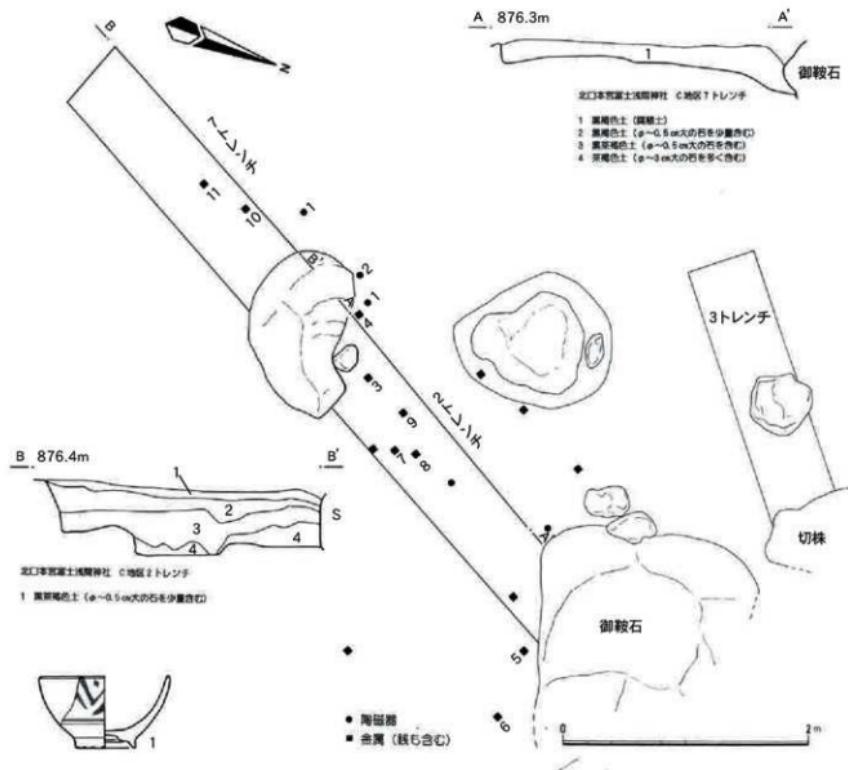
第48図 北口本宮富士浅間神社 C地区 1トレンチ 平面およびセクション図



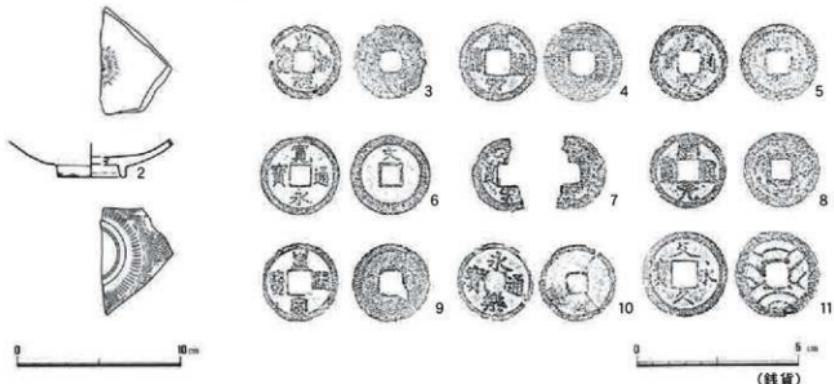
第49図 北口本宮富士浅間神社 C地区 1トレンチ 集石状遺構



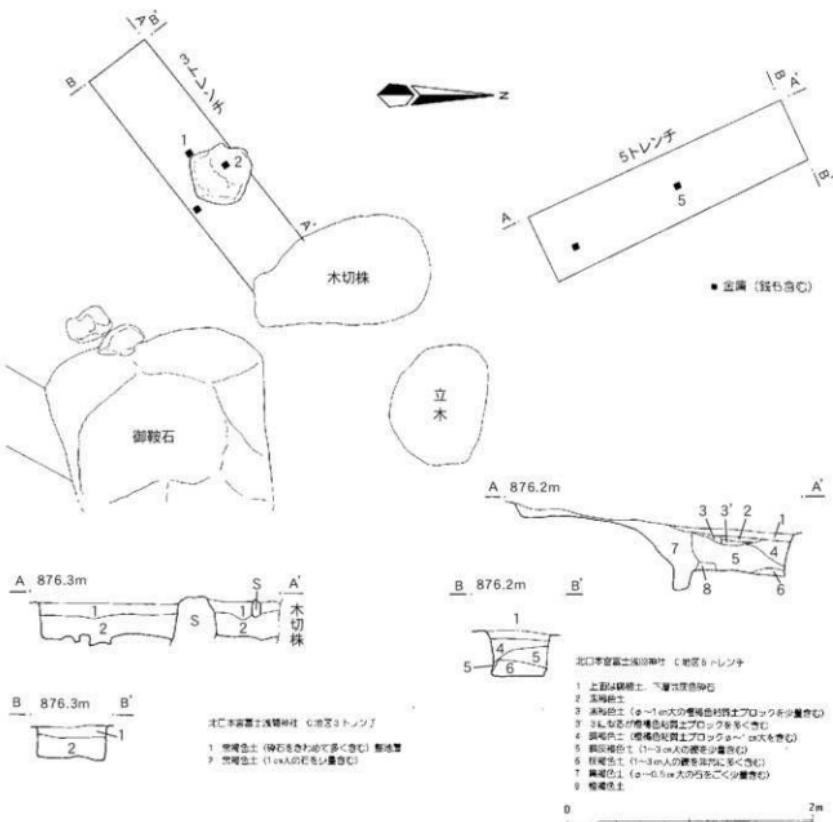
第50図 北口本宮富士浅間神社 C地区 1トレンチ出土遺物



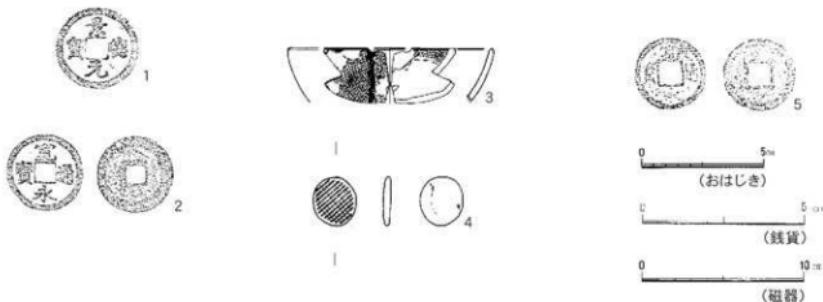
第51図 北口本宮富士浅間神社 C地区 2・7トレンチ平面図・セクション図



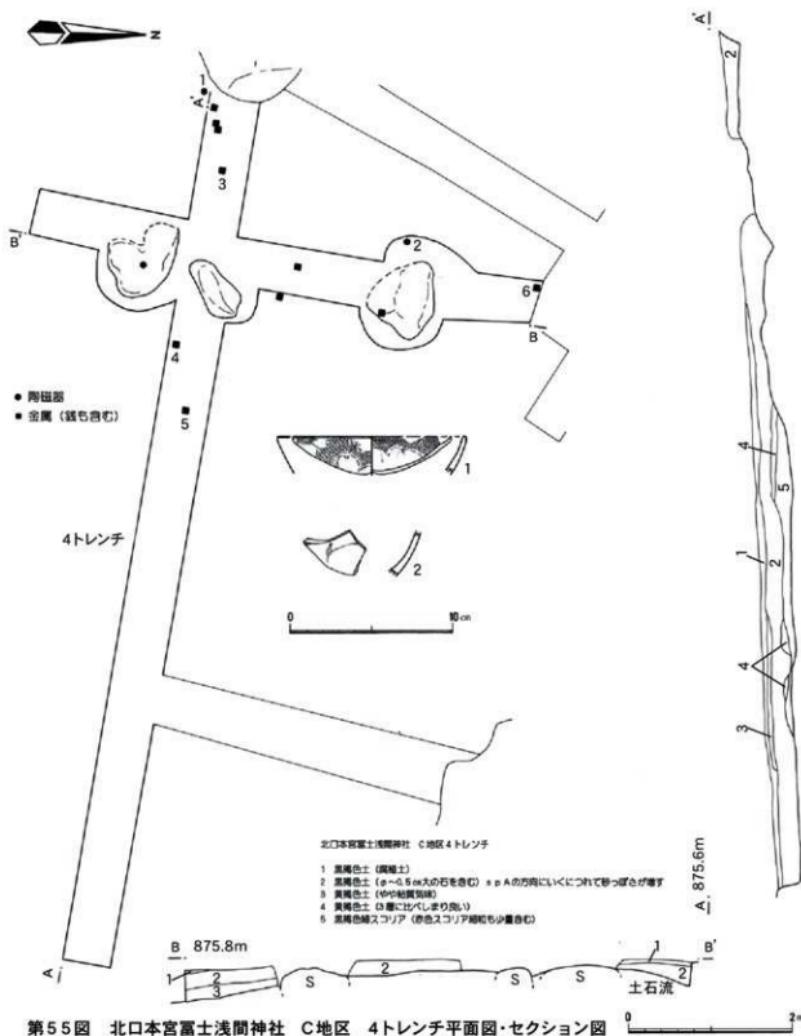
第52図 北口本宮富士浅間神社 C地区 2・7トレンチ 出土遺物



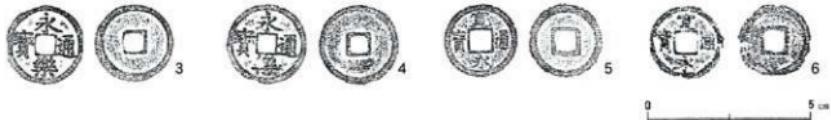
第53図 北口本宮富士浅間神社 C地区 3・5トレーニチ平面図・セクション図



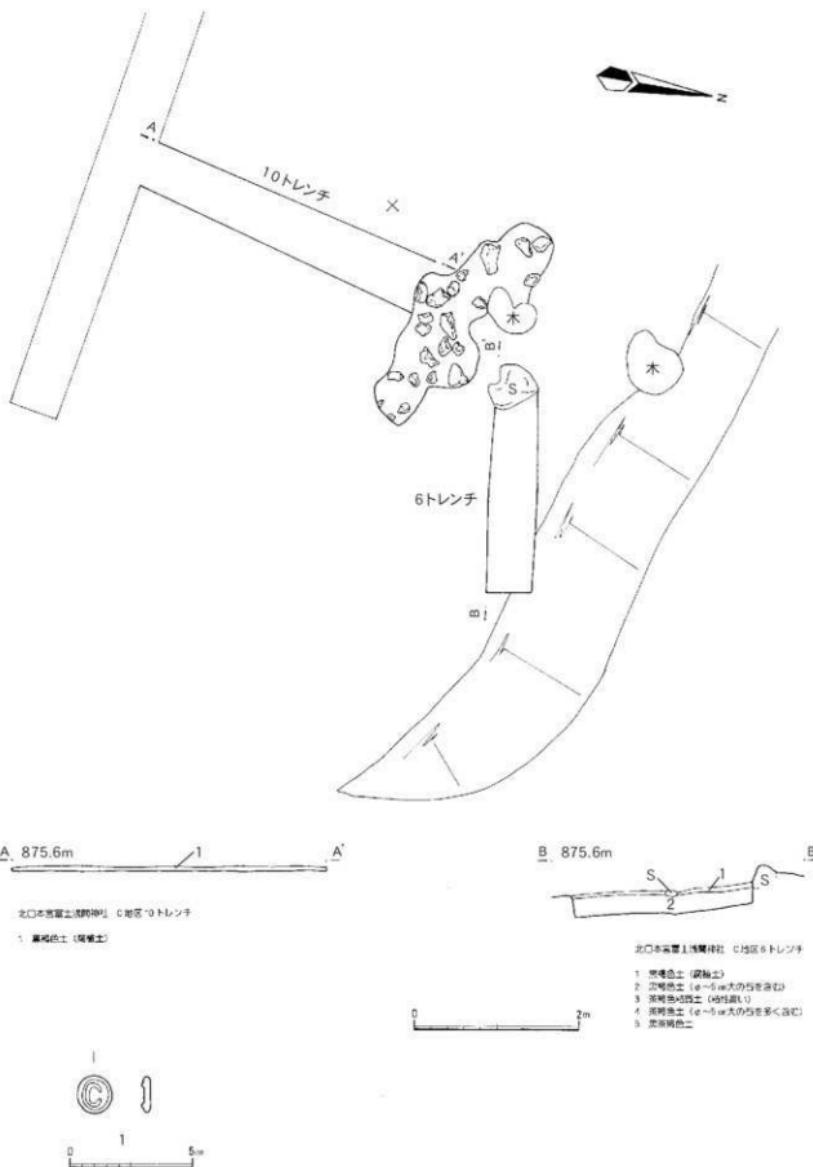
第54図 北口本宮富士浅間神社 C地区 3・5トレンチ 出土遺物



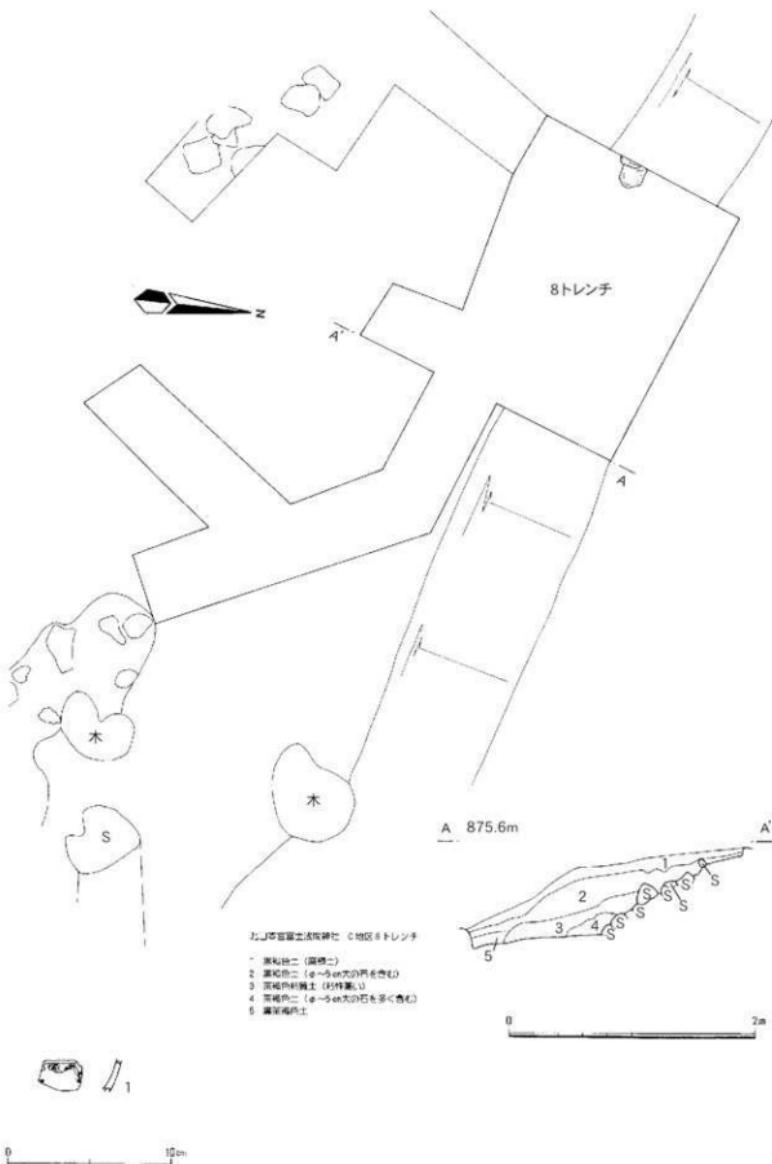
第55図 北口本宮富士浅間神社 C地区 4トレンチ平面図・セクション図 0 2m



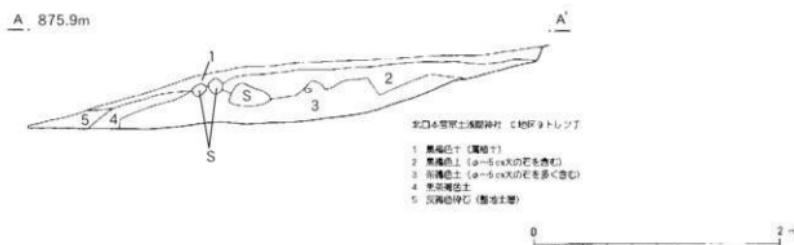
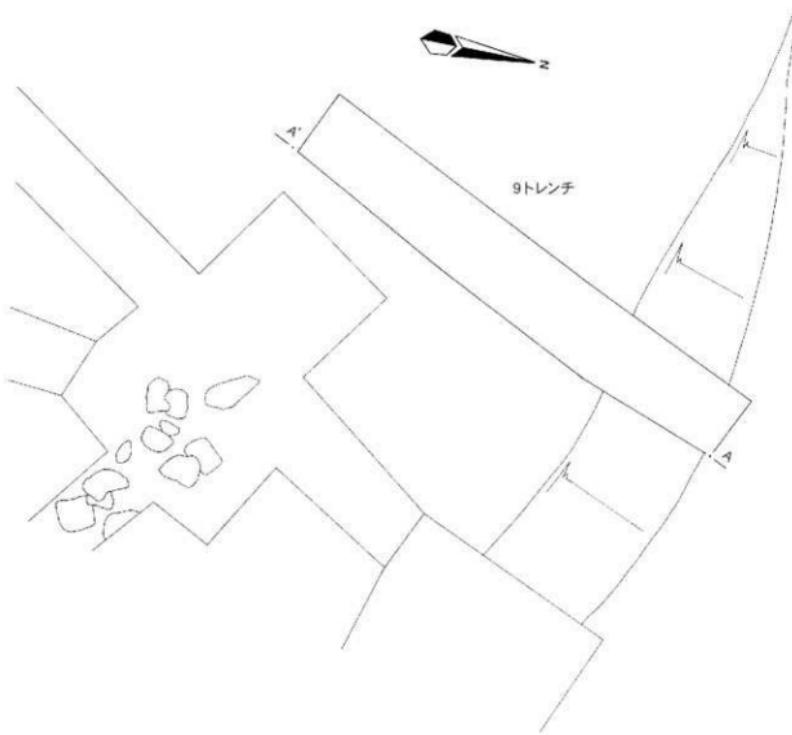
第56図 北口本宮富士浅間神社 C地区 4トレンチ 出土遺物



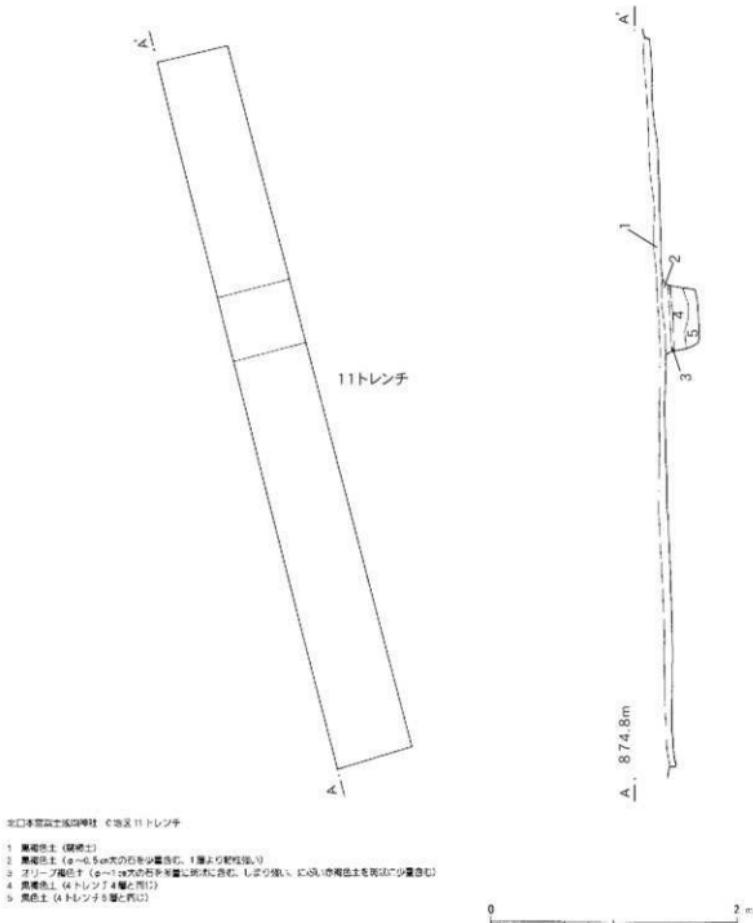
第57図 北口本宮富士浅間神社 C地区 6トレンチ 平面図・セクション図・出土遺物



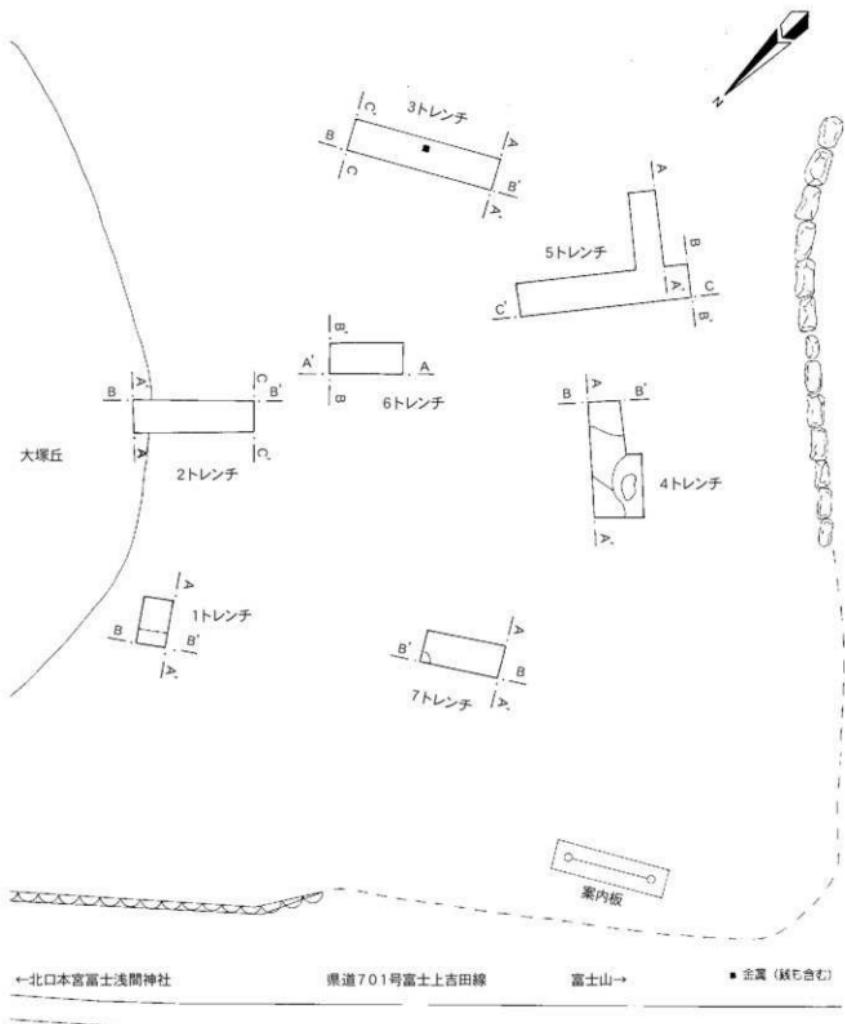
第58図 北口本宮富士浅間神社 C地区 8トレンチ 平面図・セクション図・出土遺物



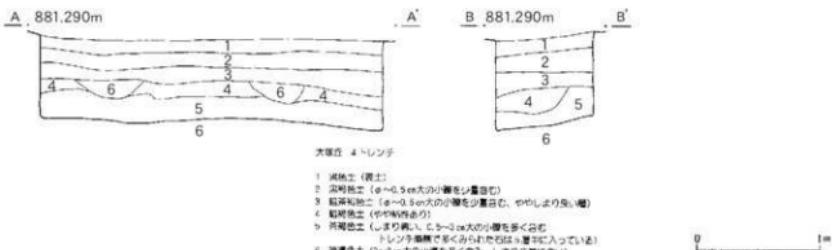
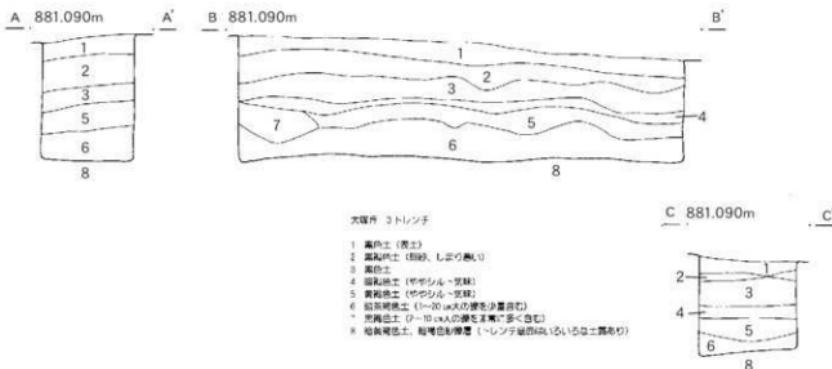
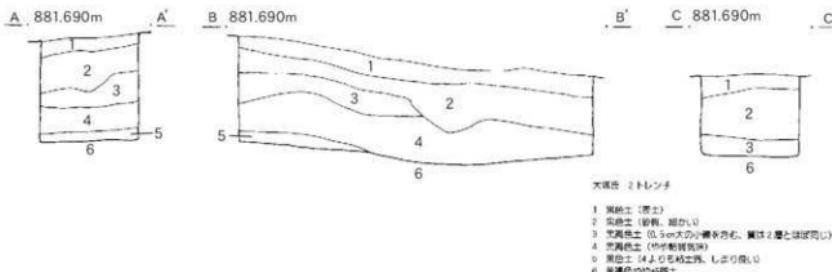
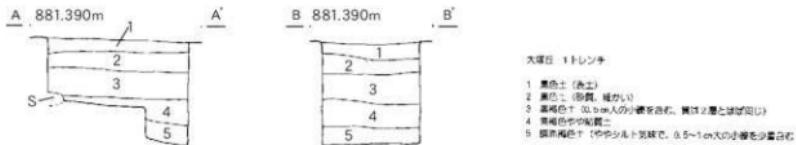
第59図 北口本宮富士浅間神社 C地区 9トレンチ 平面図・セクション図



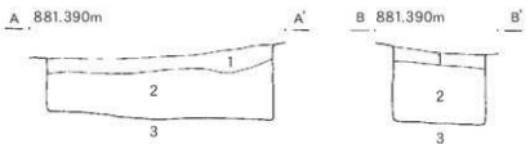
第60図 北口本宮富士浅間神社 C地区 11トレンチ 平面図・セクション図



第61図 大塚丘 近接地 トレンチ位置図

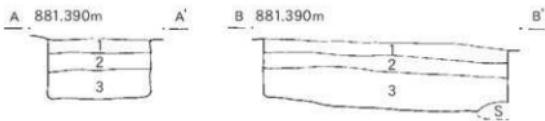


第62図 大塚丘 近接地 トレンチセクション図(1)



大塚丘 6トレンチ

- 1 湿潤土(赤土)
- 2 深成土(しまり固め)
- 3 黄褐色や褐質土

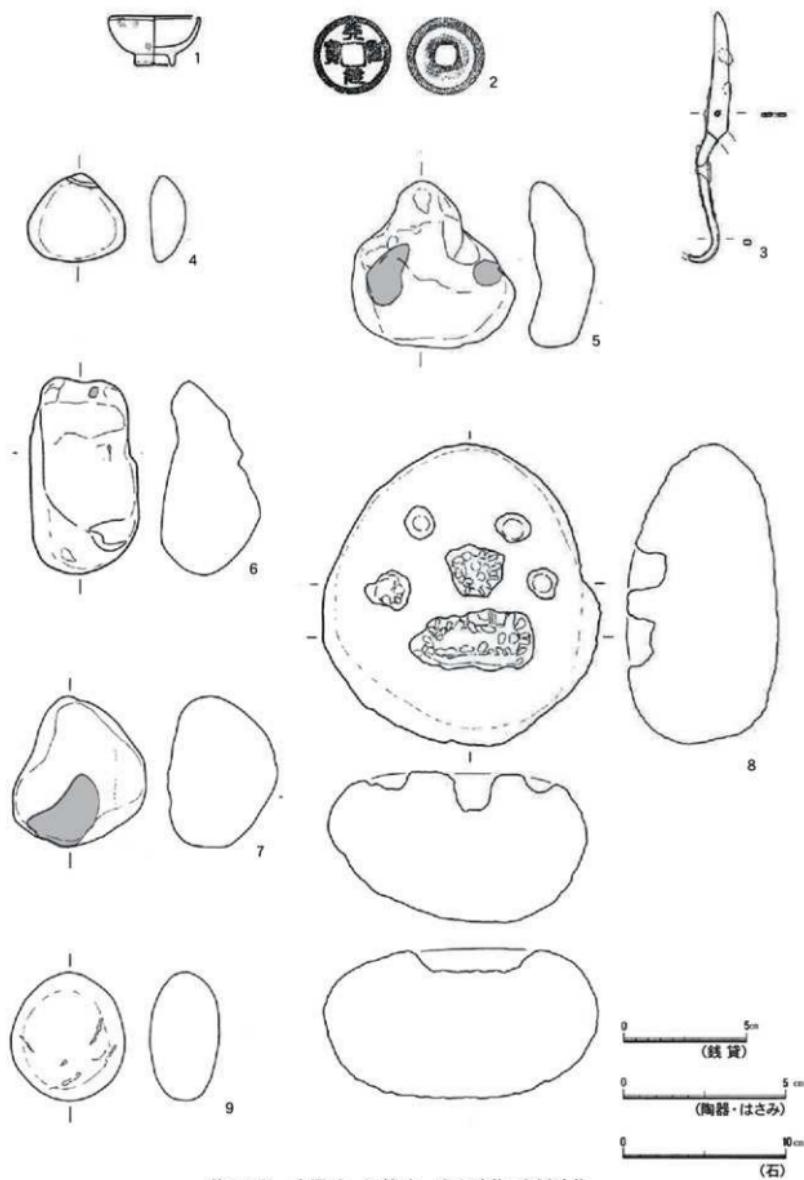


大塚丘 7トレンチ

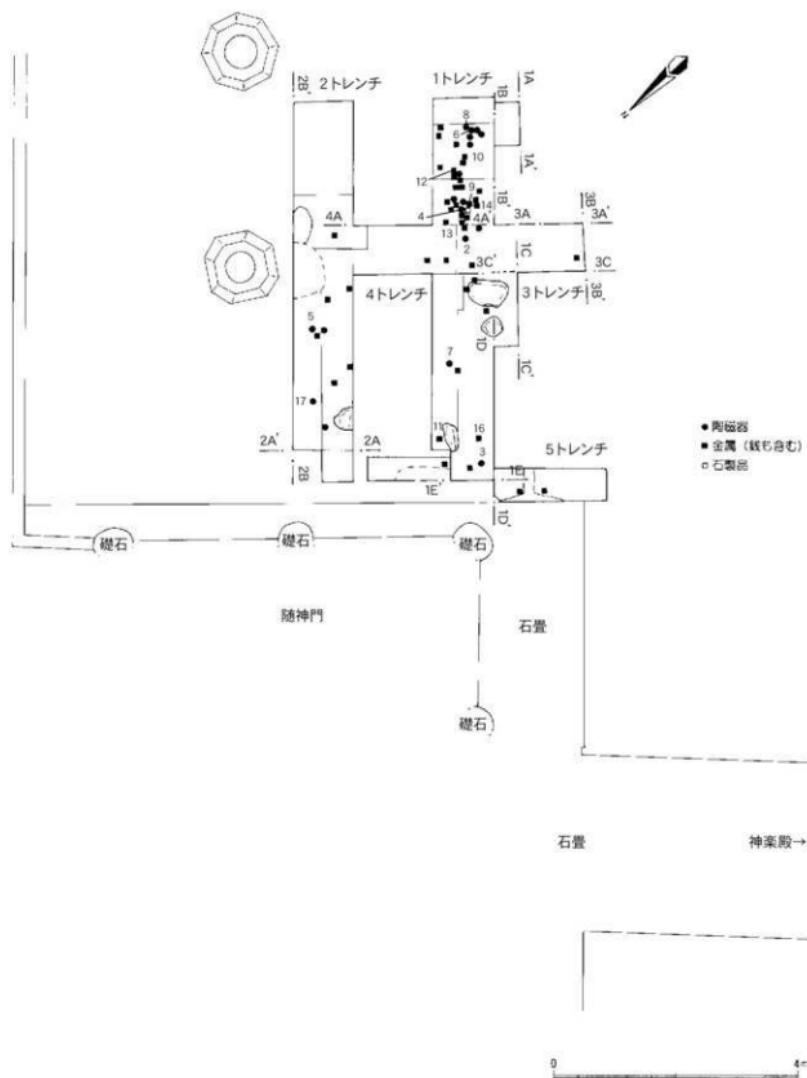
- 1 湿潤土(赤土)
- 2 細粒赤土(細砂、サラサラ)
- 3 褐色土(±1~15cmの大粒の砂を少量含む)



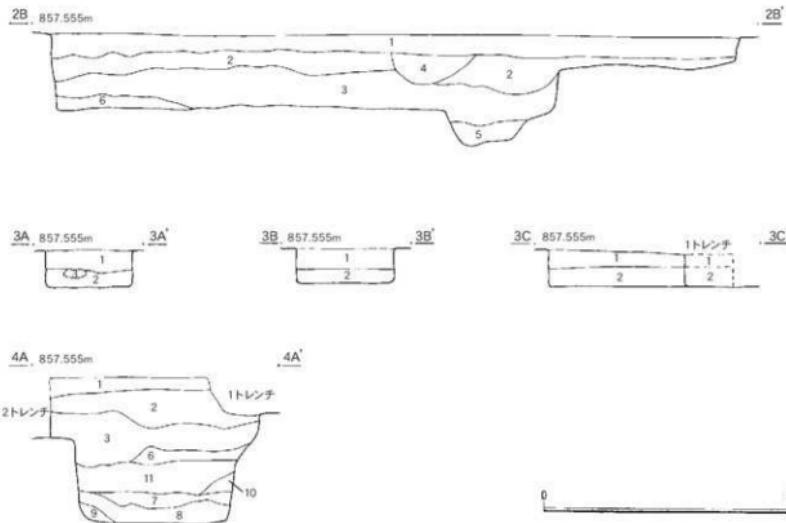
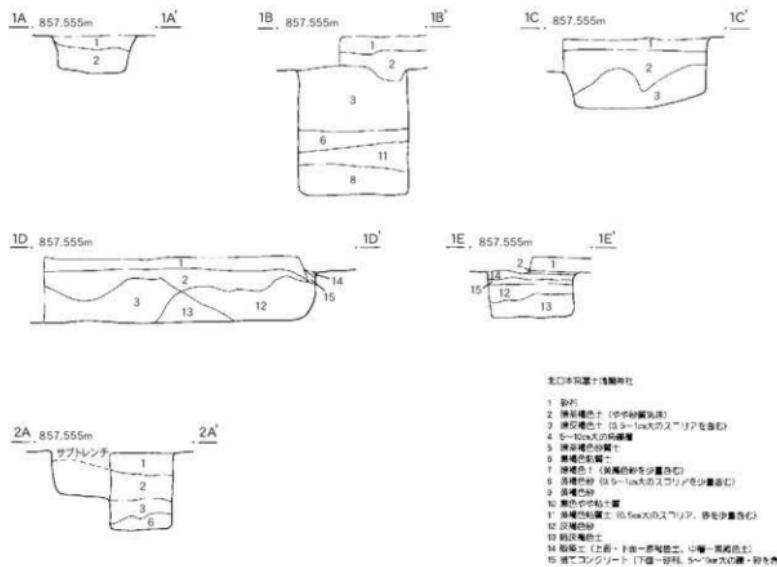
第63図 大塚丘 近接地 トレンチセクション図(2)



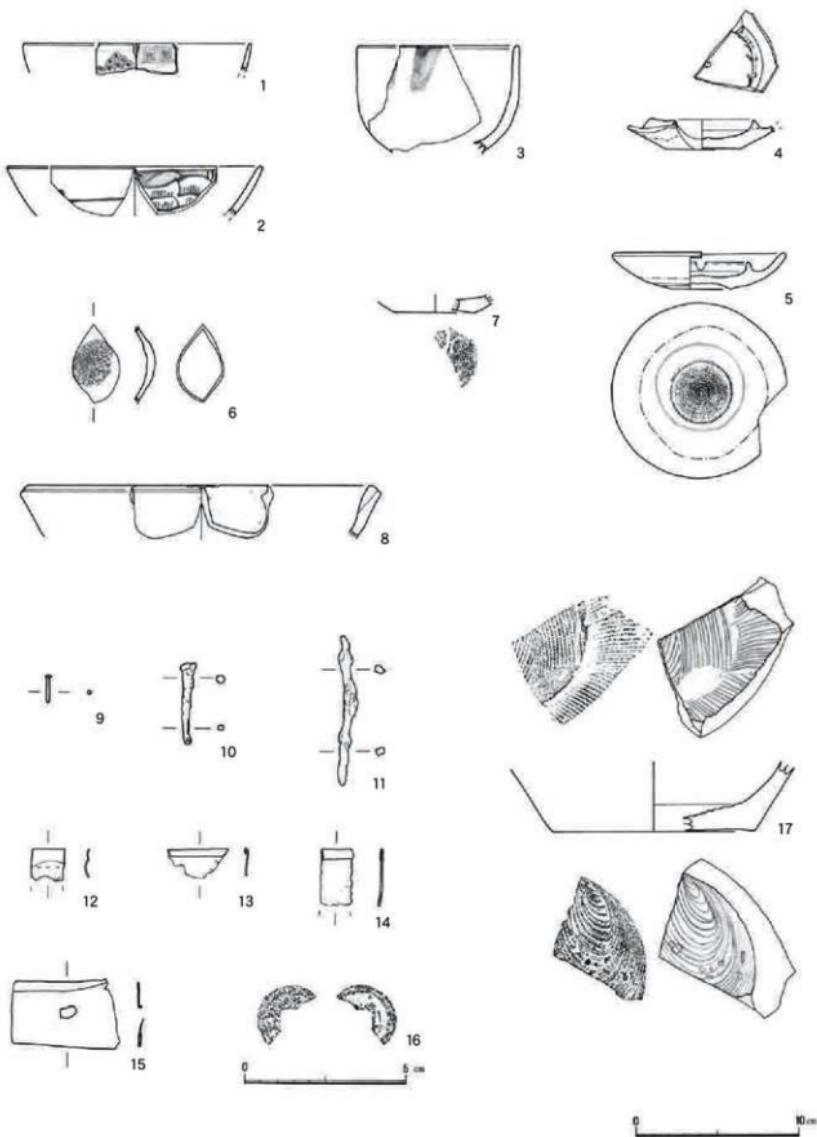
第64図 大塚丘 近接地 出土遺物・表探遺物



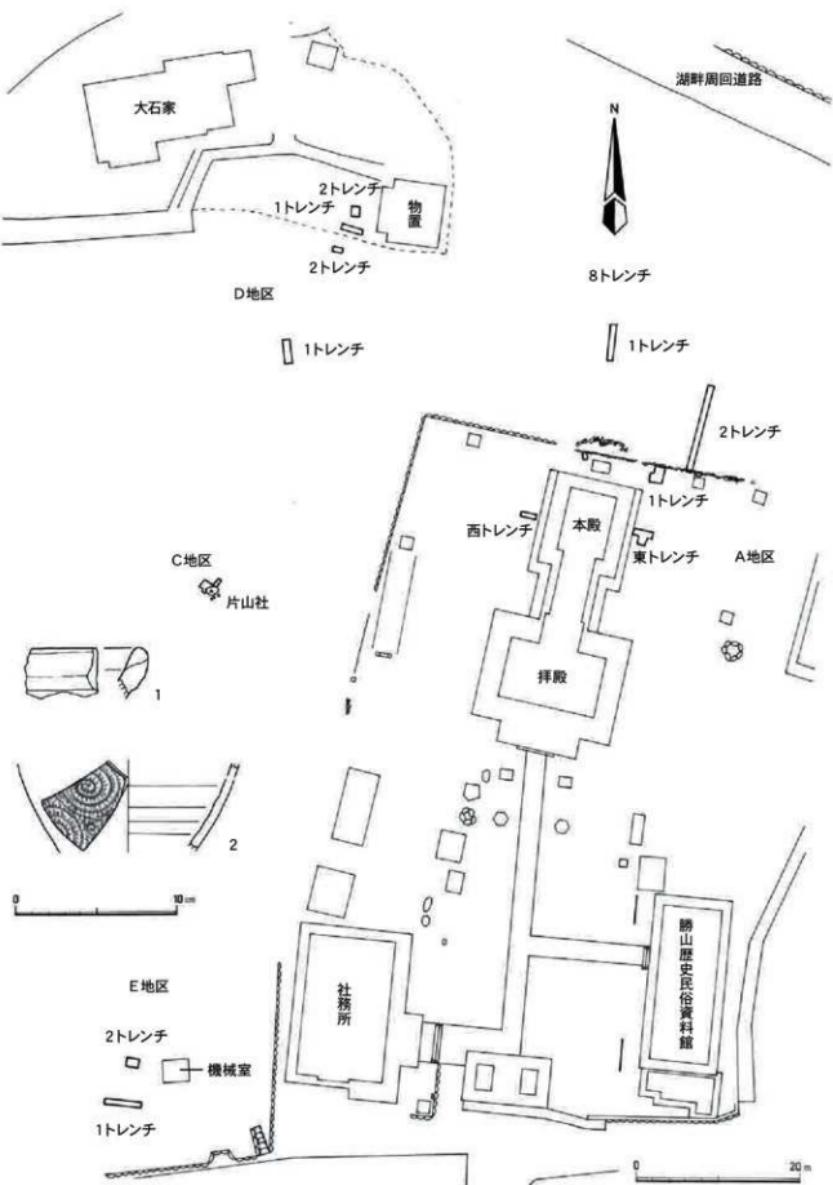
第65図 北口本宮富士浅間神社(隨神門周辺) トレンチ位置図



第66図 北口本宮富士浅間神社(隨神門周辺) セクション図

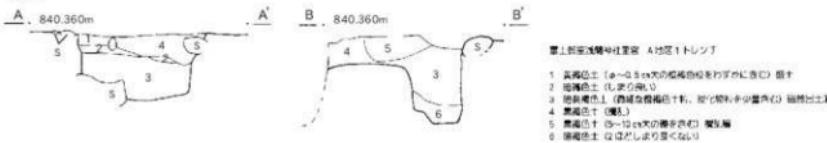


第67図 北口本宮富士浅間神社(随神門周辺) 出土遺物

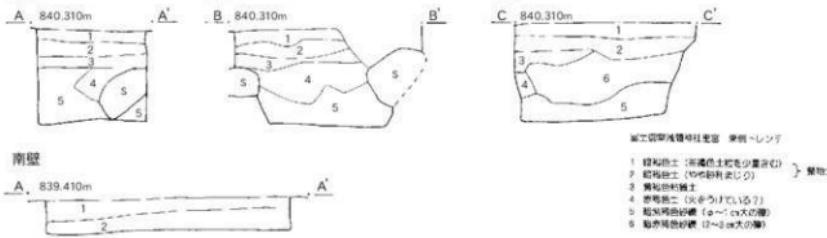


第68図 富士御室浅間神社里宮 調査区・トレンチ位置図・出土遺物

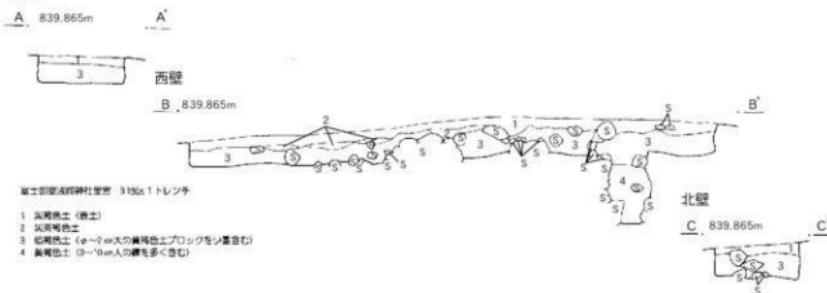
西壁



南壁



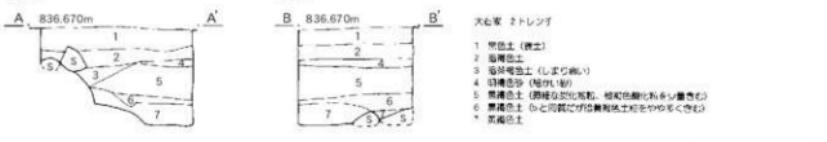
南壁



南壁

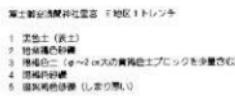
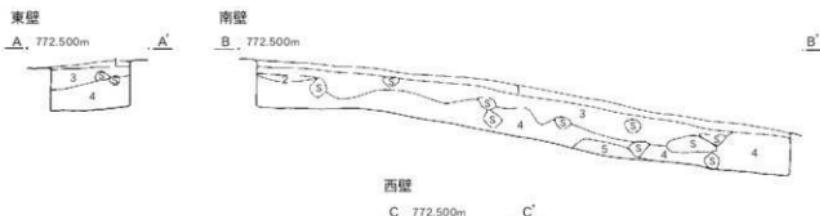
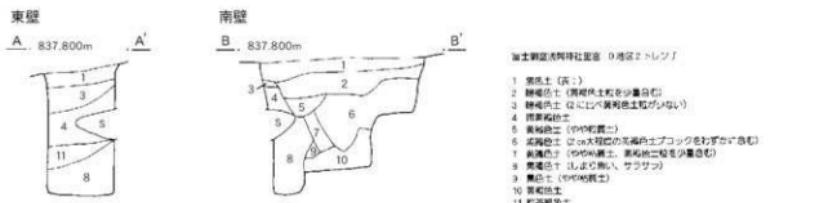
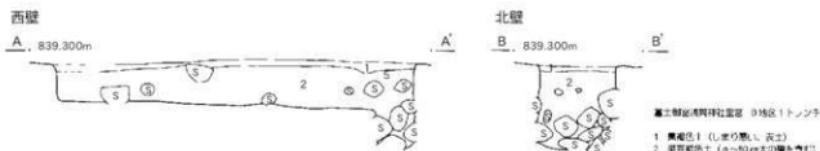


西壁

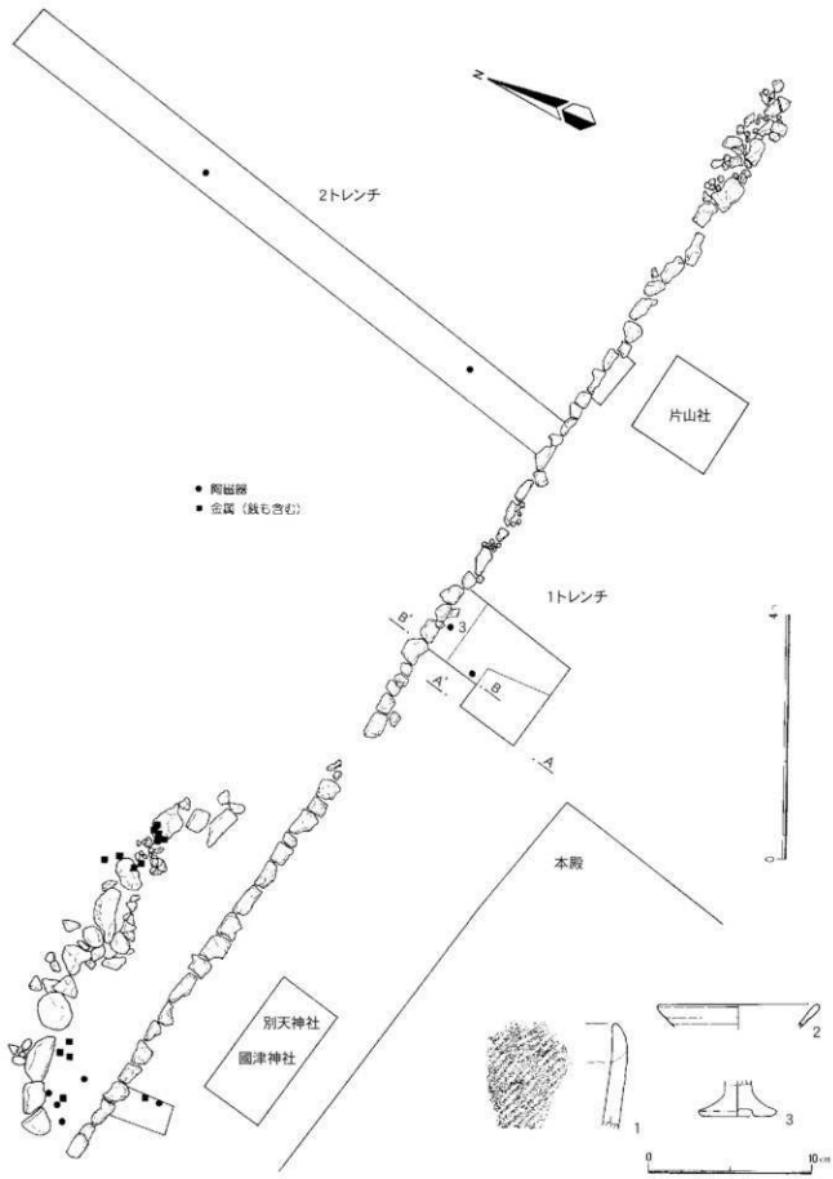


0 1m

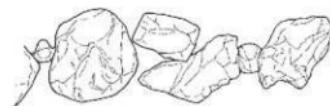
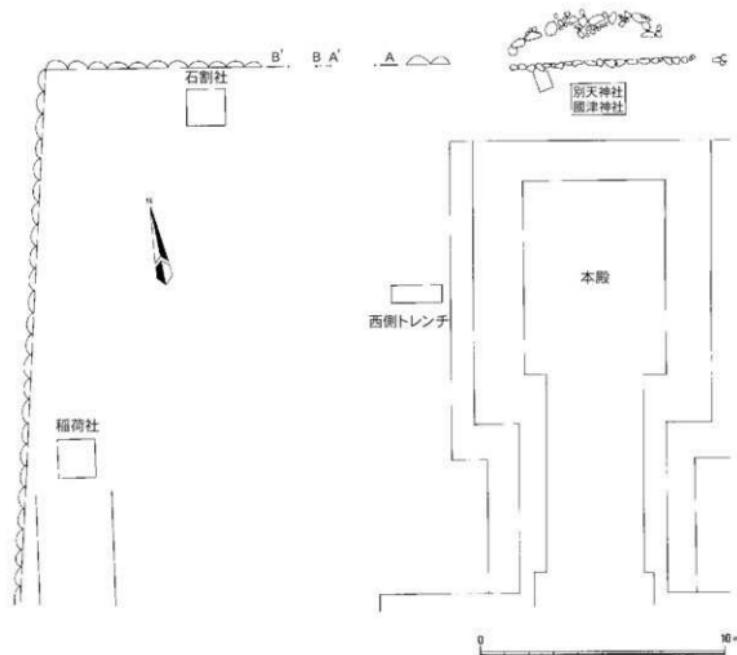
第69図 富士御室浅間神社里宮 セクション図(1)



第70図 富士御室浅間神社里宮 セクション図(2)



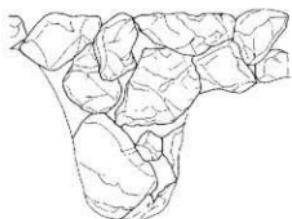
第71図 富士御室浅間神社里宮 A地区 石列検出状況・出土遺物



A, 839.715m

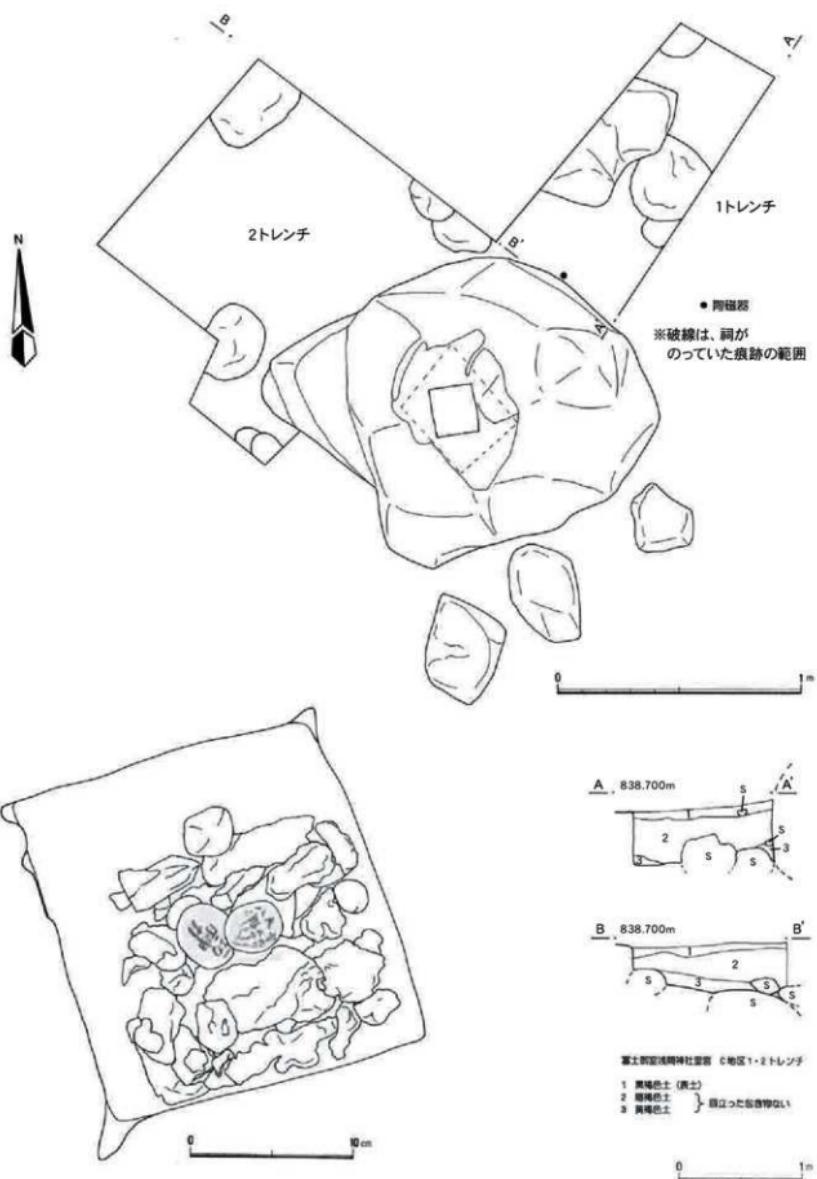
A' B, 839.745m

B'

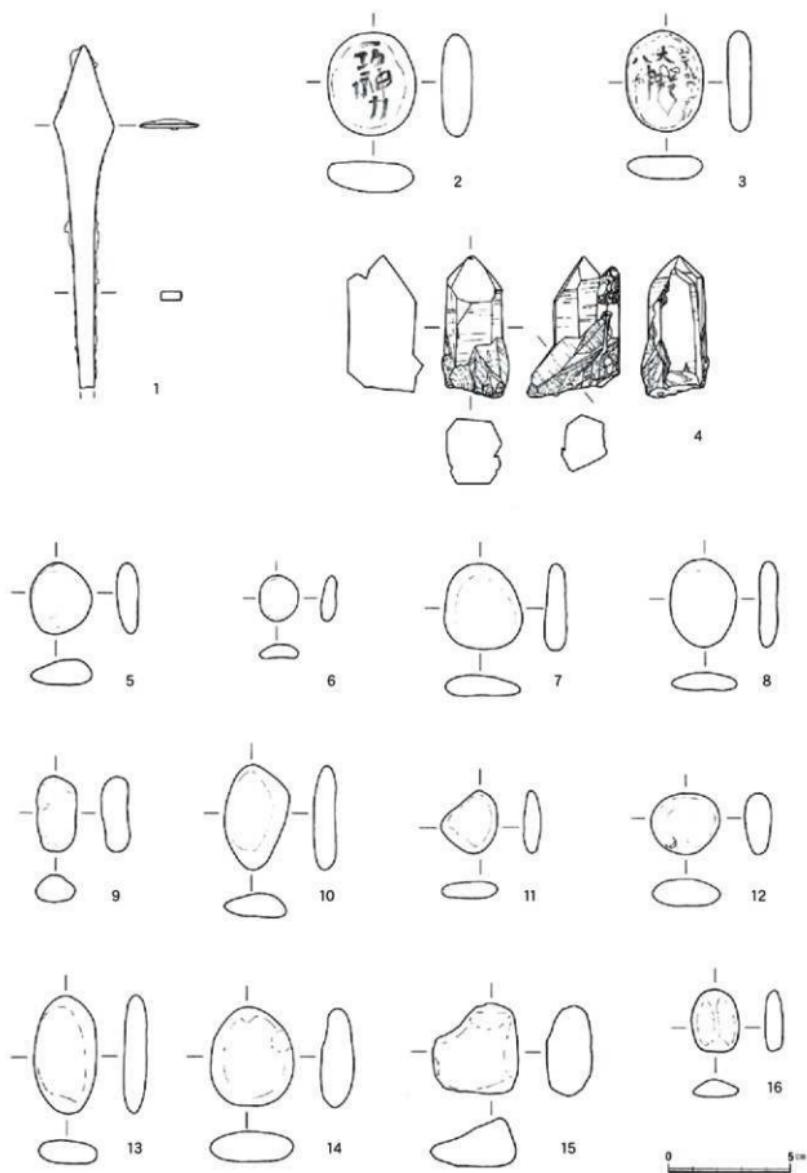


0 1m

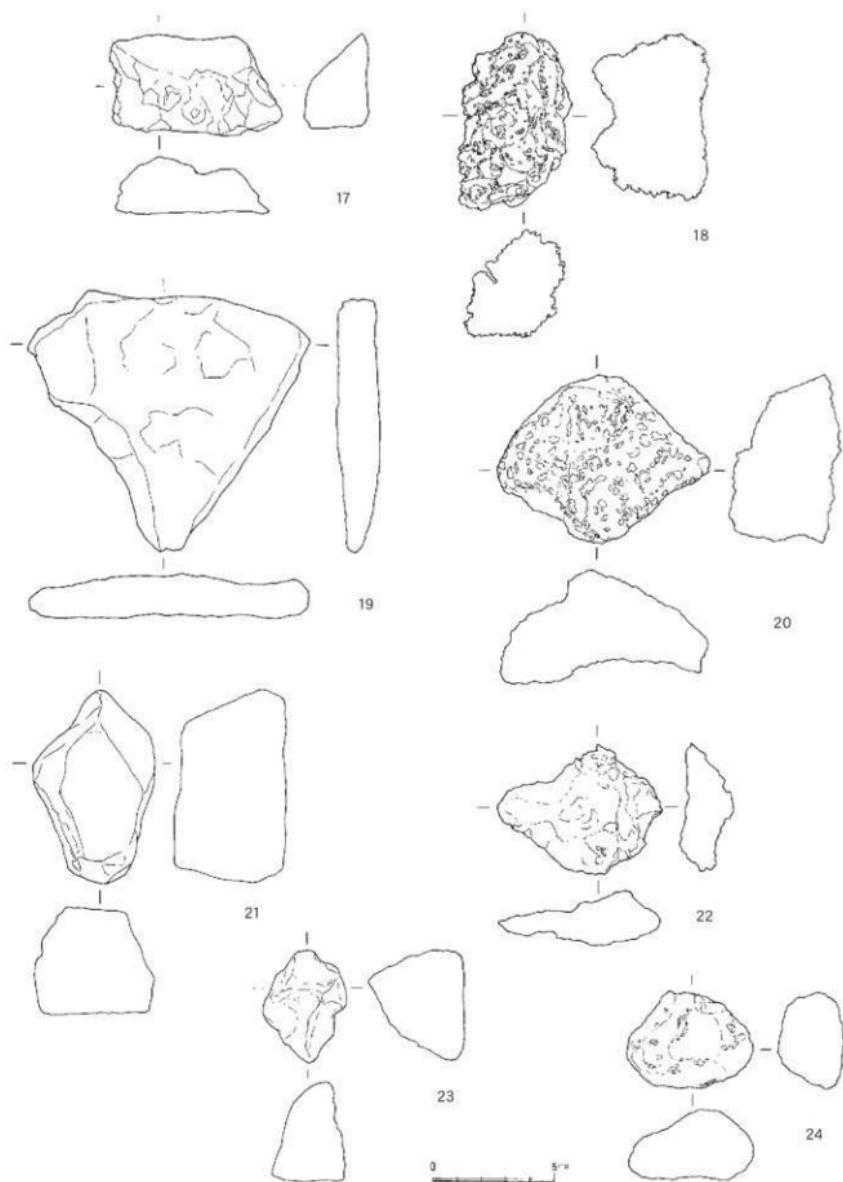
第72図 富士御室浅間神社里宮 石垣 エレベーション図



第73図 富士御室浅間神社里宮 片山社土台石 平面図・セクション図



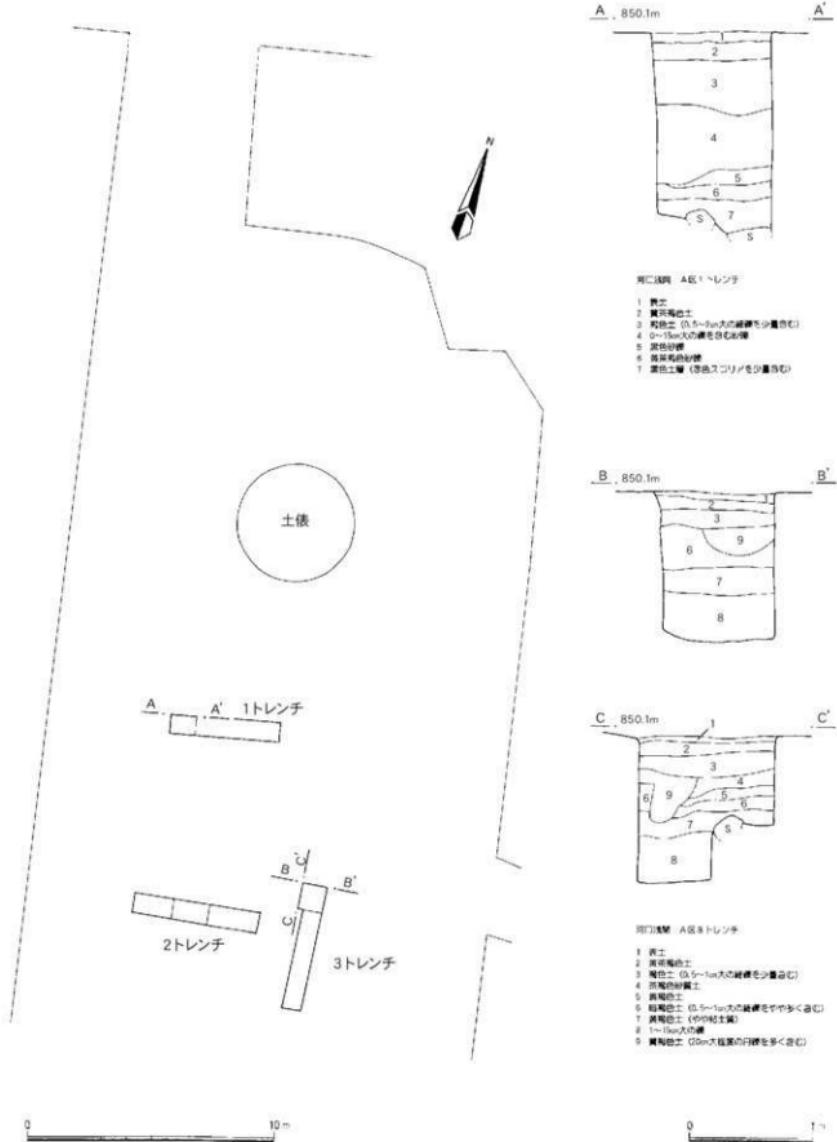
第74図 富士御室浅間神社里宮 片山社土台石 出土遺物(1)



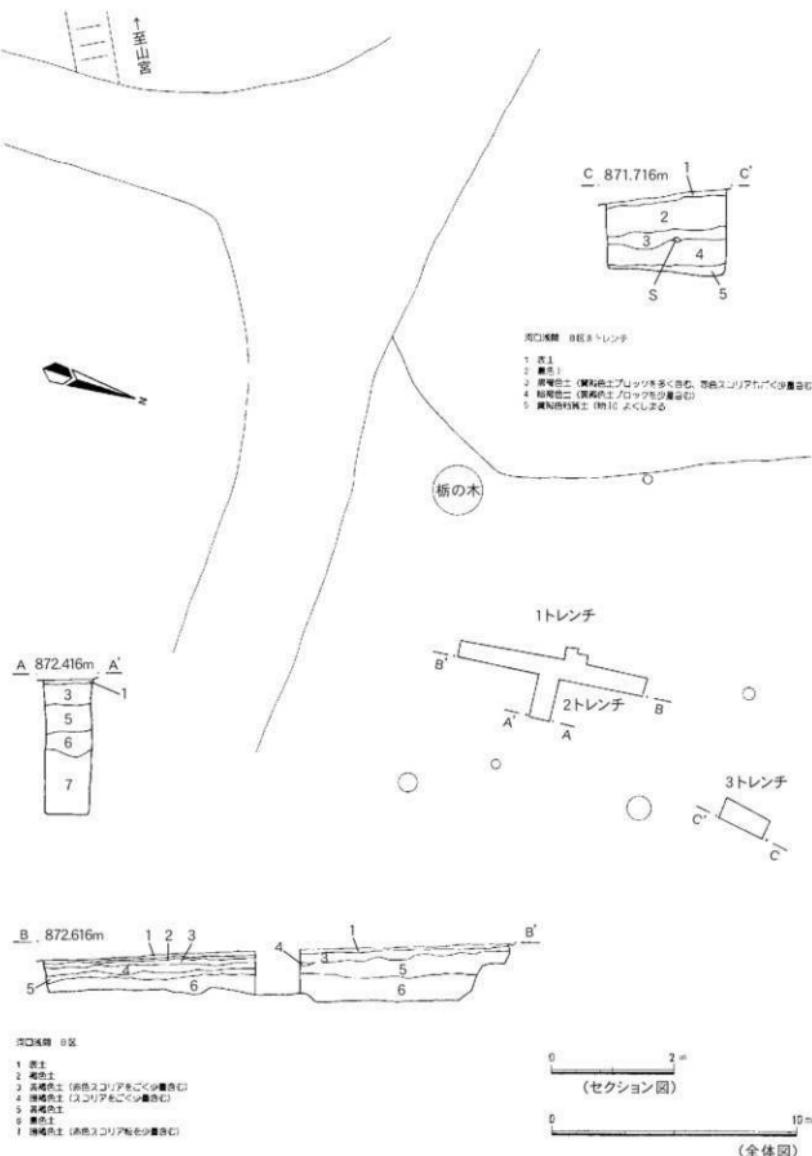
第75図 富士御室浅間神社里宮 片山社土台石 出土遺物(2)



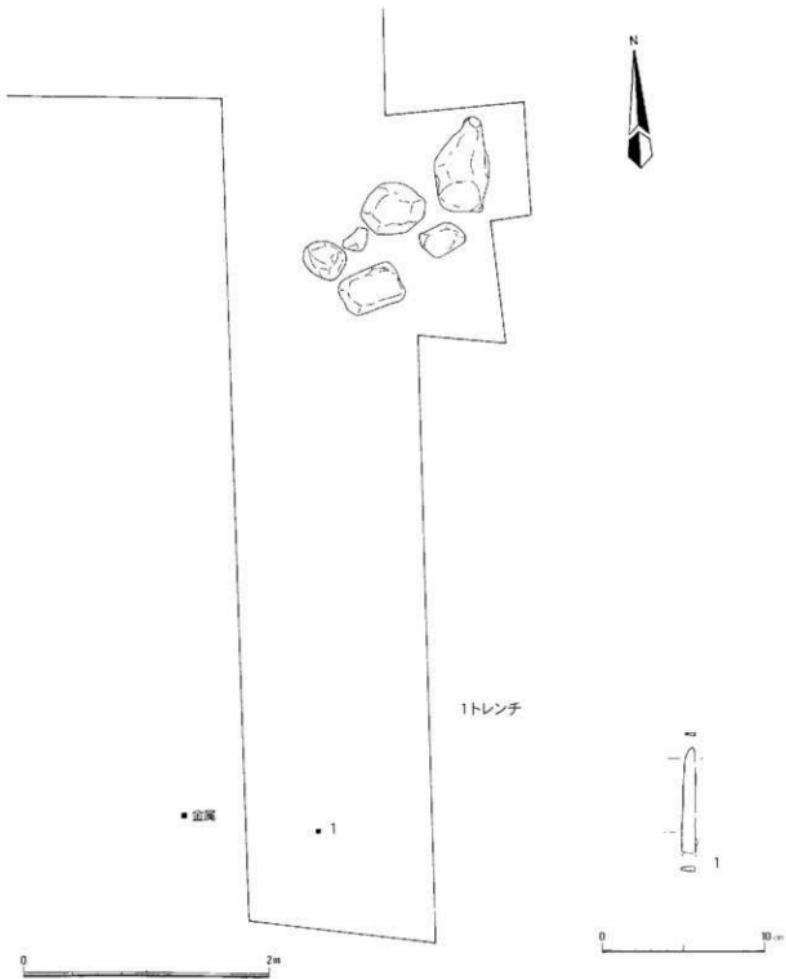
第76図 河口浅間神社周辺図 (S = 1 / 2000)



第77図 河口浅間神社 A地区 トレンチ位置図・セクション図



第78図 河口浅間神社 B地区 トレンチ位置図・セクション図



第79図 河口浅間神社 B地区 1トレンチ 集石状遺構・出土遺物



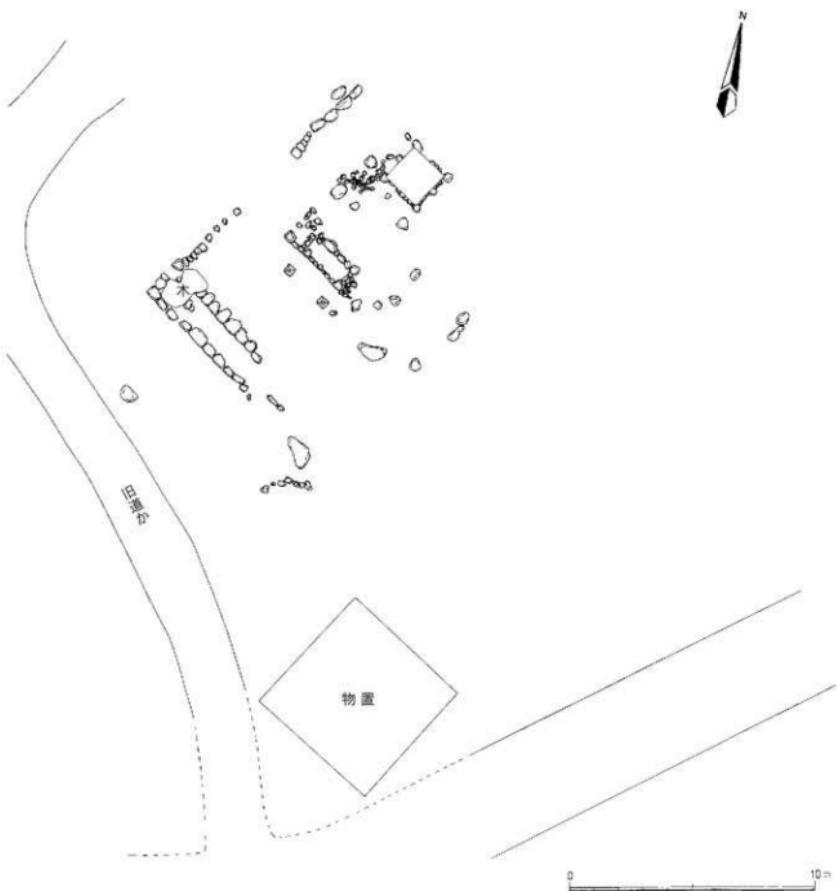
七本杉-3



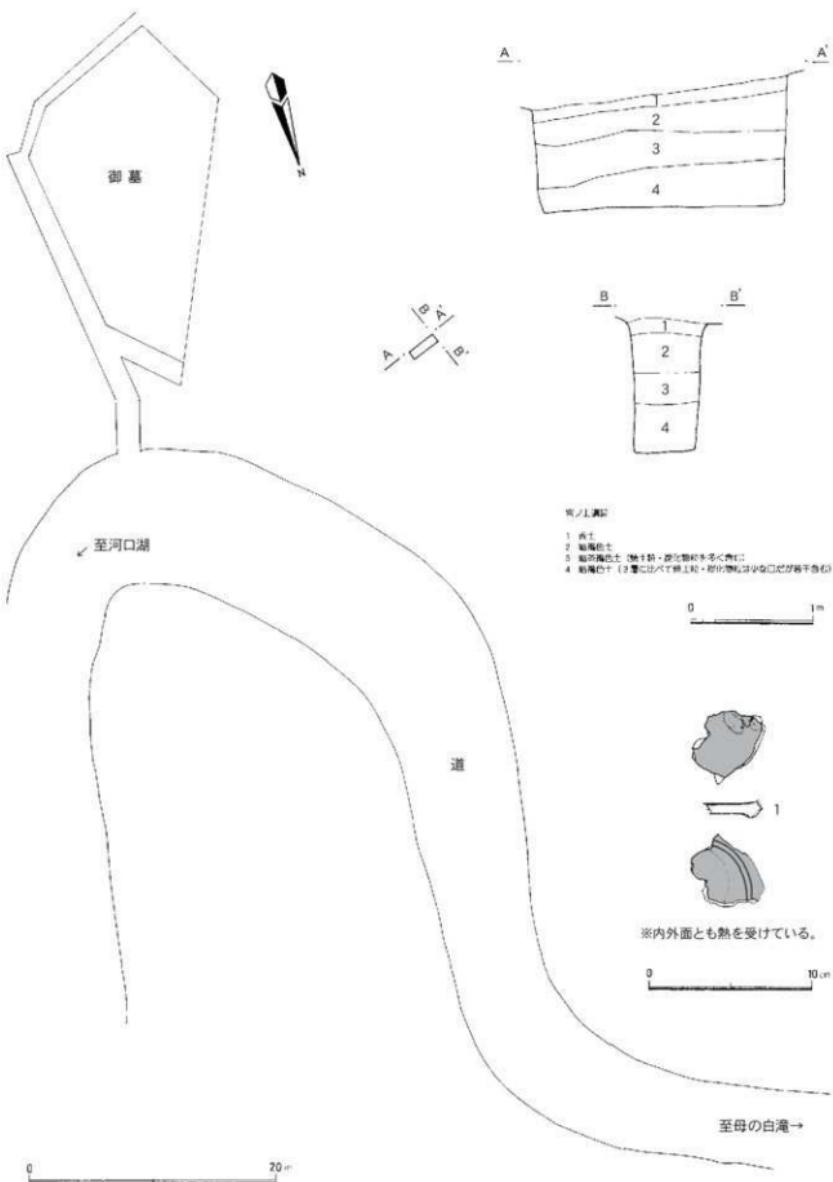
七本杉-4



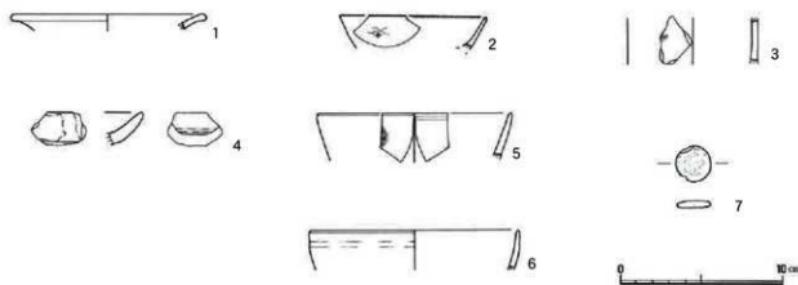
出雲社



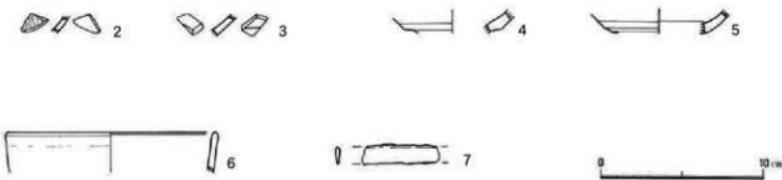
第80図 河口浅間神社 C地区 全体図



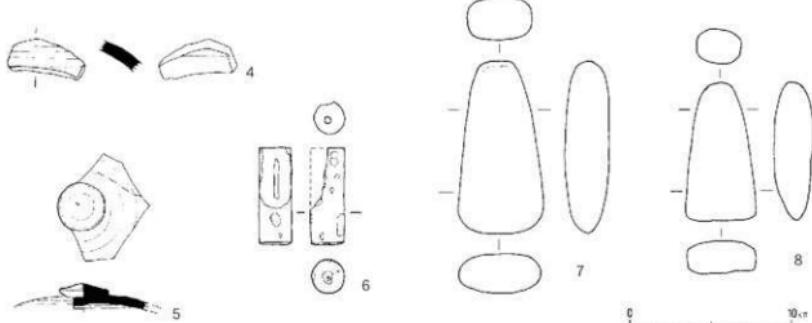
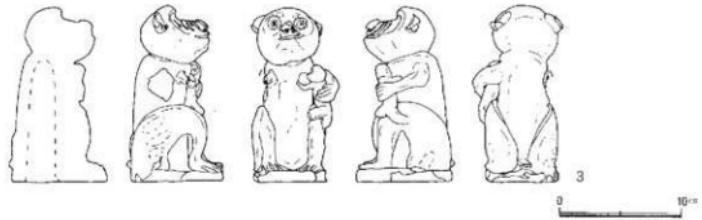
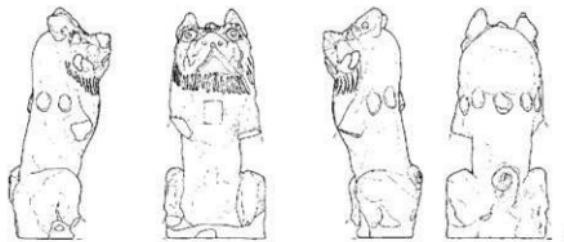
第81図 宮ノ上遺跡 トレンチ位置図・セクション図・出土遺物(1)



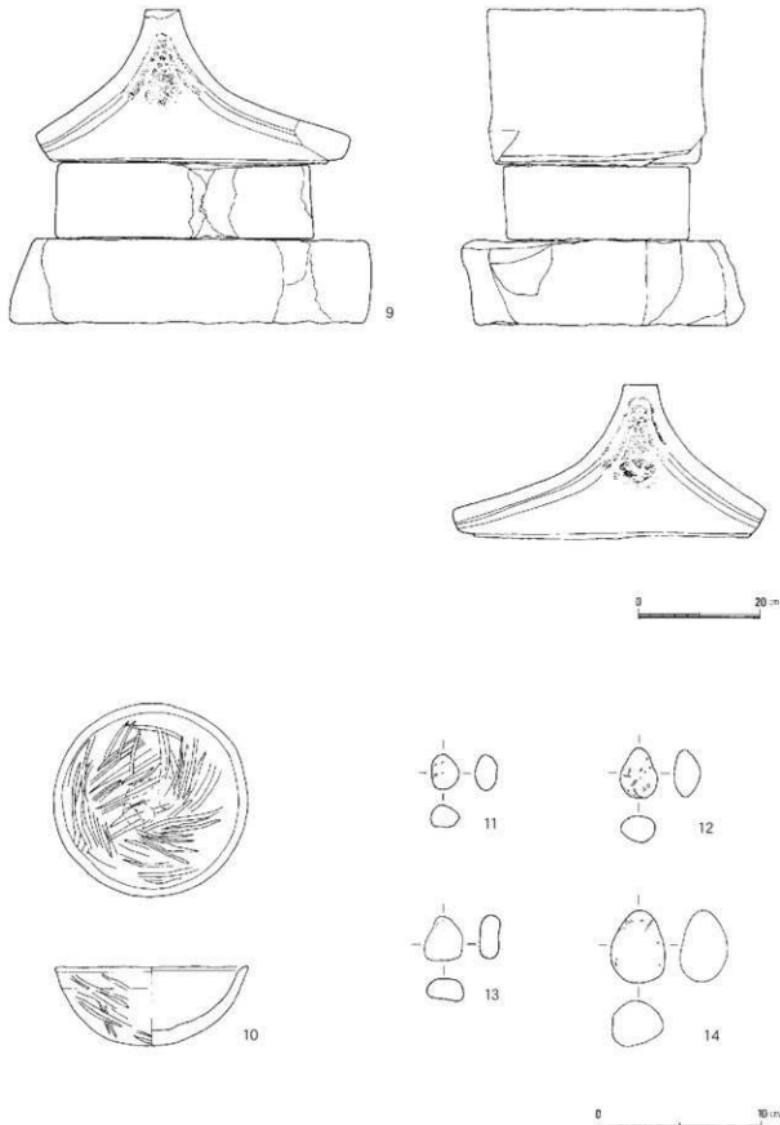
第82図 河口浅間神社 A地区 出土遺物



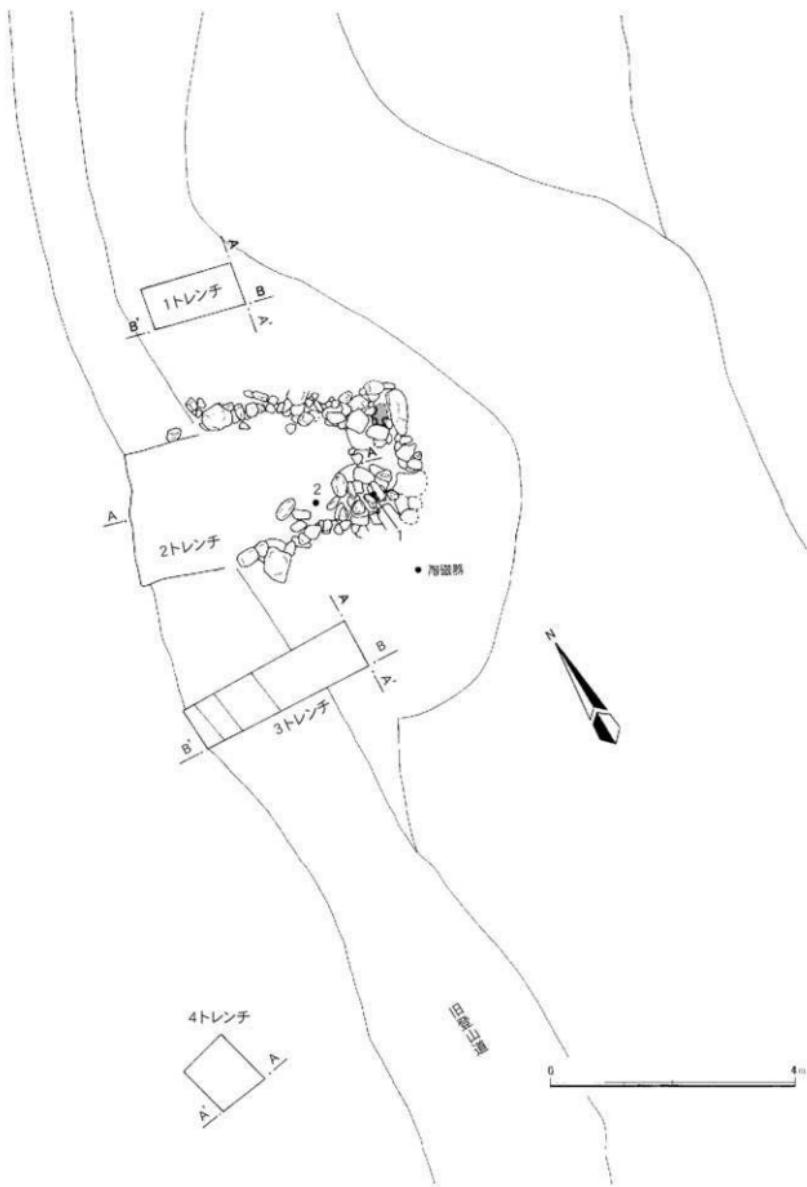
第83図 宮ノ上遺跡 出土遺物(2)



第84図 河口浅間神社に伝わる文化財(1)

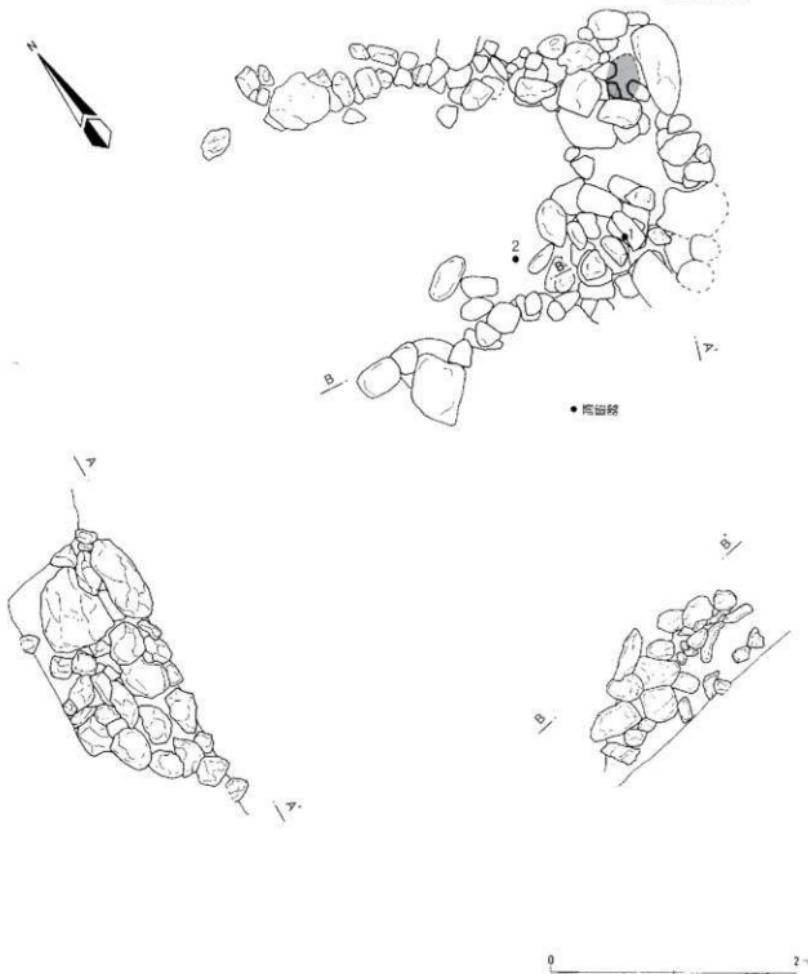


第85図 河口浅間神社に伝わる文化財(2)・10は疱瘡遺跡出土遺物

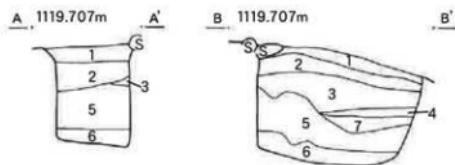


第86図 富士山吉田口登山道関連遺跡 鈴原A地点 全体図

※スクリントーンは
焼土および灰

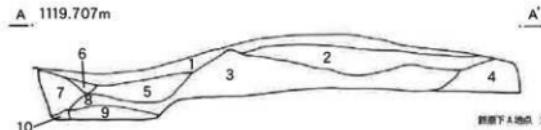


第87図 富士山吉田口登山道関連遺跡 鈴原A地点 コの字状石積 平面図・エレベーション図



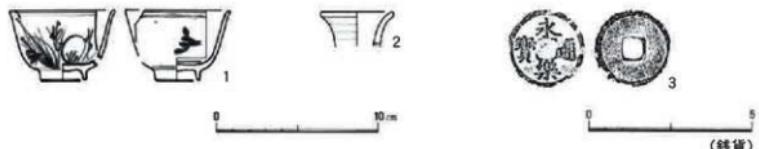
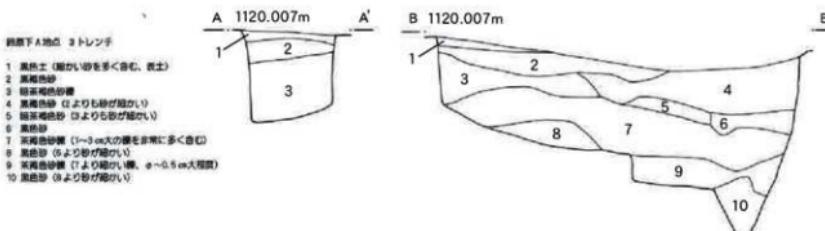
鉢底下A地点 1トレーシ

- 1 黒褐色土 (暗めの茶色を少々含む)
- 2 黑褐色土 (1~3cmの大粒を少々含む)
- 3 黄褐色粘土 (0~15cmの大粒を多く含む)
- 4 黄褐色土 (シルト混入)
- 5 黄褐色土 (1~2cmの大粒を多く含む)
- 6 黄褐色土 (シルト混入、4よりしまり固い)
- 7 黄褐色土 (シルト混入)

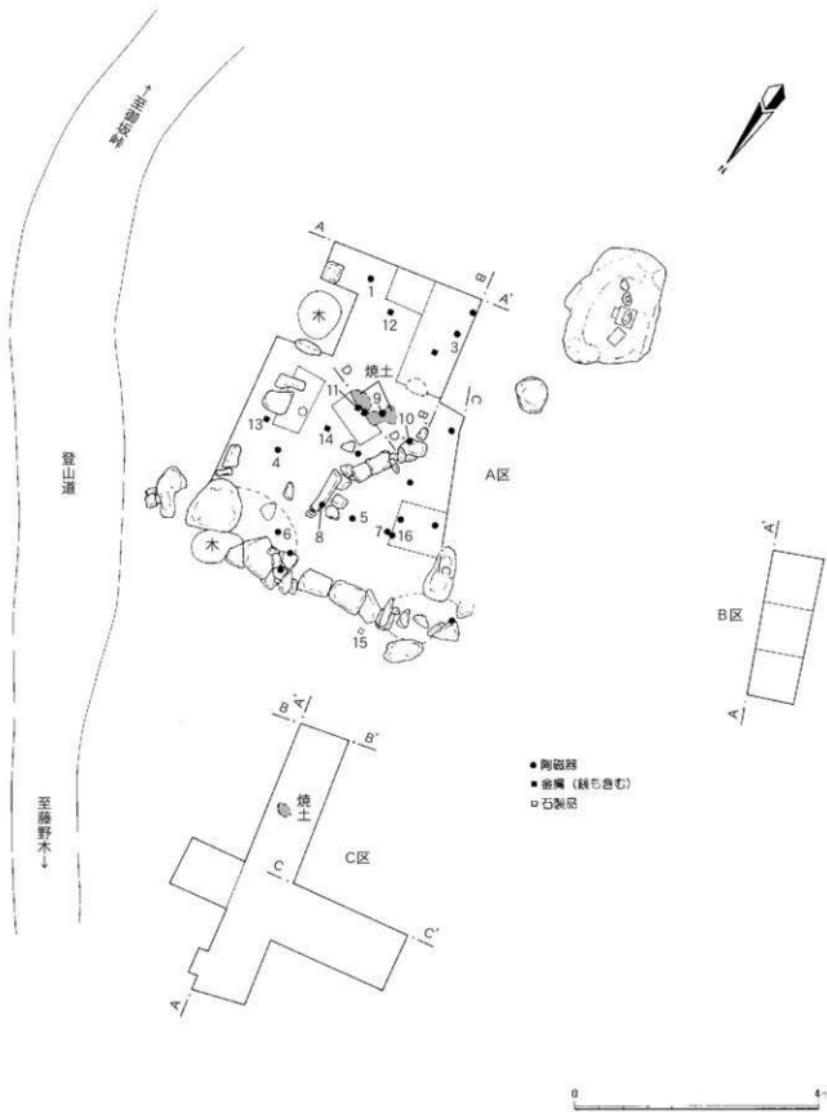


鉢底下A地点 2トレーシ

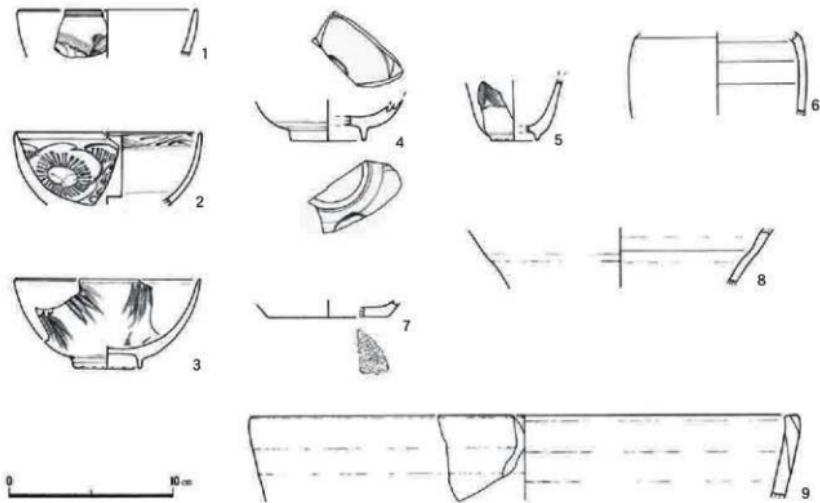
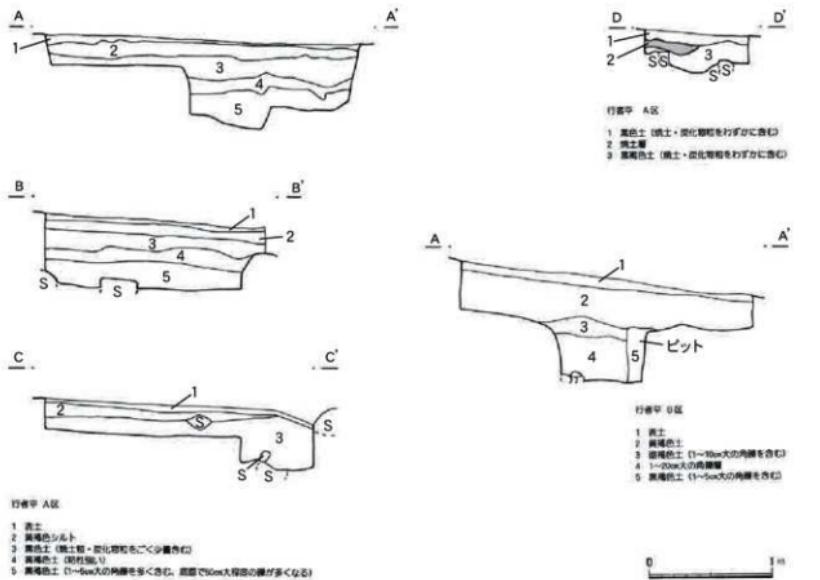
- 1 黒褐色土 (茶土、砂砂を多く含む)
- 2 黑褐色砂 (風砂)
- 3 黄褐色粘土
- 4 黄褐色粘土 (2層と所調の砂もさわが1cm大程度のスコリアを多く含む)
- 5 黄褐色粘土
- 6 黄褐色粘土
- 7 黄褐色土 (シルト混入)
- 8 黄褐色土 (シルト混入、しまり固い)
- 9 黄褐色土 (上層には1~2cmの砂利を多く含む、下層はしまりの良、砂利層)
- 10 黑褐色砂 (暗めの茶の砂)



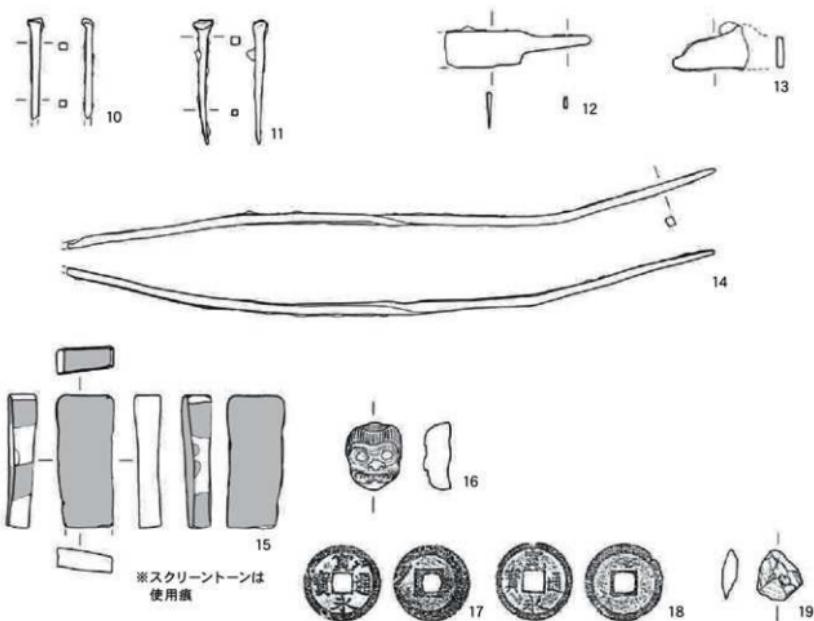
第88図 富士山吉田口登山道関連遺跡 鈴原A地点 セクション図・出土遺物



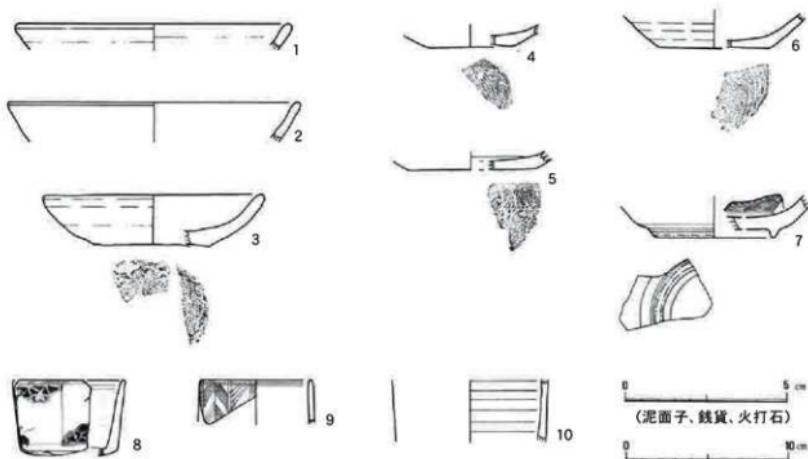
第89図 行者平遺跡(大善寺行者堂跡伝承地) 全体図



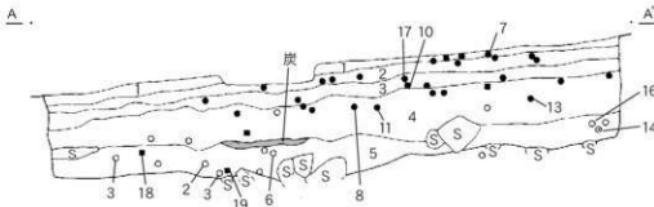
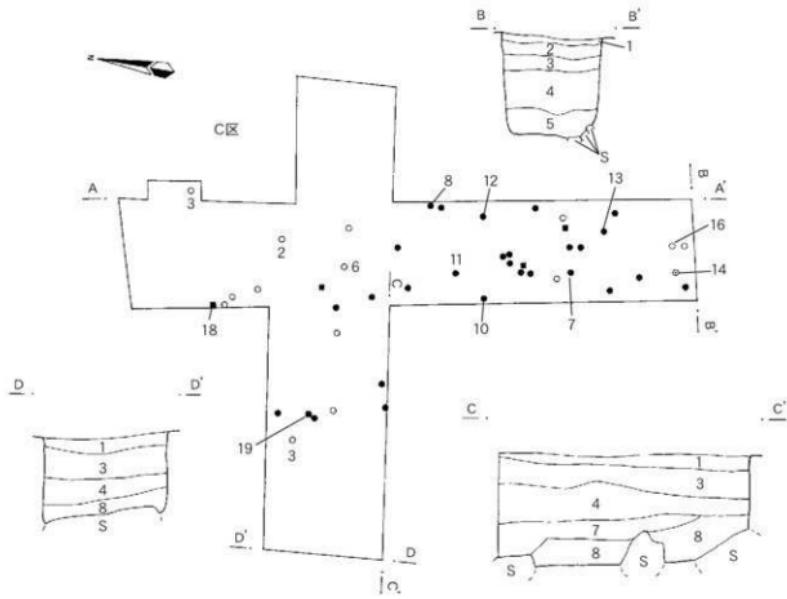
第90図 行者平遺跡(大善寺行者堂跡伝承地) セクション図、A区 出土遺物(1)



第91図 行者平遺跡(大善寺行者堂跡伝承地) A区 出土遺物(2)



第92図 行者平遺跡(大善寺行者堂跡伝承地) C区 出土遺物(1)



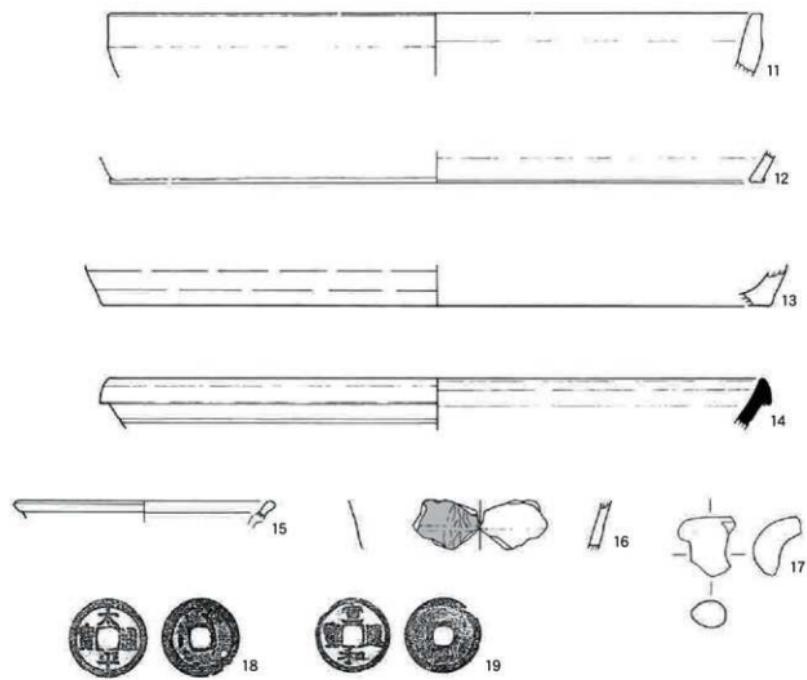
- 陶器路（江戸）
- 陶磁器（中世）
- 陶磁器（須恵器）
- 金屬（銅も含む）

行者平 C区

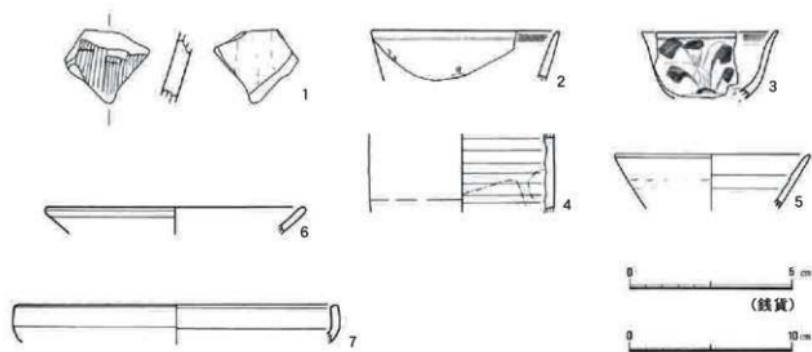
- 1. 砂土
- 2. 粘土土：じしりつち
- 3. 硫化鉄土
- 4. 黄褐色土 (φ~5mmの礫をわずかに含む)
- 5. 黑褐色土 (φ~30mmの礫を含む、下層まで)
- 6. 上層（炭化物層）、下層（粘土層）
- 7. 鉛鉱層 (φ~30mmの礫を多く含む)
- 8. 銅鉱層
- 9. 鋼鉄鉱層 (φ~30mmの礫を含む)

0 2m

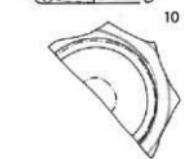
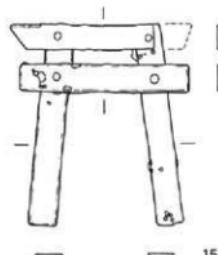
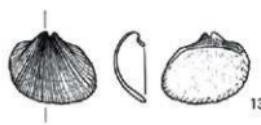
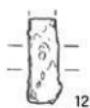
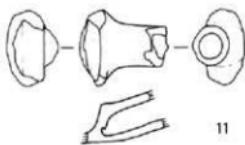
第93図 行者平遺跡(大善寺行者堂跡伝承地) C区全体図・セクション図



第94図 行者平遺跡(大善寺行者堂跡伝承地) C区 出土遺物(2)

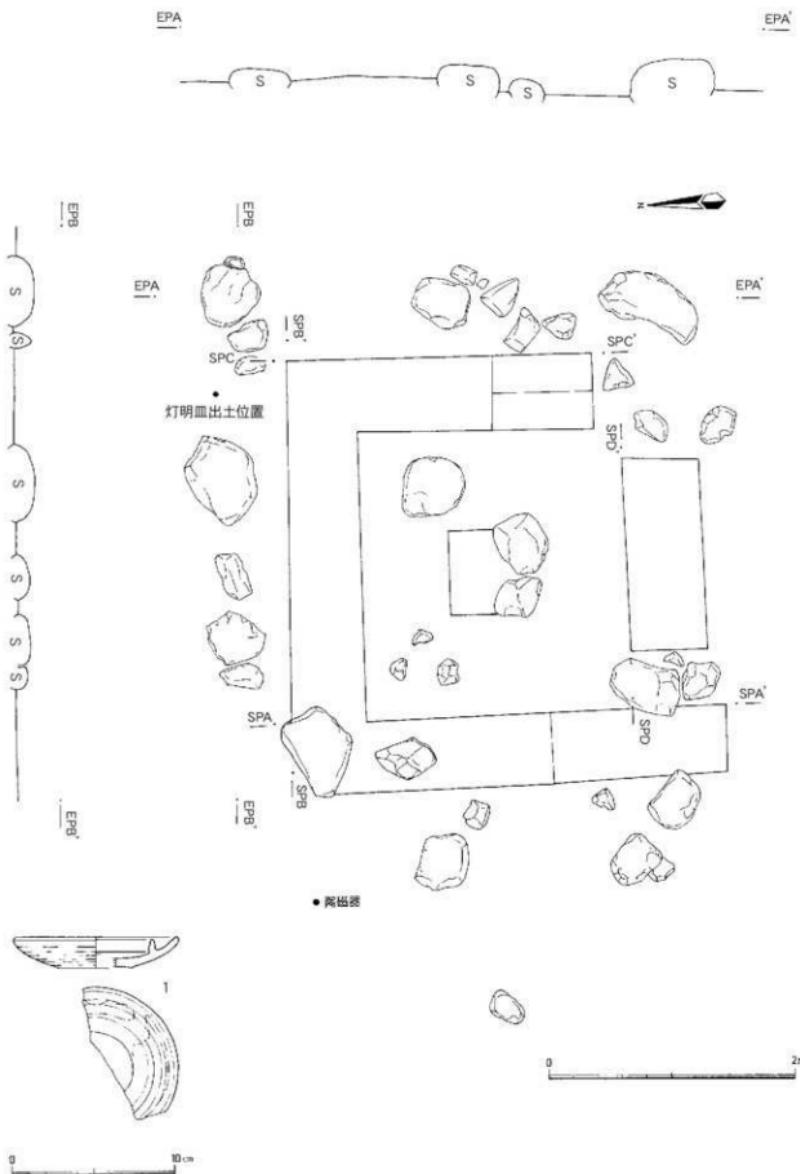


第95図 行者平遺跡(大善寺行者堂跡伝承地周辺) 表採遺物(1)

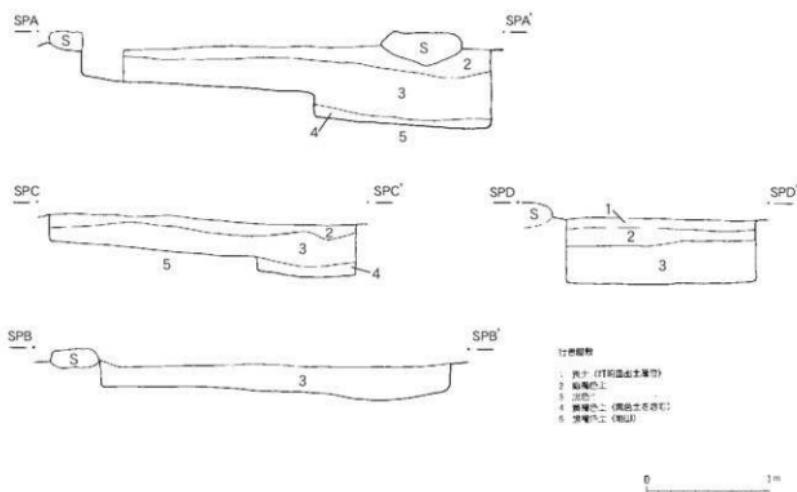


0 10cm

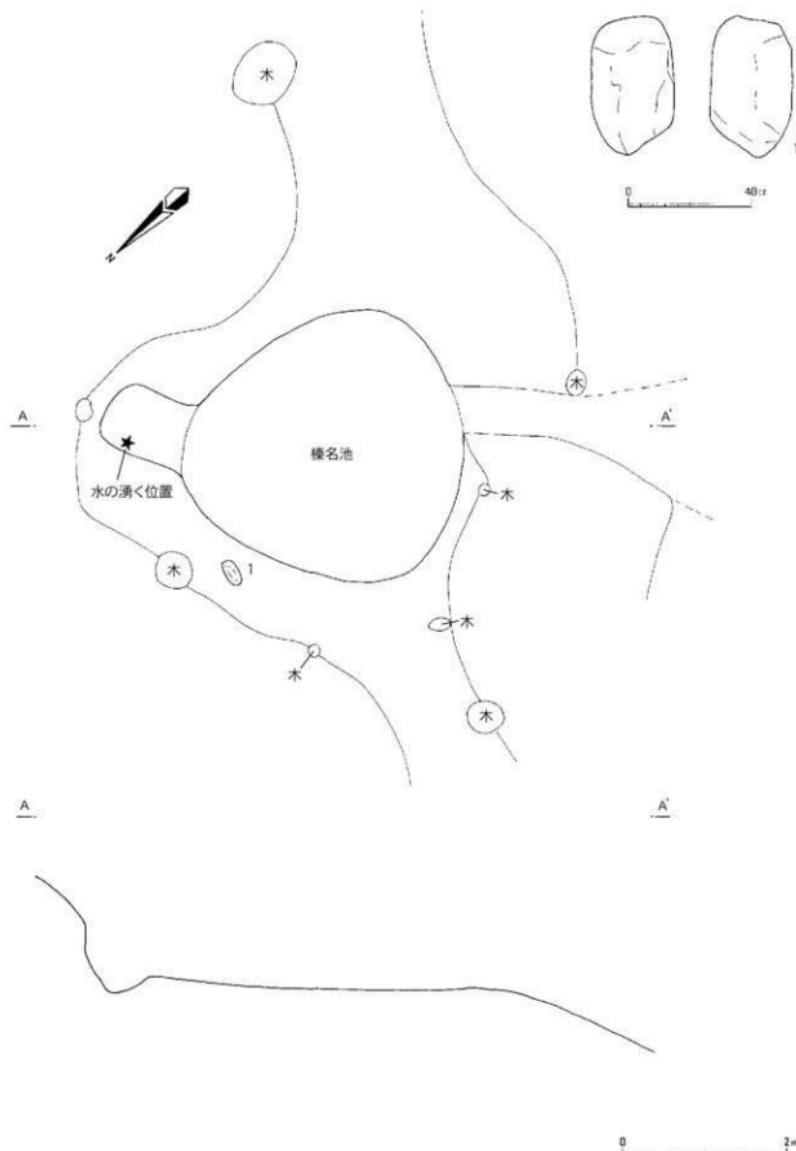
第96図 行者平遺跡(大善寺行者堂跡伝承地周辺) 表採遺物(2)



第97図 行者屋敷遺跡(蓮華寺奥の院伝承地) 全体図・出土遺物



第98図 行者屋敷遺跡(蓮華寺奥の院伝承地) セクション図



第99図 榛名池(足和田山中) 全体図・エレベーション図



第101図 山梨県の富士塚分布図

第2表 山梨県の富士塚一覧

No.	塚の名称	所在地	現状と特徴	街道筋
1	富士塚	上野原市日野	直径20m 円墳を利用して造られた 現在は耕作地になり大半が削平	甲州街道
2	浅間(アサマ)塚	甲州市塩山下萩原	直径15~20m 西から見た高さ3m 浅間大神と山神大神の碑	青梅街道
3	富士塚	甲州市塩山下小田原	北から南に突き出した尾根上に位置するが、ほとんど削平	青梅街道
4	浅間(センゲン)塚	甲州市塩山竹森	直径15~20m 西から見た高さ3m 高さ3m 富士浅間大神の祠 竹森川を東に望む	青梅街道
5	浅間塚	甲州市塩山三日市場	直径30m 高さ7~8m かつて方四間程の神楽殿があった 木花咲耶姫命、大山祇命、抱瘞神など五柱が祀られる 富士塚とも呼ばれていた	秋父往還
6	富士塚	山梨市小原東字立石	塚は消滅 直径10m 高さ1m 円形の基壇 享保十三年(1728)の富士仙現請願成就の碑が立つ	青梅街道
7	富士塚	山梨市万力字藤塚	直径23m高さ5m、頂部はやや壅んで石の祠があるが破損がひどい	青梅街道
8	ふじ塚	山梨市三ヶ所字野田	20年ほど前に削平 六筆に分譲 当時は直径20~30m高さ5m程 キツネ山とよばれる 現在は跡地に富士浅間大神の碑が残る	青梅街道
9	富士塚古墳	笛吹市春日居町鎌目字日向	笛吹川以南東に望む山麓斜面 標高340m付近 直径10mの円墳 墓惠器が散布 古墳から富士塚に転用されたもの 正面に大藏經寺山の裾が伸びているため、富士山は見えない	青梅街道
10	富士塚	笛吹市御坂町下黒駒	黒駒勝造の墓の近くにある 頂部は削平 現高2m程 直径20m 社や祠はなくこの地の名を「富士塚」という	鎌倉街道
11	迎富士浅間神社	笛吹市御坂町	直径30m高さ5m 表面に礎を石垣状に積み上げた三段築成の塚 頂上に社があり 木花開(咲)耶姫命、蛭々杵命、大山祇命を祀る かつて「富土塚」と言われる	鎌倉街道
12	富士塚(富士塚古墳)	笛吹市八代町竹井字富士塚	直径25m、北側より高さ5~6m、頂上には浅間大神の碑を中心に稻荷神社、天照皇大神などの碑がある	若彦路
13	富士(藤)塚	北杜市小瀬沢大笠原	消滅して現存しない 60年ほど前には直径10m高さ2~3mの富士塚が存在した。ここからは富士山がよく見える	逸見道
14	藤塚	北杜市長坂町中丸字藤塚	直径10m、やや盛り上がる 江戸時代には家の守り神として社があったが、何を祀っていたかは不明 明治時代に曾祖父によってたてられた「富士見回碑」が立てられている	逸見道
15	藤塚	北杜市長坂町夏秋	東に鳩川の作った低地に望む丘陵端にあり、直径10~15m高さ1.5mで碑や社は見当たらない。	逸見道
16	藤塚(富士塚)	北杜市長坂町宇藤塚	直径20m高さ1.5m 中央がやや壅む 社や碑は見られない	逸見道
17	藤塚	山中湖村山中935	山中小学校から西へ500mほど鷹丸尾溶岩流に挟まれた場所にある 富士山を遥拝する施設か、南北朝時代の長慶天皇の墓という説もある 直径14m高さ2.9m	鎌倉街道

第3表 陶磁器類遺物觀察表

第4表 金属製品観察表

図No.	遺物No.	出土位置	遺物注記No.	種別	器種等	法量(cm)			備考
						縦	横	厚さ	
11	3	3トレンチ	09オムロ3トレスK5	鉄	鉄釘	4.8	—	—	卷頭町
11	4	3トレンチ	09オムロ3トレスK3	鉄	鉄釘	11.05	—	—	卷頭町
12	2	4トレンチ	09オムロ4トレスK1	銅	金貝?	1.3	0.3	—	墳金あり
12	3	4トレンチ	09オムロ4トレスK2	鉄	鉄釘	16.8	—	—	卷頭町
13	3	5トレンチ	09オムロ5トレスK1	鉄	鉄釘	17.9	—	—	卷頭町
13	4	5トレンチ	09オムロ5トレスK2	鉄	鉄釘	7.4	—	—	角頭町
13	5.6	5トレンチ	09オムロ5トレスK1	銅	—	1.5	2	—	薄板状、破片
15	3	7トレンチ	09オムロ7トレスK1	鉄	鉄釘	15.1	—	—	卷頭町
16	7	8トレンチ	09オムロ8トレスK9	鉄	鉄釘	5.3	—	—	角頭町
16	8	8トレンチ	09オムロ8トレスK7	鉄	鉄釘	2.3	—	—	卷頭町、木片付き
16	9	8トレンチ	09オムロ8トレスK4	鉄	鉄釘	3.8	—	—	角頭町
16	10	8トレンチ	09オムロ8トレスK5	鉄	鉄釘	4.5	—	—	角頭町
16	11	8トレンチ	09オムロ8トレスK12	鉄	鉄釘	3.9	—	—	卷頭町
16	12	8トレンチ	09オムロ8トレスK6	鉄	鉄釘	5.01	—	—	角頭町
16	13	8トレンチ	09オムロ8トレスK2	鉄	鉄釘	4.6	—	—	角頭町
16	14	8トレンチ	09オムロ8トレスK3	鉄	鉄釘	5.4	—	—	角頭町
16	15	8トレンチ	09オムロ8トレスK1	鉄	鉄釘	14.9	—	—	角頭
18	26	9トレンチ	09オムロ9表採	鉄	火打金?	7.3	1.9	1.3	—
18	27	9トレンチ	09オムロ9表採	鉄	鉄釘	9.65	—	—	卷頭町
18	28	9トレンチ	09オムロ9表採	鉄	鉄釘	14.3	—	—	附折町
19	1	9トレンチ	09オムロ9トレスK4	鉄	鉄釘	5.8	—	—	角頭町
19	2	9トレンチ	09オムロ9トレスK3	鉄	鉄釘	6.2	—	—	角頭町
19	3	9トレンチ	09オムロ9トレス一括	鉄	鉄釘	9.7	—	—	卷頭町
19	4	9トレンチ	09オムロ9トレスK1	鉄	鉄釘	7.7	—	—	卷頭町
19	5	9トレンチ	09オムロ9トレスK2	鉄	?	1.5	2.5	—	薄板状、破片
20	2	9トレンチ	09オムロ9トレス表採	鉄	鉄釘	6.6	—	—	角頭町
25	2	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	3.95	—	—	角頭町
25	3	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	5.3	—	—	角頭町
25	4	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	6.3	—	—	角頭町
25	5	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	5.7	—	—	角頭町
25	6	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	6.2	—	—	角頭町
25	7	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	9	—	—	角頭町
25	8	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	10	—	—	角頭町
25	9	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	11	—	—	角頭町
25	10	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	12	—	—	角頭町
25	11	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	14	—	—	角頭
25	12	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	13.7	—	—	卷頭町
25	13	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	13.8	—	—	卷頭町
25	14	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	13.7	—	—	卷頭町
25	15	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	17.7	—	—	附折町
25	16	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	17.1	—	—	卷頭町
26	1	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	3.5	—	—	角頭町
26	2	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	5.9	—	—	角頭町
26	3	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	7.1	—	—	角頭町
26	4	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	6	—	—	角頭町
26	5	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	11.8	—	—	角頭町
26	6	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	12.2	—	—	角頭町
26	7	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	7.8	—	—	角頭町
26	8	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	6.9	—	—	角頭町
26	9	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	9.9	—	—	角頭町
26	10	2トレンチ	10オムロ2T一括	鉄	鉄釘	6.2	—	—	角頭町
27	24	—	11オムロ	鉄	鉄	15.5	1.4	0.9	角頭町
30	9	7トレンチ	10定7丁K1	銅	飾金貝	0.9	0.9	0.25	—
50	4	C区	09北1C1トレス1鉄	鉄	鈴	2.1	2.75	0.1	—
50	5	C区	09北1C1トレス鉄製品1	鉄	鈴?	0.8	1.9	—	—
64	3	3トレンチ	10大3T	鉄	鉄	15.4	—	—	平丁
67	9	1トレンチ	11北1C1T	鉄	鉄釘	1.7	0.3	—	小丸町
67	10	1トレンチ	11北1C1T鉄17	鉄	鉄釘	5	1	1	角頭町
67	11	1トレンチ	11北1C1T鉄11	鉄	鉄釘	9.1	0.9	0.6	角頭町
67	12	1トレンチ	11北1C1T鉄Z	銅	?	1.9	2	0.1	板状
67	13	1トレンチ	11北1C1T鉄4	鉄	?	1.7	3.6	0.1	板状
67	14	1トレンチ	11北1C1T鉄11	鉄	?	3.5	2	0.1	板状
67	15	4トレンチ	11北1C4T	銅	?	4.3	6.65	0.1	板状
74	1	C区	09オムロ	鉄	劍形鉄製品	14	2.45	0.4	—
79	1	B区	11河口I	鉄	刀子	0.8	6.5	0.3	—
83	7	—	11宮ノ上	鉄	刀子	1.1	4.8	0.25	—
91	10	A	11行者A K3	鉄	鉄釘	6.2	1	0.4	角頭町
91	11	A	11行者A K7	鉄	鉄釘	7.6	1.2	0.5	角頭町
91	12	A	11行者A K6	鉄	刺刀?	9	2.2	0.3	—
91	13	A	11行者A K4	鉄	火打金?	4.7	3	0.5	—
91	14	A	11行者A K2	銅	?	39.8	0.8	—	棒状
96	12	—	11行者平	鉄	?	5.1	1.8	0.4	—
96	14	—	11行者平	鉄	?	2.95	3	0.2	—
96	15	—	11行者平行者像釘の上	鉄	鳥居型	11.2	12.3	0.4	—

第5表 古銭觀察表

番号	遺物名	遺物名	出土位置	遺物注記No.	銘種	時代	初鉛(西歴)	年	字体	残存率	備考
9	2	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残1	永楽通寶	明	1408	真	100	70	樂・通・宝のみ残存
9	3	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残2	永楽通寶	明	1408	真	—	90	元・寶のみ残存
9	4	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残3	元○寶	—	—	—	—	30	破片、水・寶のみ残存
9	5	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残4	永楽通寶	明	1408	真	30	破片、水・寶のみ残存	
9	6	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残5	永楽通寶	明	1408	真	40	破片、樂・通のみ残存(4と1個体)	
9	7	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残6	○○○寶	—	—	—	—	98	判読不明
9	8	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残7	聖宋元寶	北宋	1101	行	100	70	樂・通・宝のみ残存
9	9	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残8	開元通寶	唐	621	真	30	破片	—
9	10	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残9	治平元寶?	北宋	1064	篆	60	—	—
9	11	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残10	元符通寶	北宋	1098	篆	100	—	—
9	12	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残11	○○○寶	—	—	—	—	25	破片
9	13	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残12	永樂通寶	明	1408	真	90	—	—
9	14	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残13	皇宋通寶?	北宋	1038	真	50	皇・寶のみ残存	—
9	15	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残14	治平元寶	北宋	1064	真	100	—	—
9	16	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残15	熙寧元寶	北宋	1068	真	100	—	—
9	17	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残16	元祐通寶	北宋	1086	行	100	—	—
9	18	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残17	咸平元寶	中世	1350～1370	真	100	—	—
9	19	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残18	元符通寶	北宋	1098	行	100	—	—
9	20	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残19	光緒通寶	後魏	1460	真	100	—	—
9	21	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残20	永樂通寶	明	1408	真	100	—	—
9	22	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残21	永樂通寶	明	1408	真	100	—	—
9	23	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残22	聖宋通寶	北宋	1038	真	98	—	—
9	24	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残23	熙寧元寶	北宋	1068	真	70	—	—
9	25	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残24	熙寧元寶	北宋	1068	真	100	—	—
9	26	御室本宮	1トレンチ	1トレンチ残25	○○○寶	—	—	—	—	40	—
9	27	御室本宮	2トレンチ	2トレンチ残1	祥符通寶	北宋	1008	真	100	—	—
9	28	御室本宮	2トレンチ	2トレンチ残2	○○通寶	—	—	—	—	95	—
9	29	御室本宮	2トレンチ	2トレンチ残3	元豐通寶	北宋	1078	篆	100	—	—
9	30	御室本宮	2トレンチ	2トレンチ残4	熙寧元寶	北宋	1068	真	100	—	—
9	31	御室本宮	2トレンチ	2トレンチ残5	元豐通寶	北宋	1078	行	100	—	—
11	5	御室本宮	3トレンチ	3トレンチ残9	皇宋通寶	北宋	1038	真	95	—	—
11	6	御室本宮	3トレンチ	3トレンチ残10	熙寧元寶	北宋	1068	真	70	—	—
12	4	御室本宮	4トレンチ	4トレンチ残2	天聖元寶	北宋	1023	篆	40	聖・元のみ残存	—
12	5	御室本宮	4トレンチ	4トレンチ残3	皇宋通寶	北宋	1038	真	40	宋・通のみ残存	—
12	6	御室本宮	4トレンチ	4トレンチ残4	開元通寶	唐	621	真	100	—	—
12	7	御室本宮	4トレンチ	4トレンチ残5	洪武通寶	明	1368	真	100	—	—
12	8	御室本宮	4トレンチ	4トレンチ残6	咸平元寶	北宋	998	真	100	—	—
12	9	御室本宮	4トレンチ	4トレンチ残7	咸平元寶	北宋	998	真	100	3枚重着して出土	—
12	10	御室本宮	4トレンチ	4トレンチ残8	嘉祐通寶	南宋	1228	真	95	—	—
14	1	御室本宮	6トレンチ	6トレンチ残2	祐祐元寶	北宋	1056	真	98	—	—
14	2	御室本宮	6トレンチ	6トレンチ残3	洪武通寶	明	1368	真	90	—	—
15	4	御室本宮	7トレンチ	7トレンチ残1	文久永寶	幕末	1863	真	100	11渡	—
17	16	御室本宮	8トレンチ	8トレンチ残2	寶永通寶	江戸	1636～1659	真	100	—	—
17	17	御室本宮	8トレンチ	8トレンチ残3	寶永通寶	江戸	1636～1659	真	100	—	—
17	18	御室本宮	8トレンチ	8トレンチ残4	淳化元寶	北宋	990	真	100	—	—
17	19	御室本宮	8トレンチ	8トレンチ残5	太平通寶	南北朝後期	1350～1370	真	45	太・寶のみ残存	—
17	20	御室本宮	8トレンチ	8トレンチ残6	皇宋通寶	北宋	1038	真	45	宋・通のみ残存	—
18	29	御室本宮	一括	神社前	祥符通寶	北宋	1008	真	100	—	—
18	30	御室本宮	一括	表様	元符通寶	北宋	1078	篆	60	—	—
18	31	御室本宮	一括	2トレンチ上部の山	洪武通寶	明	1368	真	100	—	—
18	32	御室本宮	一括	神社前	寶永通寶	江戸	1636～1659	真	95	—	—
19	6	御室本宮	9トレンチ	9トレンチ残1	寶永通寶	江戸	1636～1659	真	100	—	—
24	6	御室本宮	オムロ	オムロ4トレンチ4	寶永通寶	江戸	1636～1659	真	90	—	—
24	7	御室本宮	オムロ	オムロ4トレンチ2	寶永通寶	江戸	1636～1659	真	100	—	—
27	16	御室本宮	オムロ	オムロ4トレンチ1	寶永通寶	江戸	1636～1659	真	100	—	—
27	17	御室本宮	オムロ	オムロ4トレンチ1	寶永通寶	江戸	1636～1659	真	100	—	—
27	18	御室本宮	オムロ	石碑群4	寶永通寶	江戸	1636～1659	真	99	—	—
27	19	御室本宮	オムロ	石碑群1	寶永通寶	江戸	1636～1659	真	100	—	—
27	20	御室本宮	オムロ	オムロの表様	附一銭	大正	1919	真	100	青銅貨	—
29	8	御室本宮	トリイ	トリイ1枚残2	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	—	—
29	9	御室本宮	トリイ	トリイ1枚残3	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	波11	—
29	10	御室本宮	トリイ	トリイ1枚残1	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	人文	—
29	11	御室本宮	トリイ	トリイ1枚残1	—	—	—	—	—	45	—
30	8	御室本宮	定尙院	定尙院1部表様	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	—	—
33	3	御室本宮	定尙院	定尙院7枚1枚	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	人文	—
33	4	御室本宮	定尙院	定尙院7枚2枚	寛永通寶	江戸	1636～1659	真	100	—	—
33	5	御室本宮	定尙院	定尙院7枚6枚	—	—	—	—	—	30	寶のみ残存
33	6	御室本宮	定尙院	定尙院7枚5枚	—	—	—	—	—	20	寶のみ残存
33	7	御室本宮	定尙院	定尙院7枚4枚	—	—	—	—	—	20	元のみ残存
39	1	五合地點	3テラス	3テラス残1	—	—	—	—	—	60	判読不明、鉄錢
39	2	五合地點	3テラス	3テラス残2	永楽通寶	明	1408	真	100	—	—
39	3	五合地點	3テラス	3テラス残3	祥符通寶	北宋	1008	真	100	—	—
39	4	五合地點	3テラス	3テラス1	—	—	—	—	—	35	鉄錢
39	5	五合地點	3テラス	3テラス残4	永楽通寶	明	1408	真	100	—	—
39	6	五合地點	3テラス	3テラス残5	洪武通寶	明	1368	真	98	—	—

地名	遺物名	遺物名	出土位置	遺物注記	鉄種	時代	初鉄(西歴)	年	字体	残存率	備考
39	7	五合門地点	3 テラス	3テラス銛6	—	—	—	—	—	48	鉄銛
39	8	五合門地点	3 テラス	3テラス銛7	元永通寶	南唐	960	兼	100		
39	9	五合門地点	3 テラス	—	元永通寶	明	1368	真	100		
39	10	五合門地点	3 テラス	3テラス銛9	洪武通寶	明	1408	真	100		
39	11	五合門地点	3 テラス	3テラス銛10	永樂通寶	北宋	1078	行	95		
39	12	五合門地点	3 テラス	3テラス銛11	聖和通寶	北宋	1111	真	100		
40	13	五合門地点	10 テラス	10テラス銛1	賀永通寶	江戸	1636～1659	真	100		
40	14	五合門地点	10 テラス	10テラス銛2	嘉祐通寶	北宋	1056	真	100		
40	15	五合門地点	10 テラス	10テラス銛3	—	—	—	—	—	45	寶のみ残存
40	19	五合門地点	表様	—	船形元寶	北宋	1094	行	98		
40	20	五合門地点	3 テラス	—	元祐通寶	北宋	1086	真	100	2テラスと3テラスをつなぐ旧道	
44	8	北口	B 地区	B 2 トレンチ銛1	祥符元寶	北宋	1008	真	100		
50	6	御室里宮	C 地区	C 1 トレンチ銛2	賀永通寶	江戸	1636～1659	真	100		
50	7	御室里宮	C 地区	C 1 トレンチ銛3	賀永通寶	江戸	1636～1659	真	100	鉄銛	
50	8	御室里宮	C 地区	C 1 トレンチ銛7	洪武通寶	明	1368	真	100	背北平	
50	9	御室里宮	C 地区	C 1 トレンチ銛9	賀永通寶	江戸	1636～1659	真	100		
50	10	御室里宮	C 地区	C 1 トレンチ銛11	賀永通寶	江戸	1636～1659	真	100		
50	11	御室里宮	C 地区	C 1 トレンチ銛12	賀永通寶	北宋	1078	行	90		
50	12	御室里宮	C 地区	C 1 トレンチ銛13	賀永通寶	江戸	1636～1659	真	100	裏:波	
52	3	御室里宮	C 地区	C 2 トレンチ銛1	聖和元寶	北宋	1054	兼	95		
52	4	御室里宮	C 地区	C 2 トレンチ銛2	賀永通寶	北宋	1038	真	100		
52	5	御室里宮	C 地区	C 2 トレンチ銛6	賀永通寶	江戸	1636～1659	真	100		
52	6	御室里宮	C 地区	C 2 トレンチ銛7	賀永通寶	江戸	1636～1659	真	100		
52	7	御室里宮	C 地区	C 2 トレンチ銛8	賀永通寶	北宋	1038	真	90		
52	8	御室里宮	C 地区	C 2 トレンチ銛9	開元通寶	唐	621	真	100		
52	9	御室里宮	C 地区	C 2 トレンチ銛10	賀永通寶	北宋	1038	真	95		
52	10	御室里宮	C 地区	C 7 トレンチ銛1	永樂通寶	明	1408	真	100		
52	11	御室里宮	C 地区	C 7 トレンチ銛2	文久永寶	江戸	1863	真	100	波 11	
54	1	御室里宮	C 地区	C 3 トレンチ銛2	崇禎元宝	北宋	1004	真	100		
54	2	御室里宮	C 地区	C 3 トレンチ銛1	賀永通寶	江戸	1636～1659	真	100		
54	5	御室里宮	C 地区	C 5 トレンチ銛2	賀永通寶	江戸	1636～1659	真	100		
56	3	御室里宮	C 地区	C 4 トレンチ銛2	永樂通宝	明	1408	真	100		
56	4	御室里宮	C 地区	C 4 トレンチ銛5	永樂通寶	明	1408	真	100		
56	5	御室里宮	C 地区	C 4 トレンチ銛9	賀永通寶	江戸	1636～1659	真	100		
56	6	御室里宮	C 地区	C 4 トレンチ銛10	賀永通寶	江戸	1636～1659	真	95		
64	2	大塚	3 トレンチ	大3 トレンチ銛1	天聖元寶	北宋	1023	兼	100		
67	16	北口	1 トレンチ	—	—	—	—	—	—	50	
88	3	鶴原A	—	—	永樂通寶	明	1408	真	100		
91	17	行者平	A区	表様	賀永通寶	江戸	1636～1659	真	100		
91	18	行者平	A区	—	賀永通寶	江戸	1636～1659	真	100		
94	18	行者平	C区	銛3	太平通寶	南北朝後期	1350～1370	真	98		
94	19	行者平	C区	銛5	宣和通寶	北宋	1119	真	98		

第6表 石製品観察表

図No.	遺物No.	出土位置	種別	法量(cm)			遺物注記No.	備考
				縦	横	厚さ		
40	16	五合口3テラス		3.5	2.5	1.3	10五3テラス1	
40	18	五合目	火打石	2.1	1.3	0.75	10五	
44	9	2トレンチ		8.8	4.3	2.5	09北1B 2トレ1126	
64	4	大塚丘		3.6	4	1.45	一括	灰に白擦
64	5	大塚丘		6.8	6	2.6	一括	明褐色、緑色の付着物
64	6	大塚丘		8	4.5	4.1	一括	灰赤に白擦
64	7	大塚丘		6.2	5.5	4.5	一括	黄に白擦。緑色の付着物
64	8	大塚丘		12.3	11.3	6.2	一括	6力所穴あり
64	9	大塚丘		5.3	4.6	2.85	一括	紫白
74	2	片山社	丸平石	4.2	3.6	1.25	10片7	墨書
74	3	片山社	丸平石	4.1	3.1	0.95	10片6	朱書、鉢分付着
74	4	片山社	水晶結晶	5.2	3.3	2.3	10片29	
74	5	片山社	丸平石	2.9	2.5	1.05	10片11	
74	6	片山社	丸平石	1.95	1.6	0.55	10片13	
74	7	片山社	丸平石	3.5	3.1	0.8	10片14	
74	8	片山社	丸平石	3.6	2.7	0.75	10片15	
74	9	片山社	長丸石	3.1	1.6	1.1	10片16	
74	10	片山社	丸平石	4.3	2.6	1	10片17	
74	11	片山社	丸平石	2.5	2.3	0.7	10片18	鉢分付着
74	12	片山社	丸平石	2.5	2.8	1.1	10片19	
74	13	片山社	丸平石	4.85	2.5	1	10片20	
74	14	片山社	丸平石	4	3.4	1.25	10片21	
74	15	片山社		3.7	3.5	1.8	10片22	
74	16	片山社	丸平石	2.6	1.9	0.7	10片23	
75	17	片山社		4	7	2.7	10片1	鉢?
75	18	片山社		7.3	4.7	4.9	10片2	溶岩
75	19	片山社		10.3	11.5	1.7	10片3	
75	20	片山社		6.9	8.7	4	10片4	
75	21	片山社		7.9	5	4.7	10片5	
75	23	片山社		4.7	3.4	4.1	10片8	鉢分付着
75	22	片山社		5.3	6.7	2	10片9	
75	24	片山社		4	5.2	2.9	10片12	
82	7	A1トレンチ	尋石	2.15	2.1	0.45	11河口JA1T一括	黒
91	15	A	鐵石	8.2	3.5	1.6	11行者平A	
91	19	A		1	1.3	0.45	11行者平A	石英 剥片

第7表 その他観察表

図No.	遺物No.	出土位置	器種等	法量(cm)			遺物注記No.	備考
				縦	横	厚さ		
96	13	一括	赤貝?	4.8	5.5	1.9	11行者平	

木製品

図No.	遺物No.	出土位置	器種等	法量(cm)			遺物注記No.	備考
				縦	横	厚さ		
96	13	一括	赤貝?	4.8	5.5	1.9	11行者平	

ガラス

図No.	遺物No.	出土位置	種別	法量(cm)			遺物注記No.	備考
				縦	横	厚さ		
96	13	一括	赤貝?	4.8	5.5	1.9	11行者平	
57	1	C地区	ガラス	1.55	1.4	3.5	09北1C 10トレー括	Cの文字、おはじき

第8表 河口浅間神社に伝わる文化財 遺物観察表

品名No.	遺物名、 種類	幅(㎝)	器種等	法面(㎝)		法面(㎝) 壁面(㎝) (推定値)		表面加工 方法	断土	細目・範 囲	備考
				口径・底	高さ	底面・横 径	底面・高さ				
84	1 銀製	-	鏡子(こまく)	-	(19.0)	9.2	-	磨削・抛光	-	1号ノ一	
84	2 銀製	-	鏡子(こまく)	-	(19.0)	8	-	磨削	-	1号ノ二	火を受けた痕跡
84	3 銀製	-	鏡子(こまく)	-	14.6	6	-	磨削	-		
84	4 銀製器	4.7	酒	-	-	白粉飾	-	磨削	-		
84	5 銀製器	(9.2)	蓋	1.4	-	白粉飾	-	磨削	-		未調査中ノ二号
84	6 石	1	管玉	3	1	-	-	磨削	-		未調査中ノ三号
84	7 石	10.6	滑石	5.3	2.6	-	-	磨削	-		未調査中ノ四号
84	8 石	8.5	滑石	4.3	2.4	-	-	磨削	-		未調査中ノ五号
85	11 石	2.1	1.7	1.3	-	-	-	磨削	-		
85	12 石	3	2.1	1.6	-	-	-	磨削	-		
85	13 石	2.7	2.3	1.5	-	-	-	磨削	-		
85	14 石	4.4	3.1	2.8	-	-	-	磨削	-		

第9表 残焼跡 出土遺物観察表

品名No.	遺物名、 種類	幅(㎝)	器種等	法面(㎝)		法面(㎝) 壁面(㎝) (推定値)		表面加工 方法	断土	細目・範 囲	備考
				口径・底	高さ	底面・横 径	底面・高さ				
85	10 土器	11.8	杯	4.8	-	-	-	磨削	-	砂や粗・小石まじり、素白色	1号外にミガキ、研削跡有

第4章 富士山吉田口登山道の測量成果

第1節 吉田口登山道の歴史的環境

富士山の登山道としては、富士山本宮富士浅間大社に残る13世紀頃の文書に東口珠山（須山）、南口大宮（富士宮）、北口吉田（富士吉田）の3ルートが挙げられている。その他にも村山口、船津口、精進口などのルートがあったと言われるが、すでに廃絶しているものもある。

このように吉田口登山道は、古くから開かれていた登山道であるが、今回の調査および山梨県内中世寺院分布調査により、二合目で発見された12世紀末～13世紀初頭の山茶碗片の存在や、富士御室浅間神社二合目日本宮境内のトレンチ内から見つかった炭化材の年代（西暦約1100～1200年）等から考えると、吉田口登山道の歴史は現段階では、少なくとも平安時代末～鎌倉時代初頭に遡ることは確実といってよい。この吉田口登山道は、食行身縁により登拝の本道とされたために富士講が隆盛を極めた江戸時代に多くの参詣道者で賑わった。特に関東方面からのアクセスがよかつたため、この方面からの道者が多く集まつた。

その後、馬返から五合目は、明治40年の改良工事により付け替えられ、現在では吉田口登山道は県道富士吉田線として管理されている。昭和39年にスバルラインが開通すると、五合目まで車で行けるようになったため、五合目以下の登山道は急速に廃れた。

第2節 吉田口登山道測量成果（第102図）

吉田口登山道のうち、中ノ茶屋から六合目までの現登山道および旧道、さらに道中に所在する信仰拠点についての測量を、昭和測量株式会社に委託して実施した。

第5章 成果と課題

今回は、富士山とその信仰について、主として遺跡から読み解くという目的で調査を実施してきた。富士山を信仰対象とすれば、その範囲は、富士山が見える場所全てに拡大されるはずであり、山梨県内には到底収まりきらない。そのため調査箇所は、富士山の近接地ということで富士山中とその周辺地域に限定した。また各地点における調査目的は、その場所がもつ性格と、どの時期に機能していたのか、ということを主眼としたが、富士山に対する信仰全体として見た場合、一体信仰活動はどこまで遡れるのか、という事が調査にあたってのひとつの大きなテーマであった。従来言われているのは、平安時代には火山活動が活発であったため、富士山には近づけず、遙拝という形で遠くから富士山を仰ぎ見る信仰形態だったものが、噴火が収まってきた中世以降、まず宗教者が山中での活動を活発化させ、その後、一般民衆による登拝形態も盛んになっていく流れであるが、この辺りを念頭に置きながら、調査を振り返ってみたい。

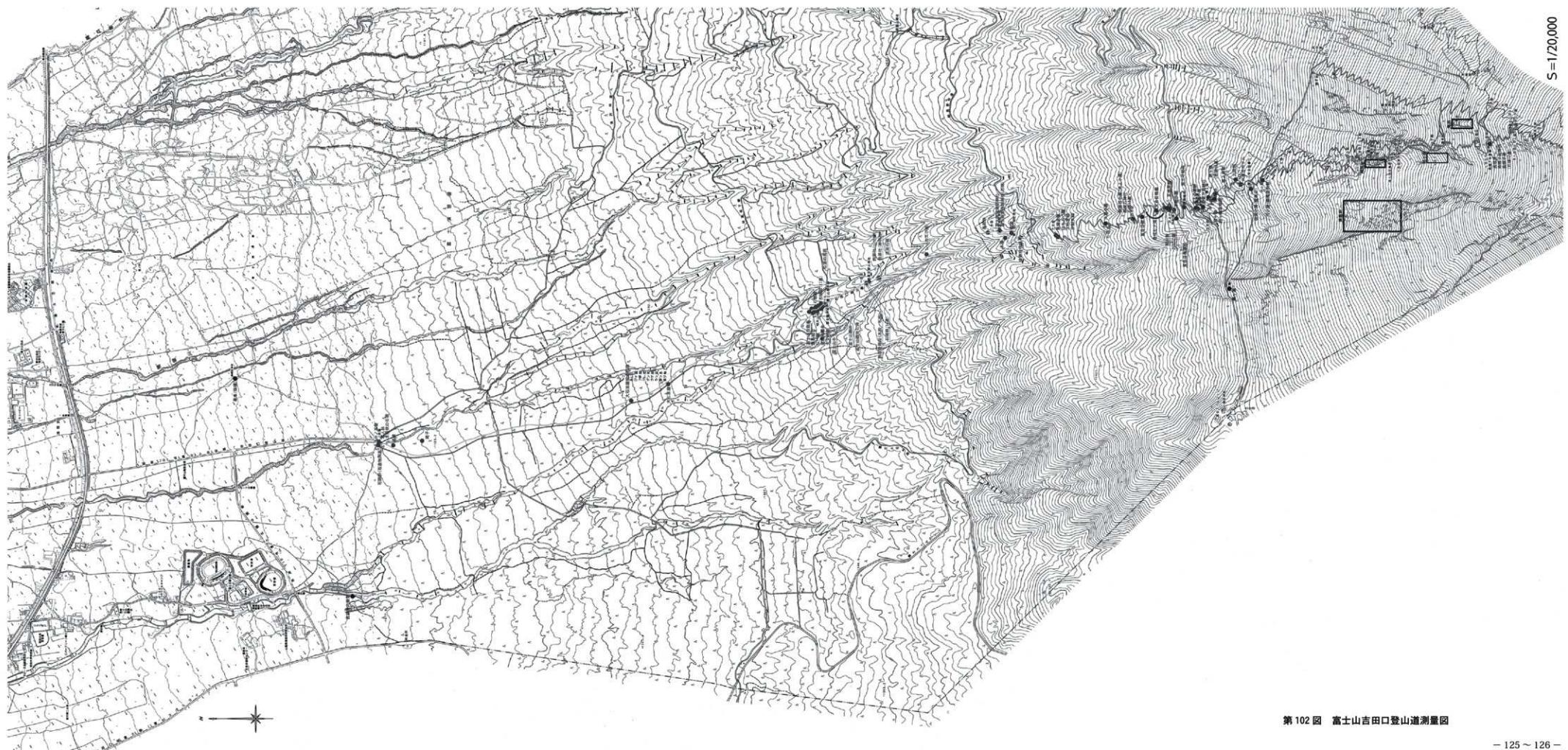
第1節 富士山中の信仰活動

富士山中については、『八葉九尊図』（第1図）という江戸時代初期の版本に記された山梨県側の富士山の信仰世界を念頭に置きながら調査を実施した。調査地点としては、富士山吉田口登山道関連遺跡鈴原A地点、二合目の富士御室浅間神社二合目日本宮境内地遺跡と富士吉田口登山道関連遺跡五合目地点がある。ここでは富士山中の重要な信仰拠点である二合目と五合目の調査についてまとめたい。

第1項 富士山二合目

二合目は、富士御室浅間神社本宮をはじめとして、甲府市円楽寺の行者堂、富士吉田市に所在する時衆西念寺の塔頭定善（禪）院などの信仰拠点が集中するという山中でも特異な空間である。二合目に様々な信仰施設が集

S=1/20,000



第102図 富士山吉田口登山道測量図

またた理由として考えられるのは、まずひとつには山中としては下界からアクセスし易い場所である点、近くに水場があったという点、二合目一帯は、地質学的に見ると、古富士火山の堆積物が地表に出ているという山中でも数少ない場所であり、地盤の良さという面からも他場所に比べて優れている点、さらに調査時に感じたことであるが、非常に風が強い日でも、山の向き加減からか、周りと比べて風当たりが弱い場所である点などが挙げられる。先人もこのような地の利をよく心得た上で、信仰拠点の選地をしているのは明らかである。このように重要な信仰拠点である二合目における今回の調査で明らかになった事柄から伺える富士山信仰の一端について考えてみたい。まず今回の調査により、現在の富士御室浅間神社境内の裏側にも、かつては宗教活動の場が広がっていたことが明らかとなった。その時期については、出土銭貨から中世段階であることが想定される。また現在、拝殿が建てられているテラスについては、土層の観察により、土盛り造成されていることがわかった。現在二合目に残る拝殿および里宮に移された本殿は、江戸時代初期の慶長年間に建てられたものとされている。この時期に造成が成されて、広いスペースが確保された可能性もある。以上のことから、慶長年間の前と後とでは、景観が大きく異なっていた可能性もある。

また、富士御室浅間神社の下の比較的広いテラスには定善（禪）院跡があったものと想定されてきたが、今回の調査によって、このテラスでは建物の痕跡や定善（禪）院が機能していた時期の遺物が全く確認できなかったことから、実際は他の場所にあった可能性もでてきた。『甲斐国志』では一合五勺に定善（禪）院があったと記されるが、今回の調査地は、富士御室浅間神社二合目本宮のすぐ下であり、距離的に本宮と接近しすぎている感があることから、二合目一の鳥居よりも下である可能性もある。一方で、絵図等により、このテラスを回り込み、富士御室浅間神社拝殿前に登り上げる形での旧道ルートが想定されていたが、今回このルート上の調査を行うことにより、寛政8年（1796）の銘が入った富士講の碑が確認され、ここがかつての旧道であったことが確実となった。また周辺の旧道の調査と併せてこの一帯の旧道ルートが明らかとなっている。

二合目が信仰拠点としてどのくらいまで遡るか、という問題に関しては、富士御室浅間神社拝殿すぐ下の旧道沿いで、12世紀後半に位置づけられる山茶碗の破片が表採されている。以前に実施された行者堂跡推定地の調査時にも13世紀初頭の山茶碗片が出土していること合わせて考えると、現在のところ、吉田口登山道が使われた時期として最も古い確実な年代として、この時期を提示することができると考える。この時期は、かつて神社に納められていたとされる2体の神像（現在は所在不明）に記された銘一文治5年（1189）・建久3年（1192）一とほぼ同時期にあたることも興味深い。また、現境内地のテラスの試掘確認調査で出土した炭化材の年代は西暦約1100～1200年を示しており、この年代観とも共通する。この時期には大規模な喰火の記録等はないことから、これらの木は人為的な要因で炭化した可能性が高い。これまでに富士山中で見つかっている信仰関係の遺物で最も古いものは、三島ヶ嶽経塚の遺物で、その規模等から久安5年（1149）の末代による埋経もしくは末代以降の埋経と考えられている。富士山中での本格的な祭祀行為がこの頃から始まったとすると、かつて二合目に納められていた神像や、二合目で発見されている山茶碗片は、山頂の埋経を皮切りに山中に信仰目的の人々が足を踏み入れていったことを物語っているようにも感じられる。

第2項 富士山五合目

富士山を植生で分けた区分に草山・木山・焼山という呼び名があるが、この植生による区分は宗教的なポイントをも示している。その境界にあたるのが一合目と五合目であるが、それぞれには富士山の神「浅間明神」の本地仏である「大日如来」が祀られていた。実際、一合目鈴原社には室町時代末頃の制作と考えられる「大日如来坐像」が伝えられている。一方の五合目には、現在「富士守稲荷」が残るのみであるが、かつては大日社・浅間社・稲荷社の3社が祀られており、このうち大日社には「大日如来」が祀られていた。またこの辺りには富士山中の役銭場のひとつである「中宮役場」が置かれており、山中での重要な信仰拠点であったことが理解できる。この五合目周辺の小屋については、永祿9年（1566）の武田信玄が記したとされる文書の中に「中宮之室」とあり、戦国時代にはすでにあったものと考えられている。ここでは、鎌倉改めのための小屋が設けられており、吉田・

河口の御師がここへ詰めて撰銭を行ったのが始まりとされる。

五合目周辺の調査としては、富士吉田市史編纂事業に伴ない実施された分布調査がある。かつて五合目における中心的な信仰拠点のひとつであった中宮役場跡は、滝沢林道により破壊されているものと推定されているが、この推定地付近から多量の銅銭が発見されている。今回の調査では、この場所の上方で旧道筋が確認されており、この旧道に面する位置から石碑が倒れた状態で埋もれているのが確認された。旧道の存在が明らかとなったことにより、かつては、中宮役場から直登するルートがあったものと想定される。今回の調査では『八葉九尊図』に記される「こやかす十八間」と推定される箇所の試掘確認調査を実施し、礎石や銭貨などを発見し、ここが何らかの場として機能していたことを確認することができた。また今回の調査では、富士山ハザードマップ作成にあたってつくられた富士山周辺の赤色立体図により地形の観察をしたが、このようなヒナ段状の地形を表わす場所は、山梨県側・静岡県側含めて、この地点の他には吉田口登山道一合目の禊跡から鈴原社に至る旧道沿いにしか認められない。これらの成果を古記録等と付き合わせて考えると、この場所が中宮十八軒にあたるものと考えてもよいのではないだろうか。

また旧道に着目すると、小テラスの周りには、これらを繋ぐように旧道が巡っており、これを辿っていくと、中宮役場や今回の調査で発見された石碑が面する旧道に繋がっていたものと考えられる。

第2節 富士山麓の信仰活動

山麓の調査では、主として富士山信仰と関連の深い社寺有地の調査を実施した。調査地点としては北口本宮富士浅間神社・同社有地である大塚丘近接地及び御鞍石周辺（いずれも富士吉田市）、富士御室浅間神社里宮（富士河口湖町）、河口浅間神社（富士河口湖町）、御墓（富士河口湖町）、宮ノ上遺跡（富士河口湖町）、行者屋敷遺跡（蓮華寺奥の院伝承地）（鳴沢村）、行者平遺跡（大善寺行者堂跡伝承地）（笛吹市）、藤塚（山中湖村）である。ここでは、浅間神社について考えてみたい。

浅間神社は、富士山の荒ぶる神を鎮める目的で建立された神社であるため、その立地については、富士山信仰上重要な位置を占めている。まず、吉田口登山道の起点となる北口本宮富士浅間神社、貞觀の大噴火の際、甲斐国最初に浅間明神を祀ったと伝わる河口浅間神社は、河口湖の湖面のその先に噴火した側火山を望む場所に立地し、荒ぶる神（噴火活動）を鎮める儀式を行う場所としては好条件である上、「河口駅」があったと推定される河口の地という政治的・文化的な中心地という立地条件は、重要な神社の鎮座地としてはふさわしい。次に、富士御室浅間神社の本宮は富士山二合目に鎮座し、山中で最も古い神社であると伝えられる。その里宮は河口湖南岸に位置し、『甲斐國志草稿』によれば、「…此古ハ舟津木立勝山大嵐成沢長浜大石七郷ノ産神ナリ」とあり、河口湖を取り巻く地域で広く信仰されていた時期もあったという。

このようにそれぞれの神社の立地とその生い立ちを概観してみると、ある共通点を見いだせる。例えば、北口本宮富士浅間神社は、もともと一帯の産土神である諏訪神社の神域内に鎮座しているし、富士御室浅間神社も、もともとは付近一帯の産土神であった。また神社内には現在でも「片山社」と呼ばれるこの地の産土神が鎮座している。「片山（カタヤマ）」とは、神社が所在する地名である‘勝山（カツヤマ）’のものとの呼び名であったという。河口浅間神社については、慶長段階の火災により神社の由緒等が残っていないため、その歴史はよくわかっていない。

次に静岡県に目を移してみると、まず全国の浅間神社の總本宮である富士山本宮浅間大社（富士宮市）がある。こちらも現在の鎮座地には、もともとは一帯の産土神である富知（フチ・フチまたはフクチ）神社という富士山 자체を神とする神社が鎮座していたが、その後浅間大社に場所を譲る形で、少し離れた場所に遷っている。このように浅間神社を造営するにあたっては、在地の主要神社がある場所を選んで鎮座地を決定している傾向が見いだせる。その後の神社は、荒ぶる神（富士山の噴火活動）を鎮める国家祭祀の場としての役割と、地域の産土神としての役割という2層構造をもっていたと想定できるのではないだろうか。

今回の調査では、山梨県側の浅間神社の存在がいつまで遡れるかという点を目的のひとつとしてきた。北口本

富士浅間神社社有地については、境内地、大塚丘、御鞍石という3地点についての調査を行ったが、境内地は大規模に造成されている痕跡が確認され、近世以前の遺物等は確認されなかつた。大塚丘については、近隣にはない黒色粘質土で築造されていることが確認され、從来言われていたような流れ山を利用した構造ではなく、人工的に造られたものであることが明らかとなつた。御鞍石はもとの諏訪神社の鎮座地であるという説もあったが、周辺に建物等の痕跡は確認されず、諏訪神社は現境内地にもともと鎮座していた可能性が高い。河口浅間神社では、神社創建期と考えられる平安時代の坏片が出土しており、神社に近接する宮ノ上遺跡からも同じく出土している。また宮ノ上遺跡では、金精鍊の痕跡を示す中世段階の陶器片が出土している。該期にこの辺りで金の精鍊が行われていた可能性があり、遺跡の特殊性を示している。富士御室浅間神社二合目本宮社有地については、先の第1節第1項で述べた通りである。

また考古学的調査ではないが、河口浅間神社に伝わる「陶製こま犬」に関する調査の機会を得た。「陶製こま犬」は寺社に奉納された小形のこま犬で、もとは御簾の両側をおさえる為の鏡子としての性格を持っていた。中世段階には、生産地である瀬戸美濃地域に分布するほか、少数ではあるが関東・関西地方にも点在する。江戸時代に至ると、分布域は瀬戸美濃地域を主体とするものとなり、その数は急増し形態にも様々なバリエーションが広がる。奉納者の名前が入れられるものが多くなり、村や氏子、個人で様々な願いを込めて奉納する絵馬に近い性格であったと言われる。河口浅間神社伝来のものは室町時代の所産と考えられるが、この段階のものは関東地方では限られた寺社に伝来するのみである。伊勝八幡宮（愛知県）に伝来するものには「熊野 順主淨通」の銘が入れられているが、この淨通は熊野山天台宗系の行者と考えられており、一説には、これら小形のこま犬は、厨子に入れられ山岳宗教の修験者により各地に運ばれたものとも考えられている。そもそも山梨県側の修験は、熱海の走湯修験やそこから分岐して発展した村山修験と深い関係を持っていたことは、富士御室浅間神社二合目本宮に伝わっていた神像銘にある「奉立勧進走湯山住金剛仏子覺寔」等にもあらわれており、富士山を取り巻く修験は伊豆半島やその近海の島々に加え関東地方も含めた広範囲なネットワークによるものだったとの考え方もある。そのような点では、河口浅間神社のものが八丈島の優婆夷神社のものと類似していることは興味深いと言える。今後このような視点から「陶製こま犬」の分布や、また河口浅間神社に伝来した経緯等を考えていく必要性があるものと考えている。

第3節 山岳信仰遺跡調査の今後に向けて

第6章では、雄駿ではあるが今回の調査成果について概観してみた。今回の調査は山梨県側における富士山信仰遺跡に関する調査の第一歩であり、富士山信仰を理解するためにはさらに多くの調査や、調査に基づく課題の整理、再検証等が必要になると考える。また、山梨県は富士山をはじめとした多くの山々に囲まれた地域であり山岳信仰を考える上では、この上ないフィールドである。このような中で、富士山信仰についてより深く理解するためには、他の山々の信仰のあり方を含めた山岳信仰全体の枠組みの中で捉える事が重要であり、他の山々についての調査の積み重ねも必要である。また、これらの遺跡は山中などの人目に触れない場所に眠っていることが多く、突発的な開発により破壊される危険性を孕んでいる。これらの遺跡を守り、山梨県という地域がもつ独自の文化・歴史のひとつとして後世に伝えていくためには、引き続き地道な調査を積み重ねていく必要性があると強く感じる。

〈参考文献〉

- 山梨県立図書館 1969『甲斐国社記・寺記』第二～四巻
佐藤八郎編 1971『甲斐国志』大日本地誌体系第三・四巻 雄山閣
山中湖村史編纂委員会 1978『山中湖村史 第三巻』
伴泰 1983『浅間神社正史』
鳴沢村誌編纂委員会 1988『鳴沢村誌 第二巻』

- 勝山村史編纂委員会 1992『勝山記』勝山村史別冊
- 富士吉田市史編纂室 1991『上吉田の石造物』
- 富士吉田市史編纂委員会 1992『富士吉田市史』史料編 第2巻
- 堀内真 1993『富士参詣の道者道と富士道』『甲斐路76号』山梨郷土研究会
- 富士市立博物館 1995『富士塚調査報告書～富士山信仰と富士塚～』
- 富士吉田市史編纂委員会 1996『富士吉田市史』民俗編 第2巻
- 富士吉田市史編纂委員会 1997『富士吉田市史』史料編 第5巻
- 富士吉田市歴史民俗博物館 1997『富士山明細図』企画展図録
- 富士吉田市史編纂委員会 1998『富士吉田市史』史料編 第1巻
- 鈴木昭英編 2000『富士・御嶽と中部靈山』山岳宗教史研究叢書9 名著出版
- 富士吉田市教育委員会 2001『富士山吉田口登山道関連遺跡』富士吉田市文化財調査報告書第3集
- 富士宮市教育委員会 2002『村山浅間神社遺跡』富士宮市文化財調査報告書第29集
- 富士吉田市歴史民俗博物館 2002『富士の信仰遺跡』企画展図録
- 富士宮市教育委員会 2003『浅間大社遺跡II』富士宮市文化財調査報告書第31集
- 富士吉田市教育委員会 2003『富士山吉田口登山道関連遺跡II』富士吉田市文化財調査報告書第4集
- 伊藤裕久・串田優子 2004『富士山中宮小屋の成立と展開－富士山吉田口旧登山道における歴史的環境の形成と空間構成に関する研究(1)』日本建築学会学術講演梗概集(北海道)
- 愛知県陶磁資料館 2005『陶磁のこま犬百面相』
- 富士宮市教育委員会 2005『村山浅間神社調査報告書』
- 富士吉田市教育委員会 2005『吉田の火祭』国指定記録選択無形民俗文化財調査報告書
- 富士吉田市歴史民俗博物館 2006『富士を登る』富士山叢書第4集
- 串田優子・伊藤裕久 2006『北口本宮富士浅間神社境内空間の変遷過程』日本建築学会計画系論文集 第604号
- 山梨県立博物館 2006『祈りのかたち－甲斐の信仰－』
- 山梨市教育委員会 2006『袖口金桜神社奥社地遺跡－山梨市牧丘町袖口地内の山岳寺社跡学術調査報告書－』
- 富士吉田市歴史民俗博物館 2008『富士の神仏－吉田口登山道の影像－』企画展図録
- 富士吉田市歴史民俗博物館 2008『富士山吉田口御師の住まいと暮らし－外川家住宅学術調査報告書－』
- 甲州史料調査会編 2009『富士山御師の歴史的研究』山川出版社
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009『浅間大社遺跡・山宮浅間神社遺跡－平成20年度富士山世界文化遺産登録事業に伴う埋蔵文化財発掘調査等報告書－』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009『村山浅間神社遺跡－平成20年度富士山世界文化遺産登録事業に伴う埋蔵文化財発掘調査等報告書－』
- 山梨県教育委員会 2009『山梨県内中世寺院分布調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第260集
- 山梨県教育委員会 2011『史跡「富士山」(仮称)調査報告書』

第1節 富士山修験

清雲 俊元（山梨県文化財保護審議会会長）

奈良・平安期の修験

富士山は奈良時代末期から平安時代にかけて十数回の噴火の記録が史料にみられるが、永保2年(1083)を最後に休止期に入る(扶桑略記)。この頃から修験による富士山への登拝活動がはじまつた。修験は山岳信仰の中の宗教活動の一つで、特に富士山との関わりについて捉えてみた。

一般的には修験道は日本古来の山岳信仰が外来の密教・道教・儒教などの影響のもとに、平安時代末期に至つて一つの宗教体系を作りあげたものである。このような修験は特定の祖師の教えに基く宗教とは異なり、山岳修験の修行によって呪術を獲得した実践的儀礼を中心とした宗教でもある。

富士山修験者の最初にあげられるのは、後世修験の開祖として崇められた役小角である。役小角は葛城山で修行した山林修行者の一人である。富士山にも役小角の登拝伝説がある(『日本靈異記』)。小角は舒明天皇6年(634)正月元旦大和国葛城上郡茅原村に出生した。7歳にして仏法を信じ、30歳の時、葛城山の岩窟に入り二十年間孔雀明王の法を修した。文武天皇の時、葛西山中にて修行して金峰山と葛城山との間に橋を架け渡らせたとある。また韓國の連広足は、小角の妙術を妬んで天皇に讒訴し、そのため小角は伊豆の大島に流刑に処された。小角は昼は伊豆におり夜は富士で修行したという。このように小角は奈良時代から傑出した呪術者、験者として伝承化されていた。

富士山への登拝については、貞觀17年(875)頃に著わした都良香の『富士山記』(『本朝文粹』)に「昔役の居士といふもの有りて、其の頂に登ることを得たり」とあるので9世紀末には役小角登拝伝説があったことは事実であり富士山には既に修行者による登拝がみられた証左でもある。やがて平安時代の末から鎌倉時代になって、大峯山や熊野、富士山などに修験者が入り修行の拠点となつていったと考えられる。役小角は、彼らの理想とする修験者として崇められ修験道の開祖役行者と呼ばれるようになった。後述するが、甲府市の円乗時所蔵の役行者及び前鬼後鬼像(鎌倉時代前期)や、甲州市大善寺所蔵の役行者像(鎌倉時代末期)は富士山との係わりがあり、富士山修験が平安時代後期から活躍をはじめていた一つの証左でもある。

初期富士山修験

富士山をめぐる縁起や記録に名をとどめている古い修験として伊豆国(熱海市)の伊豆山権現(現在の伊豆山神社)の修験があげられる。伊豆山神社の『走湯山縁起』(『群書類従』第2輯)によると承和3年(836)、甲斐国八代郡竹生の住人賢安が伊豆国に赴任していたとき、走湯権現の靈験を得て本地仏の千手觀音像や仏堂を造営したのが同社のはじまりとされる。また彼は出家して賢安法師と称したといわれる。この神社の祭神は『延喜式』神名帳には火牟須比命についている説と、『伊豆国神階帳』によれば正一位千眼大菩薩とあり、浅間大菩薩を祭神とする説がある。この神社は後に富士山修験として活躍する末代をはじめ山村修験の発生の地であり、富士山の祭神浅間大神は女神といわれるが、その女神像の造立にかかわってくる。

賢安について『甲斐国志』巻77の福光園寺の項をみると「保元年中(1156~58)賢安上人ヲ中興開山」とあり走湯山の賢安とすれば時代が符号しない。国志の年号が誤記であって平安時代とすれば注目すべき内容である。またこの『走湯山縁起』の末尾をみると「于時延喜四年甲子九月十八日 大教王護国院 定額僧阿闍梨豪忠記 延教闍梨上綱良宣全」とあり、延喜4年(904)賢安は大教王護国院(東寺)に関係する真言宗の僧侶ではなかつたかとも考えられる(『山梨県史』資料編3)。

また福光園寺は黒駒にあり、黒駒というと「富士山図」で最も古いもので奈良法隆寺東院絵殿の壁を飾っていた(現在、東京国立博物館収蔵)、延久元年(1069)制作の『聖徳太子絵伝』中に見られる太子像が、甲斐の国から献上された黒駒に乗って富士山頂に登つたという伝説が描かれている。この太子が乗つたという黒駒の産地が福光園寺の周辺である。甲斐国造の出した馬は中央で甲斐の黒駒と呼ばれて著名であった。この寺は、往古は駒岳山大野寺と称し黒駒牧の旧地(『甲斐国志』巻41古跡部第4)と呼ばれている。寺には聖徳太子伝説も伝えて

いる。この御坂の地は甲斐の国司の庁所である国衙が和名類聚抄によれば八代郡とみえ今日の笛吹市御坂町国衙の地を指すのが通説であり、その他にも一宮町国分説や、同市御坂町金川原の方八町の地に注目する説などがある。また福光園寺に現存されている「吉祥天及二天像」(重要文化財)は寛喜3年(1231)に仏師蓮慶により造立されたもので像内の墨書によると、大野寺(現福光園寺)の第3世良賢聖人が大勧進となり当時の国守と考えられる藤原定隆を中心に大檀越在庁官人の三枝氏が名を連ねていることから、大野寺は国衙に最も近い寺院であり、国司や在庁官人とのかかわりのある唯一の尊像である。また当時この黒駒一帯から名馬を産することから11世紀の初頭、富士山登拝が盛んになるに伴い聖徳太子伝説が生まれたのではないかと考えられる。また賢安の出生は10世紀の初頭で立証する資料はないが伊豆山権現縁起を見る限り、甲斐・伊豆・京都との関係をもった僧と考えられるが、ここでは次期の研究を待ちたい。ただ富士山信仰、とくに祭神である女神像の出自と登拝修行については賢安が初期の修験と考えられる。それは後の村山修験の登場をみても女神像さらには神仏習合から発展して村山修験の成立をみると伊豆山権現とのかかわりが大きい。

伊豆権現と修験

走湯山の修験と富士山への登拝は末代上人が有名であるが、伊豆山権現は承和3年(836)ごろ賢安によって創立してまもなく登拝が始まったと考えられる。それは都良香の『富士山記』をみても前述の通り役行者の登拝をあげているがこの時代すでに富士山登拝は行われていたことを指摘している。『本朝世紀』(藤原通憲編纂)によれば、金時(年次未詳)、賀薩(983)、日代(1059)など、村山修験が富士山の山頂を極めたことが見え。末代上人以前のことが明らかになった。これは西岡芳文著『興風』22号の「富士山をめぐる中世信仰」などに詳細があるが、この論拠は金沢文庫所蔵『称名寺聖教』の「浅間大菩薩縁起」によるものである。從って最初に富士山に修行の場を求めたのは末代に代表される走湯山に本拠を置く修験達である。

末代は『本朝世紀』久安5年(1149)の記事によると「富士上人」と称され、富士山への登拝は数百度に及び修行を繰り返し、一切経を書きして富士山頂に埋納することを発願した。その実現のために東海、東山両道の人々に勧進して4696巻の経を書きした。大般若經600巻が残ったので鳥羽法皇の結縁を獲得したことが伝えられている。末代は、頂上に大日堂を建立したことが『本朝世紀』(久安5年(1149))の条に見える。

これは奈良時代からすでに発生した日本固有の信仰と外来の仏教信仰との習合の思潮である「神は仏法を悦び擁護する」という「護法善神」の考え方方がおこり、更に神は仏の化身(権現)とする本地垂迹思想があらわれ、平安末期には富士山にも入って来た。

富士山の御神体は浅間大菩薩で、その本地仏は大日如来と定められた。大日如来は摩訶毘盧遮那といい、太陽をあらわし、偉大なる光の如来ともいい、宇宙の真理を仏格化した仏である。大日如来には金剛界、胎藏界の大日如来がある。金剛頂經に基づき仏の智徳、智慧を示したのが金剛界大日如来で、金剛界曼荼羅の中尊で智掌印を結んでいる。また理徳、慈悲の面を示していたのが大日經に基づく胎藏界大日如来である。とくに胎藏界は母胎を現すともいい、胎藏界曼荼羅の中尊に位置し、法界定印を結んでいる。

末代が浅間大神の本地仏を大日如来とし、富士山を浅間大菩薩即大日如来とする神仏習合思想に基づく信仰を説くまでになみなみならぬ苦難があった。鎌倉末期成立の『地蔵菩薩靈現記』に伝えている。その内容を見ると「垂迹浅間大菩薩 法体は金剛界蘆舎那の應作、男体に顯れ玉ふべきに、女体に現じ玉へり。然れば即本迹各別なれば末代に不信の衆生多くして 二仏の中間に迷い、済度も覺束なく思し奉る。

所詮我捨身の行を修め、後代の不審を晴さんと思立て、御岳の半上座して樹下石上にして百日断食して、正しく神体を拝み奉とぞ祈りぬ」。この『地蔵菩薩靈現記』で言っていることは浅間大菩薩の本地仏は金剛界毘盧遮那、すなわち金剛界大日如来であり男体(金剛界大日如来)であるはずなのに、女神を浅間大神として祭る浅間神社側とは考えが異なり女体(胎藏界)の大日如来を本地仏としなければならなかった。末代はこの問題を解決するため富士山中で百日の断食を行おこなったが、大日如来の世界は男女を超越した世界であることを悟られたのである。そのため富士山に勧請された大日如来像は、金剛界、胎藏界両部の仏像が造立されるが、末代が最初に富

士山頂に建立した大日堂の本尊については不詳であるが、南面の村山浅間神社の13世紀の胎藏界大日如来をみるとおそらく胎藏界にこだわったと考えられる。

また北面の内野浅間神社の鎌倉時代前期の制作と伝える大日如来をみても胎藏界大日如来であることは、いかにも浅間大菩薩が女神であることとにこだわっていた證左ではないかと思う。中でも村山修験の拠点となった村山浅間神社（静岡県富士宮市）に祀られた正嘉3年（1259）銘の大日如来は、総高97.5cmの等身の像で法界定印を結んで坐す胎藏界大日如来である。脚部裏に正嘉3年、仏師聖運造立の銘文がある。また異筆で天保15年（1844）の修理墨書銘があるが『村山浅間神社調査報告書』（富士宮市教育委員会）によると軀幹部と脚部は別作の可能性があり、脚部周辺が正嘉3年で頭体幹部は平安時代後期の古様式が見られると指摘している。平安時代後期の作とすれば、南面の浅間神社の浅間大神の本地仏としては最も古い像と考えられる。また現在村山浅間神社の中尊として祀られている木造大日如来像は、文明10年（1478）渡邊行忠ならびに息子の作である。本像は本地仏大日如来像で前記の胎藏界大日如来と対になる金剛界大日如来像である。三昧目の木造大日如来像は法界定印を結ぶ大日如来像で室町時代末期の作（『村山浅間神社調査報告書』）とみられる。

このように神仏習合時代の浅間大神の本地仏として平安時代から室町時代にかけての富士山信仰を如実に現わしている貴重な三昧の大日如来で村山修験者によって造立されている。

甲斐の富士山修験

富士山の南面（駿河側）の村山に対して、北面の甲州側の修験の拠点となったのが富士山二合目の御室である。同所に鎮座する浅間神社は甲州側の山体にあって、最初に勧請された浅間神社と伝えられている（『甲斐国志』巻71ほか）。江戸時代後期には二合目神社を「小室浅間明神」、里宮を「富士浅間明神」（『甲斐国志』）という。江戸末期には二合目神社を「富士山北口本宮浅間社」、里宮を「里宮浅間宮」（『甲斐国志・社記・寺記』）と呼んでいる。現在では富士御室浅間神社という総称で、本宮と里宮と称している（『勝山村史』下巻）。本宮の鎮座した地は、富士河口湖町勝山3951の1番地にある。周囲は富士吉田市であるが、現在ここは勝山の飛び地になっている。この一帯には、富士御室浅間神社を中心に円乗寺（甲府市右左口）とかかわりのあった行者堂、西念寺の子院である定禪院などがあり、富士山登拝に係る信仰拠点の一つとして重要な役割を果たしてきた場所である。この二合目の地を「御室」と称するが、前述の通り『甲斐国志』は「小室浅間明神」とあり『勝山記』には「富士山北室」「山室」などと地名を呼んでいる。一般に「室」（むろ）というのは、山腹にある窟（いわや）を指している。とくに修験の人達にとってムロは窟を意味し修行の場所である。山梨市の地名「室伏」は甲斐金峰山で修行する山伏の窟または洞穴のあったところであり、最近の調査では牧丘同辺にはその室といわれる洞穴が多く確認されている。

また、山梨県富士山総合学術調査研究委員会によると、この富士山二合目は、古富士火山体の地質が地表近くに現れる地に接し、地質学的にも安定した基盤に近い土地とみなされている。本宮境内には古富士を形成する基盤に三方を囲まれた平坦地であるとともに、境内の西側に沿って浅い谷がある。岩盤を河床とする谷からは水を得ることができる。さらに岸部付近には湧水箇所もあり、飲料水として用いられていたという（『史跡富士山調査報告書』）。

このように安定した基盤と水の利便に恵まれた土地であり、伝承からもこの土地が湧水の限界であることが明らかである。

この御室浅間神社の境内には、それぞれ鎌倉時代の文治5年（1189）と建久3年（1192）の紀年銘をともなう日本武尊と女神の二像が伝わっていた（『甲斐国志』巻71）。また国志によると両像ともに走湯山の観寳台坊により造立されており、北面における信仰拠点の開創にも伊豆山修験が関与していたことが明らかである。更に国志の記事をみると、日本武尊の像は3尺2寸5分で髪は左に垂れ、容貌は不動尊に似ていることが記されていた。一方の女神像は合掌した神像で1尺6寸5分であることが記されている。富士山に祀られた女神としては最も古い像であるが、現在両像とも行方不明である。御室浅間神社から出された安政6年（1859）の江戸での

御開帳頗りにこの像のことが記されており、更に慶応4年(1868)の段階でも神宝として日本武尊像は里宮に移されていることが明らかである(『甲斐国社記・寺記』)。

近年村山浅間神社における発掘調査では穴室住居跡と溝が検出されたが、これにともなう9世紀後半から10世紀前半の甲斐型土器や灰釉陶器が出土して南・北両面にまたがる回峰ルートの存在にも疑いない。従って江戸時代に盛行した中道巡りの渾源もこのころからのものと考えられる。

富士御室浅間神社には「役行者堂」が存在し、前述した役行者像及び二鬼像が祀られていた(『甲斐国志』巻71)。また慶応4年の時点でこの御室の地に御本社・幣殿・拝殿が記されており、他に二ノ宮・末社・護摩堂の記載があった。護摩堂については「是ハ七覚山円楽寺古例ニテ出勤仕候」とあり、この社地は拾町四方とういう広い境内地を有していたことを記している。この護摩堂というは行者堂のことで役行者及び二鬼像を本尊とする御堂で円楽寺が兼帶し、6・7月は円楽寺の僧侶が護摩を修法していたことが記されている(『甲斐国志』巻72)。

この行者堂に祀ってあった「役行者及び二鬼像(現在円楽寺所蔵、県指定文化財)は坐高83cmで12世紀から13世紀の制作と考えられ、木像役行者像として現在最古の遺例である。作者については康慶周辺の南都系仏師とする指摘がある。また甲州側から富士山に向かう御坂峠の盆地側の鞍部近くに役行者像を祀る神変堂(行者堂)があった(『甲斐国志』巻24)。祭祀をつかさどったのは大善寺(甲州市勝沼町)で同寺に現存する鎌倉時代末期の役行者像(山梨県指定文化財)が安置されていたのを、武田信春の時代に大善寺に移したと伝えている(『甲斐国志』巻75)。大善寺には毎年四月十四日(現在五月八日)「藤切り祭」という修驗による会式が伝わっている。役行者を祀る六所明神堂の前で修驗によって修行されている。また甲府市右左口の七覚山円楽寺にも『甲斐叢記』によると江戸時代まで「真切」と呼ばれる藤切り祭が伝わっていたが、現在は途絶している。両方共に富士山の行者堂と係わりがあり修驗者による富士山信仰に起源をもつ貴重な民俗行事とみてよい。

富士河口湖町大嵐に所在する蓮華寺(日蓮宗)は大同山御堂寺と称する真言宗寺院として創立。弘法大師創造といい役小角は此の山に来りて修法する山といい、背後に聳える「だんの山」(檀山足和田山)の頂上は奥院と呼ばれた(『甲斐国志』巻90)。平成23年度の蓮華寺奥の院跡伝承地の調査で二間二間程度の礎石の石が確認され、他は燈明皿が1点出土した。この一帯が修驗の行場であったことを伝えている。『甲斐国志』の編纂に際して作成された大嵐村の絵図には、檀山の山頂に「法印塚」を記すとともに門前を横断して東方の富士山へと延びる道に「富士山とうしゃ(道者)道」と注記している。この道が『甲斐国志』が「七覚山」の頂において「相伝テ云、昔役小角富士登山ノ時、此處ヨリ發シ、遊葉。阿難ノ二嶺ヲ踰テ、精進・西海・長浜・大嵐・大田和・成沢数村ヲ經テ直ニ御室ニ達ス」とあるが甲府盆地南東辺と富士山二合目を直結する通路である(『富士山』小学館)。途上にある十二岳にも役行者にまつわる伝承もある(『甲斐国志』巻26)。

このように富士山周辺には役行者伝承が多くあり、また二合目・御坂峠に伝わる役行者像をみると修驗による登拝が早く平安時代の初めからみられたことを物語っている。

富士山の北面甲州側の忍野村には、忍草浅間神社と内野浅間神社の別当は、当山派又は本山派の修驗であったと考えられる。両社には大日如来像が伝わる。忍草浅間神社には、鎌倉時代正和4年(1315)造立の女神像(仏師丹後國住人石見坊)を含む3躯の神像がある。仏像は忍草浅間神社の別当東円寺(現天台宗)に文保4年(1320)仏師静存造立の聖觀音坐像と2躯の浅間大菩薩の本地仏である金剛界大日如来像を伝えている。1躯は天正6年(1578)造立の金剛界大日如来で、像高33.1mの智拳印を結んだ像である。もう1躯の金剛界大日如来は平安時代に遡る。像高34.5cmの像で、智拳印を結んでいる。東円寺は鎌倉時代初頭までは真言宗で、南泉寺と称した。その後、正治元年(1199)に天台宗東円寺となった。これらの仏像は、明治初年の廃仏毀釈により浅間神社から移された仏像である。大日如来もその時に移されたと考えられる。また『甲斐国志草稿』(柏木本)によれば、浅間神社には大日堂が存在したことなどが記されていることなどから、平安時代末期から明治時代初年まで浅間神社には大日如来が祀られていたことは明らかである。また、内野浅間神社の別当寺は、現在は臨済宗である承天寺の前身であった本山派修驗の光学院が別当寺であった。その内野浅間神社に像高10.7cmの蓮華座まで含

む一木造の大日如来坐像が伝わっている。本来は懸仏の本尊であったと思われる。仏像は法界定印を結ぶ胎像界大日如来で、鎌倉期に造立された像で、現在でも木花咲耶姫命と呼ばれ、本社の御神体として祀られている。

甲州の富士山修験の特徴

国中で富士山にかかわる修験の寺院は円楽寺（甲府市右左口）、円楽寺の末寺大福寺（中央市）、大善寺（甲州市）そして福光園寺（笛吹市）などが数えられる。共に真言宗寺院であることから、一般には甲州側の富士山修験は当山派、駿州側の富士山修験は本山派と言われてきたが、実際には分けることは難しい。

甲州国中の富士山修験の寺の特色は、鎮守に五社権現・七社権現があるが必ず伊豆権現がお祀りしてあることである。円楽寺も大善寺にも五社権現があり伊豆権現をお祀りしている。とくに大福寺の鎮守七社権現は平安時代後期11世紀の尊像である。その尊像は熊野三所、金峰、白山、伊豆、箱根の七社をお祀りしているが、神像は兩乞いに用い、やっと原形をとどめている。

また郡内では岩殿山円通寺がある。この寺は天台宗で常楽院・大坊が修験の大きな権力をもった本山派修験道である。この寺の鎮守である七社権現（県指定文化財）は、15世紀初頭のもので、伊豆権現を合祀している。また、文明19年（1487）に聖護院門跡道興が入峠して岩殿山円通寺、柏尾山大善寺、右左口の円楽寺など伊豆権現とかかわりをもった寺を巡行していることが道興の紀行文『廻国難記』にみえるが、これまた富士山修験の寺院を巡錆しているように考えられる。甲州における富士山修験は伊豆山からの村山修験の影響を受けて発達したようと考えられる。

第2節 山岳信仰遺跡調査の課題

坂詰 秀一

1 山岳信仰遺跡研究の回顧

日本における「山」の考古学的調査・研究は、古来、信仰との関わりで展開してきた。その対象は、信仰の痕跡としての遺跡（遺構）であり遺物の存在であった。これら形而下の資料は、信仰の実態を具象的に顕在化させることが可能であるため考古学的研究の課題として注視されてきた。

現在、山岳信仰の考古学は日本の考古学において発展が著しい分野として関連分野からも注目されている。そこで当該分野の進展を、当面する課題に沿って逐次的に概観することにしたい。ここで当面する課題とは、所謂「歴史時代」の山岳信仰遺跡とそこから派生する事項及び展開についてである。考古学的方法による山岳信仰の調査・研究を逐年的に整理するとⅢ期にわけて展望することが出来る（1）。

第Ⅰ期（探査期）

山岳信仰に関する遺跡・遺物の存在が認識され、表面採集による遺物の確認が進んで当該分野の先駆的報告・論文が発表された時期。

丸山瓦全・古谷清（1924）による日光男体山、鳥居龍藏（1926）による筑波山、樋口清之（1927.28）による三輪山、大場磐雄（1935.36）による大山・日光男体山（二荒山）・箱根山・伊豆山・赤城山・榛名山などの調査結果が報告された。また、大場（1943）の総括的見解が集成された。大場は、石器時代～歴史時代の遺跡・遺物を資料として「神道考古学」（2）を提唱し、山岳信仰と修験道との関係について論及し、以後における研究の方向性を具体的に論じた。さらに、大場は「祭祀遺跡ノ研究」（1947、國學院大學提出学位論文。1970公表）において「自然物〈山嶽・巖石・湖沼・池泉など〉」を対象とする祭祀遺構を分析し「神奈備式靈山」の存在を指摘すると共に祭祀遺物の諸相について具体的な資料を挙げて論じた。他方、山岳信仰は、山林仏教（經塚）、修法関係遺跡さらには峠の神に対する祭祀の痕跡などを加えて考察すべきことを論じた。かかる問題の提起は、石・水の信仰ともども「神道に関する諸現象を考古学上より考察し」て、「日本考古学の中に、神道を中心とする一分科を樹立」する構想のもとに体系的に主唱したものであったが、山岳信仰の考古学的研究の方向性を示したものであった。

第Ⅱ期（確立期）

考古学の視点で各地の山岳信仰についての関心が高まり、山岳山頂遺跡の発掘調査が試みられ、他方、山岳信仰に対する諸分野の研究成果が総括された時期。1959年に日光、1960年に大山・宝満山、1964～65年に戸隠、1975～77年に求菩提山などにおいて計画的な発掘が実施された。

日光男体山の山頂（2,484m）から仏法具の出土が知られていたが1959年に組織的な調査が行われた。山頂の遺跡は、男体山頂をはじめ太郎山頂、女峰山頂、大真名子山頂、小真名子頂にわたって認められたが、なかでも男体山頂から鉄錫杖・密教法具（独鉢杵・三鉢杵・羯磨など）・鏡鑑・鉄火打鑑・武具・農工具・懸仏・土器類・銅印などの多種多様の優品が検出された。古代から近世にわたるこれらの遺物は巨岩の岩裂を中心として見出され、儀礼のあり方を彷彿とさせる。

大山（神奈川）の山頂（1,252m）に存在する遺跡が1960年に発掘された。修法跡などが発掘され、1879年に出土した經塚関係の遺物のほか、小仏像（懸仏か）・土器類・錢貨などの出土が知られ、12～15世紀頃に比定される。

宝満山の山頂（830m）とその付近の調査が実施され、上宮岩壁の中腹の棚状部分及びその直下から銅鐘・銭貨・石製祭具・土器類が見出され古代の信仰の実態が明らかにされた。

戸隠山（1,911m）の奥社の講堂跡・院房跡と修行窟などの調査が行われ、前者から仏具・土器類、後者から金銅仏・仏具類が検出された。出土遺物の観察から13～14世紀の信仰の痕跡が顕現された。

求菩提山（782m）は修験の道場として知られているが、3年間にわたる発掘によって多くの經塚が検出された。山頂の巨岩付近と岩窟内より見出された經塚は12世紀代のものであり、营造の実態が明らかにされた。

考古学的発掘が実施されたこれらの諸山は、古來、信仰の対象として遺物の出土も知られていたが、発掘の結果、

その事相の一端が明瞭にされたのである。このような山岳信仰遺跡の発掘の実施に呼応するかのように、山岳信仰に関する文献史学・宗教学・民俗学など諸分野の成果を集成した「山岳宗教史研究叢書」全18巻が刊行された。1974～84年にかけて刊行された主要靈山編(1～6)地方靈山編(7～13)文化・伝承・史料編(14～18)には、山岳信仰をめぐる研究の到達点が示されている。とくに、地方の諸靈山を修験道の視点において展望すると共に修験道の美術・芸能・文学・伝承文化を示した諸編と修験道史料が収録され、修験道研究の指針的役割を果たすものであった。また、1985年に奈良国立博物館で開催された春季特別展「山岳信仰の遺宝」は、1983年から着手された大峯山寺の本堂解体修理に際しての発掘品・小黄金仏2軸なども展観され、まさに「時宜相応の企て」として注目された。それは「山岳信仰に焦点をあてた最初の企画」であり、山岳信仰の実相を遺物を通して総覽したものであった。山頂遺跡の考古学的発掘の兆し、山岳信仰研究諸分野の論文集成、山岳信仰遺品の展望は、山岳信仰の実態を考古学的方法で究明する方向性が確立されたことを示したのである。

第三期(形成期)

山岳信仰遺跡の新たな研究視角は、1983年に着手された大峯山本堂の解体修理に伴う発掘調査が一の契機となって進展していく。1986年に國學院大學考古学資料館によって行われた白山(2,702m)山頂遺跡の発掘調査が改めて注目の的となり、1991,92年に実施された「大峰奥駆道の考古学的調査」を課題とする「山岳信仰遺跡の踏査とその測量を中心とした大峰山岳信仰遺跡の調査研究の方法とともに、山岳信仰遺跡の考古学による調査の方法が具体的に提示され、分布調査と発掘調査の必要性が求められるようになった。

大峰山の調査は「奈良山岳遺跡研究会」(研究代表:森下惠介)が組織され、大峰奥駆道の分布調査、参籠窟(笙ノ窟)の測量・発掘調査、深仙宿跡の測量調査、小篠宿跡の測量調査(1999～2001)が実施された。調査の成果は『大峰山岳信仰遺跡の調査研究』(2003)として発表され、大峰山の開山が奈良時代後半であることが示されたのである。ついで、2003年には「吉野山金峰山信仰の考古学的研究」(研究代表:茂木雅博)として、吉野山南部遺跡群(安禪寺跡とその周辺の測量)の調査が、2005年には吉野山南部遺跡群「金照坊」地区・上岩倉遺跡の測量と周辺の悉皆調査が「山岳信仰の考古学的研究」(研究代表:橋本裕行)の一環として実施された。因みにこれらの研究は(財)由良大和古代文化研究協会及び(独)日本學術振興会の科学的研究費(基盤研究B)に関わる研究調査であった。

大峰山寺における発掘調査が触発となって「山の考古学研究会」が1987年に発足した。山岳信仰の考古学的調査研究が関連分野の研究ともども全国的に行われるようになっていったが、その間、山の考古学研究会は、遂に、調査成果の発表と情報交換の研究会を企画し、奈良(大峰山)橋本(日光山)滋賀(比叡山)神奈川(大山)富山(立山・劍岳)山梨(金峰山)石川(白山)奈良(大峰山・笙ノ窟)山形(出羽三山)奈良(吉野山)茨城(筑波山)大阪(高尾山山頂遺跡)福島(飯豊山)鳥取(大山)和歌山(高野山)群馬(赤城山)福岡(宝満山)長野(戸隠山)滋賀(伊吹山)鳥根(大船山)山形(出羽三山)奈良(深仙窟・玉置山)山梨(乾徳山)などで研究集会をもった。このような動向は、各地域に山岳信仰遺跡についての関心を醸成する契機となり、刺激となって同好の士が増えていった。

2003～05年に福井で開催されたシンポジウム「山の信仰を考える」(朝日町)及び「山と地域文化を考える」(第20回国民文化祭越前町実行委員会)は圧巻であった。2003シンポで越前5山の越知山と山頂遺跡(大谷寺遺跡)に着目し、2005プレシンポで山岳信仰の考古学、本シンポでは「北部九州・近畿・関東・北陸と中国及び朝鮮」の諸靈山の基調報告があり、山岳信仰遺跡の調査の現況が示された。とくに3回のシンポジウムの資料集には、「全国の主要な靈山」「福井県内の主要な山と主な宗教施設」「山岳寺院データベース」などが収録された。2009年には「中世北陸の山岳信仰」(北陸中世考古学研究会)が開催され、越前・加賀・能登・越中・越中・加賀・越中にそれぞれ存在する諸靈山についての報告があり、考古資料による研究の状況が総括された。

山岳信仰遺跡のなかで、古来、調査の眼が向けられていたのは仏教及び修験道に関する寺(「山寺」)についての関心であった。広義の信仰遺跡に対する調査が進展するのに伴い山寺についても注目されたのは当然であった。

2004～06年にかけて実施された「忘れられた靈場をさぐる」講演・報告会(栗東埋蔵文化財センター講座)

は、栗東と近江南部に残る「山寺」をテーマに開催され、報告集には紙上報告・調査資料集が収められた。また、2010年には「三遠の山寺」（三河山寺研究ミニシンポ、三河考古学講話会）が開催され、三河、遠江、駿河における古代末～中世の山寺についての知見がまとめられたことは有用であった。

「山寺」をめぐる総括的研究は、2008～11年の4年間、全国的に実施された「日本中世における『山の寺』（山岳宗教都市）の基礎的研究」（（財）日本学术振興会・科学的研究費（基盤研究B）、研究代表：仁木宏）が注目される。その総括シンポジウム「中世『山の寺』研究の最前線」が2011年に開催され、各地の「山の寺」調査の現状が報告された。この研究は、文献史学分野の研究者が「山の寺」を山岳宗教都市のあり方と関連して位置づける方向性をもつやに窺われるものであるが、その基礎資料は考古資料を一の前提とする。したがって、古代末～中世にかけての山寺跡の悉皆調査の実施が将来に向けて求められるにいたった。

山の考古学研究会の『山岳信仰と考古学』（2003）『山岳信仰と考古学Ⅱ』（2010）に収められた30余編の論文は、山岳信仰遺跡研究の基礎となり、調査の方向性の指針をも含むものであった。かかる動きは、各地において山岳信仰遺跡を考古学の方法によって明らかにする方向を惹起し、山の遺跡の分布調査、伝承庵寺跡の再検討が行われるようになった。加えて、従来、さして調査の対象として意識されることなく等閑視されてきた山の遺跡の発掘が試みられるような気運が地域ごとに横溢するにいたったのである（3）。

それに伴って地域史の研究目標に山がクローズアップされ、山の信仰に対する伝承などが文献史学分野の調査とあいまって展開していくようになっていった。それは地域における信仰の歴史的背景を闡明にする役割を果たすこととなり、考古学の有用が改めて注目されたのである。

以上、山岳信仰遺跡の研究を考古学の視野から把握・確立・形成とⅢ期に区分して展望してきた。素より粗略な独善的な区分であり管見に過ぎない。

2 山岳信仰遺跡の諸相

「山」の山岳信仰は、「山容」と関連づけて研究が進められてきた。それは、富士山を代表とする浅間型と三輪山を典型とする神奈備型である。この二者は、峻険的な前者、秀麗的な後者であり、集落（里）と遠隔の浅間型、指呼至近の神奈備型である。換言すれば、登拝修行の「山」は浅間型、仰ぎ尊び祈念する「山」は神奈備型である。神奈備型は、耕地と平面的に連続し人知の及ばぬ「山」としての存在である。山岳（山嶽）の信仰遺跡（4）と言えば、主として浅間型の「山」と感覚的に捉えられるが、神奈備型をも包括する場合もある。浅間型の遙拝祭祀遺跡、神奈備型の山裾祭祀遺跡をも対象として、それぞれの信仰遺跡として理解する方向も認められている。ここで対象とするのは、すでに研究の回顧において展望したように浅間型の「山」の信仰遺跡である。山岳信仰に関する遺跡は、大別すると遙拝の遺跡と登拝の遺跡となるが、一般的には、山（山岳）に存在する遺跡を連想する。山は、古来、生産の場であり信仰の空間であった。山における生産の様態は多岐にわたるが、その多くは信仰意識と暗黙裡に密接な関係を保持してきたことが知られている。山岳における信仰の場は、山頂、山腹、山裾と自然的環境によって分けられ、一方、山中に存在する洞窟、岩石・池などの自然物、祠・伽藍・埋経地（經塚）・宿坊などの人工施設による対象として認識される。これらの場は、自然条件の相異と信仰者の時代差によって一様ではないが、総じて認められている。

山岳信仰遺跡として広く意識されるのは、山頂に存在する遺跡（遺物存在地）である。周知の羽黒山（山形）信夫山（福島）筑波山（茨城）日光男体山（栃木）武甲山（埼玉）大山（神奈川）箱根駒ヶ岳（神奈川）富士山（山梨・静岡）金峰山（山梨・長野）妙高山（新潟）白山（石川・岐阜・福井）大峰山（奈良）宝満山（福岡）は、古代～近世の代表的な山頂信仰遺跡である。なかでも発掘調査が行われ日光男体山では太郎山神社の祠付近の岩の隙間などから鑑鏡（160面以上）、仏像、懸仏、鉄鏹（130）、鉄刀子（450以上）、火打鎌（44以上）、銅印、銭貨（1300以上）、武器・武具類、馬具、農工具、仏法具（独鉢杵、三鉢杵、羯磨、鏡、高炉、花瓶、鰐口ほか）、經筒、禪頂札、種子札、陶磁器など多種多様な遺物が検出された。古代～近世に及ぶこれらの遺物は、男体山上において修験道の信仰事事が行われていたことを示している。また、白山においては、鑑鏡、懸仏、仏法具（独鉢杵など）、火打鎌、經筒、陶磁器など、古代～中世の遺物が検出されている。さらに、大峯山上の大峰山寺本堂の解体修理

に伴う発掘によって、黄金仏・鏡像・御正体・鑑鏡・仏法具・銅板経・錢貨・陶磁器(青・白磁)などが出土し、10～12世紀における事相が知られた。大峰山頂には、湧出岩付近に营造された經塚、大岩の至近地に設定された護摩壇施設が検出されている。一方、宝満山の山頂遺跡は、山頂の岩壁の下方から、銅儀鏡・錢貨(和同開珎、万年通宝、神功開宝、隆平永宝、富寿神宝、承和昌宝)、陶磁器(二彩、三彩、綠釉、灰釉)類、石製模造品など8～9世紀代の遺物が見出されている。

山頂遺跡の発掘が行われた2～3の例を見ると、修驗的事相と非修驗的事相の信仰様態を窺うことが可能である。ただ、かかる修驗の行法には仏教的な事相の痕跡を内包混在していると考えられ、一方のしかざる例と対照的である。例えば仏教的な事相は、四度加行(十八道法・金剛界法・胎藏界法・護摩法)行法の痕跡とも考えられ、その場として頂上の空間が求められていたことは明らかである。また、儀鏡・石製模造品・錢貨を中心とする他例は、非創唱宗教の祈りの一類として理解すべき可能性を示しているとすべきであろう。

山頂には、經塚の营造が認められている。寛弘4(1007)年に藤原道長が奉納した金銅經筒を主体とする大峰の金峰山經塚はその代表的な遺例として知られている。計画的に発掘調査された朝熊山經塚(三重)求菩提山(福岡)横尾山經塚(大阪)武藏寺經塚(福岡)は、山頂～山腹に营造された代表的な例である。經塚は、經典理納の遺跡で北海道を除き全国的に認められているが、その多くは經筒と施設を伴う平安時代のものであり、中世末～近世にかけての礫石經とは性格を異にする。書写經典を埋納する目的のもとに形成された古代と中～近世の經塚が共に山頂とその近くに見られることは、山に認められる遺跡として注意される。

多くの山腹に平場を造成し營まれている山寺(山岳寺院・山林寺院)は、以前から考古学の対象として注目されてきた。その多くは法燈の跡絶えた廃寺跡であり、堂宇が存続している例は、建築史・美術史分野の主対象として調査研究がなされてきた。考古学で対象としてきた山の廃寺跡については、かつて「山地区画伽藍」と「山地任意伽藍」に2大別し、平地に营造された「平地方形区画伽藍」と「平地任意伽藍」と対比したことがある(5)。山地の2者は坐禅修行、平地の2者は都邑修学を目的とした造営と考えたのである。また、小さな山寺の多くは阿蘭若処として設営されたものであろう。その選地は闊伽水が絶えることのない場、あるいは巨岩・奇岩の存在する場、石窟であった。したがって、限られた時間の法灯の場であったと推察され、小規模かつ短期間内の施設として阿蘭若処の存在が推考される。それは小さな「山寺」であり、「山地区画」と「山地任意」に加えて「阿蘭若処」(6)的な性格を有する遺例が認められると推定される。

石窟は、他方、修驗道の修行窟としても利用されたことが知られている。阿蘭若処であるか、修行窟であるか、石窟内における検出物の検討が必要であることは言うまでもない。

池中納鏡遺跡は修驗道、池中經典投入遺跡は仏教的作善業の痕跡として把握される。前者は、羽黒山(山形)鏡ヶ池(600面以上)、赤城山(群馬)小沼(13面)、後者は、榛名山(群馬)榛名湖、などの諸例が知られている。

山頂、山腹、山裾に岩場・巨石の存在が認められる場合はそれ自体が信仰の対象とされている。山頂における岩場、山頂・山腹に見られる磐座としての巨石である。箱根駒ヶ岳(神奈川)の山頂には3箇の磐座があり、周辺より土師器環が錢貨(宋銭片)とともに出土している。また、赤城山(群馬)の尾根上の「櫛石」は至近の4巨石と共に磐座群として知られ、周辺より石製模造品・手捏小型土器・玉などが採集されている。山頂近くと山腹の岩場には修驗の行場が設定されていることもあるが、多く地名・伝承の場であり、考古学的資料を、見出すことはほどほど困難である。

山中には、修驗の結界と考えられる巨石の存在が認められるが、結界標識となる整形痕、文字表現が認められるものはほとんどない。また、釘類の遺存による祠施設の存在を推察することはできるが、その確認には発掘調査が必要であることは言うまでもない。

仏教・修驗における仏像は多種多様であるが、修驗にとって不動明王・蔵王権現・役行者の崇拝対象は特有である。修法の対象である阿弥陀・薬師・虚空藏・普賢・文殊・觀音などの造形、山伏の諸道具(十二、十六)類にも配慮される。それは諸山において見出される多くの仏法具とともに遺跡の特性を考える重要な遺品となっている。

3 富士山信仰遺跡調査の意義

富士山は、浅間型山岳信仰の代表的靈山として有名であり、古来、信仰史をめぐる研究歴は、まさに汗牛充棟の感がある。しかし、その考古学的事相は隔靴搔痒であり不鮮明である。1930年に山頂の三島ヶ嶽(3,734m)の北東部(3,713m)から発見された経塚は、一切経の埋納経塚として唯一孤高な作善堂の仏教遺跡であるが、不時発見のため、その全容は必ずしも明瞭ではない。三島ヶ嶽で発見された経塚(7)は久安5年(1149)に富士上人末代により一切経5,296巻などが、見仏悟道、仏法興隆を願い、鳥羽法皇ほか京洛、東海・東山両道の結縁者を得て駿河国富士山の山頂に营造したとされている。蓋し、未曾有の遺跡であり、仏教考古学とくに経塚研究者にとって不可避の経塚であった。この経塚の実態解明を意図した三宅敏之は1959年以来、関係史・資料を涉獵した。また、勝又直人(8)は、2008年に富士山世界文化遺産推進事業に伴い現地調査と現存資料の確認調査を行い、現在の所見を総括した。富士山には(9)、三島ヶ嶽経塚のほか、吉田口五合目経ヶ嶽(日蓮聖人宝塔の根元から「自然ニ地中ヨリ发掘」)より出土したと伝えられている室町時代の版経(法華経・序品)の残片が東京国立博物館に所蔵されている。また、1924年に日蓮聖人関係堂宇の増築工事中に出土したと伝えられる青銅鑄製の経筒(現存高さ約21.3cm、直径約13.5cm、厚さ1~2mm)納入の紙本経(朱書の觀普賢經などで10巻、縦22cm、17字詰、46行)とともに2002年8月に富士吉田市歴史民俗博物館の企画展「富士の信仰遺跡」で展観紹介された。経ヶ嶽には、伝資料の出土地点を肯定すれば、平安時代後期及び室町時代に経塚の营造がなされたことが知られる。伝経ヶ嶽の平安時代写経は、朱書であり三島ヶ嶽経塚50巻中、3巻の墨書き以外は朱書きであったことが想起される。

富士山における埋経は、平安時代後期に山頂(三島ヶ嶽)において末代上人によって行われたほか、末代上人又は有縁の勧進者により吉田口五合目(経ヶ嶽)においてなされたことも考えられる。山頂のほか木山と焼山の境における経塚の营造は、营造選地として首肯されるであろう。しかし、山頂の三島ヶ嶽経塚、吉田口五合目の伝経ヶ嶽経塚は、不時発見及び伝承資料であることに問題点が残されている。今後、「天地境」一森林限界ライン付近の計画的調査によってかかる問題解決の緒が見出せる可能性があろう。

富士山頂に大日寺と号する仏閣が末代上人により建立されたのは久安5年頃のことであった(『本朝世紀』第三十五)。この大日寺については位置など不詳であるが、三島ヶ嶽経塚より「承久」墨書銘の経筒が出土しており承久年間(1219~1222)の埋経次第は大日寺との関係が考えられ、その位置は、後世「表大日」と通称された大日堂の近くであろうか。山頂は、経年自然環境の変容に加え、廢仏毀釈により仏教的施設などの解体除去、関係文物の破壊と遺棄が行われており、古代に限らず中世~近世における遺跡も同断である。かかる状況に対応するには、考古学的調査の実施が期待される。

中世の修験者及び道者の登拝の実際は、村山口の中心であった富士山興法寺〔村山浅間神社〕(駿河)と村山三坊(大鏡坊・池西坊・辻之坊)の故地調査、大日堂(興法寺)に保管されている下山仏の調査の必要がある。吉田口二合目の御室浅間神社には、かつて、文治五年(1189)七月二十八日銘の木造不動明王(?)像、建久三年(1192)四月九日銘の木造女神像が祀られ、他方、伊豆の走湯山との関係も推察されて浅間信仰及び富士山修験の拠点的位置を占めていた。吉田口二合目については、すでに発掘調査が試みられ注目されてきた。

近世については富士講関係の石造物が吉田口の登拝道(道者道)各拠点に存在している。吉田口一合目の発掘は、登拝道の考古学的調査として先駆的な試みであり、関係諸分野から注目された。近世は、富士講による富士信仰が隆盛をきわめ、中世における道者の道を用いた登拝道のほか、八海巡り、角行終馬の人穴への道程、さらに碑塔の建立が認められているが、まだ不明のことが多く残されている。近世における富士信仰の実相は、甲斐・駿河の浅間神社の展開ともどもより将来の究明が求められている。

以上、富士山の「歴史時代」信仰遺跡について瞥見してきたが、それにつけても考古学的方法による調査と研究が等閑視されることであった。勿論、若干の先駆的な研究が認められるにしても、発掘調査の事例はまさに稀有であった。

2009年から2011年にかけて山梨県埋蔵文化財センターが実施した「山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査」は、

2004年～2008年の「山梨県内中世寺院分布調査」の成果に立脚し、とくに山梨県南東部地域の「富士山信仰に関する遺跡」が対象とされた。この度の調査の特性としてとくに注目されるのは、(1) 浅間神社の境内地及び周辺の関連地、(2) 伝承地、(3) 富士山五～六合目の石室などの試掘確認調査である。

御室浅間神社本宮・里宮、北口本宮富士浅間神社、河口浅間神社に対する考古学的調査は、はじめてのことであった。御室浅間神社本宮の周辺においては吉田口登拝道二合目の往時の環境を示唆する資料が検出され、また、五合目～六合目の石室の実態把握に関する手掛かりが得られた。御室浅間神社里宮、北口本宮富士浅間神社、河口浅間神社における境内地の試掘は、それぞれ浅間信仰の歴史的事相を考察する資料が得られたことは大きな成果であった。さらに、富士山通拝の地と伝えられてきた大塚丘は、地中レーダー探査により人工と推察されたことも注目すべき成果であった。また、大善寺行者堂跡の伝承地、蓮華寺奥の院の伝承地にも、はじめて考古学的調査が試みられ、相応の結果が得られたのである。

富士の信仰を考古学的方法で調査する動きは、駿河側では、例えば富士山本宮浅間大社、山宮浅間神社、村山浅間神社・大日堂などにおいて試みられてきた。甲斐側の吉田口登拝道の発掘、二合目の御室浅間神社とその周辺地の発掘、そして石室(五合目～六合目)の確認調査は、赤色立体図を有効に活用した悉皆調査に立脚して実施されたものであり、富士山の考古学的調査の必要性を具体的に示すことになったのである(10)。

註

- (1) 日本における山岳信仰の研究は、宗教史・文献史学・民俗学・国文学など多くの分野にわたって積み上げられて膨大であるが、考古学の分野においては、大場磐雄による神道考古学の業歴が知られている。以下、ここで触れるのは「歴史時代」の考古学分野の展望の一つとして、私なりの回顧に過ぎない。
- (2) 大場磐雄『祭祀遺跡・神道考古学の基礎的研究』(1970)『神道考古学論叢』(1943)は、その総括的な著作であり大場編『神道考古学講座』6巻(1972～81)には、大場の主張が取りされている。
- (3) 東北・関東・中四国・九州などにおける活発な研究は、各地で山の考古学のシンポジウムが開催されていることによって知ることができるが、逐一については省略した。
- (4) 以下、山岳信仰遺跡について概括的に述べる。時代性については、あえて捉われることなく概観することにしたい。
- (5) 坂詰秀一「初期伽藍の類型認識と伽藍構成における僧地の問題」(『立正大学文学部論叢』63.1979)
- (6) 坂詰秀一「阿蘭若処を伴う伽藍」(『日本仏教史学』14.1979)
- (7) 三島ヶ嶽経塚について真正面から取り組んだのは三宅敏之である。三宅は、1959年3月の歴史考古学研究会の例会で発表して以来、「富士山における一切経の埋納供養について」(『歴史考古』4.1961)、「富士曼荼羅と仏典埋納」(山岳宗教史研究叢書14『修驗道の美術・芸能・文学』1.1980)において総括した。
- (8) 勝又直人「三島ヶ嶽経塚小考—富士山本宮浅間大社所蔵写真資料から—」(静岡県埋蔵文化財研究所『研究紀要』17.2011)
- (9) 富士山の経塚については篠原武の研究が本書に収められている。研究の現状と問題点については篠原論文を参照。以下は、私見の現在の略述である。
- (10) 本書所収の野代恵子の報告を参照。

第3節 富士山の古代祭祀とその背景

— 火山活動・災害と古代の神觀・祭祀 —

笛生 博（國學院大學）

1.はじめに

富士山は、日本列島の中で最も高い山であると同時に、秀丽な山容から、古くから信仰の対象となってきた。しかし、その信仰の内容は一様ではない。中世以降、仏教や修驗道との結び付きは盛んになるが、古代には全く異なった信仰が展開していた。

神道考古学を提唱した大場磐雄氏は、日本の山岳に対する信仰を、「神奈備型」と「浅間型」の二類型に大別している。いずれも、山容が円錐形で美しく、神靈が籠る場所と想定するが、「神奈備型」は、奈良県桜井市の大輪山を典型例とし、里に近い形の良い山を信仰対象とする古墳時代以来の古い形とする。これに対し、「浅間型」は、その名からも分かるように、浅間つまり富士山や、日光男体山といった高山・火山を対象とする信仰で、高山という性格から、仏教の山林修行や修驗道との密接な関係を認めている（註1）。

では、富士山の信仰とは、この「浅間型」に見られるような、修驗道など山岳信仰と関連する形だけなのだろうか。古代の文献史料を見ると、決してそうではない。既に大場氏も指摘しているように、古代においては、むしろ活発な火山活動に対する祭祀や信仰を中心としている。そこで、ここでは、古代の富士山に対する祭祀・信仰について、特に火山活動との関連に焦点を当てて、文献史料と考古資料から考えてみようと思う。

2.文献史料に見る富士山の古代信仰

古代における富士山の神の存在、それへの信仰は、東国に唯一残る古風土記『常陸國風土記』で確認できる。

昔、神祖の尊、諸神たちのみ處に巡り行でまして、駿河の國福慈の岳に到りまし、卒に日暮に遇ひて、遇宿を請欲ひたまひき。此の時、福慈の神答へけらく、「新粟の初嘗して、家内諱忌せり。今日の間は、冀はくは許し堪へじ。」とまをしき。是に、神祖の尊、恨み泣きて嘆告りたまひけらく、「即ち汝が親ぞ。何ぞ宿さまく欲りせぬ。汝が居める山は、生涯の極み、冬も夏も雪ふり霜おきて、冷寒重襲り、人民登らず、飲食な焚りそ。」とのりたまひき（註2）。

8世紀初頭のこの説話では、富士山の神「福慈の神」は、新粟の初嘗の日に、祖先神「神祖の尊」の宿りを断つたため、富士山を、冬も夏も雪・霜が降り人々が近付かない山として描いている。しかし、8世紀の末期から9世紀にかけて、富士山の火山活動が活発化すると、その細かな状況と、関連する祭祀の記録が正史等に度々残るようになる。主な記事をみてみよう。

- ・天応元年七月癸亥（七日）。駿河國言す。富士山の下とに灰を雨らす。灰の及ぶ所は、木葉彫縮すと。『続日本紀』（註3）
- ・延暦十九年六月癸酉（六日）。駿河國言す。去ぬる三月十四日より四月十八日まで、富士山の嶺自ずから焼けぬ。晝は則ち烟氣暗晦にして、夜は則ち火光天を照らしき。其の聲雷の如く、灰の下ること雨の如し。山の下の川水は皆紅色なりきと。
- ・延暦廿一年正月乙丑（八日）。是日、勅すらく。駿河國言す。駿河國富士山、晝夜烜燎し、砂礫は燄の如しとてへり。之をト筮に求むるに曰く。ここに疫さむと。宜しく兩國をして頌謝を加へ、ならびに經を讀み以て灾殃を攘はしむべしと。以上、『日本紀略』（註4）
- ・貞觀二年五月五日甲寅。駿河國言す。富士山の上に五色の雲見ゆと。
- ・貞觀六年七月十七日辛丑。甲斐國言す。駿河國富士大山、忽ちに暴火有り。巣巒を焼砕し、草木を焦然す。土を鏟し石を流し、八代郡本柄、并に剣の両の水海を埋む。水熱くして湯の如く、魚鼈皆死に、百姓の居宅、海と共に埋れ、或いは宅有りて人無きもの、其の數記し難し。両の海より東にまた水海有り。名づけて河口の海と曰ふ。火焰赴きて河口の海に向ひき。本柄、剣等の海の未だ焼け埋れざるの前、地は大いに震動して

雷電暴雨あり、雲霧晦冥にして、山野弁ち難く、然る後に此の災異有りきと。

- ・貞觀六年八月五日己未。甲斐國司に下知して云ひけらば。駿河國富士山に火ありて、彼の國言上す。之れを著龜に決するに云はく、淺間名神の祢宣祝等、齋敬を勤めざるの致し所なりと。仍りて応に鎮謝すべきの状、國に告知し訖んぬ。宜しく亦幣を奉りて解謝すべきなりと。
- ・貞觀七年十二月九日丙辰。勅して、甲斐國八代郡に淺間明神の祠を立てて官社に列ね、即ち祝祢宣を置き、時に隨いて祭を致さしめたまひき。是より先彼の國司言へらく、往年、八代郡に暴風大雨、雷電地震あり、雲霧杳冥して、山野を辦へ難く、駿河國の富士大山の西峯、忽ちに熾火有りて巖谷を焼き碎きき。今年、八代郡の擬大領無位伴直眞、託宣して云はく、我は淺間明神なり。此の國に齋き祭らるを得むと欲し、頃年、國史の爲、凶咎を成し、百姓の病死を爲す。然るに、未だ曾て覺悟せず。仍りて此の恥を成せり。早く神社を定め、兼ねて祝祢宣を任じ、宜しく潔め奉祭るべしと。眞貞の身、或いは伸びて八尺ばかり、或いは屈みて二尺ばかり、體を變へて長短をなし、件等の詞を吐きき。國司、之を卜筮に求むるに、告ぐる所、託宣に同じかりき。是に於て明神の願に依り、眞貞をもって祝と爲し、同郡の人伴秋吉を祢宣と爲し、郡家以南に神宮を作り建て、且つ鎮謝せしめき。然りと雖も異火の變今に止まず。使者を遣りて検察せしむるに、剝の海を埋めること千許町、仰げて之を見るに、正中最頂に社宮を飾り造り、垣四隅に有り、丹青石を以て其の四面に立つ。石の高さ一丈八尺許、廣さ三尺、厚さ一尺餘なり。石の門を立つると相去ること一尺、中に一重の高閣有り。石を以て構り營み、彩色の美麗言ふに勝ふべからず。望請はくは、齋き祭り、兼ねて官社に預らんと。從したまひき。以上『日本三代実録』(註 5)

これらの記事によると、富士山は天応元年（781）の噴火以降、延暦年間の末期と貞觀年間に大規模な噴火を起こしており、それに伴う火山灰の降下や溶岩噴出は多くの被害をもたらした。このような火山の働きを、当時の人々は神の力の発動とみなして一定の方法に基づき祭祀を行っている。それは、ト占・託宣により神意を判定し、それに対して鎮謝・奉幣するというものである。『日本紀略』延暦 21 年（802）の記事に「卜筮に求む」「兩國をして鎮謝を加へ」とあり、その祭祀の形は既に 9 世紀初頭には確認できる。9 世紀後半、『日本三代実録』貞觀 6・7 年（864・865）の記事も基本的に同じ脈略で、富士山の噴火活動を神の怒りによる神意発動とみなし、奉幣し祭祀を行い鎮謝するという形をとっている。これは、富士山の祭祀に限ったことではない。類似の事例を、出羽国大物忌神社・鳥海山と薩摩國開聞神・開聞岳で確認してみたい。

- ・貞觀十三年五月十六日辛酉、是より先、出羽國司言しけらば、從三位勲五等大物忌神社、飽海郡の山上に在り。巖石壁立し、人跡到ること稀に、夏冬雪を截き、禿げて草木無し。去る四月八日、山上に火有りて土石を焼き、又聲有りて、雷の如く、山より出づる河は、泥水泛溢して其の色青黒く、臭氣充満して人聞ぐに堪へず。死魚多く浮き、擁塞して流れず。兩の大蛇有り、長さ十丈ばかり、相流れ出でて海の口に入り、小蛇の隨ふ者、其の數を知らず。河に縁へる苗稼の、流れ損ふもの多く、或は濁水の臭氣に染み、朽ちて生たず。古老に聞くに、未だ嘗て此の如き異有らず。但し弘仁年中、山中に火見れ、其の後幾くならずして、兵杖の事ありきといふ。之を著龜に決するに、並びに、彼の國の名神禱りし所に未だ賽せず、又塚墓の骸骨、其の山水を汚ししに因り、是れに由りて怒を發して山を焼き、此の災異を致す。若し鎮謝せば、兵役有るべしと云ふと申しき。是の日、國宰に下知して、宿禰に賽し、舊骸を去り、并せて鎮謝の法を行はしめき。
- ・貞觀十六年七月二日戊子。地震りき。大宰府言しけらば、薩摩國從四位上開聞神の山頂に火有りて自ずから焼け、煙薰りて天に滿ち、灰沙雨の如く、震動の聲百餘里に聞こえ、社に近き百姓震恐して精を失ふ。著龜に求むるに、神封戸を願ひ、及び神社を汎穢せるに仍りて此の祟を成すなりと。勅して封二十戸を奉りたまひき。以上『日本三代実録』(註 6)

ここに見られる火山活動への対応は、基本的に富士山の場合と同じである。古代日本では、火山活動を神意の発動とみなし、ト占によりその原因となった神意を明らかにし、それに対処するために奉幣・祭祀を行うという流れが確認でき、律令政府は列島内の北から南まで、このような祭祀で火山活動に対処した。この祭祀構成は、古代における神の祟への対応と同じもので(註 7)、火山活動とそれに伴う災害・異変を、神の怒り「祟」と考

えていたのである。9世紀後半、貞觀年間の富士山の火山活動と、それに対処した祭祀は、その最も細かな記録が残る典型例ということになる。

貞觀7年、富士山噴火を契機に官社となった「浅間明神の祠」は、富士河口湖の河口浅間神社の起源と伝えられるが、その鎮座地周辺は、富士山そのものよりも貞觀年間に噴火した富士山西麓の側火山を一望できる場所である（註8）。つまり、火山活動に対する祭祀は、神の力が発動した場所、噴火した地点を望む形で祭祀を実施していた可能性が高い。富士山西麓の貞觀の噴火口と河口浅間神社との位置関係は、それを如実に表わしているのではなかろうか。

では、このような祭祀の形は、上記の史料以外にも確認できるのか、また、それは何時ごろから行われていたのだろうか。次に考古資料をもとに検討してみよう。

3. 考古資料から見た火山活動の祭祀

(1) 天武天皇13年の造島記事と東京都大島町和泉浜遺跡C地点

まず、火山活動に対する祭祀について、文献史料と考古資料から言及できる例から見ていこう。

天武天皇十三年冬十月、壬申(十四日)、人定に連りて、大いに地震る。国舉りて男女叫び賀ひて、不知東西ひぬ。

則ち山崩れ河涌く。諸国の郡の官倉、及び百姓の倉屋、寺塔神社、破壊れし類、勝て數ふべからず。是に由りて、人民及び六畜、多に死傷はる。時に伊豫湯泉、没れて出でず。土左国の田苑五十餘萬頃、没れて海となる。古老の曰く、「是の如く地動ること未だ曾より有らず」といふ。是の夕に、鳴る聲有りて鼓の如くありて、東方に聞ゆ。人有りて曰く、「伊豆嶋の西北、二面、自然に増益せること、三百餘丈。更一の嶋と為れり。則ち鼓の音の如くあるは、神の是の嶋を造る響なり」といふ。『日本書紀』（註9）

この記事は、四国で大規模地震が発生し多くの被害が生じ、地殻変動により広大な水田が陥没したのと時を置かずに、伊豆諸島周辺で火山活動が活発化したことを伝える。伊豆嶋の西北の海域で海中火山が噴火して新島が出現し、その火山・造島活動を神の仕業とする。この伊豆嶋が現在の伊豆大島とすれば（註10）、大島の西北海域で、7世紀後半の天武天皇13年（684）に大規模な火山活動があったことになる。

伊豆大島内で、この天武天皇13年の記事と関連すると考えられる祭祀遺跡が発掘調査で明らかになっている。東京都大島町に所在する和泉浜遺跡C地点である。この遺跡は、伊豆大島の北西海岸に立地しており、天武天皇13年に火山活動があったとされる海域を正面に望む場所である。

ここでは、昭和61年から平成7年にかけて、海洋信仰研究会・國學院大學考古学資料館が3次にわたり発掘調査を行い、東西10m、南北15mほどの範囲で第1～第5ブロックまで、5カ所の遺物集積を確認している（註11）。いずれのブロックからも、土師器・須恵器の他、鉄製刀剣類、鐵鎌が出土している。須恵器の多くは湖西産と考えられ、破碎された状態のものを含む。各ブロック中で第1と第4ブロックでは豊富な遺物が出土している。第1ブロックからは、須恵器杯類50点以上、土師器高盤2点・杯5点とともに、鉄製大刀・刀子片20点、鐵鎌19点、有孔短冊形金製品（金幣）2点、有孔短冊形銀製品（銀幣）2点、ガラス小玉1点が出土し、第4ブロックからは、須恵器杯類70点以上、土師器杯類8点・甕3点の他、鉄製直刀・刀子21点、鐵鎌29点、鉄矛1点、銅製六鈴鎧1点、銅製鎧1点、ガラス小玉28点・丸玉14点、石製鉗車1点が出土した。また、第2ブロックでは、伝統的な滑石製の勾玉と丸玉が集中して出土している。

出土した須恵器の型式は、湖西窯編年の第Ⅲ期第2小期から第3小期後葉で、報告は7世紀後半から8世紀初頭までの年代を想定しており、7世紀後半、40年程の時間幅で祭祀が継続したと推定できる。また、多くの遺物が出土した第1ブロックの湖西産須恵器は、「660年代に製作されたものを含み、680年代に収まるように思われる」としている（註12）。

鉄製品には刀剣・鎌・鉢の武器類、刀子の工具があり、紡織具の紡錘車が含まれ、武器・工具に紡織具から推定できる布帛類が加わる供献品のセットを復元でき、5世紀以来の伝統的な幣帛のセットが供されていたと考えられる（註13）。伊豆大島の北西海岸で、多量の須恵器に神饌・神酒を盛り、鉄製品と布帛類を中心とした幣帛

を供えたと推定でき、祭祀の後、これらの品々を遺棄した形で、この遺跡は残ったと推定できる。特に、第1ブロックでは金・銀幣が加わっている。この金・銀幣は、祭祀遺跡から出土する例は極めて稀で、特に丁重な幣帛として捧げたものと考えられる。そうすると、これを含む第1ブロックの祭祀は、特別な意味を持っていたと推定できる。出土須恵器の年代は、660年代から680年代となり、天武天皇13年(681)を含む時期となる。この遺跡の西北海域で、火山活動が活発化し新島が出現した時期と一致する。海中火山が噴火し、新島が形成されつつある海域を望む海岸で、幣帛を捧げて祭祀を継続的に行っていたと考えられ、多数の鉄製武器・工具と布帛類に、金・銀の延板(金幣・銀幣)を加えた供献品の内容は、この火山活動に対する祭祀に朝廷が供与した、丁重な幣帛の具体的な内容を示していると言えよう。

(2) 棚名山の噴火と群馬県渋川市宮田諏訪原遺跡

火山活動を対象としたと考えられる祭祀の事例は、考古資料では、さらに年代を遡る。5世紀代の明確な事例として、群馬県渋川市宮田諏訪原遺跡がある(註14)。この遺跡は、赤城山の西麓、利根川上流域に面する標高250mほどの台地上に立地する。遺跡内では、複数の火山灰層を検出し、5世紀末期~6世紀初頭の棟名渋川火山灰(Hr-FA)で埋没した祭祀跡13ヵ所、6世紀中頃の棟名伊香保火山灰(Hr-FP)で埋没した祭祀跡6ヵ所を確認している。棟名渋川火山灰(Hr-FA)で埋没した祭祀遺構からは、TK23~TK47型式の須恵器が出土しており、5世紀後半から末期の時期に集中して祭祀を行ったと考えられる。

棟名渋川火山灰(Hr-FA)層直下の祭祀遺構の中で、I区1号祭祀跡からは最も豊富な遺物が出土している。鉄製品は74点が出土し、鐵、小札、刀子、U字形鋒先、曲刃鎌がある。蛇紋岩製石模造品は166点が出土し、有孔円盤、劍形、勾玉形の他、刀子形、斧形があり、これに白玉482点が加わる。さらに、銅製小形変形乳文鏡1面、碧玉製管玉3点も出土しており、初期須恵器の双耳杯、土師器の高杯・杯・壺、ミニチュア土器等、多量の土器類が伴っている。

I区1号祭祀跡の出土遺物は、5世紀代の祭祀遺跡の典型的な供献品、鉄製武器、農・工具に、小形銅鏡と小札から推定できる甲冑が加わる点に特徴があり、ここでも丁重な供献品(幣帛)を供えていると言える。その豊富な出土遺物と、棟名渋川火山灰(Hr-FA)で埋没したという層位から、I区1号祭祀跡で最も活発に祭祀を行った時期は、5世紀末期から6世紀初期までに限定できる。また、宮田諏訪原遺跡の西、利根川を挟み直線距離で26kmほどに二ツ岳の噴火口があり、I区1号祭祀跡の祭りの場からは、棟名山二ツ岳の火山活動を望むことができたと推測できる。つまり、祭祀の執行者は、棟名山二ツ岳の火山活動が活発化し溶岩ドームが成長する姿を望みながら、噴火の直前まで丁重な幣帛を供え祭祀を行っていたと考えられる。この祭祀は二ツ岳の噴火と降灰で一時中断する。その後、6世紀代に祭祀は再開するものの、6世紀中頃、再び棟名山が噴火、棟名伊香保火山灰(Hr-FP)で埋没し祭祀は終息する。宮田諏訪原遺跡では、5世紀から6世紀にかけて棟名山の火山活動に対処するため、その火山活動を望む場所で継続的に祭祀を行っていたのである。そして、そこで供えられた多量の鉄製品には、甲の小札、当時最新のU字形鋒先、曲刃鎌があり、大和王權が供与した品であった可能性が高いだろう。

4.まとめ—古代祭祀と火山災害—

以上、古代の富士山への信仰と火山活動への祭祀について、文献史料と考古資料から見てきた。9世紀後半、貞觀6年の富士山噴火では、噴火を神の怒りの発動、祟と見なし、浅間明神の祠を立て奉幣し官社に列すといった丁重な祭祀が行い、火山活動の沈静化を願った。

『日本三代実録』は、貞觀6年7月17日の富士山噴火を伝える記事の直後、7月25日条に以下の内容を含む勅を記している。

國家を鎮護し災害を消伏するは、尤も是れ神祇を敬ひ、祭禮を飲むの致す所なり。是の以に格制頻りに下り、警告懲懟なりき。今聞く、諸國の牧宰制旨を慎まずして、専ら神主禪宣祝等に任せ、神社を破損し祭禮を疎慢ならしめ、神明其れに由りて祟を發し、國家此れを以て災を招くと(註15)。

ここからは、災害を防ぐ上で神々への祭祀が最も重要であり、その執行には律令政府と地方国司は一定の責任を持つという考え方がある。9世紀代には存在していたことが窺える。そのために、災害が発生すれば、その原因となつた神意を占卜で判定し、朝廷からの幣帛を捧げ丁重な祭祀を執行したのである。これと同じ構造は、7世紀後半の和泉浜遺跡C地点や5世紀後半の宮田諏訪原遺跡の祭祀でも窺える。和泉浜遺跡C地点の金・銀幣と鉄製武器・工具、宮田諏訪原遺跡の鉄製武器・武具、農・工具は、大和王権からの供与を推定でき、東国で発生した火山活動・災害に対しても、大和王権は幣帛を供与し、地方首長は祭祀を執行するという責務を負っていたと考えられる。結局、9世紀代に富士山などで確認できた、火山活動とそれに伴う災害に対処する祭祀の構造と系譜は、7世紀後半の和泉浜遺跡C地点や5世紀後半の宮田諏訪原遺跡の事例から、7世紀後半代、さらには5世紀後半まで遡及すると考えてよいだろう。

5世紀後半という時期は、大和王権の中で国家領域の意識が明確化した時期と考えられる。埼玉県行田市稻荷山古墳出土鉄劍銘の辛亥年はAD 471年と考えられ、その銘文には「大王」と「治天下」の文字を刻んでいる(註16)。つまり、この段階には、大王が統治する天下という国家の領域意識が形成され始めていたと考えてよい。この国家領域内で発生する災害に対しても、大王は地方首長とともに一定の責任を負い、地方首長が執り行う祭祀に、大王(大和王権)は供獻品(幣帛)を供与する構造が形成されていたのではなかろうか。少なくとも、火山活動とその災害に関しては宮田諏訪原遺跡の事例から、5世紀後半には、そのような祭祀の形が存在した可能性が高い。古代、富士の神、浅間明神は噴火を繰り返し、災害をもたらす祟る神としての侧面を顕著に見せるが、それに対処する祭祀は、ここで見たように5世紀以来の伝統を背景としていたと言つてよいだろう。また、その信仰は、自然に恵まれる一方で、多くの自然災害も発生する日本列島で、人々が自然災害をどのように見て、いかに接してきたのかを如実に物語っていると言える。

続く10世紀以降、古代祭祀の形は大きく変容する(註17)。恐らく富士山に対する信仰も同様だったのだろう。山林修行の僧侶などが直接、富士山に分け入るようになり、13世紀には山頂の三島岳經塚が築かれ(註18)、富士山は新たな信仰の形態を築いていくことになるのである。

註・参考文献

- 註 1) 大場磐雄『祭祀遺跡』角川書店 1970
註 2) 秋本吉郎校注『日本古典文学大系 風土記』岩波書店 1958
註 3) 新訂増補國史大系『續日本紀 後篇』の原漢文を筆者が読み下し。
註 4) 新訂増補國史大系『日本紀略 第二(前篇下)』の原漢文を筆者が読み下し。
註 5) 武田祐吉・佐藤謙三訳『読み下し 日本三代実録(上巻)清和天皇』戎光出版株式会社 2010
註 6) 註 5) 同じ。
註 7) 岡田莊司「天皇と神々の循環型祭祀体系—古代の崇神ー」『神道宗教』第199・200号 神道宗教学会 2005
註 8) 河口浅間神社の周辺では、奈良・平安時代の墨書き器「匁」や製塩土器を含む遺物が多数出土しており、古代官道の駅、「河口駅」と関連する遺跡である可能性が指摘されている。
杉本悠樹「富士河口湖町河口 西川遺跡の調査成果について(報告)」『山梨県考古学協会誌』第19号 2010
杉本悠樹「富士河口湖町西川遺跡出土の古代製塩土器について」『山梨県考古学協会誌』第20号 2011
註 9) 坂本太郎・井上光貞他校註『日本古典文学大系 日本書紀 下』岩波書店 1965
註 10) 註 9 文献の翻訳では、「伊豆大島か」としている。
註 11) 國學院大學考古学資料館と泉浜遺跡C地点学術調査団「伊豆大島 和泉浜遺跡C地点—第2次・3次調査の概要—」『國學院大學考古学資料館紀要』第12輯 1996
註 12) 註 11) 同じ。
註 13) 笹生 衛「古墳時代における祭具の再検討—千束台遺跡祭祀遺構の分析と鉄製品の評価を中心に—」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第2号 2010
註 14) 『宮田諏訪原遺跡I・II 平成13・14年度緊急地方道路整備(A)下久屋渋川線道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書一様名山噴火軽石・火山灰に埋没した古墳時代祭祀遺跡一』群馬県勢多郡赤城村教育委員会 2005
小林 修「東国における古墳時代祭祀の一形態—宮田諏訪原遺跡I区1号祭祀跡の検証—」『日本考古学』第27号 日本考古学協会 2009

- 註 15) 註 5 に同じ。
- 註 16)『埼玉稻荷山古墳』埼玉県教育委員会 1980
『埼玉稻荷山古墳辛亥銘鉄劍修理報告書』埼玉県教育委員会 1982
- 註 17) 岡田莊司編『日本神道史』吉川弘文館 2010
- 註 18) 関秀夫編『経塚—関東とその周辺』東京国立博物館 1988

第4節 山梨県の山岳信仰遺跡

櫛原 功一（帝京大学山梨文化財研究所）

1 はじめに

本稿は山梨県内の山岳信仰遺跡を概観し、富士山信仰との関わりを考えるものである。富士山については、従来の研究成果の蓄積と今回の山麓各地での試掘の成果に委ねることとし、富士山を除く県内の山岳信仰遺跡の分布、内容、地域的な傾向を整理する。

ところで、「山岳信仰遺跡」とはどのような遺跡を指すのであろうか。一般的に「山」は平地よりも高く隆起した地形、谷と谷に挟まれた凸起部を指し、「山岳」とは山の複合的な状態をいい、著しく隆起した山という意をもつが、「山岳信仰遺跡」の場合の山岳とは、自然地形としての「山」全般を指し、山麓から山頂までの山に存在する信仰遺跡、と理解したい。「山岳信仰遺跡」の用語には、山岳信仰に関する遺跡、あるいは山岳に所在する信仰遺跡、と2通りの捉え方ができるが、ここでは後者の立場をとる。

「信仰遺跡」認識の基準としては、信仰・祭祀に関する遺構、遺物の存在を第一義とし、磐座や経塚、山岳寺院跡などが該当する。副次的には山中の場に信仰関連地名、祠や寺社、信仰に関する史料・伝承・石造物、信仰の場にふさわしい自然要素（巨石、奇岩、窟、滝、池、川、湧水、温泉、樹木など）などが存在し、山容・地形・景観・眺望などその場の雰囲気が神聖を帯びるとき山岳信仰遺跡として認識可能で、山中の遺構、遺物と密接な関わりをもつことが明らかなとき歴史性に鑑み、総合的に判断して山岳信仰遺跡と呼びうる。つまり山中でテラス群などの遺構、生活廃棄物などの遺物が発見されただけでは信仰遺跡と認定することは難しく、副次的な要素を作りうる場合に信仰遺跡とができるだろう。また山岳信仰では山を神聖視して人為的な造成痕跡（遺構）を残さないことがあり、通常の遺跡とは異なる判断基準を要する。

山岳信仰遺跡は山中の遺跡が単独、自立的に存在したのではなく、遺跡の性格にもよるが、周辺山中のいくつかの関連遺跡からなる遺跡群として存在する事例や、いくつかの異なる要素が遺跡群のセットとして存在する事例があり、それらは山麓の山口から山頂に至る山道の中に意味をもって配置する。時期的に限定的な遺跡もあるが、たいていは遺跡として時間幅をもつ場合が多い。麓に目を転じると、信仰心を寄せた人々の居住、生活域が山麓から平地、川の流域に存在し、山中の活動を通じて里と山とが結びつき、山での宗教活動を支える経済基盤となる。視覚的には里から山を望むことができ、逆に山から里を見下ろすという可視性を認めうことが多い。山麓に里と山との仲立ちをする寺社や御師の存在をみると、山宮、奥の院が山中に残ることがある。また、一定の地域内の信仰遺跡が関係をもつという指摘もあり、広域的な関連性にも目配りする必要もある。

山梨県内の山は、甲府盆地を取り囲むように連続的に存在し、県西部に南北に連なる南アルプス（赤石山脈）、県北部の奥秩父、北西にある八ヶ岳、静岡県境の富士山を主とし、奥秩父から南にのびる大菩薩連嶺、笛子峠以西の御坂山地、本栖湖付近以南の天子山地、郡内方面の道志山塊などが分布するが、ここでは北巨摩方面、南巨摩方面、甲府盆地北東部、御坂山地・郡内方面にわけて説明する（遺跡番号は図1の番号と対応する）。

2 北巨摩方面的山岳信仰遺跡

赤岳（2899 m）を主峰とする八ヶ岳の權現岳（2715 m 1 櫛原 2003）は、八ヶ岳信仰の中核的な山である。山頂には檜峰神社の石祠を祀り、周間に胎内ぐりなどの行場がある。昭和57年に社殿遷座のため石祠を移したところ、石祠台石下から雞籠3、劍形鉄製品2、不明鉄製品3、北宋銭4が発見され、さらに同地点の石祠脇の崖より和鏡1、雞籠1、開元通宝1が採集された。八ヶ岳信仰は近世以降、南麓を中心に八ヶ岳講として地域的な発展をみたもので、和鏡、雞籠、錢貨の存在から中世段階の様相を權現岳の遺物に見出すことができる。

南アルプスの地蔵ヶ岳（2764 m 2 萩崎市 2011）は、山頂のオベリスクとも呼ばれる三角錐形の特徴的な岩塔が特徴的で、北側には石空川、東側にドンドコ沢が流下して多数の滝を形成し、川の源流、滝、岩塔を山岳信仰の構成要素とする。現在、地蔵ヶ岳、觀音岳、薬師岳の三峰を総称して鳳凰山（三山）と呼ぶが、近世には現在の地蔵ヶ岳のみを鳳凰山といい、岩塔をくちばしに見立て、翼を広げた鳳凰に擬す説のほか、大日岩、地蔵



図1 山梨県の山岳信仰遺跡分布図

岩、オオトンガリ、鳥岩という呼び名をもつ。大日岩という名称は岩塔そのものを胎藏界の中心、大日如来とみるもので、地蔵岩とは岩塔の姿から生じた名称であるが、岩塔西側には花崗岩の風化した砂礫地「賽の河原」に地蔵石仏群があり、岩塔が近世以降、地蔵信仰と結びついたことを示している。『役行者本記』に役行者開山として記載されることから、室町期にはすでに修験系靈山であったらしい。高さ約20mの花崗岩の岩塔南面には「鳳凰山大神」等の石龕を祀り、「天文云々、大日云々と刻された小石龕と仏像六体を見た」とあるが(辻本1908)、現在文字は判読できない。また『鰐中紀行』には山頂の祠に掛鏡(懸仮)があったと記すが、現在、岩塔直下の鳳凰小屋周辺で採集された直径30cmの大日如来懸仮が個人蔵として知られている。鳳凰小屋は「北御室小屋」と呼ばれ、山岳寺院があったといわれるが、甲府市桜井町の鳳凰山東禪寺は武田信虎が鳳凰山の山頂から下したと伝える鎌倉期の宝冠駈迦像を本尊とする。岩塔及び賽の河原では、雜鎌10のほか剣形鉄製品などの鉄製品、銭貨等の信仰遺物が発見されている。銭貨は岩塔南側に主に分布し、中世段階で奉賽銭を伴う岩塔参拝が岩塔南面を中心に行われたことを示す。また賽の河原では18世紀後半代とみられる寛永通宝銭に限られ、場の形成時期を示している。

甲斐駒ヶ岳(2966m 3 柳原2003)は南アルプス北端の独立峰で、将棋頭形の山容を特徴とする。大武川上流の横手駒ヶ岳神社・尾白川上流の竹宇駒ヶ岳神社の2箇所を登山口とする黒戸尾根ルートを正式な登拝ルートとし、山頂には駒ヶ岳神社本宮・奥の院を祀り、文政年間に弘幡行者によって駒ヶ岳講が成立し、今日に至るまで盛んに信仰登山が行われた結果、山中には夥しい数の比較的新しい講閑連石造物や剣形鉄製品などの奉納品を祀る。昭和63年に山頂の三角点設置場所付近で採集された土器は無文で、時期は定かではないが胎土・色調から縄文後期と推定され、日本最高地点発見の縄文土器かと話題になった。また平成14年には、同地点で先に採集された土器と同一個体とみられる台付土器の脚部片を得ている。文様が明確でないが、古墳時代台付窯の可能性が高く、山頂への意図的な土器の置き去り、遺棄とみなして山岳信仰の初期の例として扱われている。

富士山に次ぐ高さを誇る**北岳**(3193m 4)は「白峯三山」のうち北側にあることから北岳といわれ、『役行者本記』には役行者開山の靈山とされるが歴史的には新しい。寛政7年(1795)に白根大日如来を祀り、明治2年に芦倉の行者、名取直衛が官許を得て登山道を開き、甲斐ヶ根神社を祀ったという。芦安芦倉には高さ9.5

cmの銅製大日如来像があり、明治中頃までは山頂石祠内に祀られていたといわれる。懸仏の鏡板に付けられた半肉彫りの本尊像で、室町以前に遡る資料である。

苗敷山（1037 m 5 莊崎市 2011）は莊崎市旭山にあり、麓には式内社比定の穗見神社里宮が鎮座し、山頂に奥宮がある。奥宮までの参道には元禄4年（1691）に整備された丁石が立ち、十三丁目には寛文4年（1664）の石鳥居が立つ。山頂境内は穗見神社奥宮と廃仏毀釈により消滅した苗敷山宝生寺の神仏混合した宗教空間で、山門跡・隨神門跡・鐘楼跡・客殿・庫裏跡の礎石群やテラスが残る。平成13年、奥宮裏手から北側の山頂付近で行われた林道建設の際に斜面で豎穴断面が見出され、発掘調査の結果、10世紀後半を主とする重複した豎穴住居6軒分が検出された。出土遺物には燈明痕をもつ土師器が目立つか、墨書き器、縁釉陶器碗がある。現在残る奥宮は元文元年（1736）の社殿を明治・昭和に修復したもので、礎石群は出土陶器類から19世紀中頃をピークとするが、いくつかのテラスに10世紀代の土師器片が分布し、奥宮拝殿床下で採集された三筋壺片は12世紀後半、奥宮にあった推定三宝荒神の明王形立像は13世紀前半で、応安2年（1369）、永正6年（1509）銘の石灯籠竿の存在から、10世紀後半以降、中世から近世にかけて山岳寺院として成立、発展したと考えられる。苗敷山の山容には大きな特徴がないが、甲府盆地の開拓と稻作伝播に関する六度仙人の伝説をもち、甲府盆地の湖水伝説に関連するほか、背後の権池や湿地祭祀との関連性が指摘されている。また苗敷山は鳳凰三山の前山として修験ルートの起点となる山と考え、甘利山、千頭星山、天狗岩の岩屋（窟）、薬師岳磐座下の岩屋などをルート上に置く説がある（山本2011）。

苗敷山周辺の標高1000m付近の山中にはいくつかの池が信仰の場となっているが、御勤使川支流の御庵沢の水源にあたる**大笹池**（6 齋藤2011）は、御勤使川流域の原七郷と呼ばれる地域の雨乞いの池であった。原七郷から大笹池に向うルート上には善応寺があり、観音堂に祀られている一本作りの平安仏は池中から出現したという伝説をもち、境内では経塚が見つかっている。同様に雨乞いの池と知られる事例に御坂山地の事例ではあるが市川三郷町の**四尾連池**（7）があり、祈雨祈願に牛馬骨を投げ込んだといわれる。

山岳信仰に含めるかどうか微妙だが、八ヶ岳の泥流が釜無川の浸食により断崖を形成した七里岩先端には董嶋窟觀音（仏窟山雲岸寺）がある（370 m 8 柳原2006）。南向きの断崖をえぐって二つの四角い窟を設け懸造の拝殿としていて、富士山の眺望がよい。天長5年（828）の創建と伝え、現在の建築は寛正6年（1465）に懸造として造られたのち、正徳5年（1715）以降、修復が繰り返されたといわれる。そのほか七里岩にはいくつかの窟状の穴があり、例えば烏帽子岩は「方三歩許リノ岩窟アリ昔一禪僧アリテ此ノ窟ニ座禪シ遂ニ此ノ潭ニ身ヲ投ジテ滅ヲ取リ」（『甲斐国志』）と記すように修行窟として利用された窟が存在する。

山中の窟としては北杜市須玉町黒森の**岩屋觀音堂**（1250 m 9 柳原2008）が知られる。幅10.1 m、奥行7.6 mの自然窟を利用し、逆V字形の窟を軸として開き戸をもつ一面の板壁を設置し、窟全体を堂に見立て、窟奥に如意輪觀音を祀る。板壁裏には幕末（天保、弘化、安政等）の參拝記念墨書が多数残り、參拝者の来歴を知ることができる。この窟で注目されるのが窟上部の岩が高く隆起することで、窟を陰、突出した岩を陽として陰陽合体した岩場を一周し觀音石仏を巡礼しつつ、岩場に取り付いて頂に至る禪定体験の場となっていて、甲府市岩堂觀音と同様、近世に栄えた觀音靈場の一例といえる。

3 南巨摩方面の山岳信仰遺跡

身延山（1153 m 10）は文永11年（1274）、南部（波木井）実長の招きで鎌倉から入った日蓮が庵室を構え居住した地で、弘安4年（1281）に大坊を建立して久遠寺と命名した。当初、西谷にあった堂宇は、十一世日朝上人が文明6年（1474）に身延山中腹を造成して現在地に移し、伽藍整備を行ったといわれる。その後、近世になると紀州・水戸家や加賀前田家などの帰依で繁榮し、東谷、西谷などに多くの子院が成立して今日に至るまで日蓮宗總本山として大いに隆盛した。境内から山頂奥の院思親閣に至る参詣道沿いには丈六堂、大光堂、法明坊を配し、道沿いには三十六、三十七、三十八丁目に寛永13年（1636）建立の板碑型丁石が残り、七面山や苗敷山の丁石造立に影響を与えたものと思われる。久遠寺裏手にあたる「上の山」には各地の大名供養塔や、信徒の数千基もの石塔類が存在し、寛文期に本堂の諸堂宇が移転した地区として本地堂、鬼子母神堂などがあり、

その一帯を中心に多数のテラス群が存在し、坊院群の変遷をうかがうことができる。

身延山の奥の院として控える七面山（1982 m 11 七面山 2011）は、早川支流・春木川上流に登山口があり、対岸には白糸の滝、雄滝の2つの名瀑が存在する。身延山山頂の奥の院から感應坊を経て赤沢宿に至り、滝での禊のち七面山を目指すのが正式とされ、急な尾根道を約3時間かけて登ると、山上の七面大明神を祀る敬慎院に至る。その間五十丁で、初丁目から敬慎院山門までの間に1丁ごとに丁石が立ち、途中に神力坊、肝心坊、中道坊、晴雲坊がある。敬慎院の建物群は一の池の東側に配置し、その東側の一段高い位置に建つ隨身門前方には真正面に富士山がそびえ、富士山からの御来光を遙拝する場となる。彼岸の中日には富士山頂から隨身門を通って敬慎院の本堂に光が差し込む仕組みとなっていて、背後の池を祭祀の中心としつつ、富士山遙拝を強く意識した計画的、意図的な空間構成を示す。また北方には七面大明神出現の伝えをもつ影向岩を祀る奥の院があり、やはり富士山遙拝の場となっている。このように山岳信仰の典型的な構成要素としての白糸の滝、雄滝、一の池、影向岩に加え、富士山遙拝という要素を加えたところに大きな特徴がある。

七面山信仰はもともと山上の池を祀る水神信仰に起源をもつ山岳信仰とみられるが、身延山信仰に組み込む過程で、日朗上人が波木井実長の案内で永仁3年（1295）9月19日に登ったという開山伝承が生まれ、とくに徳川家康の側室、養珠院（万）が七面山參詣を行い女人禁制を解いてから日蓮宗信者の登拝が急増したという。慶安4年（1651）の七面山の所有を巡る赤沢と兩畠の境争論のち久遠寺管理下となると山上堂社の整備が進み、方が承応2年（1653）に亡くなり本遠寺に葬られたのち、七面山の登拝道沿いには結縁を求めた人々が供養塔の題目塔や、供養塔を兼ねた丁石を各丁目に建立し、登山道が急速に整備された。七面山参道の供養塔としては承応3年（1652）例を最古とする板碑型町石が出現し、元文3年（1738）には角柱型丁石に立て替えが行われ、文政年間（あるいは文化年間）に石灯籠型町石へと大きく変身し、それを受け継ぐように平成21年に真新しい石灯籠型丁石を設置している。山中には中世に遡る石造物が存在しないが、登り口の明淨院裏の墓地に承応4年（1653）以降の多数の石塔類とともに青石（緑色片岩）製の武藏型板碑が存在する。長さ70cm、幅20cm、厚さ2.5cmで、梵字キリーグの下に「正和元年十一月日」（1312）と陰刻する。開山伝承に合致する資料として重要視すべきではあるが、県内では板碑が富士川以西で未発見なうえ、国中地域に数例知られる事例については由来が疑問視されていて、本事例に関しても確認時の状況から後世の持ち込みの可能性が指摘されている。ただ赤沢集落にある妙福寺はもと真言宗妙福庵といい、建治3年（1277）に日朗上人により日蓮宗に改宗したと伝え、また祭神、子安八幡大菩薩像には天福元年（1233）の銘があるとされ、早くから七面山が開かれていたと考えられることから検討を要する。

篠井山（1394 m 12 山梨県 2003）は富士川右岸の南部町にあり、山頂からは富士山を東に望む景勝地で、甲斐国司の從四位凡河内躬恒にちなんで「四ノ位山」ともいわれる。山麓には南部町御堂、楮根、成島の3集落に登山口があり、山頂には各集落が祀る篠井（四ノ井）大明神の社が3つあり、かつては雨乞い祈願が行われ、成島の登山口にある要行寺と定隆坊は篠井山信仰の拠点であった。明治24年（1891）、楮根集落が管理する祠の下から経塚が発見され、12世紀中頃の渥美窯の藤原顯長・惟宗遠清銘短頭壺のほか、12世紀後半の渥美窯、13世紀中頃の常消費および「唐銅ノ蓋」が木炭を充填した礫郭内から見つかり、少なくとも2基の経塚が存在したと考えられている。藤原顯長は正五位下三河守で仁安2年（1167）に没し、三河国では国司写經を行ったことが知られるが、顯長銘の壺は三島市の鶴田村経塚、伝鍊倉出土例、神奈川県綾瀬市宮久保遺跡例があり、富士山を取り巻く分布から富士山遙拝地での理縁とみる説がある。そのほか、山頂東の満願寺跡には「妙法蓮華経石」（元禄7年 1694）の石塔が立ち、周辺から一字一石経石が見つかっている。『篠井大明神縁起』（宝永7年 1710）によれば、山中の寺平に龍扇禪師が住み、一字一石の法華經理納を行ったという。

4 甲府盆地北東部の山岳信仰遺跡

甲府盆地の北、長野県境をなす奥秩父山塊の主峰が甲斐金峰山（2598 m 13 樞原 2010）で、甲府盆地からは「五丈岩」の突起が目印となる。五丈岩は山頂近くにそびえる高さ約20mの花崗岩岩体で、太平洋側へ注ぐ笛吹川支流の荒川と日本海へ注ぐ千曲川の「水ノ元種」といわれ、磐座祭祀と水源が結びついている。五丈岩

には、かつて南側に金桜神社本宮があり、文武天皇2年(698)年に金峯山蔵王権現を勧請し、開山については役行者の入山縁起、智賀上人円珍による弘仁7年(816)4月8日または仁寿元年(851)3月11日の開山縁起をもつ。五丈岩の名称は「蔵石」、「御影石」、「御像石」と変遷し、「五丈岩」となったのは昭和以降のようである。

五丈岩の本宮(山宮・奥の院)をめぐる登拝道、「御岳道」は甲斐国内に東・南・西口の九口があり、別に信濃側(川上村)に北口がある。主な山口には里宮として3つの金桜神社(袖口金桜神社、万力金桜神社、御岳金桜神社)があり、とくに南口を統括する御岳金桜神社(14)は中世以降、御岳信仰の中心として栄えた。末社、末社は120ともいわれ、山中には滝尾社、飛化頭社、湯谷社、荒川社など水に関わる祠が多い。御岳金桜神社にはかつて3つの宮が並び、境内の鐘は中世以来、「起請の鐘」「秘訣の鐘」として広く知られ、近世には御岳講、御岳代参講で賑わい、「祈願場」と呼ぶ配札團は信州・武州・駿河・伊豆などに広がっていた。昭和30年に焼失した中宮は室町期の建築で、江戸中期の修復が著しく、東宮は室町期の建築で、内陣に江戸期の厨子を置く仏堂風の建築、神楽殿は1854年に再々建された建物である。境内東側の南北軸線上に仁王門、東宮(弥勒堂)、鐘楼、西側の南北軸線上に隨神門、神楽殿、方屋、里宮本社などを配し、仁王門と隨神門が東西に並び、東を仏堂空間、西を神社空間とする神仏混合の軸線構造を採用している。

境内には修驗の流れをくむ弥勒寺(上之坊)をはじめとする6坊があり、社僧、神主、社人で三派組織を構成したといわれるが、東の仏堂空間が弥勒寺である。記録によれば境内「弘法堂」という空海滞在を伝える地に永禄2年(1558)一寺を設け、慶長年中に「弥勒寺」となった。神主家が享保年間(1716~35)に吉田・白河家から神道裁許状を得て急速に神道化すると次第に社僧の姿は消え、弘化3年(1846)頃には無住となり、弥勒寺の坊舎は大破、荒廃した。その後の廃仏毀釈で弥勒寺の仏像・仏具を集めて残らず焼き捨て、天井、板戸、障子、板敷の類、門扉、石敷まで売り払ったという。『甲斐国志』によれば6月15日はかつて行なわれた峯入りの初日で、役行者が水無月(6月)16日に開山したという縁起にちなんだりが、修驗の詳細は不明である。なお神社境内で10世紀前半代の墨書「上」をもつ土師器皿が採集されている(柳原・岡野1994)。

金峰山では五丈岩南側(本宮跡)、五丈岩北側(「甲斐派美」)、五丈岩西側(千代の吹上)、薬師岳周辺、金峰山小屋(長子の番所、山宮奥の院牛頭天王社跡)のほか、勝手社跡、御室小屋周辺などに遺物が分布する。五丈岩周辺では刀子・火打ち金・鉄製馬形・御正体・鉄鏡片・錢貨・灰釉陶器瓶子、壺、土馬、水晶数珠玉、土製容器片、中世陶器腹片などがあり、とくに五丈岩北側の「甲斐派美」と呼ばれる岩陰から発見された蘋彫り宝相華文をもつ金銅製円盤は特筆される。直径12.7cmの円盤で、縁に2つの孔を穿ち、真ん中で強く折り曲げており、12・13世紀の何らかの金属製品の鏡板への転用品である。10世紀代の灰釉陶器については経塚以前、五丈岩祭祀の初期段階の遺物である。経筒外容器片と思われる土師質土器片や中世陶器片があることから、12世紀頃に埋経の場であったことは確実で、水晶玉も経塚遺物であろうか。中世段階の遺物には北宋錢を中心とした錢貨が各地点で発見されており、富士山と同様に撒き錢行為が認められる。土馬については時期が不明確ながら中世~近世初頭の祈雨祭祀に関わる遺物と推定でき、鉄製馬形も同様な性格であろう。勝手社跡(2200m 15)は「弁慶の片手回し」と称する高さ15mもの卵形の巨岩を御神体とした磐座の脇にある祠跡で、土鈴2、鉄製刀子1、古銭37が発見され、その内訳は天聖元宝1、古寛永2、新寛永34で、18世紀代前半をピークとする。

御岳金桜神社周辺には窟が多い。甲府市猪狩の昇仙峡ロープウェー乗り場のある城山南麓には複数の窟があり、「官遊紀勝」(功刀2003)にも「左り谷の山ぎしに穴のあきたる所あり」とある。八王子嶺に登る途中の窟では鉄鏡の寛永通宝が見つかった例がある。羅漢寺山にある旧羅漢寺跡の裏手、南面の山腹には3箇所の大きな岩陰があり、「一の岳」「二の岳」「三の岳」と呼ばれている(850~900m 16)。自然の岩陰で、内部に壇状の構築を施し、多量の五輪塔、卵塔を主とした石造物を配置する。羅漢寺所有の五百羅漢像は、以前は岩陰の堂に祀られていたとみられ、像の墨書には応永3年(1423)から元亀3年(1572)までの年号、参拝者名等を記す。五輪塔内に焼骨が残る例があり、納骨所的なあり方を呈している。そのほか御岳金桜神社の東側、天狗山の西面に巨大な岩陰があり、岩底の内側には金桜神社周辺の末社のひとつ、白山社が鎮座する(940m 17 柳原2006)。

山梨市牧丘町の榎口金桜神社奥社地遺跡（1000 m 18 山梨市 2006）は榎口金桜神社旧社地で、笛吹川上流、東御殿（1487 m）西麓に位置し、御岳道、榎口ルートに近い。現在、榎口の米沢山雲峯寺境内に榎口金桜神社、勝手・子守社があり、社記等によれば山中の旧社殿は天正年中火災により諸堂の大半を焼失、一説には天正10年（1582）織田勢の川尻秀隆により焼失したのち、吉野平（二本松）を経て正徳2年（1712）に現在地に移転したといい、寺記に智証上人円珍を開山とするのは『金峯山縁起』と同じである。奥社地遺跡には南に開けた緩斜面に大小23面のテラス群が存在し、南北方向を軸線とする2つの遺構群が展開する。西側には3棟の礎石建物群をコの字状に配置したテラス南側に細長い石段がのび仏堂域を構成するが、三堂配置は天台寺院に特有な中堂・法華堂・常行堂の三塔配置の系譜を引く。また東側には近世の割拝殿跡から最上段の奥社までの間に石段を整備し、神社域と寺院域が東西に並列した空間構造と推測でき、近世御岳金桜神社の空間構成と共通する。発掘調査の結果、10世紀前半の土師器を最古の遺物とし、11～13世紀前半に山寺が営まれ、15世紀以降、東側の神社域のみが維持されたようである。なお奥社地遺跡の南側にはテラス群が存在し、それらも閑連遺構の可能性がある。

奥社地遺跡と関連するのが柏尾山経塚（19）出土の康和5年在銘経筒である。昭和37年、甲州市勝沼の大善寺東の白山平で偶然発見された経筒には783文字の銘文があり、山城国乙訓郡石上村出身の勧進聖寂円が63歳で出家し、康和2年（1099）正月頃から「甲斐国山東郡内牧山村米沢寺千手觀音宝前籠居」し、如法經書写を発願、康和5年（1103）4月22日「同山東土白山妙里之峯」に埋納するまでの経緯を記している。文中「山東郡内牧山村米沢寺」は、山梨東郡内の牧山村の米沢寺という意ではあるが、「中」を「ウチ」とも読むことから「中」の誤字とみるならば「中牧山村米沢寺」となる。榎口雲峯寺は山号を米沢山といい、柏尾山大善寺を「柏尾山寺」というように「米沢寺」を米沢山寺と換言すると、雲峰寺の故地、金桜神社奥社地遺跡が中牧山村米沢山寺に比定できる可能性が高い。

山梨市三富町の乾徳山（2031 m 20）は夢窓国師の一夏面壁の地といわれる。応長元年（1311）に龍山庵（淨居寺）に隠棲し、のちに惠林寺を創建するが、その頃乾徳山で修行したといわれ、山頂西側の岩場に国師座禅窟と伝える窟がある。また道満尾根、國師ヶ原、賽の河原、極楽平などの地名、座禪岩、雨乞岩、月見石などの巨岩が点在し、登山口には明和8年（1771）勧請という乾徳神社、山頂に石祠の奥宮がある。山腹にはヒュッテ裏の登山道沿いに石垣を作ったテラスがあり、細長く石段がのびている（1680 m）。テラス中央には磐座とみられる巨岩「子抱き石」があり、以前には山小屋があって「前宮」と呼ばれ、昭和初期まで萱葺、籠堂形式の山小屋があり、夢窓国師の木造を祀っていた（原1935）。磐座をもつ山岳寺院と思われる。登山道脇には役行者の石像があり、付近には錦晶水という水場がある。

笛吹市・山梨市境にある兜山（913 m 21 兜山 2005）は、推定甲斐国府の北側背後の山並みに構える神奈備形の山で、山腹を巻く岩場に窟、水場、山房跡をもつ小規模な山房跡である（730 m）。窟は南向きの断崖にある円い人工窟で、間口幅2.8 m、高さ2.2 m、奥行き4.1 mを測り、窟前面に小テラスを伴う。窟内には炭化粒を多く含む黒色土が堆積し、その表面に10世紀代の土師器片が見られ、時期がわかる人工窟としては最古級である。西側尾根上には水場の窟をはさんで小テラス3面があり、最上段のテラスには礎石が存在する。水場の窟と山房をつなぐ岩場には明らかに人工的に削出した通路があり、テラス周辺から山の斜面直下を中心にして10世紀前半～中頃の細片化した多量の土師器片類、少量の甕類が分布する。窟からは甲府盆地東部一帯を一望に收め、御坂山地から頭を出した富士山は視界の右端に位置する。

兜山東側には夕狩沢をはさんで妙見山があり、山腹に妙見社（櫛原2006）がある。妙見山は兜山よりひとまわり小さいが、神奈備形の山容を呈している。登拝道には丁石が11丁まで配置され、山腹には巨大な岩場に懸造の拝殿が建つ（585 m）。甲府盆地を一望する拝殿からの眺めは良好で、御坂山地越しの富士山を視野中央に配し、富士山の眺望、通拝を明らかに意識している。断崖状の岩場上方には磐座状の巨石がある。拝殿西側の道の痕跡を辿ると前面にテラスをもつ南向きの窟が存在する（566 m 22）。窟内には炭混じりの黒色土が堆積し、内部で火を燃した跡がある。

妙見社東に隣接する大平山（柳原 2006）には、山麓に御天狗様とも呼ばれる八嶽神社里宮があり、祭礼時に雨乞い儀礼の呪文唱和が行われるという。そこから山道沿いに上ると山腹の巨岩南面に土蔵造りの奥宮社殿(542m 23)があり、典型的な巨岩祭祀の神社といえる。

山梨市西の大石神社（24）は、巨石の点在する大石山を境内とし、頂上の磐座とみられる巨岩の岩陰に本殿がある。岩手明神ともいい、武田信昌の子、四郎繩美が岩手氏を名乗り、その子能登守信盛が神社を建立したというが、式内社物部神社に比定する説があり、社殿改修の際に中世土器片が採集されている。

山梨市牧丘町の隼地区には国道沿いに石灯籠が立ち、隼穴観音窟（25 柳原 2006）がある。『甲斐国志』には「雛ノ大土ノ窟横ハ七間深さ十間、大黒ノ窟ハ方二間許り」とあり、2つの窟が存在する。大士の窟（480 m）は南東向きで前面にテラスがあり、間口が半円形で、幅 4.7 m、高さ 3.3 m、奥行き 7.5 m と大きく、窟内に石仏などがある。自然窟で、壁面の一部に手を加え、四角いぼぞ穴を穿つことから、窟内に堂社があったことがわかる。大黒の窟は軟質の岩盤に幅 4 m、高さ 1.8 m、奥行き 4 m の四角い彫り込みを行い、奥壁には高さ 80 cm、奥行き 55 cm のベンチ状の壇を彫り残したもので、形態的には「やぐら」に類似するが、本来は小諸市布引觀音堂に見るような建物を伴う構造であろう。大黒の窟の類似例に山梨市万力の福聚山靈岩寺があり（350 m 26）、平地の集落に近い崖面に大きな四角い人工窟を穿ち本堂とし、ノミで削ったままの壁面を室内空間とし屋根をかけている。穴觀音として親しまれ、創建は慶長 8 年（1603）以前とされる。

山梨市牧丘町の小橋山南側の妙見山には上人岩窟（27 柳原 2006）があり、この窟で西源寺の觀音像 133 体が彫られたと伝える。現在、妙見山の東斜面（1150 m）の岩場には石積をともなう小テラスが数面あり、岩陰に祠を祀る。宝曆 2 年（1752）に金剛院が祀ったとされ（山梨教育会 1916）、祠には「金剛坊大徳院」による文化 13 年（1816）の奉納札、文政 2 年（1819）遷宮札を納める。大徳院は山号金峰山で廢寺だが、もとは修験系の寺院で役行者堂があり、役行者像を保管している。

小橋山の南面にある山梨市牧丘町の戸谷山（1382 m）東斜面には鳥谷觀音窟（1205 m 28 柳原 2006）がある。開抱山光暉大和尚が窟で 21 日間の断食を行なしたのち、西保の洞雲寺を開いたといわれ（牧丘町 1980）、急崖の中間に幅 30 m、奥行き 8 m、高さ 8 m ほどの岩陰があり、奥壁寄りに西国三十三番の觀世音菩薩の石仏を祀る。天正 12 年（1582）、西国の六部源右衛門が相州三浦郡より來て断食を行め、同 15 年までに觀世音像等を安置したというが、今日見られる石仏は近世の作で、近世の觀音畫場のひとつといえる。

袖口金桜神社奥社地跡に近い大烏山（1855 m）は、山頂近くの南斜面に雛岩、サンゴウ岩と呼ぶ大きな岩場が巻く特徴的な山である。『夷秩父』によれば山梨市牧丘町室伏の日吉山王神社奥社としてサルタヒコを祀るとあり、サンゴウ岩は山宮（サンダウ）、あるいは山王（さんのう）からの転訛と思われる。雛岩からわずかに下った岩場に南向きの窟があり（1624 m 29 柳原 2006）、間口幅 0.65 m、高さ 3.2 m、奥行き 5.5 m を測る。窟の入り口付近に炭混じりの黒色土が厚く堆積し、窟内右手の壁面には水が滴っている。窟前面には明確なテラスはないが、窟の周辺で鉄鋼片 1 点を採集した。

甲府市横根の光福寺は盆地中央にせり出した八人山の先端に位置し、現在寺の脇に「下の堂」、石段を上り詰めた岩陰に近年改築された「上の堂」がある（340 m 30 柳原 2006）。上の堂は横根岩堂ともいわれ、庇の出が浅い南向きの岩陰前面に建ち、以前の建物は懸造で伝行基作の十一面觀音を祀り、側に行者堂を設けていた。甲府盆地を見下ろす景勝地で富士山の眺望もよい。手前に六角石幢があり、「上下觀音再建天文十二年三月廿九日」との刻銘があるというが風化が著しい。

甲府市の要吉山奥にある岩堂觀音（760 m 31）は深草觀音として有名で、軟質の岩場にいくつかの窟を作出し、露天の窟内に木造の仏像を安置し、多数の石仏を配している。その中で、岩場の高いところに長い鉄の梯子を掛け、内部に拝殿を設けた窟があり、背後には石段状の通路を削り出し、参拝の便宜をはかっている。文化文政期の觀音像が多いことから近世大いに隆盛した觀音畫場といえ、『官遊紀勝』にも紀行文がある。

そのほか甲州市菱山の三光寺は現在淨土真宗だが、もとは天台で創建は推古天皇 3 年（595）、秦河勝開基といわれ、大滝山中に存在した。大滝山には男滝があり、現在大滝不動尊を祀っているが、滝と結びついた山岳寺

院といえる。また『甲斐国志』によれば「雁坂」(雁坂峠)には「嶺頭ノ土中ニテ古銭ヲ掘り得ル事アリ昔時往来ノ人山靈ニ手向セシ所ト云フ」、「大菩薩坂」(大菩薩峠)には「峠ニ明見大菩薩社ニ社アリ(中略)峠ヨリ東ニ下ルコト一里半ニシテ狩場山神ニ至ル小祠アリ神体ハ十一面觀音ノ銅像ナリ相伝ヘテ弘安中長根ノ山上ヨリ掘り出ス所ナリト云フ」とあり、峠祭祀にも注目したい。

5 御坂山地および郡内方面的山岳信仰遺跡

駿迦ヶ岳(1641 m 32 柳原 2003)は笛吹市御坂・芦川境に位置する御坂山地の主稜で、山頂付近は岩峰をなし、西側は屏風岩の崖壁となる。御坂山地の中では比較的陥しく、山頂が尖った山容は、甲府盆地側から目を引く存在である。北側山腹には式内社檜峰神社があり、山頂周辺は甲府盆地と富士北麓をつなぐ御坂山中の尾根筋にある。山頂では底部片に網代压痕をもつ縄文時代後期の深鉢形粗製土器2個体以上のほか、土師器片が採集され、甲斐駿ヶ岳の土器同様、信仰的な側面を考慮せざるを得ない。

また甲府市上九一色に同名の駿迦ヶ岳(1271 m 33 畑 1993)がある。清涼寺式駿迦如来立像で有名な古閑永泰寺がかつて駿迦ヶ岳山頂にあったと伝えられ、山頂周辺には駿迦屋敷の地名をもつ平地がある。また駿迦ヶ岳の南北には阿難坂、迦葉坂の地名があるのも駿迦にちなむとされる。礎石が残るというが、それらを認めることはできない。

富士河口湖町の十二ヶ岳(1681 m 34 畑 1993)は西湖北側にあり、役行者が富士山に入るのに精進湖で斎戒沐浴をしたのち聞いたという山である。『甲斐国志』には東面に役行者の小祠、西面に十二ヶ岳権現の小祠があり、「中古山伏ノ役ノ小角ノ跡ヲタヅネ此ノ峯ニ參籠シ石上ニ端坐シ柴燈護摩修法シテ百日ノ修行セル山ナリトゾ」と記し、護摩修法に使われたらしい平らな石があること、「太刀ノハ陶器ノ破レタル又目ナレヌ壊損シタル古鏡ナド打マジリテ木葉ノ下或ハ岩石ノ間ナドニタレテ有ルコト数多シ」と遺物散布にも言及する。十二ヶ岳山頂には石祠があり、周囲では剣形、鎌形鉄製品が採集されている(図2)。

西桂町の三ツ峠山(35 西桂町 1992)は、開運山、御巣鷹山、毛無山の三峰の総称で、巨大な屏風岩の存在を特徴とする。富士講信者で富士信仰に強い影響を受けた天台宗弾誓派の木食修行僧、空胎上人を中興開山とし、天保6年(1835)に参道開削、一字一石経の完成と経塚供養塔の設置、本社、護摩堂などの再建などの山内整備が集中的に行われた。山頂に3つの峰をもつこの山を富士山に擬して山中の窟、岩場での修行が重視されたといわれる。それ以前の山岳信仰は明確ではないが、岩屋觀音窟には延享3年(1746)の石仏があるほか、山麓の白糸の滝の存在も大きい。富士山の眺望に優れ、七面山などと同様に、富士山遙拝の山であり、富士山信仰の一側面を見出すことができる。また峠という山名が示すように交通路としての機能をもち、甲斐から武藏、国中から郡内に至る脇道的な存在である。山頂周辺には平安時代の土師器片が採集でき、山岳信仰の観点での検討を要する。

都留市にある御正体山(1681 m 36 紙谷 1992)は道志山塊の最高峰で、桂川をはさんで三ツ峠山と対する信仰の山である。登拝口には道志口、鹿留口、細野口の3口があり、山頂に御正体権現を祀り、細野口と鹿留口に里宮がある。雨乞い、日照り乞いに靈験があるとされている。

大月市岩殿山(634 m 大月市 1998)は巨大な岩体を山体とし、山上に岩殿城跡がある。山体自体が神聖を帯びることから信仰対象となったことが考えられ、山上の調査ではわずかに土師器片が見つかっている。東側に七社権現窟、北側に新宮窟があり、東側山腹には円通寺七社権現跡がある(545 m 37)。七社権現窟は自然窟で、延享2年(1745)の絵図には懸造の建物を描き、真蔵院に安置する15世紀初頭の七社権現像(箱根・伊豆・日光・藏王・白山・山王・熊野)はもと七社権現堂内に祀られていた。また新宮窟(404 m)は自然窟で、幅35 m、奥行き16 mあり、延享2年(1745)の絵図には妻を正面にして屋根に滝のように水が落ちる懸造の拝殿を描く。真蔵院の十一面觀音像2体のうち1体は11世紀の作で、傷みが著しいことから新宮窟本尊と推測されている。14~15世紀には熊野信仰の拠点として隆盛し、文明19年(1487)には聖護院道興が訪れた名利である。

6まとめ

山岳信仰の場に伴う構成要素として磐座(金峰山、地蔵ヶ岳、妙見山妙見堂、八嶽神社山宮、三ツ峠山、七面

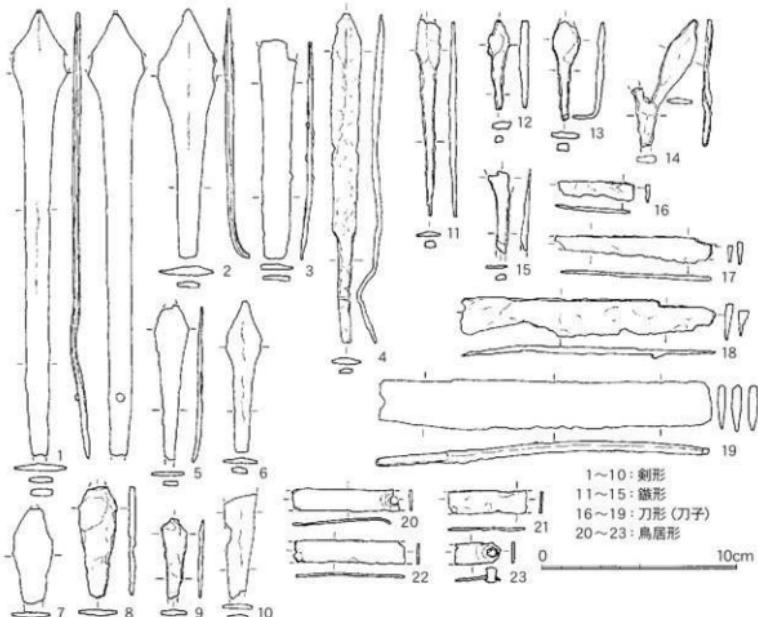


図2 十二ヶ岳山頂鉄製品 (1~3・5~7・10・19は昭1993を改変、他は2006年柳原および藤原武による採集試料)

山奥の院影向岩等)、窟(兜山、岩殿山七社権現窟・新宮窟、千頭星山天狗岩の窟、大烏山の窟、隼大士の窟・大黒の窟、御岳金桜神社白山窟等)、滝(大滝山、七面山、地蔵ヶ岳、三ツ峠山等)、池(大笛池、椹池、四尾連湖等)で分類することは可能であり、さらに立地、標高等を指標に細分することもできる。地域的には甲府盆地北縁の盆地に面した山々に窟が分布し、金峰山信仰、御岳道との関連がうかがえ、韮崎市周辺の南アルプス山麓に点在する池には雨乞い信仰が認められる。

信仰遺物で特徴的なのは権現岳、地蔵ヶ岳の雑鎌で、『甲斐国志』によれば金峰山山宮宝物に「焼鎌」とあることから金峰山での雑鎌の存在が推定でき、長野県内では長野県境に近い北西域に雑鎌分布が認められる。雑鎌は各地の諏訪神社での御柱祭に伴い神木選定の際の依り代として用いられているが、南アルプス市上今諏訪の諏訪神社宝物に2点の雑鎌がある(白根町 1967)。雑鎌は諏訪信仰圏の祭祀具で、雨乞い、風祀りなど多様な願意のもとに用いられた依り代で、その分布圏は日本全国に及び、長野県東信地域を分布の中心とし、基本的には諏訪信仰の広がりの中で理解できる遺物である。長野県川上村御陵山では剣形、容器形、劍形、弓矢形などの鉄製品とともに雑鎌が存在し、地蔵ヶ岳にも雑鎌とともに剣形が存在することから鉄製品を用いた同様な祭祀・信仰形態を想定できる。川上村では雨乞い祭祀の際、山上の祠の剣形、刀形を借用し、集落内の河原で祭祀を行った後、同じものを作って祠に戻す、という地蔵ヶ岳の地蔵信仰に似た行為の結果、形態が類似した製品が多数存在すると考えられる。剣形、刀形鉄製品については全国各地に分布し、とくに山岳信仰に限らず神社、祠の奉納品として普遍的に存在する信仰遺物であり、十二ヶ岳にもまとまって存在する。

七面山、三ツ峠山で重要視される富士山遙拝については、山梨市妙見山、乾徳山、篠井山等で認められ、富士山を擁する本地域独自の一種の信仰のかたちといえる。この視点については紙谷威廣氏がすでに指摘するところであり(1992)、富士山信仰の古い信仰形態はその姿を遠方から望む遙拝にあり、中世以降に発達した富士山登

平行の成立以前、修行者が正式に行う行とは別に富士山巡拝を重要視し、日蓮宗でも日蓮が太陽崇敬したことについて重ねて、七面山で御来光巡拝を重視するのではないかと推測されている。甲府盆地の乾徳山の夢窓国師座禅窟や兜山の窟については、悟りを得るため富士山に向き合う一種の修行窟とみることもでき、富士山を拝む平行窟と結びついて変化した宗教行為とも考えられる。

山岳信仰の変遷を時期的に整理すると、繩文後期、古墳前期の土器をもつ駿ヶ岳、甲斐駿ヶ岳については検討の余地があるが、10世紀代には金峰山五丈岩において山岳信仰と磐座祭祀の融合が認められる。10世紀前半に兜山、11世紀に岩殿山に窟を作った山岳寺院の存在があり、10世紀後半には苗敷山で宗教活動が始まり、11・12世紀には袖口金桜神社奥社地遺跡で天台系山岳寺院が建立された。12・13世紀には金峰山五丈岩のほか各地の山岳寺院周辺で經塚造営が行われ、それらの中には篠井山のように富士山を意識した場の選定が行われている。15・16世紀には羅漢寺、御岳金桜神社などへの参拝が盛んとなり、地蔵ヶ岳などの高山にも登拝者が増加する。その背景には守護武田氏の庇護、一般民衆の山岳登拝に対する関心の高まりを指摘でき、15世紀以降に隆盛する富士山登拝との関連がうかがえる。近世には三ツ峠山に富士講の影響が現われるほか、岩屋觀音、岩堂觀音、烏谷觀音など觀音靈場として発展した窟が多い。

ところで甲州市塙山藤木から山梨市小原東、勝沼休息の立正寺方面に至る道は「道者道」、「道者街道」と呼ばれ、河口湖周辺にも断続的に存在する。富士道者が往来した道といわれ(堀内 1993)、金峰山北口、川上村内にも「道者道」、「行者道」と呼ぶ道がある。『甲斐国志』には袖口藏王權現(雲峰寺)より金峰山へ至る道、および黒駒への道を「道者海道」と記しているが、このことについて若干の推論を述べておきたい。

大善寺東の白山平で発見された経筒は米沢山寺で写経され、今日の袖口金桜神社奥社地遺跡を写経所の山岳寺院跡と推定したが、袖口(米沢山寺)から大善寺(柏尾山寺)まで理縫に際して通ったルートを想定すると御岳道の袖口ルートと一部重なる。このルートは秩父方面からに道者が雁坂峠を越えて富士山参詣のため通過したルートであり、また袖口から金峰山に至る道でもあり、各地の山を巡礼する道者にとって、道者街道沿いの立正寺とともに甲州きっての名刹大善寺が重要な巡礼地、結節点となっていたことを示している。

大善寺には今日、御坂峠にあったという役行者像を武田信春のときに境内の六所明神に移したという行者堂があり、5月8日(古くは旧暦4月14日)に藤切会式の祭礼を行う。『甲斐国志』によれば「庭上ニ三丈許ノ柱ヲ建テ藤蔓ヲ繩トシ縛之修驗者一人柱ノ上ニ舉テ修法シ終リテ劍ヲ以テ其ノ繩ヲ両断トナシ地二疊ヲ香花群集ノ人噪ギ立テ左右ニ之ヲ引キ勝負ヲ争フコト旧式トス之ヲ柏尾ノ藤切ト謂フ」とあり、高さ三間半の御神木から七尋半の大蛇を象った藤の根を切り落とすという修驗系の柱松行事で、修驗における春の峯入り儀礼を意味し、富士(藤)山入峯を暗示する。『勝沼古事記』には、享保20年(1735)に「四月十四日山伏祭り木登等当年より休」とあり(山梨 2008)、少なくともそれ以前には4月14日に行われていた。また大善寺の対岸にある上岩崎權現平では8月22日に浅間神社の火祭り(柱松行事)が行われ、大正以前には4月3日にも行われていた。吉田の火祭りにならったものといわれ、富士浅間神社との結びつきを示している(勝沼町 1962)。

大善寺と同様の祭礼は甲府市七覺の円楽寺にもかつて存在し、4月15日に五社權現祭礼として「真木伐り」と称した。『甲斐国志』には「役ノ行者富士入峰ノ粧ナリ真木トテ長二丈八尺ノ柱ヲ建テ柴ヲ附ケ藤ニテ二十八所結ヒ先達修驗一人攀上り寺宝ノ百足丸ト云太刀ヲ以テ伐之七覺ノ真木伐トテ州人為群衆ナリ」とあり、二丈八尺、二十八所にみる28という数字は富士山への宿(拝所)の数を示唆する。円楽寺は富士山二合目の役行者堂を兼帯し甲州側の富士山修驗を統括した寺院であった。

大善寺の藤切会式では、役行者が金峰山の大蛇に見立てた藤の根を切る行為を演じるが、これは吉野金峰山での役行者の大蛇退治の故事に基づくといわれる。この点について想起されるのが『金峯山縁起』(由井 1983、櫛原・岡野 1994)の中で甲斐金峰山の五丈岩を蛇体として、大日如来の化身とみなすこと、『甲斐国志』に五丈岩北側の岩あるいは五丈岩そのものを「甲斐派美」と呼び水の元種と認識していることで、「派美」とは蛇を意味する。藤切会式では本堂(薬師堂)前の白峯三山に見立てた三石を踏み越え(三山渡り)、藤切りの柱に行者が取り付くことから、甲斐に入った役行者が甲斐金峰山の大蛇を退治して入峯の道を開いたという縁起を祭礼化したと考え

るのが自然で、大善寺が富士山方面から金峰山方面に向う経由地点であるのも示唆的である。大善寺は別名「三枝寺」で、在庁官人三枝氏の氏寺と考えられているが、大善寺が甲斐国との北領とされた金峰山と宗教的な紐帯を有した証左ではないだろうか。

さらに荒唐無稽かもしれないが、祭礼の開催日と埋経の行われた月日に近似性がある点を指摘したい。藤切会式の中世以前の経緯については不明だが、大善寺最大の年中行事として4月14日に行われてきたと考えると、康和5年の埋経を4月3日の収山学者庵亮の開講演説のち、やや日を置いて4月22日を埋納日としたのは、柏尾山寺の行事に合わせて、あるいはそれを避けて埋経を実施したと想像できる。經簡銘の「立並る結縁衆路頭ニ无隙かりき」という文言は、まさに祭礼時の脛わいそのものといえるであろう。大善寺はもと天台寺院で、『金峰山縁起』によれば智顕上人が金峰山を中興開山したのが卯月(4月)8日であり、4月8日の天台宗の灌仏会、14日の山王祭との関連も考えられる。ただし今日、大善寺と金峰山信仰との関連、入峯や修験についての史料はなく、康和五年銘経筒にも金峰山、藏王権現に関する記載がないことから、あくまでも仮説に留めざるを得ない。ついでながら『夫木和歌抄』(12世紀末)の「題知らず、梁塵秘抄」の歌に注目しておく。

「甲斐にをかしき山の名は、白根波崎塙の山、室伏柏尾山、篠の茂れるねはま山」

「ねはま山」とは根場山、つまり根場集落背後の十二ヶ岳から王岳を指し「室伏」とは山梨市牧丘町室伏のことでの「室伏」を山と認識し、室伏と柏尾山をセットとする点に注目すると、一方の柏尾山が甲州での天台の拠点であることから、「室伏」はやはり天台色の濃い日吉山王神社から米沢山寺一帯を指すとみられ、室伏が米沢山寺そのものを指した可能性があるのではないか。袖口金桜神社社記に米沢山雲峰寺の前身寺院を「米澤山大禪寺」と記しているのも、大善寺との関連を暗示して興味深い(山梨市2006)。

本稿は筆者がいくつかの小論、報告に記載した内容を引用し、県内山岳信仰遺跡の分布調査という主旨にもとづき整理したものであるが、富士山信仰から逸れて金峰山信仰に偏った考察になった点をお詫びしたい。

参考文献

- 大月市教育委員会・岩殿山総合学術研究会 1998『岩殿山の総合研究』
荻生徂徠『岐阜中紀行』1703(宝永3) 1981『甲斐志料集成三 日本紀行篇』
兜山遺跡群調査研究グループ 2005『笛吹市春日居町兜山遺跡群の調査』山梨県考古学協会誌』15
鶴沼町 1962『鶴沼町誌』
紙谷威廣 1992『富士信仰と木曾僧団』『三ツ峠山の信仰と民俗』西桂町教育委員会
清澤俊元 1978『甲斐金峰山と修験道』『富士・御岳と中部嶽山』山岳宗教研究叢書9
柳原功一・岡野秀典 1994『甲斐金峰山の信仰』『丘陵』14
柳原功一 2003『山岳遺跡での考古学的調査—甲州での近年の調査事例から—』『帝京大学山梨文化財研究所報』46
柳原功一 2006『甲斐の窓の諸相—修験道を中心に—』『山梨県考古学協会誌』16
柳原功一 2007『柏尾山麻塚の復元』『山梨県考古学協会誌』17
柳原功一 2008『頂から窟へ』『山の考古学研究会報』20
柳原功一 2010『甲斐金峰山と金桜神社』『山岳信仰と考古学II』同成社
功刀利夫 2003『武江長伯著 官遊起勝 注釈と余話』
校訂佐藤八郎 1971『甲斐国志』大日本地誌体系
齊藤秀樹 2011『大井池の雨乞い信仰』『苗敷山の総合研究』 菲崎市教育委員会・苗敷山総合学術調査研究会
七面山石造物調査グループ 2011『七面山の武藏型板碑—明淨院墓地と丁石の調査—』『山梨県考古学協会誌』20
白根町 1967『白根町誌』
辻本満丸 1908『蘿原山第二回登山記』『山岳』2-3号
西桂町教育委員会 1992『三ツ峠山の信仰と民俗』
菲崎市教育委員会・苗敷山総合学術調査研究会 2011『苗敷山の総合研究』
畑大介 1993『芦川村周辺の山岳信仰遺跡』『甲斐路』77 山梨郷土研究会
原全教 1935『奥秩父 続』
堀内真 1993『富士参詣の道者道と富士道』『甲斐路』76
牧丘町 1980『牧丘町誌』
山梨教育会東山梨支部 1916『東山梨郡誌』
山梨県 2003『山梨県史 資料編7 中世4考古資料』
山梨歴史美術研究会 2008『大善寺』山梨歴史美術シリーズ2
山梨市教育委員会 2006『袖口金桜神社奥社地遺跡』山梨市文化財調査報告書 第10集
山本義孝 2011『苗敷山周辺の山岳信仰』『苗敷山の総合研究』菲崎市教育委員会・苗敷山総合学術調査研究会
由井港 1983『金峯山縁起』『修験道史料集(1) 東日本編』山岳宗教研究叢書17

第5節 富士山二合目をめぐる修験の活動

堀内 亨（山梨県立山梨園芸高校）

はじめに

一は富士山中最初勧請社也。

『甲斐国志』が伝える「小室浅間明神」（富士御室浅間神社、富士山二合目）の由緒は、こうした文言で始まっている（巻71）。本項では、この記載の検証を手始めに、富士山二合目を中心とする修験の活動について考えてみたい。

1 修験の活動

富士山内に営まれた宗教施設には、数多くの仏像や神像が奉納されている。このうち「山室」あるいは「北室」とも称された御室の浅間社には、それぞれ文治5年（1189）、建久3年（1192）の紀年銘をともなう日本武尊と女神の二像が伝わっていた。いずれも「走湯山住金剛仏子観音堂」により奉納されたものと記録されている（『甲斐国志』巻71）。これに続く奉納物が、乾元2年（1303）に山頂初穂打場に奉納された銅造地蔵菩薩立像（1）であることを勘案すれば、両像が早期の遺品であることは疑いない。また、御室社周辺を対象とした一連の発掘調査では、12世紀後半の所産と考えられる山茶碗片も出土していて、この頃には当地に何らかの施設が存在していたことが確認される。後述するように、富士への登拝が一般化するのは早く見積もっても14世紀、登拝路の整備が進んだのも15世紀以降とみられることから、冒頭に引いた『国志』の記述も、案外認められてよいだろう。

さて、『扶桑略記』の記す永保3年（1083）の噴火（巻30）を最後に、富士山の火山活動は休止期に入る。これ待っていたかのように、修験がこの山を舞台に活動し始める。諸種の記録や縁起に名をとどめる者としては、富士へ登ること数百回、山頂に大日寺を構えて富士上人と呼ばれた末代が名高い。久安5年（1149）に一切経の書写と富士山への埋納を企図すると、関東から東海・東山の衆庶を勧化し、さらには鳥羽法皇の結縁を獲得したと伝えられる（『本朝世纪』）。

近年見出された縁起にしたがえば、同人は駿河の出身で伊豆の走湯山（伊豆山神社、静岡県熱海市）にあって修行を重ね、天承2年（1132）に初登頂を遂げたという。この縁起は、末代以前にも金時（年次未詳）、覽薩（983年）、日代（1057年）といった上人たちが山頂を極めたと記している（2）。すでに9世紀後半成立の都良香の『富士山記』に、山腹や山頂の様子が具体的に描写されており、末代に先行する登頂者がいたことは大いに想定される。金時・覽薩の両名については、走湯山の開創伝承に登場する金地・蘭脱の両仙人の名に類似するとの指摘もある（3）。いずれにせよ、最初に富士山に修行の場を求めたのは、末代に代表される走湯山に本拠を置く修験たちであった。日本武尊・女神の両像を御室に奉納した観音堂も、その末派に属す修験であろう。御室は、富士北面におけるかれらの根拠地として開かれたと考えたい。

一方、末代が山麓における拠点として伽藍を構えた地として知られるのが、南面の村山（静岡県富士宮市）である（『地蔵菩薩靈験記』）。江戸時代の絵図面の多くは、ここに浅間社・大日堂・大棟梁権現の三宇とともに池西坊・辻之坊・大鏡坊の三坊を描いている。付された注記からは、前三宇を興法寺と総称し、その別当を修験の三坊が務めたことが知られる。伊豆山権現の別當密嚴院の寺領を書き上げた応永5年（1398）の文書には「富士村山寺」の記載があり（『醍醐寺文書』）（4）、興法寺は古くは村山寺とも称したようだ。

この村山を拠点に行われた富士山内の回峰行を「富士峰修行」と呼んだ。役行者以来の行法と伝え、江戸時代には先の三坊が年番により配下の修験たちを率いて実践したという。宝永山や愛鷹山、さらには三島明神（三島大社、静岡県三島市）など、富士山南面の山腹および山麓を全26日の行程で巡った（『駿河志料』巻57）。村山は、南面からの登拝拠点として、また回峰行の基点として、このち発展を遂げていくこととなる。近年の村山における発掘調査では堅穴住居跡と溝が検出されたが、これにともなって9世紀後半から10世紀前半所産の甲斐型土器が出土していて（5）、南・北両面にまたがる回峰ルートの存在さえ想定されよう。

2 甲斐の修験

二合目御室には、浅間社とともに役行者堂があった。『甲斐国志』が浅間社の西方に所在すると記述するほか（巻35）、『富士山真景之図』や『富士山明細図』も浅間社に並べてこれを描いており、19世紀後半では、ここに

堂宇が存在していたことは疑いない。これを兼帶していたのが甲府市右左口町の円乗寺（真言宗）である。役行者による創建と伝え（『国志』巻80）、同寺に伝存する12世紀末期の作と推定される役行者像（山梨県指定文化財）は、御室の行者堂に安置されていたものともいう。

富士山の北麓と甲斐国を中心をなす甲府盆地の間には、御坂山地が横たわっている。古代の官道に起源する御坂峠越え（鎌倉街道、国道137号）や平家追討に向かう甲斐源氏軍が進撃した大石峠越え（若狭路）などの諸道が両地域を結んでいた。このうち御坂峠には、盆地側の鞍部近くに役行者像を祀る堂宇があった（『国志』巻24）。その祭祀を担ったのが大善寺（甲州市勝沼町）で、同寺に現存する役行者像（山梨県指定文化財）は、その本尊であったと伝承されていた（『国志』巻75）。また、富士河口湖町大嵐に所在する日蓮宗寺院蓮華寺は、大同山御堂寺と称する真言宗寺院に起源すると伝える。背後の「だんの山」（檀山、足和田山）の頂上は奥院と呼ばれ、寺伝ではここを役行者修法の地とするなど（『国志』巻90）、一帯は修驗の行場であったことを伝えている。文化3年（1806）、『甲斐国志』編纂に際して作成された大嵐村の絵図は、檀山の山頂に「法印塚」を記すとともに、同寺の門前を横断して東方の富士山へと延びる道に「富士山とうしや（道者）道」と注記している。この道は、『国志』が「七覚山」の項において、「相伝テ云、昔役小角富士登山ノ時、此処ヨリ発シ、迦葉・阿難ノ二嶺ヲ踰テ、精進・西海・長浜・大嵐・大田和・成沢数村ヲ經テ直ニ御室ニ達ス」（巻26）と述べる甲府盆地南東辺と富士山二合目を結ぶ通路に該当するとみられる。円乗寺は七覚山の足下に所在する。この道こそ、円乗寺の住僧が御室との間を往来した道に他なるまい。

大善寺や円乗寺は、ともに甲府盆地を代表する修驗の拠点的な寺院であり、盆地東辺から御坂山地、さらには富士山へと連なる回峰ルートの存在が想定される。こうした巡錫路をたどった修驗にとって、御坂山地直下に所在する蓮華寺は格好の中継地点であったに違いない。「浅間大菩薩御宝前」に奉納したと刻む享禄元年（1528）鋳造の額口が同寺に伝存するのも、同寺と御室の結びつきを物語ろう。二合目御室は、甲斐の修驗の根拠地のひとつであった。

3 登拝の大衆化と修驗の退潮

御室に納められた二軸の神像と山頂初穂打場の地蔵菩薩像。12世紀末と14世紀初頭、その造立時期には百有余年の隔たりがある。この間の信仰実態の変化には、大きな関心を寄せるべきだろう。地蔵菩薩の背面には、「富士禪定」の4文字、および「益頭庄沙弥光実・同比丘尼」と施主の名が刻まれている。登拝の成就が叶つたことを記念して光実夫妻が奉納したものとみられる。ちょうどこの頃、富士への登頂を果たした者として、仏教史書『元亨釈書』の著者として知られる禪僧虎闘師練をあげることができる。師練は、応長元年（1311）に34歳で山頂を極めたが、登拝に際しては「導引者」を必要としたこと、「衆人」はその命にしたがって隊列を組んだことを記している。山頂付近の水の残る泉（コノシロ池か）では、身を浄めることが求められたという。ガイドや登拝の作法までが存在したことが知られる（『海藏和尚紀年録』）。12世紀、富士は修驗の行場・すなわち隠された宗教者のものであった。14世紀まで降ると、登拝は庶民のものとなった。登拝者の増加にともなって、登拝路の整備も進んだと推定される。『勝山記』には15世紀の後半以降、登拝路に沿って多くの施設が整備されていく様子が記録されている。二合目についても、浅間社の社殿や行者堂・護摩堂の修造にかかる記事が散見される（永正5年〈1508〉条ほか）。そうしたなか、御室の地では、いつしか浅間社を所管する別当小佐野氏の勢力が増していくようだ。永禄6年（1563）には、「小屋」の帰属をめぐって武田氏のもとで円乗寺と争論に及び、これに勝訴している（「富士御室浅間神社文書」）（6）。二軸の神像が別当側に伝わったことともども、修驗の勢力の減退を示すものであろう。

- (1) 富士吉田市・勝俣信彦氏所蔵（『山梨県史』資料編7〈中世4・考古資料〉第3部88号）
- (2) 神奈川県立金沢文庫展示図録『金沢文庫の中世神道資料』（1996）
- (3) 西岡芳文「中世の富士山」（峰岸純夫編『日本中世の再発見』吉川弘文館、2003）
- (4) 「密巖院領関東知行地注文案」（『静岡県史』資料編6〈中世2〉1232号）
- (5) 「浅間大社遺跡・山宮浅間神社遺跡」（『静岡県埋蔵文化財研究所調査報告』第201集、2009）
- (6) 「有賀勝慶・跡部昌長連署状写」（『山梨県史』資料編4〈中世1〉1614号）

第6節 伝経ヶ岳出土資料について

篠原 武（富士吉田市教育委員会）

1 はじめに

富士山の吉田口登山道（山梨県富士吉田市）五合五勾に位置する経ヶ岳で大正13年（1924）に発見された経筒と経巻が、初めて世に知られたのは、昭和10年（1935）7月3日付けの山梨日日新聞の記事（参考資料1）による。記事をみると、大正13年の6月中に経ヶ岳で行われた工事の際に経筒と法華経10巻が出土したことや、その9年後となる昭和10年になって専門家へ鑑定を依頼した経緯とともに、当時これらの出土品が、日蓮上人が写経し埋納したものとの認識があったことが分かる。また、鑑定人の中に、経塚研究の第一人者である石田茂作氏の名がみえるように、経塚出土資料との認識も一方であったことが分かる。その後、これらの資料は、塩谷家により代々大切に守り伝えられ、富士信仰研究者により、その概略が紹介される¹⁾こともあったが、平成14年（2002）に開催された富士吉田市歴史民俗博物館企画展「富士の信仰遺跡」及び企画展図録『富士の信仰遺跡』²⁾で、展示公開及び報告されるまで、考古学も含め各分野で学術的評価が行われることはなかった。

資料自体は第一級資料と評価されながら、60年以上にわたって離伏の時を過ごさざる得なかつたその遠因には、発見時に現地の学術調査がなされなかつたことや、その発見から報告までに9年の空白期間があつたことにより、これらの資料が、確かに経ヶ岳出土であるという客観的証拠が残されなかつたことがある。そのため、後になると経ヶ岳ではなく富士山頂から出土したものであるという指摘もなされる³⁾。というように、その評価は未だに定まってないため、本論中では「伝経ヶ岳出土資料」と呼称したい。

このような現状を踏まえ、今回の報告では、未図化であった伝経ヶ岳出土資料の図化を行い、基礎データを提示し今後の評価に備えると共に、経ヶ岳の歴史を文献資料等を用いて紐解きつつ、未解決となつてゐる伝経ヶ岳出土資料の出土地の問題を中心にその課題を提示したい。

2 伝経ヶ岳出土資料について

（1）経ヶ岳と伝経ヶ岳出土資料の出土地点（図1）

詳しく述べるが、富士山中にはいくつか経ヶ岳と称する場所がある。今回紹介する資料が出土したとされる吉田口の経ヶ岳は、富士山北面の枝尾根先端で標高2,306mを測る小ピーク（以下、経ヶ岳山頂）を中心とした地のこと、剥き出しの岩が聳えていることから江戸時代には「岩嶽」⁴⁾と称されている⁵⁾。吉田口登山道はその経ヶ岳山頂に南進しながら近づき、その手前で迂回のため南西へ折れ、途中でU字状に折返して北東へ進みながら経ヶ岳山頂の北側を回り込こんで、また南西へ登り上げていく。この内の北東へ向かう登山道の南西側に、小屋と昭和28年（1953）に建築された八角堂（常唱殿）⁶⁾があり、現在ではここが経ヶ岳の中心地と認識されている。周辺は樹林のため眺望を遮られているが、枝尾根の先端部のため、樹高が低ければ、富士山麓を一望することも可能な地であろう。また、南を望めば、富士山頂が眼上に聳えており、山中の景勝地といえる。なお、現在の登山道のうち、馬返～五合目は、明治40年の登山道改良工事⁷⁾により一部付け替えられているが、五合五勾の経ヶ岳周辺についても、江戸時代後期の富士山中の記録である『富士山明細図』⁸⁾や『富士山真景之図』⁹⁾に描かれる経ヶ岳の様子とは大きく異なる。これらの絵図中には、経ヶ岳山頂ではなく、登山道を挟んで北に位置する姥ヶ懐という岩穴へと直登するように登山道が描かれており、やはり五合目から経ヶ岳までの登山道も、近代になって付け替えられたものと考えられる¹⁰⁾。そのため、小屋と八角堂がある地も、過去の登山道から離れていることになるが、遠藤秀男氏によると「経ヶ岳のお堂背後に開かれた小道をすこし行ったところ、けずりとられた崖面にポツリと古錢が額をのぞかせていた」とし、宋銭・明銭を合計15枚発見した¹¹⁾とあるため、近代以後の歴史しかないと断言はできない。

なお、この現在の経ヶ岳と姥ヶ懐については、近世の記録との差異が他に2点ある。まず、『甲斐国志』¹²⁾及び『甲斐国志草稿』¹³⁾によれば、経ヶ岳の南（上）に姥ヶ懐があったとされ、現在の位置関係と南北が逆転している。次に、『富士山明細図』及び『富士山真景之図』によれば、現在では、別々の地と認識している経ヶ岳と姥ヶ懐を、同一地と認識しているように見える。具体的には、まず『富士山明細図』の「経ヶ嶽日蓮上人百日行場」¹⁴⁾と題す

埋蔵の経筒から国家的目蓮手写の経文十巻
昭和十年七月三日

堀尾博士寺が眞物の折紙

南都留郡福地村上吉田塙谷内左衛門氏は、大正十三年六月中尊山經ヶ岳日蓮上人の遺跡の仮宮増築工事の際、吉銅製の経筒を发掘、所蔵していたが、日蓮主義者が吹して日本精神を明徴にしようとの経ヶ岳奉請会を組織し昨年參道所を建築したが、六月二十五日所蔵の経筒を搬入して上京し、徳富蘇峰翁に鑑定を請うたところ、経は妙経編纂官寺澤博士舊尾駿教、渡邊口祐、岩橋小太郎、帝国博物館溝口源次郎、石田茂作氏等を顧み、史資料編纂所で展覧、椎麻の五氏が鑑定の結果、経筒は鎌倉時代のものの中には珍されたものと認められ、法華經八巻、開結經二巻で日蓮が文永六年相州から畿州路により吉田翁、初代塙谷平内左衛門氏方に宿り、富士に登山、中腹の景勝地に手がけた法華經を埋め、一日の行を終へて下山した史実に合致する得難き寶物である事、裏書きされ博物館から國宝に認定されたものなので、應食し中の経文は皆本紙の事として一束となり、一巻を解くに一日もかかった今後真空函子塔に保藏する【写真は塙谷氏】

図1 経ヶ岳周辺図



る絵図中には、お堂とそれに隣接する題目が刻まれた大岩が、『富士山明細図』の数年後を描くとされる『富士山真景之図』の『文永六年妙経一部ヲ埋テ 経ヶ嶽』¹⁵と題する絵図中には、「姥ヶ懐」とある岩穴とそれに隣接するやはり題目が刻まれた大岩が描かれている。このうち、『富士山明細図』のお堂は、『富士山真景之図』の「五合五勾小御嶽横吹一ノ鳥居」¹⁶と題する絵図中に「弘化二巳年ヨリ日蓮祖師堂經ヶ岳ヨリ引テ立ル」と記して一ノ鳥居手前に描く日蓮堂と同一建物で、経ヶ岳から一ノ鳥居前へ移築されている可能性がある。従って、『富士山明細図』中のお堂は、『富士山真景之図』に描かれる姥ヶ懐を覆うように建てられているのであり、その数年後に一ノ鳥居前に移築されたとも解釈できる。その場合、両絵図とも姥ヶ懐及び題目碑を含む地を経ヶ岳と認識していることになり、経ヶ岳と姥ヶ懐を別個のものとする現在の認識とやや差異が出てくる。ここでは、これ以上この問題に立入らないが、近世と現在の経ヶ岳と姥ヶ懐の位置や認識に大きな相違があるのは確かであり、踏査等により再検討を行う必要がある。

では、伝経ヶ岳出土資料は、これらのうちのどこで出土したとされるのであろうか。参考資料1によれば、「富士山經ヶ嶽日蓮上人の遺跡の仮宮」の増築工事中に出土したとされるが、その仮宮の位置は現在特定されていない。ただ、昭和10年時点で、「日蓮上人の遺跡」という認識があるのは、経ヶ岳山頂・経ヶ岳山頂下・姥ヶ懐の3ヶ所であり、今後、現地調査や文献調査を通じて、この場所についても特定する必要がある。

(2) 伝経ヶ岳出土資料の内訳

経筒1点、経巻9点、既に開かれた経典1点で構成される。

経筒（図2・写真1）全体に緑青を吹くとともに、体部外面については、制作時か後の劣化により生じたとみられる直径1mm以下の気泡状の空隙が全面にあるが、底部には、そうした空隙は一切みられず、平滑な面となっている。上部は部分的に欠けているが、上端部は1/3周分残存しており、その先端はやや細まり尖頭状を呈している。底部は完存しており、底面側がやや丸みを帯びている。底部周縁部は1.8cmほど折返され、その中に銅鋳製の体部を入れ込んで接合¹⁷しているが、内面をみると、底部と体部端部に約5mmほどの間隙があり、完全に

表1 経巻一覧表

	最大高 (経巻)	最大径 (経巻)	最大高 (経軸)	最大径 (経軸)	重量
軸1	20.0	2.6	21.0	4.0	15.2
軸2	20.4	2.7	—	—	19.9
軸3	20.4	3.0	—	—	22.4
軸4全体	20.0	6.9	—	—	96.1
軸4-1	20.0	2.8	—	—	—
軸4-2	19.6	2.9	—	—	—
軸4-3	19.5	3.5	—	—	—
軸4-4	20.0	3.0	—	—	—
軸5全体	19.7	4.6	—	—	28.1
軸5-1	19.7	2.1	—	—	—
軸5-2	18.7	2.4	—	4.0	—
平均	19.8	2.8	21.0	4.0	20.2
合計					181.7

単位はcm、重量のみg

表2 経紙一覧表

No.	縦幅	横幅	行範囲	行数	行数/横幅
1	(8.3)	(17.1)	卷末	—	—
2	(14.9)	51.4	0394a06 ~ 0394b11	36	0.70
3	(14.5)	48.2	0393b27 ~ 0394a06	37	0.77
4	(11.1)	41.0	0393a11 ~ 0393b27	32	0.78
5	(11.3)	50.2	0392c02 ~ 0393a11	39	0.78
6	21.1	49.5	0392a21 ~ 0392c02	40	0.81
7	21.1	49.5	0391c12 ~ 0392a21	42	0.85
8	21.1	49.5	0391a29 ~ 0391c12	43	0.87
9	21.1	49.3	0390c16 ~ 0391a29	44	0.89
10	21.1	49.4	0390b01 ~ 0390c16	44	0.89
11	21.1	49.4	0389c14 ~ 0390b01	45	0.91
12	19.2	49.1	0389b26 ~ 0389c14	17	0.35
平均	20.8	48.8		38.1	
合計		536.5		419	

単位はcm。()は、欠損のあるもの。行範囲は、大藏經テキストデータベースにより作成。テキスト名は、法華部・草薙部 Vol9 佛說觀普賢菩薩行法經 (0277, 雪無蜜多譯)。この他に、下段部のみのもの3点、中段部のみのもの3点あり。いずれも計測不能・位置不明。

一体化はしていない。なお、底部の折返し先端部も尖頭状を呈している。外寸は、最大高21.6cm・口縁最大径12.7cm・底部最大径13.5cm、内寸は最大高20.8cm・口縁最大径12.5cm・底部最大径12.5cmで、器壁厚は1.5~2mm、重量は1,250gである。

経筒の時期であるが、『富士の信仰遺跡』では、後述する経巻・経紙も含めて、三島ヶ岳出土とされる浅間大社所蔵資料との類似を指摘するとともに、平安時代後期と推定している¹⁸。型式学的な検討による時期や制作地の特定まで今回はその考察が及ばないが、経筒の最大高21.6cm、経巻の最大高20.4cm、経紙の最大縦幅21.1cmというやや大型の法量から12世紀後半と考えたい¹⁹。なお、劣化が著しかったため、平成14年度に帝京大学山梨文化財研究所に委託し、ベンゾトリアゾールエタノール溶液及びインクララックの減圧含浸等による保存処理が行われている。

経巻(写真2~4・表1) 紙本経で、紙質は維持しているが、癒着と変形が著しいだけでなく、先細りしていることから腐食も進んでいるようである。単独のもの3巻以外に、癒着しているものが2組あり、それぞれ4巻と2巻で構成される。この癒着した4巻と2巻は出土時の状態のままと考えられるが、4巻のものは軸頭側からみると縦2巻、横2巻で癒着しているため、全体で四角形を呈している。9巻のいずれも外装がなく、経紙が露出して経文らしきものが透けて見えるため、9巻全てが朱書き分かる。単独ものの内の1巻は、直徑4mmの円柱状の棒を半割したものを軸に用いている。また、2巻癒着したものの内の1巻も、やはり直徑4mmの円柱状の棒と思われるものの末端が確認できるが、同じく半割されている。これらの軸は、植物質で竹に似るが、種名については鑑定する必要がある。なお、他の7巻については軸を確認できず、当初からなかったのか、経紙で覆われて見えないのか、残念ながら判然としない。また、それぞれの法量は表1のとおりで、最大高は18.7~20.4cm、最大径は2.1cm~3.5cmであるが、経巻の多くは変形してやや扁平化しているため、特にその影響が著しい最大径は、あくまでも参考値である。ただ、その法量から、経筒内にこの経巻9巻と開かれた1巻が納まることは確かである。

最後に注目すべき事実として、経巻の隙間に火山噴出物である直徑1~5mmのスコリアが入り込んでいることがある。これは、富士山起源のものと考えられ、経ヶ岳も火山灰で覆われているため、経ヶ岳出土を裏付ける有力な証拠の1つとはなるであろう。但し、富士山中でも五合目以上はどこでもスコリアに覆われているため、経ヶ岳以外の地で出土した可能性も排除はできない。

経紙(写真5・表2) 開かれた1巻の経典名は、法華三部経の結経である「仏說觀普賢菩薩行法經」と判明している²⁰。現在、この経典のうち遺存状態が良好で、継ぎ紙ごとに整理されているものは、11枚ある。また、そ

の他に、上端部を含む上段部のみのもの 1 点 (No. 1)、下端部を含む下段部のみのもの 3 点、上下端部のない中段部のみのもの 3 点がある。この内、No. 1 については、巻末部分であり、奥書き文字が 1 文字半えるが、判読は困難であった。また、他の 6 点は、残存し判読できる文字数が少ないため、11 枚のいずれと組み合わさるか特定することはできなかった。

次に、11 枚の経紙の法量及び大正新脩大藏經テキストデータベース²¹上の行数であるが、表 2 のとおりである。各継ぎ紙は、No. 12 ~ No. 2 の順でつながり、行数の照合結果から、經典の全行が書写されていると考えられる。なお、初行までに 31cm の余白があることから巻頭部分と分かる No. 12 については、その初行に「佛說□□□薩行法經」とあり、判読困難で判然とはしないが、「佛說觀普賢菩薩行法經」と記されていると考えられ、經典の照合が確かであることが傍証される。經典の法量は、経紙が完存しているものの平均で、縦幅 20.8cm、横幅 48.8cm であるが、中心となる法量は、縦幅 21.1cm、横幅 49.5cm である。文字は縦書きで、1 枚あたりの行数は、巻頭の No. 12 が 17 行、それ以外は 32 ~ 45 行で、平均 38.1 行となる。1 行あたりの文字数は、約 17 文字で、算線はなく、字は朱書きでやや乱雑に記されている。注目されるのは、巻頭を除く No. 11 ~ No. 2 の行数が、No. 2、3 で微増するものの漸減傾向にあることで、これは 1cmあたりの行数にするとより明瞭であり、No. 11 の最大値 0.91 行から No. 2 の最小値 0.70 行へと途中で微増することなく漸減していく。この巻頭から巻末へかけての行数の減少から、継紙ごとに一定の行数で書写するといったことを顧慮することなく、最初はやや行を詰めて書写しながらも、全体の経紙幅に余裕があることから、行数を減少させていったと考えられる。こうしたことや字体が全体を通して一定であることから、この經典については 1 名のみで書写した可能性が高い。また、No. 12 の余白が經軸への取りつけ部分とすれば、No. 12 から No. 1 にむけて順に写経しつつ、經軸へ巻きこんでいき、文末の No. 1 を経巻の巻頭にしたと考えられる。

最後に、未開封の経巻の經典名であるが、他の埋納事例では、法華經 8 卷に開經「無量義經」とこの結經「佛說觀普賢菩薩行法經」の 10 卷を埋納することが多いことから、昭和 10 年の新聞報道以来、残り 9 卷の經典名は不明ながらも、法華經 8 卷に開結經 2 卷で構成されていると認識されてきたようである。しかし、あくまでも推測であり、これらの經典名を解明するとともに、各經典に記されている可能性の高い奥書きからその奉納人名や奉納年を特定するためにも、その開巻が望まれる。

(3) 三島ヶ岳出土資料・浅間大社所蔵資料と伝經ヶ岳出土資料の関係

伝經ヶ岳出土資料は、その出土地が確定されておらず、これまでに富士山中に発見された經典資料のうち、三島ヶ岳出土資料か浅間大社所蔵資料と同一資料である可能性があるため、ここでその比較検討を行いたい。

まず、昭和 5 年 (1930) に発見され、現在その所在が不明となっている三島ヶ岳出土資料については、經筒の器高が推定 51.5 ~ 54.5cm、底径が約 28cm と格段に大きく、開かれた經典も重複せず、經巻についてもその經軸が杉や竹を二ツ割したものである点は類似するが、その法量が直徑 5.4mm、長さ 24.2cm と、直徑で 1.4mm、長さで 3.2cm ほど伝經ヶ岳出土資料より大きいなど相違点が多く²²、資料が残らないことから断言はできないが、同一資料である可能性は低いと考えられる。

次に、富士山本宮浅間大社所蔵資料であるが、經巻 10 卷の内の開かれた 5 卷の経紙については、伝經ヶ岳出土資料と同じ法華經というだけでなく、『富士の信仰遺跡』も指摘するように、その法量が縦 21.5cm、継ぎ幅 48.3cm で、字は朱書きでやや乱雑である²³という点も伝經ヶ岳出土資料と類似する。ただ、この經巻 10 卷自体の来歴が不明であり、三島ヶ岳出土品であるかのみならず、富士山頂で出土したものであるかも確定はしていないため、浅間大社所蔵資料については、まずはその出土地を特定する必要がある。

このように、三島ヶ岳出土資料・浅間大社所蔵資料と伝經ヶ岳出土資料を比較検討するためには、それぞれの資料の所在や来歴の調査がまずは必要であり、今後の課題としたい。

3 経ヶ岳の歴史 (表 3)

(1) 吉田口経ヶ岳の由来

伝經ヶ岳出土資料の出土地の比定を試みるにあたって、出土地として想定される富士山中の各所に存在する

表3 富士山絶ケ岳に関する年表

No.	和暦(西暦)	登山口	場所	内容(□は原文。他のは概要のみ)
1	久安5年(1149)	村山口	三島ヶ岳	富士上人と号する末代が、羽列法皇の援助を得て、一切経5262巻を埋納する。(『本朝世纪』久安五年四月十六日の条・案) 卷五十九「鳥羽天皇写大般若經發願文」参照) □註48 三宅 1983
2	建長3年(1251)	村山口	三島ヶ岳	【本中峯ハ冠ノ題也。前ニ有リ石室、金時上人安ス種々ノ仏具等々】 □註51 大高 2010
3	延宝8年(1680)	吉田口	不淨ヶ岳	【ふちやうかたけ】 □註25
4	延宝8年(1680)	吉田口	健ヶ岳	【今ほかたけ】 □註25
5	延宝8年(1680)	吉田口	不ヶ岳	【不淨峯】 □註25
6	延宝8年(1680)	東走口	絶の峯(山頂)	【絶音之嶽・此所に。六つうち二つは、きやうのみね。せいしがくば】 □註35
7	延享4年(1747)	吉田口	絶ヶ岳	日蓮が絶峰を書写し、富士山不ヶ岳に奉納した地は、今は絶ヶ岳と呼ばれている。その碑も跡に埋もれてしまつたため、改めて原山内左衛門が金剛王塔を奉納する。 □註24
8	宝曆14年(1764)	吉田口	上行寺・絶ヶ岳	【絶妙法華草紙 富士山 絶峰】 佛妙法華後五百歳中廣宣演布 元相曰蓮大菩薩集庵地土行等(以下略) □註28
9	安永8年(1779)	吉田口	絶ヶ岳	本文: 大・土・如・ク・山・吉・田・口・一・手・ラ・事・一・金・金・塔・テ・テ・一・貢・風・平・幅・一・以・テ・後・供・添・舟・之・指・船・一・舟・八・經・ト・】 如甲州 稲佐生・久松昭一郎・山本水心著「大士尊二群の小僧」 備考ノ部山本フシテ理・推・】 詳【吉田 古道標、大士道、白日、日暮寺、吉野山行寺、大士書本尊、書舟・二寺跡、大士醫藥一書】 丹波國屋足見・以テ放テ今茲シ受戒ス、其書子レ今歲ニ・體屋家一】 □註28
10	安永9年(1780)	吉田口	絶ヶ岳	【左引絶ケ岳上入神祇せし所と伝ふ】 頂山の巔に上るに御事有 絶ヶ岳石室を建て、雄谷家が毎年夏祭を賜得したが、高祖五百忌忌以前に、この石室が風雨で破壊されてしまい、改築できなくなつたこと、さう寺子が絶ケ岳上行寺と新廟に名乗ったことについて、雄谷家が改築する絶ケ岳の無い雄利が侵害するものであると、本稿の光長寺へ上源する。 □註60
11	天明5年(1785)	吉田口	絶ヶ岳	【合五勾・絶ヨリ南ノ絶御方筋ト云】 佐伝吉門曰蓮此ノ序ニ於テ法華経疏セシ地ナリト・堂宇アリ其ノ祠洞上ニ御方筋ナリ附行アリ ト日蓮夢魔地ハシタニニ六縁アリ 今既ガワトコトス 是日蓮御ヨリ御寺モナシトナリト・彼其時也屋内左衛門カラニ宿シ被者御道トシ地ヲセリト云 此地今ニ雄谷左衛門進退又】 申註51 伊藤国志
12	文化11年(1814)	吉田口	絶ケ岳・健ヶ岳	【合五勾・絶ヨリ南ノ絶御方筋ト云】 佐伝吉門曰蓮此ノ序ニ於テ法華経疏セシ地ナリト・堂宇アリ其ノ祠洞上ニ御方筋ナリ附行アリ ト日蓮夢魔地ハシタニニ六縁アリ 今既ガワトコトス 是日蓮御ヨリ御寺モナシトナリト・彼其時也屋内左衛門カラニ宿シ被者御道トシ地ヲセリト云 此地今ニ雄谷左衛門進退又】 申註51 伊藤国志
13	文化11年(1814)	吉田口	絶ケ岳・健ヶ岳	【合五勾・絶ヨリ南ノ絶御方筋ト云】 小屋一千貫其地廻廊ノ宝塔有り、宗祖曰蓮大菩薩安坐 文政元年中日蓮大菩薩御所ニテ一百八十法門地也其地屋内左衛門カラニ宿シ被者御道トシ地ヲセリト云 此地今ニ雄谷左衛門也此ヨリランヒトノ筋六縁アリカワトコト云 此處中ニ雄谷ヲ陵キント云 此地今ニ雄谷左衛門進退又】 申註51 伊藤国志
14	文化11年(1814)	吉田口	絶ヶ岳	日蓮が雄谷屋内左衛門宅で自説をした後、富士山に登り、その中腹に絶縁を埋めた。上行寺は元は雄谷の庵庵であるが、日蓮の時にあたるかは分からぬ。(日蓮の諸の上行寺に関する抜粋あり) □註61
15	文政6年(1823)	吉田口	絶ヶ岳	【絶ヶ嶺、京室大聖人、文永六・七、一百日法事所也。南妙法華草紙】 断のく崩に形付有り。大岩のこし路の方に日蓮聖人一百日罷り玉山小室有り、古沢したる。】 □註62
16	天保2年(1831)	東走口	山頂	天保2年に浅間神社主神小野大和が伊豆郡都法華宗玉津上人(日相)の協力を得て、家絶縁を山頂に奉納。 □註32
17	天保3年(1832)	東走口	須走	浅間神社主神小野大和の妻、幾曾女郎の名で阪本「日蓮勧進」が制作される。 □註36・39
18	天保3年(1832)	東走口	須走	浅間神社主神小野大和の義弟に富士山開會堂を建立し、日蓮大菩薩の大像を安置。 □註34
19	天保3年(1832)	村山口	絶ケ岳(山頂)	山田山現神社所蔵の富士山絶縁の刷物、山絶の絶ケ岳への参詣と中宮女堂の再創によるご利益を唱える。奥書に山田山日沖とある。 □註43
20	天保4年(1833)	東走口	各合目と山頂	各合の石室に神を安置し、日相が開闇供養を行う。 □註34
21	天保5年(1834)	村山口	絶ケ岳(山頂)	【東上方の絶ケ岳とすふ所あり、一切経を納し所なりと云は此未だ開東の民底に給進し仙洞に調進せし一切経を納所なり】 【南有大日堂、絶縁書文也】 此經御絶縁 西有御絶縁片岡開道雄山此絶縁は上にいふ木束上人一切經を納する所。吉田山絶縁と云ふ所】 □註53
22	天保9年(1838)	山頂	一	須山御絶縁谷主大が発願してて御像を造立。安置した場所は不明。 □註45
23	天保12年(1841)	東走口	山頂	浅間神社主神小野大和・和泉の嘉善女・職右衛門が発願主、江戸伝馬町講中が本願主となって、唐御の御像像を造立し、富士山頂へ安置する。 □註42
24	嘉永元年(1848)	吉田口	五合目	【合五勾・絶御洞跡ノ一ノ鳥居】 と題する絶縁中に【日蓮堂 弘化二年ヨリ日蓮祖師堂絶ケ岳ヨリ引ヨリ立】 ある。 □註9 文獻中
25	嘉永元年(1848)	吉田口	絶ヶ岳	【絶ヶ嶺、道より南の巖壁を云う、庚中の巖には女も此迄迄のぼるなり 是より中道通りみち有り】 □註9 文獻中
26	嘉永元年(1848)	吉田口	絶ヶ岳	【絶ケ岳】 とあるが絶縁中に【文永六年日輪御絶縁一部】 とある。 □註9 文獻中
27	嘉永元年(1848)	吉田口	山頂	【合五勾・日蓮堂御絶縁所・絶縁部分】 【日蓮】 とあるが石室と絶縁【須山御絶縁堂】 絶縁部分) □註9 文獻中
28	万延元年(1860)	吉田口	絶ケ岳・健ヶ岳	【絶ヶ岳】 と山より前の崖岩を崖所。此所ハ西元八年日輪御絶縁一部手写し不二山の半腰に埋て絶縁が留ててある。健ヶ岳は日蓮御絶縁の跡と云ふ所】 □註63
29	万延元年(1860)	吉田口	山頂	【日蓮御堂 初創打闇の少し下に】 □註63
30	万延元年(1860)	村山口	五合目	祖師堂を建立し、初開像を祀る。 □註45
31	万延元年(1860)	村山口	五合目	【無天界絶縁白菩提大光明】 と題する絶縁。上段に【如日光明能除諸障礙。斯入行世間能滅衆生苦】 【ひさの法乃八歲の蓮華口 ひらけし不二の鮮】 下段に祖師堂と【日蓮上人御子祖師堂御堂 泰安院坐し山表口五合目 野中村 大治寺】 とある。(その内容から万延元年発行と考察される。) □註45
32	慶応4年(1868)	吉田口	絶ヶ岳	文永6年(1269)に野中村百十代で日行大作を間にたて、当山へ奥摩を造営した。 □註64
33	明治35年(1902)	吉田口	絶ヶ岳	慶応3年(1867)の火災で、雄谷山の祖師堂は焼失し、明治5年(1872)の飛雲坂設立、絶ケ岳の宝塔は焼失された。開館元年50周年遠近である当年を前に、これら祖師堂と宝塔を明治38年までに再建すること目的に、富士ヶ岳法華堂開創興業会を組織し全員寄付を募ることを、内務省及び福地町に願い出る。 □註65
34	大正13年(1924)	吉田口	絶ヶ岳	富士山御絶縁谷主人の遺産の收拾奉行の事務の整理、絶縁・絶巒を発見。 □参考資料1
35	昭和4年(1929)	山頂	山頂	夏、鋼網の破片及び石碑石を発見。 □註46
36	昭和5年(1930)	山頂	三島ヶ岳	8月初旬、頭上巻の參詣用の被服用の小袋を採取のため、三島ヶ岳の體を削ったところ、絶巒の入った木部や絶巒の入った絶縁を発見。 □註46
37	昭和6年(1931)	村山口	絶ヶ岳	①五合目宝塔後醍醐天皇が御御園の石垣を修理して日蓮作成650年の記念塔を造ろうとした際に、地下3尺より、直徑1才長さ3才位の水晶品と祥菴物が見出された(御御新御物)。②五合目絶ケ岳の日蓮上人宝塔の根元から絶ケ岳とぞそれを包む布の袋が発見された。絶縁は、法華絶縁一品第一、版阪である。絶縁ならばに包布から判断して、おそらく御絶縁時代に埋められたと考えられる。 □註49
38	昭和9年(1934)	吉田口	絶ヶ岳	參詣所の建築。 □参考資料1
39	昭和10年(1935)	吉田口	絶ヶ岳	大正13年に絶ケ岳で発見された絶縁・絶巒の初観。 □参考資料1
40	昭和18年(1943)	吉田口	頂上奥宮	【日蓮の場合絶ケ岳が絶ケ岳から出でたのではなく、頭上巻の物語をつくるため富士吉田や門司湖町の人の石割の石に大石を割り取り、取り除かしているとき、絶ケ岳と同じく、ぎつり絶巒がついたものが出てきた。そのうち絶巒にはついて流れていないものを、日蓮署名の絶巒と侵襲難を三人が一巻づつ持ち切ったのが、吉田の御谷内右衛門内に一部が残り、絶ケ岳から出土したという伝承と結びついたのが事実である。】 □註1
41	昭和28年(1953)	吉田口	絶ヶ岳	常陽殿(八角堂) 建立 □註6
42	昭和42年(1967)	吉田口	絶ヶ岳	けずりられた崖面で、15枚の古鉄券が発見。皇室宝庫・治平元宝室・聖宋元宝室・淳祐元宝室・洪武通宝室が確認された。 □註11

経ヶ岳の由来と歴史を辿りたい。

まず、吉田口の経ヶ岳であるが、その初見は、管見の限りではあるが、延享4年（1747）に吉田の御師である塩屋平内左衛門が経ヶ岳に宝塔を奉納する際に、本山である光長寺（現、静岡県沼津市宮岡）住職の日泰が記した供養文³⁴中である。この文書中には、日蓮が不淨ヶ岳に經典を埋納したことから、今は同地が経ヶ岳と称されていると記されており、その初見当時から、経ヶ岳は日蓮による經典埋納伝承と不可分であったことや、経ヶ岳の地が不淨ヶ岳と同一若しくはその一部と認識されていたことが分かる。この不淨ヶ岳であるが、延宝8年（1680）の富士山中を描いた八葉九尊図³⁵や月旺御身抜³⁶が初見であることから、経ヶ岳より古い地名であることは確かであり、両図中に記される位置から現在の吉田口経ヶ岳を含むその周辺地に比定される。『甲斐国志』によれば、不淨ヶ岳は現在の経ヶ岳より上にあったとされ、「古ヘハ六七月ノ間山伏此ノ処ニ籠り居て登山ノ旅人不淨解除ノ祓ヒセシ所ナリ 故ニカク称スルトゾ」³⁷とある。この場所は、現在の六合目安全指導センター東側に広がる平地の北東端部で、過去に山小屋の六合荘があった地の周辺と考えられる。また、八葉九尊図には、「ふちやうかたけ」（不淨ヶ岳）の上に「うはかたけ」とあり、現在の経ヶ岳の下にあって、日蓮が風雨を凌いだという「姥ヶ懐」周辺を指しているとすれば、経ヶ岳周辺が「うはかたけ」（姥ヶ岳）と呼称されていた可能性もあるであろう。このように、経ヶ岳という地名自体は、江戸時代中期以降のものであるが、日蓮による富士山中への埋納伝承についても、同様であると考えられる。それは、先述した延享4年（1747）の供養文以前に記録がないことや、日蓮の伝記における初見が、安永8年（1779）に成立した『本化高祖年譜 全』と『本化高祖年譜改異』³⁸であり、それ以前の伝記では確認されることからも分かる。こうしたことから、経ヶ岳と日蓮の伝承が不可分であることが分かるが、この日蓮による經典埋納伝承は、吉田口の経ヶ岳が最も古く、その後富士山中の各所で語られるようになっていく。

なお、川口（現、山梨県富士河口湖町河口）の御師である大梅谷 本庄監物が制作した版本³⁹には、吉田口経ヶ岳に日蓮上人が訪れた際の宿坊が大梅谷であり、その縁で今は日蓮宗の宿坊及び御祈願所となっていることが記されている。また、この大梅谷は、『甲斐国志』の蓮華寺（富士河口湖町大嵐）の記述中において、「弘安五年壬午九月某日 日蓮往⁴⁰・武州池上⁴¹・富士ノ北麓ヲ過ギ 号-鎌倉海道 川口村上野坊ガ家ニ宿ス 浅間明神御師今其家存 隣家ニ梅屋采女ト云フ者アリ 同御師ナリ今存 日蓮ニ謁見ス 日蓮乃チ神仏一致ノ大意ヲ示シ權灾ノ道理ヲ説ク 采女拌合シテ歸依ス⁴²」⁴³とある中の梅屋采女と同一家である可能性が高く⁴⁴、こうした日蓮宗との深い関係が、大梅谷と経ヶ岳が結びつく背景にあったと考えられる。

これらの『甲斐国志』の記述や版本の内容から、江戸時代後期頃に、川口御師も経ヶ岳の祖師信仰に関係していったことは確かであり、今後経ヶ岳の歴史を探る上では、川口御師の活動も視野に入れていく必要がある。

（2）吉田口以外の経ヶ岳（図3・4）

須走口 吉田口の経ヶ岳に次いで、祖師信仰が関わる形で経ヶ岳が登場するのが、須走口である。天保2年（1831）に、須走口の浅間神社神主の小野大和が、豆州君沢郡玉沢（現、静岡県三島市玉沢）の経王山妙法華寺の41世貫主日桓の協力を得つつ、日蓮上人550年遠忌に合わせて富士山頂に宝塔（宝経塔）を奉納⁴⁵するのであるが、その山頂の地名が「元経ヶ岳」とされる⁴⁶。この「元経ヶ岳」の場所であるが、『法華富士の記』⁴⁷には、内院（山頂火口）へ賽錢を投じ、神仏へ祈願する地である「初穂打場」を表す鳥居手前に「法華開会塔」の標記と共に宝塔が描かれ、その左手に「元経ヶ嶽」と標記があることから、宝塔周辺地かその南にある「観音ヶ岳」（現在の伊豆ヶ岳）が「元経ヶ岳」と想定される（図3・4）。ここで「元」とあることから、その現「経ヶ岳」もあるはずであるが、その候補地としては、吉田口の経ヶ岳以外に、後述する三島ヶ岳や村山口五合目が挙げられる。また、観音ヶ岳については、延宝8年（1680）刊本の『富士山の本地』⁴⁸に「観音之嶽 此所に、八つヲうぢば、きやうのみね、せいしがくぼ」とあり、宝塔建立以前から観音ヶ岳周辺は「きやうのみね」（経の峯）と称されていたことが分かる。このことから、詳しく述べるが、日蓮による富士山中への經典埋納伝承に基づき、その名称から經典関連の由来を持つであろう「きやうのみね」を「元経ヶ岳」とみなし、その近くへ宝塔を建立した可能性がある。次に、この宝塔の建立地であるが、既に竹谷鞠負氏が詳述⁴⁹しているように、『富士山真景之図』⁵⁰には「吉田須走拝

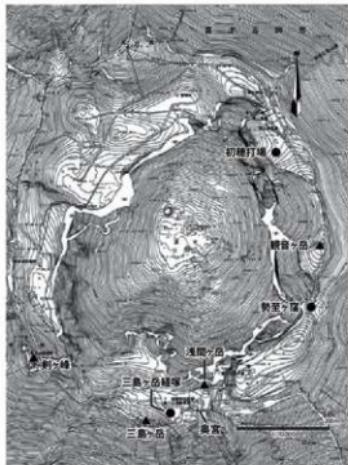


図3 富士山頂周辺図



図4 「富士山頂上略図」部分拡大
(『法華富士の記』・信州大学附属図書館所蔵)

所」とある初穂打場の手前に宝塔が描かれ、『富士山明細図』³³や『法華富士の記』にも同様に描かれる事から、初穂打場があったと推定される現在の久須志岳と大日岳の合間の平地あたりが宝塔の建立地と考えられる。

なお、この宝塔奉納以降も、天保3年（1832）には題目勧進の版本制作³⁴及び小野大和敷地内への富士山開会堂の建立と日蓮大菩薩像の安置³⁵、天保4年（1833）には須走口登山道の各合目への神仏の安置³⁶、天保12年（1841）には富士山頂への祖師像奉納³⁷と立て続けに奉納がなされており、須走口に祖師信仰が根付いていく様子が分かる。

村山口 村山浅間神社で所蔵する縁起に、奥書に天保3年（1832）とある「富士山頂上経ヶ岳靈場略縁起」³⁸がある。内容は、山頂の経ヶ岳へ宝塔を建立して参詣することと、村山口の中宮女人堂を再建して祖師像を安置することによるご利益を説くものであるが、「大導師日蓮大菩薩文永六³⁹」此頂に登り給ひて、拾石染筆まし／＼て妙経を書きし、一岳二岳の辺りに塚となし給へるより経ヶ岳と呼なせり、五合目を経ヶ岳とおりふは誤りなり」とあり、日蓮がいわゆる一石経を書きして塚を築き、それを経ヶ岳と呼んだことや、五合目にも経ヶ岳という地があったことが分かる。また、同縁起には、村山三坊のうち大鏡坊と池西坊の旧記とされるものが引用されている。それによると、まず大鏡坊の旧記には、日蓮が大鏡坊の社殿へ正嘉2年（1257）に法華経一部を奉納したことが記され、池西坊の旧記には、同じく日蓮が文永6年（1269）に富士山頂で「全石経修行」したことが記されるとしており、この縁起が村山三坊の協力を得て制作されたであろうことを示唆している。また、このうち後者の「全石経修行」が、先の一石経書写を指すのである。ここで、問題となるのは、経ヶ岳の近くにあるといふ一岳と二岳の位置であるが、江戸時代に村山三坊の池西坊が版行した刷物「蓮嶽真形図」⁴⁰によれば、一岳は表口（村山口）登山道が山頂へ達する左手に描かれ、二岳は更に左手で「剣峰」と標記される。このことから、この「蓮嶽真形図」の認識と「富士山頂上経ヶ岳靈場略縁起」の認識が同一であればという前提ではあるが、一岳と二岳は、それぞれ現在の三島ヶ岳と剣ヶ峰に比定することができ、この両岳の近くに一石経の塚が日蓮により築かれたと説くものであると解釈できる。

最後に、縁起中で記される五合目の経ヶ岳であるが、縁起の内容が村山口を主とすることから、吉田口ではなく、村山口五合目を指しているのである。この村山口五合目も、大泉寺の主導で、万延元年（1860）に祖師

堂が建立され、天保9年（1838）造立の祖師像を安置⁴⁵しており、縁起版行の時点でも何かしらの信仰があつた可能性もある。

（3）経ヶ岳出土品からみる経ヶ岳成立史

富士山中で「経ヶ岳」と称される地は、先述してきたように、吉田口五合五勾以外に富士山頂の三島ヶ岳周辺と觀音ヶ岳周辺及び村山口五合目があるが、その内、三島ヶ岳と村山口五合目は、吉田口経ヶ岳と同じく經典が出土している。まず、三島ヶ岳では、銅仏の破片及び一石経が昭和4年（1929）に発見⁴⁶され、数百本の經巻軸が入った木樽と50巻の經巻が入った経筒が昭和5年（1930）に発見⁴⁷されており、後者の全てかその一部は、久安5年（1149）の末代上人による埋納物であると考えられている⁴⁸。次に、村山口五合目であるが、昭和6年（1931）に、日蓮上人宝塔の根元から室町時代に埋納されたと考えられる經巻1巻とそれを包む布1枚が発見されている⁴⁹。

この両者に共通するのは、經典が出土したこと以外に、祖師信仰の対象地であることであり、これらの点は、吉田口経ヶ岳も同様である。そして、この3ヶ所の「経ヶ岳」は、いずれもその成立が、これまでみてきたように江戸時代を遡らないものであるのに対し、その出土品の全ては室町時代以前である。では、この3ヶ所に「経ヶ岳」が成立した背景であるが、江戸時代の「経ヶ岳」成立以前から、この3ヶ所で經典に係る遺物、つまり經巻か一石経が出土しており、それが広く知られていた可能性が考えられる。これは、「富士山頂上経ヶ岳靈場略縁起」に「拾石染筆まし／＼て妙經を書写」という一石経を思わせる具体的記述や、実際に三島ヶ岳で一石経が出土しているという事実からも強く示唆されるところである。つまり、「経ヶ岳」成立以前から、富士山中の特定の場所で經巻や一石経が出土することは周知の事実であり、そこへ江戸時代中期から盛んになっていく祖師信仰や身延山信仰⁵⁰が結びついたことで、經典出土地は日蓮により經典が埋納された地であるとの認識になり、祖師信仰に基づく「経ヶ岳」の成立につながったと考えられるのではないだろうか。このことは、先述したように、祖師信仰が富士山中で盛行する以前である延宝8年（1680）刊本の『富士山の本地』において、「きやうのみね」（経の峯）とみえ、當時から經典や經石の埋納伝承があったことが推定されることや、後になって、その近くへ須走口側から祖師信仰に基づく宝塔が奉納され、「元経ヶ岳」とも称されていたことからも、裏付けされることである。いずれにしても、伝經ヶ岳出土資料も含め、富士山中から出土した經典資料の制作年代と、祖師信仰に基づく「経ヶ岳」成立年代は、約600年の年代差があるとともに、その間の經縛に未だ不明な点も多い。今後、その歴史の空白を埋めていくためにも、經典資料の分析とともに、経ヶ岳に関する歴史資料の調査を進めていく必要がある。

4まとめ

（1）富士信仰地としての経ヶ岳

富士山各所の経ヶ岳の歴史を紐解いてきたが、經典が出土した3ヶ所の経ヶ岳は、富士信仰の歴史上においても重要視されてきた場所であり、經典を埋納するに相応しい地といえる。

まず、三島ヶ岳については、末代上人による埋納が行われたとされるだけでなく、建長3年（1251）の奥書のある「浅間大菩薩縁起」⁵¹において、やはり三島ヶ岳に比定される「未申峯」に、末代上人の3代前に登拝したとされる金時上人により仏具が納められとされる。また、その後も覧薩上人、日代上人、そして末代上人により、「未申峯」と断定はできないが、經典や仏具が奉納されたとしている。このように奉納の舞台として描かれている富士山頂は、古来から神仏の住まう靈地として重視され、中世から近世にかけて仏像など多くの奉納物が納められた地であり、「浅間大菩薩縁起」に描かれる様子は、その一端を指し示しているといえる。また、信仰地として極めて重要な地であるという点は、同じく富士山頂に位置する「きやうのみね」も同様であり、今後、經典や一石経が発見される可能性はあるであろう。

次に、吉田口経ヶ岳と村山口経ヶ岳であるが、植生変化により景観が一変する境界地であり、かつ富士山中腹を一周する巡拝路（御中道）の合流地であるという点で、両者は共通する。吉田口については、『甲斐国志』⁵²に、経ヶ岳より下の驥ヶ馬場から中宮までは「古木天ヲ蔽ヒ蘿藤道ヲサヘギリテ攀チガタキ所多シ」とあり、中宮よ

り上は「砂石山ヲナシ草木不生^レ因リテ毛ナシト称ス 岐路益々ハゲシ四方ヲ眺望スレバ名ヲ得シ高山皆目下ニ見ユ 又此所ニ選ばれ所アリ 是レ最頂ニ攀ルコト不^可能者ノ拝スル所ナリ」とあり、五合目とされる中宮が森林限界で、それより上では草木がなくなり、眺望が一変する様子がよく分かる。経ヶ岳は、こうして森林帯を抜けた五合五勾にあたるわけであるが、更に少し上は、先述したように不淨ヶ岳という地であり、御中道の起点ともなっている。

このように植生の変遷に伴う明瞭な景観変化がある富士山は、近世においては吉田口以外の登山道も、麓から山頂に向かって茅野・木立・毛ナシ⁵³や草野三里・木山三里・岩山（すな山）三里八町⁵⁴という3区分がなされ、茅野と木立の境と木立と毛ナシの境が信仰上の区分としても重視されてきた歴史がある。特に、経ヶ岳周辺も含む木立と毛ナシの境は、「天地の境」⁵⁵とも称され、村山口や須走口においては一合目の起点であると共に、ここから上が本山⁵⁶であり、少し上の五合目は、繰り返しになるが吉田口と同じく御中道の合流点でもあった。このように、吉田口だけでなく、村山口においても五合目は重要な地であり、富士山中において山頂と同じく經典の埋納が行われるに相応しい地といえ、後に両者とも「経ヶ岳」と命名されたことも、全く不思議なことではない。ちなみ、吉田口では、茅野と木立の境である一合目においても、江戸時代と考えられる一石経の経塚が発掘⁵⁷されており、景観上の境界が信仰上重視されてきたことを裏付けている。更に、この一石経からは、法華経28品のうち、第6品の「授記品」と第14品の「安樂行品」が確認されており、経碑が未発見のため、その埋納の背景が不明ではあるが、「経ヶ岳」と同じく日蓮宗寺院や信徒が関連している可能性はあるであろう⁵⁸。

(2) 伝經ヶ岳出土資料の出土地

これまで検討してきた経ヶ岳を称する地は、吉田口五合五勾、村山口五合目、三島ヶ岳、觀音ヶ岳の4ヶ所、經典か一石経が出土したとされる地は、このうちの吉田口五合五勾、村山口五合目、三島ヶ岳に吉田口一合目を加えた4ヶ所である。そして、伝經ヶ岳出土資料の出土地は、これらのうち、伝来地である吉田口五合五勾か、同時期の經筒・經典が出土している三島ヶ岳の2ヶ所の可能性が高いが、第2表N 40で指摘されるように、それ以外の地である可能性も否定はできない。残念ながら、本稿でこれ以上推定地を絞り込むことは、先述したきたように、手元の資料のみでは困難であり、富士山中から出土した經筒・經卷資料及び各経ヶ岳の歴史調査を今後も継続して行い、解決の糸口を探りたい。

以上、事実確認に終始してしまったが、伝經ヶ岳出土資料の研究に際しての基礎資料として今回の報告が役立つことができれば幸いである。なお、本稿の執筆にあたり、以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。伊藤昌光・井上輝夫・遠藤是秀・小林義生・大高康正・奥脇和男・桃山沙織・菊池邦彦・櫛原功一・坂詰秀一・高橋晶子・布施光敏・松田香代子・渡井一信（敬称略、五十音順）

¹ 小川孝徳「富士登山今昔上」「山梨時事新聞」昭和42年（1967）7月23日・羽田光 1975「富士登山史」「富士の信仰と富士講」

² 布施光敏 2002「富士吉田市歴史民俗博物館企画展図録 富士の信仰遺跡」

³ 前掲註1

⁴ 「崩の意は、①そばだつ。山がそりたつ。山が高くぬきんでる。②ぬきんでるさま。独立のさま。起こるさま。《角川 大字源》より」

⁵ 『肥之 35 山川部第16ノマ 都留郡都内編 富士山』『甲斐国志』（『大日本地誌大系 甲斐国志』第2巻 所収）。なお、『甲斐国志草稿』（田辺家文書）では、「岩崩」ではなく、名称を「法華騒ヶ岳」とある。

⁶ 小野哲彦 1989「鳥仰 5 富士信仰と御師（3）御師と講社 経ヶ岳」「史民俗調査報告書第9集 上吉田の民俗」

⁷ 星野芳三 1999「第2章 明治中後期の地域社会 第7節 生活と文化 2 富士登山の振興」「富士吉田市史」通史編第3巻 近・現代

⁸ 小澤人蔵 貢宣「富士山明細図」（奥脇和男 1997「富士吉田市歴史民俗博物館企画展図録 富士山明細図」所収）の「27 小御岳一之鳥居入口」「33 経ヶ岳 日蓮上人百日行場」。なお、「富士山明細図」の制作年代は、本文獻によれば天保11年（1840）～弘化3年（1846）の間とされる。

⁹ 長島泰行 1848「富士山真鏡之図」（岡田博校訂 1985「江戸時代夢遊録 富士山真鏡之図」所収）の「文承六年妙経一部ヲ理テ 経ヶ岳」と題する絵図

¹⁰ 前掲註7によると、大正4、5年（1915、16）の「福地村富士登山道県費補助書類」に、馬廻より経ヶ岳まで幅員一間とし、直登部分は迂回して乗馬・駄馬の通行を可能とするとあるとし、この整備による可能性がある。

¹¹ 遠藤秀男 1975「富士に埋もれる古蹟」「富士山の謎」大蔵書房

¹² 前掲註5

¹³ 前掲註5

¹⁴ 前掲註8「33 経ヶ岳 日蓮上人百日行場」

¹⁵ 前掲註9

¹⁶ 前掲註9 文獻中

¹⁷ 前掲註2によると銀鈴付け

¹⁸ 前掲註2

- 19 石田茂作 1926－28「経塚」「考古学講座 古墳・和鏡・経塚・梵鏡」3雄山園、の経筒・経紙の法量に関する論考及び、関秀夫 1985「経塚遺文」東京堂出版、関秀夫 1988「経塚一闇東とその周辺」大塚工芸社、奈良国立博物館編 1977「経塚遺宝」東京美術 に言記載される経筒・経紙の法量を参照した。
- 20 前掲註2
- 21 大藏經テキストデータベース研究会 (<http://21dzk.t.u-tokyo.ac.jp/SAT/>)
- 22 後掲註 46・47・48
- 23 前掲註2
- 24 「経ヶ嶽に金剛之宝塔供納につき開眼供養文」(富士吉田市史編さん委員会 1997「富士吉田市史」史料編第5巻 近世Ⅲ No.75 所収)なお、同時に日勝上人へ授与され、今は上吉田の日蓮宗寺院上院にて伝わる奈良時代制作とされる創造如来形立像(県指定文化財)は、「黄金佛経ヶ嶽」と墨書きされた扇子に納められ、経ヶ岳に安置されていたと考えられる。
- 25 富士吉田市歴史民俗博物館 1993「八葉九尊圖」「描かれた富士の信仰世界」
- 26 「月夜御身振」(富士吉田市史編さん委員会 1997「富士吉田市史」史料編第5巻 近世Ⅲ No.33 所収)
- 27 前掲註5
- 28 英蘭日英対訳 1847 井戸田鶴校訂 1974「本化高祖年譜叡異会本」(日蓮上人伝記集(建立日諦・玄得日善 1779「本化高祖年譜 全」と「本化高祖年譜叡異」の合本。この原本は未確認)
- 29 富士吉田市歴史民俗博物館所蔵、原文「富士山之儀君三國第一之靈山也 往古より諸宗之祖師信仰厚く 夫々開山塔被立置 別當日蓮上人之儀君当山へ百日乃大師として被成し 一宗開基の祖師君に顕彰なさしめし玉ひ 今おみて富士山経ヶ嶽と明大君有之 自然にして南無妙法蓮華經相顕れ右場所:祖師堂相立宗之本定所となりぬ もと登山中繁榮羅有二衣部の祖師君蓮上人之宿坊^{モニ}有之 先祖當山上人御行之導師相勅 依之御宗旨之宿坊^{モニ}有之 右山繩^{モニ}御行繁榮孫子孫長久諸^{モニ}除濟の御戒差し申候 己上 富士山御祈願所本宮御師 日蓮上人應山之宿坊 大梅谷 本庄監物 8月(菊池邦彦氏に翻刻いただいた)。
- 30 「巷之90 仏寺部第 17ノ下 都留郡都内領 持名山蓮華寺」「甲斐国志」「大日本地誌大系 甲斐国志」第3巻 所収)
- 31 菊池邦彦氏に、大梅谷の宝来3年(1706)の文書に梅谷某女のお名があるところ教歎いただいた。
- 32 青柳賛一 2000「フィッシュの後始末~天保2年駿州鹿島郡走村神主室誠塔建立一件~」「富士信仰研究」創刊号
- 33 青柳賛一 2006「人の移動と地域社会~富士山の『日蓮宗の各所』化をめぐって~」「近世地城史フォーラム2 地域史の視点」吉川弘文館
- 34 «法華富士の記»(信州大学附属図書館近世日本山岳関連データベース所蔵)序文末に「干時天保九年 富士山東麓須走口 大歲戊戌夏 開会堂別当源記」とある。
- 35 «富士山の本地』(横山重・松本龍信編 1978「室町時代物語大成」第11 所収)
- 36 竹谷鶴飛 2011「天保2年の女人富士登山」「富士山と女人禁制」
- 37 前掲註9 文獻の「其二 吉田須走詳所」
- 38 前掲註8 文獻の「45 同(頭上)」
- 39 東口本宮富士浅間神社編 2008「天保3年小野幾曾女題目勅進」「収藏版本展~版本にみる富士信仰の諸相~」前掲註 36
- 40 前掲註 34
- 41 前掲註 34
- 42 望月真澄 2008「車返塲場関係資料」「身延論義」13・望月真澄 2010「江戸庶民の身延山巡拝~法華信仰の形態を探る~」「近世民衆宗教と旅」法藏館・望月真澄 2011「第1回 甲斐國の身延山信仰」「身延山信仰の形成と伝播」岩田書院、前掲註 9 文獻の「頂上薬師巖」と題する絵図において、「日蓮」と標記された石室内に祖師像が描かれており、この時に奉納された祖師像と考えられる。
- 43 大高康正 2010「富士山上経ヶ岳霧場跡解説」「富士山縁起の世界~絆夜姫・愛鷹・犬飼~」
- 44 堀内真貞 2000「蓮蓬真形図」「富士吉田市歴史民俗博物館企画展図録 富士山登山案内図」
- 45 富士宮市教育委員会伊藤昌光氏、大寺守往職道是秀氏にご教授いただいた。
- 46 佐野勇 1930「富士山上三島ヶ岳の秘蹟」「考古学雑誌」第20巻 10号
- 47 前掲註46・足立聰太郎 1930「富士山頂三島ヶ岳の秘蹟」(足立聰太郎修訂 1975「新駿河国風土記」下巻 所収)
- 48 三宅敏之 1983「富士山人代末の埋葬」「経塚論叢」(原典は三宅敏之 1961「富士山における一切經理納供養について」「歴史考古」5)・勝又直人 2011「三島ヶ岳經塚考一富士山本宮浅間大社所蔵写真資料からー」(静岡県理文化財調査研究所「研究紀要」17)
- 49 三宅敏之 1980「富士山茶葉と經典埋納」「山岳宗教史研究叢書14 修驗道の美術・芸能・文学」(1)名著出版・和田恵夫 2009「日蓮の遺跡」「昔の富士登山」
- 50 中尾亮 1999「日蓮信仰の系譜と儀礼」吉川弘文館・望月真澄 2011「身延山信仰の形成と伝播」岩田書院
- 51 大高康正 2010「古文状」所収「漫談大菩薩縁起」部分(専修圖文庫・西岡芳文氏翻刻)「富士山縁起の世界~絆夜姫・愛鷹・犬飼~」・西岡芳文 2004「新出「觀音菩薩縁起」にみる初期富士修験の様相」「史学」73 - 1
- 52 前掲註5
- 53 新庄道雄 1834「巻二十三 富士山 上」「新駿河国風土記」(足立聰太郎修訂 1975「新駿河国風土記」下巻 所収)
- 54 1823「三の山塗」(国立国会図書館書籍を読む会翻刻 1979「江戸削山書齋翻刻叢書1 三の山塗」所収)
- 55 高山彦九郎 1780「富士山行記」(高山彦九郎先生道徳講演会編 1943「高山彦九郎全集」第1巻 所収)
- 56 前掲註53・秋山山王 1755「富士記」(長野県立伊那郡教育会編「諏原拾葉」8所収)
- 57 布施光敏 2001「富士山吉田口登山道関連跡I 歴史の道整備活用推進事業に伴う調査報告書」・布施光敏 2003「富士山吉田口登山道関連跡II 歴史の道整備活用推進事業に伴う調査報告書」
- 58 田代季 2001「民間信仰道路分布調査報告書~近世の経塚』においても、日蓮宗と一石經埋納の密接な関係が指摘されている。
- 59 富士吉田市史編さん室 1991「富士吉田市史資料叢書1 上吉田の石造物」
- 60 「上行之儀新規に経ヶ嶽を名乗候沿跡に乞願書」(富士吉田市史編さん委員会 1997「富士吉田市史」史料編第5巻近世Ⅲ No.76 所収)
- 61 「巻之90 仏寺部第 17 / 都留郡都内領 吉祥山上行寺」「甲斐国志」「大日本地誌大系 甲斐国志」第3巻 所収)
- 62 芙蓉亭鑑乘 1823「富土日記」(国立国会図書館書籍を読む会翻刻 1983「江戸削山書齋翻刻叢書6 富土日記・木曾探薬記」所収)
- 63 「富士山道解説」(富士吉田市史編さん室 1997「富士吉田市史」史料編第5巻 近世Ⅲ No.30 所収)
- 64 「都留郡上吉田村 明細報 日蓮宗吉祥山 上行寺」「(甲斐国 社記・寺記)第4巻 寺院編 3 所収)
- 65 「富士経ヶ岳宗祖靈蹟再興の義につき願書」(富士吉田市史編さん委員会 1993「富士吉田市史」史料編第6巻 近・現代 I No.187 所収)

第7節 富士河口湖町河口 西川遺跡の概要

杉本悠樹（富士河口湖町教育委員会）

はじめに

南都留郡富士河口湖町河口字西側に所在する西川遺跡では、平成21年の2回の調査によって奈良・平安時代の遺物が多数検出され、遺跡の所在地である河口の地名を示唆する「川」の墨書き銘をもつ須恵器をはじめ、墨書き土器及び刻書き土器のほか、墨痕のみとめられる土器片、須恵器や土師器の破片を二次的に利用した転用硯、灰釉陶器の薬壺などの出土があり、古代の官道「甲斐路」の3駅のひとつ、河口駅と関連をもつ遺跡である可能性を報告している^①。さらに平成22年10月には、一般住宅の建設工事に先立つ試掘確認調査の結果、8世紀～9世紀にかけての土師器、須恵器等の土器片に伴い製塩土器の破片が出土した。山梨県内における古代の製塩土器の出土事例として7例目であり、山梨県東部及び富士山麓地域においては初の事例となり、製塩土器をはじめ資料化しうる遺物の紹介をしている^②。本稿ではこれまで3回にわたる調査によって出土した資料を中心に戻跡の概要を示す。

1 遺跡の立地と歴史的環境

本報告書における河口浅間神社及び宮の上遺跡の調査の項目において、河口地区の地質や遺跡などの概要是記載されているため重複を避ける。

西川遺跡は、西川左岸の平坦地上の標高約843mに位置する。遺跡の東方には国道137号が近接しており、河口集落を南北に縦断している。国道は旧鎌倉往還であり、河口の集落は同往還の難所である御坂峠の南に位置し、古くから峠を越える前後の人々が寄宿する宿場町として賑わってきた。特に中世以降は、鎌倉往還を通じて富士山へ向う中部、北陸方面の道者が多く詰めかけ、道者たちに宿を提供し、祈祷を行ったうえで富士登山の案内を行う御師が集住した。近世まで通じて最盛期には140軒を超える御師集落が繁栄した。御師集落には、旧鎌倉往還（現・国道137号）に平行する人工水路が東西対称に設けられ、西川から取水した水が流れている。この水路は呑川と呼ばれ、集落の生活用水のほか、御師住宅に寄宿する道者の潔斎にも使われたと伝えられる。西川遺跡は集落の西地域を南北に流れる呑川により分断されている。また、西川遺跡の所在地の小字は西側であるが、鎌倉往還（国道137号）を挟んだ地域の小字は東側と称され、地名に往還が意識され、往還の東西が字の名称に反映されている。対面する字東側には、史跡富士山の構成要素のひとつである河口浅間神社が鎮座する。また河口は、「延喜式」に記載された東海道の支路、甲斐路（御坂路）の三駅のひとつである河口駅の所在地にも地名などから比定されてきた^③。

交通の要衝として重要視されて、特異な歴史を歩んできた地域であることが遺跡や現存する地割、古道の状況からうかがえる。

2 調査の経緯と出土遺物

西川遺跡は、古墳時代の散布地及び中世の城館跡（河口氏屋敷跡）が複合する遺跡として遺跡台帳に記載されてきた^④。国道137号の河口浅間神社交差点から河口駅在所にかけての区間の路肩の西に面した直径約200メートルの範囲が埋蔵文化財包蔵地として周知されている（第1図）。

平成21年2月の調査（試掘確認調査）

平成21年2月、遺跡の範囲において、一般住宅が建設されることに伴い、富士河口湖町教育委員会が事前の試掘調査を実施した。地盤の脆弱化を防止するため、住宅建設予定地のうち、建物基礎の及ばない地点に2×2mのトレンチ（第2図のH21-T1）と1×3mのトレンチ（第2図のH21-T2）を設定し、人力により掘り下げた。調査の結果、住宅の基礎が及ぶ深度である地表から60cmの範囲では遺構及び遺物が検出されなかった。しかし、分布調査としての好機であるため、トレンチの一部を掘り下げた。結果として、地表から約90cm～1m10cmの範囲に奈良・平安時代から中世にかけての遺物包含層があることが確認された。遺物の点数は多

くはなく、資料化し得る大きさの遺物は得られなかったものの、現在の河口の集落の中心部の直下に奈良・平安時代の遺跡が存在することが明らかとなった。奈良・平安時代の遺物は、甲斐型の土師器の环形土器、壺形土器の破片が主なものであった。

平成 21 年 3 月の調査（工事立会い調査）

平成 21 年 3 月には、先述の一般住宅の建設工事と並行して、この新築住宅を含んだ周辺の家庭に接続する下水道管の埋設工事が実施されることが判明し、富士河口湖町役場水道課と同町教育委員会、工事施工業者の間で協議を行い、工事に際して遺物包含層の存在する深さよりも浅い、地表から約 80cm の深さで重機による掘削を一旦中断し、包含層の精査と遺物の検出を目的とした工事立会い調査を実施することが決定した。下水道管は、国道 137 号に埋設された本管に直交する約 53m の支管を敷設するものであり、西川遺跡の範囲内を東西に横断する。下水道が敷設されるのは、河口地区に現存する最古の御師住宅に国道 137 号から通じる路地（いわゆる「タツミチ」）である。前述の呑川を挟んで地下約 2m の深さに埋設する計画で、平成 21 年 3 月 17 日から工事が開始され約半月の期間にわたり工事立会い調査を行った。

第 3 図-1 は、「川」の字が記録された須恵器の环形土器である。口径は復元で約 16cm を測り、残存高は約 6cm である。やや白みがかった灰色の色調をもち、内面には灯明に用いられた際に付着したと思われる焦げ跡がある。また、内面には燃料となる油類を充填していたことによる黄ばんだシミも残る。断面は口唇がやや外反し細く尖り、ロクロ整形による痕跡が段状のくびれた断面を呈する。底部は欠損しており高台の形状等も不明である。墨書きは器体部に記録されており、「川」の字の三画目は右に大きく払われる古代に多く見られる書法である。奈良時代の 8 世紀中葉～後葉にかけてのもので、静岡県の湖西窯産であるとの教示を得ている^⑨。この「川」は、西川遺跡が所在する河口の「河」と同音異字のものと推測され、地名を表す可能性があるとの見解を得ている^⑩。地名を表す場合、延喜式にみられる河口駅の所在地を示すものと考えられる。また、これまで河口の地名を示す最古の資料は、『日本三代実録』の貞觀 6 年（864）の記事にみえる「河口海」であったが、この墨書き土器の年代観から奈良時代に河口という地名が存在したことも想定される。灯明に用いられている点と、地名を推測される記録をもつことに大きな特徴を有する。

第 3 図-2 は、「□廣□」という墨書きの記録を底部にもつ土師器の环形土器である。全体形の 1/3 ほどの残存状況である。3 つの破片の状態で検出され、洗浄後に接合した。復元した口径は直径約 12cm、器高は 4.5 cm を測る。器厚は約 5mm とやや厚い。器体部の外側には連続した弧状に、器体部内側には縦位に、見込み部には放射状に暗文がみられ、精巧に磨かれている。底部と器体下部は、ヘラ状の工具でケズリの調整が施されている。器の形状や仕上げは奈良時代の 8 世紀中葉の甲斐型土器と共通するが、胎土が赤色の甲斐型土器とは異なり、暗茶褐色系の色調をもち、駿東型に用いられる土により作られたとの教示を得ている^⑪。墨書きは底部が半分欠損しているため、「廣」の字の下半部のみ認識しうるが、器面に水分を加えると「廣」の字の下に続いて「坏」の字があら、「□廣坏」という記録をもっていた^⑫。通常の状態では「坏」の字が認識できないため実測図では表記していないが、平川南氏の実見に際するスケッチを掲載している。この土器も灯明に使われたとみられ、器の表面に煤が多く付着している。

第 3 図-3 は、土師器の环形土器の底部片である。球面に近い形状を呈するため、底径の復元が困難である。元来は仏鉢のような器種である可能性も考えられる。残存している部分の最大幅約 8cm である。橙色に近い赤褐色の色調を持つ。破片ではあるが、断面が面取りされたように滑らかに磨耗しており、器全体も掠られた痕跡が認められることから、二次的な使用がされた可能性を示唆していただいた^⑬。見込み部は放射状に暗文がみられ、底部は一定方向に磨かれている。刻書により「山太」という記名が施されているが、後に則天文字で「天」を示す文字が追記されている^⑭。「山太」の「太」は、「田」と同じ意味をもつとの教示を得ている^⑮が、峠のたもとに遺跡が所在することから、峠の語源である「手向け（たむけ）」との音の関連も推測される。この土器は、奈良時代の 8 世紀中葉の所産と推測される。

第 3 図-4 は、平安時代 10 世紀初頭に位置付けられる甲斐型土器の环形土器片である。呑川西第 1 地点から

多くの同時期の土器とともに出土した。器体部の下部の細片であるが、「罣（岡）本」の記銘が墨書で施されている³⁰⁾。細片のため底径の復元等は不可能であり、内面の剥離もあり器の厚さ等は不明である。明るい赤褐色で、胎土には赤色の粒子が肉眼で確認しうる。峠のたもとを連想させる墨書記銘である。

第3図-5は、第3図-4と同時期の所産で、出土も同地点からである。底部の部分片であるため全形は不明だが、横位のケズリの状況から皿形土器と推定している。赤みの強い色調をもち、黒色の斑点がみられる。墨書は底部に「夷」（＝「奉」）と記銘されている³¹⁾。

このほか、須恵器の壺または壺の破片を二次的に使用した転用硯、器体部内面に墨痕がみられる土師器の破片など、文字の筆記行為に関連する遺物が際立つ。灰釉陶器の菴壺などの出土もあり、官衙関連と推測される遺物のほか、河口湖や周辺の河川で漁撈に用いたと考えられる土鉢も出土しており、西川遺跡の立地の特徴としてとらえられる。

平成22年10月の調査（試掘確認調査）

平成22年10月には、平成21年2月に試掘確認調査を実施した地点の北に隣接する地点において一般住宅の建設に伴い試掘調査を実施した。地盤の脆弱化を考慮して、新築される建造物の基礎にかかる部分を避けて2箇所のトレンチを設定した。敷地の制約上、第1トレンチを2m×2m（第2図H22-T1）、第2トレンチを2.5m×1m（第2図H22-T2）として、人力で掘削した。掘削を進めたところ、2つのトレンチともに地表面より約1mの深さにおいて遺物包含層が認められた。遺物の多くは、奈良・平安時代の土師器片であった。

一方、第2トレンチからは奈良・平安時代の土師器及び須恵器の破片が出土したが、遺構の確認には至らなかつた。

この調査における出土遺物は、細片を含め約100点を数えた。出土遺物のうち、特徴が南アルプス市の向第1遺跡で出土した8世紀の製塙土器に類似していることから、製塙土器について見識のある帝京大学山梨文化財研究所の平野修氏に実見していただいたところ、8世紀の製塙土器であるとの見解を得た。3点の製塙土器は第2トレンチからの出土である。

第3図-6は、製塙土器の口縁片である。色調は暗黄褐色であるが、断面を観察すると器内部は明灰色となっており二次焼成を受けたものと考えられる。器厚は約5.5mmで残存高は約2.2cmを測る。外面は斜方向に、内面は横方向にナデが施されるのが基本である。内面には細かく斜方向に調整された痕跡も確認される。

第3図-7は、製塙土器の体部の破片である。色調は暗黄褐色で外面は斜方向または横方向、内面は横方向のナデが施されている。器厚は約5.5mm、残存高は約1.7cmである。色調、器厚ともに1に類似している。

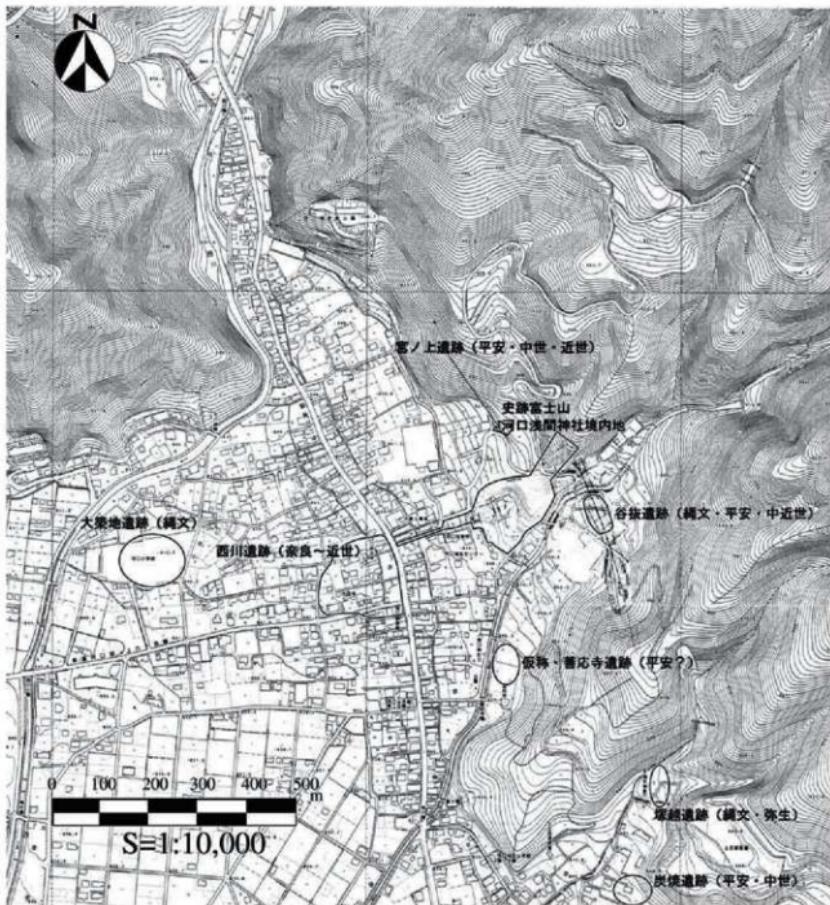
第3図-8は、1と2とは異質のもので、器厚約3mmと薄く、色調も外面は灰褐色、内面は暗黄褐色である。外面は斜方向又は縦方向に、内面は斜方向に削りが施されている。残存高は約3cmを測る。

3 調査結果の考察

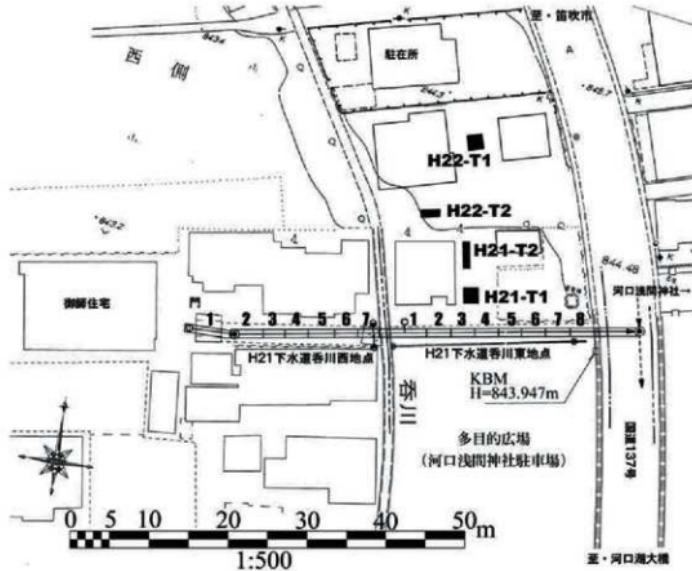
西川遺跡は、これまでの調査により墨書土器等の文字資料、転用硯の出土から官衙、特に駅家に関連する遺跡である可能性を述べてきた。製塙土器の出土事例が加わり、流通拠点である証拠をひとつ得ることができた。しかしながら、遺跡のごく一部を試掘によって調査したことによる過ぎず、これまで3回にわたる調査では遺跡の全容を把握するまでには程遠いことに変化はない。河口地区全域の分布調査を含め、西川遺跡を中心とする古代集落の広がりの確認、道路遺構の検出に向けて努めたい。また、官衙に関連する遺物は、祭祀に用いられる遺物とも捉えられることから、河口浅間神社との関連なども今後検討する必要がある。

註

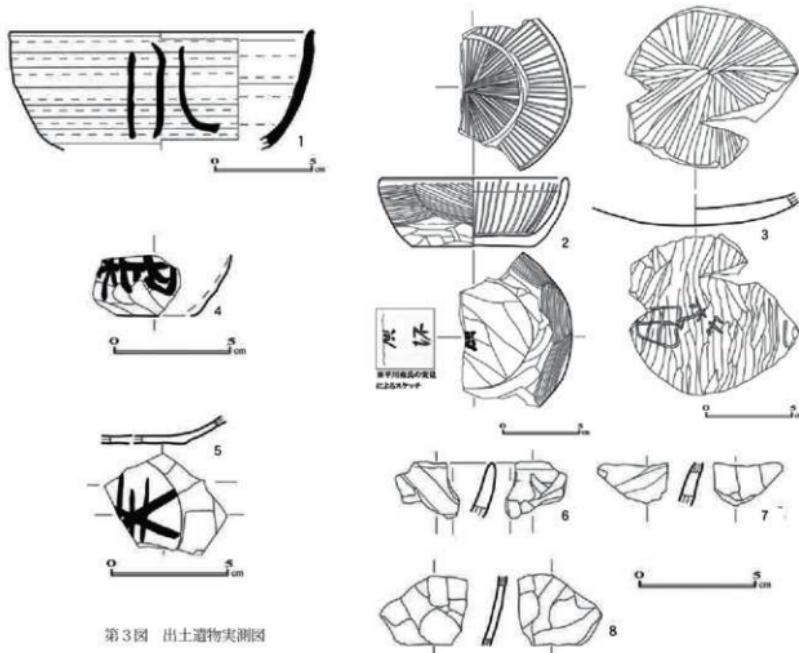
- (1) 杉本悠樹 2010 「富士河口湖町河口 西川遺跡の調査成果について（報告）」『山梨県考古学協会誌』第19号 山梨県考古学協会
- (2) 杉本悠樹 2011 「富士河口湖町西川遺跡出土の古代製塙土器について」『山梨県考古学協会誌』第20号 山梨県考古学協会
- (3) 1999『山梨県史』資料編2 原始・古代2 考古（遺構・遺物） 山梨県
- (4) 1999『山梨県史』資料編1 原始・古代1 考古（遺跡） 山梨県
- (5) 山梨県立考古博物館学芸課長 保坂康夫氏のご教示による。
- (6) 山梨県立博物館 館長 平川 南氏のご教示による。
- (7) 帝京大学山梨文化財研究所 平野 修氏のご教示による。
- (8) 実測図をもとに甲斐市教育委員会の大島正之氏からご教示いただいた。
- (9) 文化庁記念物課 史跡部門の主任文化財調査官 佐藤正知氏からも平川 南氏と同様のご教示をいただいている。



第1図 富士河口湖町河口地区 遺跡分布図



第2図 西川遺跡調査地点位置図



第3図 出土遺物実測図

第8節 宮ノ上遺跡出土の金付着陶器の科学調査について

著名 貴彦（山梨県立博物館）

1 はじめに

近年、筆者らの調査により山梨県を中心に金が付着した土器片や陶器片が数多く確認されている^①。その事例は、黒川金山や湯之奥金山の金山遺跡、勝沼氏館跡や武田氏館跡などの城館跡、武田・甲府城下町遺跡から出土した遺物であった。

今回、富士河口湖町に位置する川口浅間神社の境内に近い宮ノ上遺跡出土の陶器片に、金が付着したものが確認された。これは、東部富士五湖地方では初めての事例であり、これまでに確認事例がない神社境内域内からである。

本資料の調査から、資料の使用方法や出土地付近の役割推定、金生産地特定の可能性など新たなる情報が付着物の詳細調査により得られると考え、科学調査を実施した。

以下に、その調査結果について報告する。

調査資料

宮ノ上遺跡出土陶器片 1点

調査内容

○ エックス線透過撮影エックス線透過撮影による資料への重元素の付着状態調査

資料表面への重元素類の付着状況の可視化を目的に、エックス線透過撮影を行った。

・使用装置

デジタルエックス線撮影システム（エクスロン・インターナショナル（株）製）

・撮影条件

管電圧：160kV 管電流：4.0mA

○ 顕微鏡による詳細観察

実体顕微鏡を用いて資料表面の詳細な観察を行った。

○ 蛍光エックス線分析による付着元素類の非破壊定性分析

蛍光エックス線分析による非破壊定性分析を、金粒子部分や各付着物に対し実施した。

・使用機器

エネルギー分散型蛍光エックス線分析装置 SEA5230HTW

（エスアイアイ・ナノテクノロジー（株）製）

・分析条件

管電圧：50kV 管電流：1000 μA 照射面積：1. 直径 1.8mm、2. 直径 0.1mm

照射時間：60sec 分析環境：真空中

○ エックス線マイクロアナライザ付走査型電子顕微鏡（SEM-EDX）による付着元素類の分布調査

蛍光エックス線分析で得られた情報を元に、エックス線マイクロアナライザ付走査型電子顕微鏡を用いて金粒付着部分の元素分布状態の確認を実施した。

・使用機器

走査型電子顕微鏡：Quanta600（FEI（株）製）

エネルギー分散型エックス線マイクロアナライザ：Genesis CDU（アメテック（株）製）

・分析条件

加速電圧：30kV 分析環境：30Pa

2 調査結果（巻頭図版5）

○ 顕微鏡による詳細観察

図1に陶器表面の顕微鏡画像を示す。図1(a)は図2(a)中1の顕微鏡画像（以後部位1）、(b)は図1(a)中2の顕微鏡画像（以後部位2）である。

金粒子は、大きいもので直径約0.5mm以上、小さいものは10μm以下である。陶器表面には、被熱により種類が変化した部分やその周辺に金粒子や、付着物が確認された。

○ エックス線透過撮影エックス線透過撮影による資料への重元素の付着状態調査

図2(a)には調査資料画像、(b)にはエックス線透過撮影における画像を示す。

(b)において数カ所にみられる黒点は、金粒子によるものと考えられるが、その他に重元素の付着による影状の部分は確認されなかった。

○ 蛍光エックス線分析による付着元素類の非破壊定性分析

部位1,2に対して蛍光エックス線分析を実施した。その結果を部位1は図3(a)-1.2に、部位2は図3(b)-1.2に示す。1.は直径1.8mm、2.は直径0.1mmの範囲で分析を行った

図3(a)-1では、付着金粒子とその周辺付着物の分析結果であるが、Au以外に特徴的な重元素の確認はできない。図3(b)-1では、Au以外にPbやBiが確認された。

○ エックス線マイクロアナライザ付走査型電子顕微鏡(SEM-EDX)による付着元素類の分布調査

部位1,2について、SEMによる観察とEDXによるマッピング分析を行った結果を、図4(a)(部位1)、図4(b)(部位2)に示す。図4(a)では、粒子部分にAu以外にAg,Cuがわずかに確認され、周辺の付着物からはFeが強く確認された。図4(b)では、粒子部分にAuやAg,Cuが確認された以外にPb,BiがAu表面や周辺に広がる状態が確認された。

3 考察

今回、宮ノ上遺跡出土の陶器片1点から金の付着が確認されたことは、この地点で金の生産・加工に関連する作業を行っていたことが示唆される。

金生産遺物での陶器の使用例としては、これまでに筆者の調査により山梨県や長野県の出土遺物から計5例確認されているが、土器に比べればわずかであり、事例が増えたことは重要といえよう。ただし、土器に比べ熱に弱い陶器を用いた理由はまだ不明である。

付着金粒子の分析結果から、金以外に特徴的な元素の未確認部分と、付着物としてビスマスや鉛の確認部分の混在が示された。これまでの調査でも少ない事例である。確認したビスマスも、エックス線透過画像では影として確認できない程度。蛍光エックス線分析チャートでもピークは小さくわずかとみられた。その結果から、この陶器片は不純物を含んだ金の加工や焙解に用いられたと考えられる。

ビスマスなどの不純物は金鉱石に含まれていることが知られており、筆者はこの不純物に着目して調査を行ってきた。これまでの調査から、ビスマスは黒川金山出土の金粒子付着土器から多数確認され、鉛は湯之奥金山出土の金粒子付着土器で確認されている。そのため、そのどちらもが確認される本事例では、両金山から生産された金が持ち込まれた可能性が考えられるだけでなく、金以外に特徴的な元素が確認できず鉄の確認から砂鉄とみられる不純物が確認された部位が他にあることから、この陶器の使用時には砂金も含まれていると考えられ、様々な金がこの地で使用された可能性が伺われる。この点に関しては、今後のより詳細調査が必要である。

今回の調査から、宮ノ上遺跡で金生産・加工が行われていたことが示され、使用した金には金鉱石由来のものが含まれることや、金山との関連も示された。しかし、ここで用いていた技術やその工程等、作業内容の詳細は

不明確なままである。

今後の更なる調査から、宮ノ上遺跡での金生産・加工内容が明らかとなり、中世における金生産・加工の実態に迫ることが可能になると考えられ、今後に期待したい。

参考文献

- 1)「甲斐金山における金生産に関する自然科学的研究」山梨県立博物館 2011

写真図版



国福神社より望む富士山



足和田山中腹より望む富士山



滝沢林道二合目より望む富士山



五合目地点調査中に出会った修験の方々

写真図版 1

富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡



第1 トレンチ作業風景



第3 トレンチ礎石検出状況



第9 トレンチ古富士堆積物検出状況



第6 トレンチ



第6 トレンチ出土石造物



第6 トレンチ出土石碑

二合目一の鳥居周辺テラス



作業風景



二合目での現地説明会（あおぞらミュージアム）の様子

富士山吉田口登山道関連遺跡五合目地点



第1テラス礎石検出状況



第3テラス



第10テラス



五合目 富士守稻荷跡近くで発見された石碑

北口本宮富士浅間神社



A区 調査風景



B区 第2トレンチ



C区 御敷石がのるマウンドの土留め



C区第1トレンチ集石検出状況

写真図版 3



吉田の火祭 御鞍石での神事



地中レーダー探査の様子（拝殿前）



随神門東側の調査風景



随神門東側の遺物出土状況

大塚丘



地中レーダー探査の様子



簡易ボーリング調査の様子



第2 トレンチ



第3 トレンチ作業風景

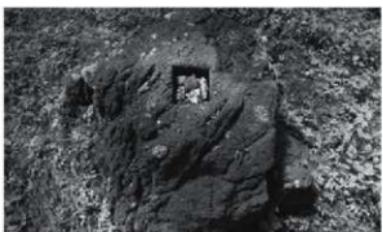
富士御室浅間神社里宮（里宮遺跡）



A区石列検出状況



C区片山社 土台石周辺作業風景



C区片山社 土台石



C区片山社 土台石の孔中の遺物検出状況



C区片山社 土台石の孔底の剣形鉄製品検出状況

藤塚



地中レーダー探査の様子



大石邸（神社隣接地）作業風景

河口浅間神社



地中レーダー探査の様子（拝殿前）

写真図版 5



A区 作業風景



B区 作業風景



B区 集石状遺構検出状況



C区 石段検出状況（奥は出雲社）

御墓



C区 全体

宮ノ上遺跡



宮ノ上遺跡全体 (写真中央の富士山の裾部は長尾山麓辺)



地中レーダー探査の様子

富士山吉田口登山道関連遺跡鈴原下A遺跡



石組周辺作業風景

写真図版 6

行者平遺跡（大善寺行者堂伝承地）



石組検出状況



A区 全体



A区 土層



C区 作業風景



行者像・後鬼像



礎石検出状況



作業風景



榛名池と調査風景

写真図版 7



富士山二合目富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡 H21 年度出土遺物



富士山二合目富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡 H22 年度定善（禪）院跡伝承地出土遺物



富士山二合目富士御室浅間神社二合目本宮境内地遺跡 H22年度一の鳥居テラス出土遺物

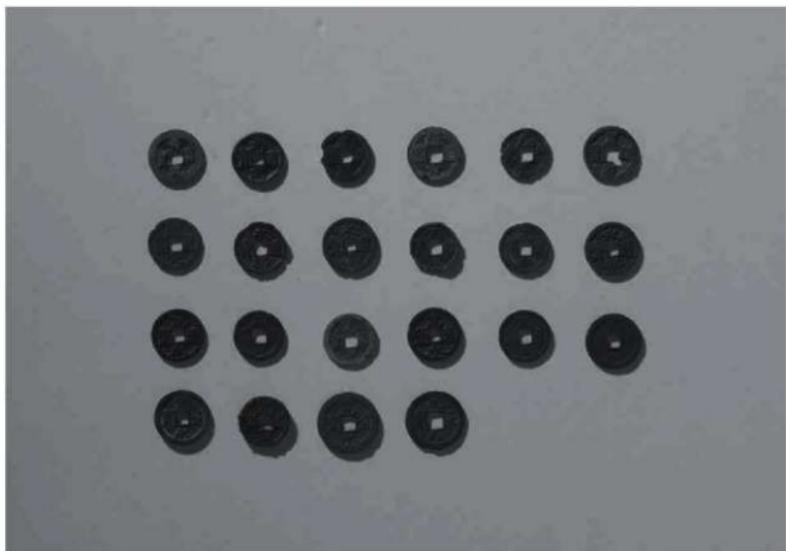


富士山吉田口登山道関連遺跡 五合目地点出土遺物

写真図版 9



北口本宮富士浅間神社社有地 H21 年度出土遺物



北口本宮富士浅間神社社有地 H21 年度出土遺物



北口本宮富士浅間神社社有地 大塚丘 出土遺物



行者平遺跡 出土遺物

報告書抄録

本 り が な 者 名 シ リ ー ズ 番 号 第 285 集	やまなしきんこういさんかくしこういせきじょうさいぶんじょうさはうこくしょ 山梨県山岳信仰遺跡分布調査報告書 —富士山信仰遺跡に關わる調査報告書—			
編 著 者 名 和 田 義 典 編 著 者 名 山 梨 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ル	野代哲子 山梨県埋蔵文化財センター 山梨県甲府市下曾根町 923 TEL: 055-266-3016			
発 行 年 月 日 2012年3月23日				
所蔵遺跡名	所在地			
	コード 山町村 北緯(新) 東経(新) 調査期間 調査面積(m²)			
【試験確認調査】				
富士御室瀬戸神社・合日本宮境内地遺跡	南都留郡富士河口湖町勝山 3953-1,2,3 番地	19430 427-0022 35°24'01" 138°45'19" 10:30* 2010.9.2 ~ 165 10:6		
北上本宮富士浅間神社境内地	富士吉田市上吉田 5558 番地	19202 — 35°28'14" 138°47'32" 11:30* 2010.5.16 ~ 150 5:23		
御坂石造跡	富士吉田市上吉田 5363 番地	19202 35°28'13" 138°47'22" 11:30 2009.11.9 ~ 40		
富士御室瀬戸神社里宮(里宮遺跡)	南都留郡富士河口湖町勝山 3049 番地 3951-2,3,4,5 番地	19430 427-0001 35°30'38" 138°44'45" 12:28 2010.6.1 ~ 35		
富士吉田市上吉田山道間遺跡勝原A地点	富士吉田市上吉田勝原下 5403 番地	19202 35°26'18" 138°46'05" 7:15 2010.6.28 ~ 12		
富士吉田市上吉田山道間遺跡五合目地点	富士吉田市上吉田市富士山北向 5618 番地	19202 35°23'27" 138°44'57" 10:18 2010.7.15 ~ 12		
大塚丘	富士吉田市上吉田 5619 番地	19202 — 35°28'06" 138°47'20" 6:6 2010.10.7 ~ 22		
河口浅間神社境内地	南都留郡富士河口湖町河口1番地	19430 — 35°31'51" 138°46'29" 6:14 2011.5.23 ~ 22		
河ノ上遺跡	南都留郡富士河口湖町河口1字宮ノ上 E 1215-1 番地	19430 19430-0035 35°31'54" 138°46'30" 2011.6.29 2		
行者平遺跡	西牧山御廟町上河内御廟山 6752 番地	19211 109 35°34'08" 138°45'39" 6:14 2011.6.8 ~ 26		
行者平散遺跡	南都留郡鳴沢村 8512 番地	19429 23 35°29'34" 138°42'35" 6:23 2011.6.22 ~ 7		
【山中レーダー探査】				
A99丘	富士吉田市上吉田 5619 番地	19202 — 35°23'27" 138°47'20" 2009.1.25 ~		
北上本宮富士浅間神社境内地	富士吉田市上吉田 5558 番地	19202 — 35°28'13" 138°47'22" 2010.11.16 ~		
河口浅間神社境内地	南都留郡富士河口湖町河口1番地	19430 — 35°31'51" 138°46'29" 2011.7.13 ~		
御坂石造跡	南都留郡富士河内御廟町	19425 — 35°25'21" 138°50'21" 2010.2.25 ~		
御坂	南都留郡富士河口湖町	19430 — 35°31'56" 138°46'29" 2011.7.13 ~		
【地図ボーリング調査】				
大塚丘	富士吉田市上吉田 5619 番地	19202 — 35°28'06" 138°47'20" 2010.10.26 ~ 2011.2.22		
【地図遺跡名】				
編別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富士御室瀬戸神社・合日本宮境内地遺跡	神社 中世・近世	石造跡 山形礫片、陶器断片、瓦片、石碑	富士山の石碑が出土	
北上本宮富士浅間神社境内地	神社 近世	造成の跡	陶器断片、瓦片	
御坂石造跡	祭壇場 近世	陶器断片、瓦片		
富士御室瀬戸神社里宮(里宮遺跡)	神社 達文・平安・近世	石祠、地蔵遺構	達文土造跡、土師質土器、陶器断片、埴輪遺物、神社内の山川社より地蔵遺構を発見	
富士吉田市上吉田山道間遺跡勝原A地点	空跡? 近世?	石積	縄文土器片	
富士吉田市上吉田山道間遺跡五合目地点	小祠跡 中世・近世	縄文土器片		
大塚丘	達文・平安・近世	造成した土壠	鉢	
河口浅間神社境内地	神社 平安・中世・近世	集石状遺構	土師質土器片、陶器断片、鐵製品	
河ノ上遺跡	工房跡? 平安・中世・近世	土師質土器片、陶器片	金が付着する陶器が出土	
行者平遺跡	空跡? 中世・近世	土師質土器片、陶器片		
行者平散遺跡	空跡? 中世	縄文土器片	明打窓	
要約	平成21(2009)~23(2011)年度の3カ年で実施した、山梨県内特に東部富士五湖・濃尾地域の富士山信仰遺跡についての分布調査。11地点の試験確認調査を行ない、その他、周辺調査として、5地点についての地中レーダー探査と1地点についての地図ボーリング調査を実施した。富士山二合目・五合目の調査では林中より石碑が発見され、その周囲がかつての信仰の場であることが明らかとなっている。			

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第285集

山梨県山岳信仰遺跡詳細分布調査報告書

—富士山信仰遺跡に關わる調査報告書—

印刷日 2012年(平成24年3月19日)

発行日 2012年(平成24年3月23日)

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県甲府市下曾根町923

TEL 055-266-3016

発行 山梨県教育委員会

印刷 株式会社峠南堂印刷所